永岡岸元遺跡

―主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告１―

筑紫野市文化財調査報告書

第 91 集

２００７

筑紫野市教育委員会

永岡岸元遺跡遠景（北から）

Ⅱ区谷部出土の青銅製鋤先（左表面、右裏面）

序

筑紫野市は太古より交通の要所であり、多くの先人達が行き交いあるいはこの地に踏み止まって、多くの文化遺産を私達に遺してくれています。しかし、近年の交通体系の整備による埋蔵文化財の消失は確実に進んでおり、消失する文化財については記録保存という形で将来に残し伝えていく努力をしています。

ここに発行の運びとなりました『永岡岸元遺跡』も主要地方道久留米筑紫野線の建設に伴い発掘調査したものです。本遺跡の北側には江戸時代に日田街道も開設されており、本市が現在に至るまで交通の要所であることが肯けます。今回の発掘調査では主に弥生時代や古墳時代の集落の一部が発見され、集落周辺の谷部からは多くの土器・石器・金属器が出土しました。また、調査区の一部には生活用の小道の跡も検出されており、昔から人の往来があったことを感じることができます。

この発掘調査の成果が市民の皆様の学習・研究および文化形成の一助となり、まだまだ数多く埋もれている文化財の保護のための参考となることを切に願うものです。

なお、発掘調査・整理報告にあたっては、地元住民の方々および福岡県那珂土木事務所・福岡県教育庁・福岡市教育委員会の関係各位より多大なご理解とご協力を頂きました。ここに深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

筑紫野市教育委員会
教育長 髙 嶋 正 武

例　　言

１．本書は、筑紫野市教育委員会が福岡県那珂土木事務所から委託を受けて、主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に伴い実施した永岡岸元遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
２．永岡岸元遺跡の調査は、池松幸路（筑紫野市教育委員会文化課技師）・森山栄一（同）が担当し、一部吉村靖徳（福岡県教育庁福岡教育事務所生涯学習課文化班主任技師）の協力を得た。
３．発掘調査は、福岡県筑紫野市大字永岡 62-1 外の 4,902 ㎡を対象とし、2001 年 5 月 7 日から 2002 年 1 月 16 日にかけて行った。
４．基準点測量は、株式会社イーディシーに委託した。
５．遺構実測・図化は、池松・森山・吉村が行った。
６．遺構写真撮影は池松・森山が行い、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区の空中写真撮影は（有）空中写真企画に委託した。
７．遺物写真撮影は、土器をハートフルスタジオミッキー、石器・金属器を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
８．遺物実測図化は、土器を（株）九州文化財研究所・（株）埋蔵文化財サポートシステムに、石器・金属器を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、一部を池松が行った。
９．図面トレースは、遺構配置図・遺構図を（有）遺跡整備計画・（特）文化財保存活用支援センターに、遺物図の土器を岡三リビック（株）に、石器・金属器を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、一部を池松が行った。
10．写真トリミング焼付は、フォトハウスＯＫＡに依頼した。
11．金属器の透過Ｘ線撮影および青銅製鋤先の保存処理は、福岡市埋蔵文化財センターの協力を得た。
12．鉄器の保存処理は、九州歴史資料館に依頼した。
13．石器の材質分析は唐木田芳文氏（西南学院大学文学部名誉教授）に、青銅製鋤先の成分分析は比佐陽一郎氏（福岡市埋蔵文化財センター文化財主事）に鑑定を依頼し、玉稿を賜った。
14．本書の執筆は、下記の通りであり、編集は、森山が行った。

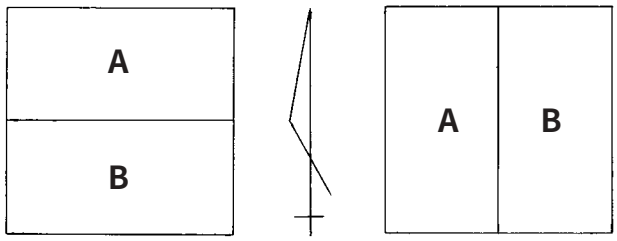
第１・２章	池松
第３章第１・２節	池松
第３節	池松・森山
第４節	池松
第５節	池松・森山
第４章	唐木田・比佐
第５章	池松・森山

15．土器の記述の中で「○○系」としたものは、「類似するもの」という程度の意味で使用しており、必ずしも他地域からの搬入土器ということではない。
16．この調査における写真・図面・遺物は、筑紫野市教育委員会で保管している。
17．表紙の題字は、山口蝸牛氏（西南学院中学校・高等学校書道科教諭）によるものである。

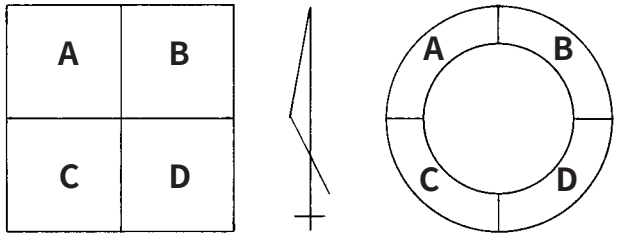
凡　　例

1．本書では、測量法に基づき世界測地系および平面直角座標第Ⅱ系を用いており、図中の方位は全て座標北（G.N.）である。
2．本書で使用する略号は、ＳＢ(掘立柱建物)・ＳＣ(竪穴住居)・ＳＤ(溝)・ＳＦ(道路状遺構)・ＳＫ(土坑)・ＳＰ(貯蔵穴)・ＳＶ(円形周溝)・Ｐ(ピット)・ＴＬ（トレンチ）である。
3．遺物実測図において挿図ごとに通し番号をつけているが、下の(　)つき数字は遺物の個体番号である。
4．Ⅱ～Ⅳ区の遺構以外から出土した遺物については、便宜的に設定したグリッドで一括取上げしており、そのグリッド番号（数字＋アルファベット）を付している。
5．遺物観察表の出土遺構欄に遺構略号・番号の次に付しているＡ～Ｄは、同一遺構を便宜的に分割したブロック記号である。このため遺物の取上げにおいても、個別に取上げ番号を付さないものは各ブロックで一括している。
6．ＳＣ（竪穴住居）・ＳＶ（円形周溝）のブロックは、下図の通りである。

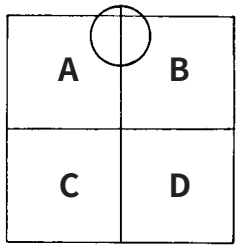
北を上にして竪穴住居(SC)を２分割した場合



北を上にして竪穴住居(SC)・円形周溝(SV)を４分割した場合



カマド付竪穴住居(SC4)はカマドを上にして４分割



目　　次

本文目次

第１章　調査の経過と組織 …… 1

第１節　調査の経過 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3

第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の成果 …… 7

第１節　遺跡名の変更と調査区の設定 …… 7
第２節　Ⅰ区の調査 …… 8
竪穴住居（ＳＣ） …… 9
掘立柱建物（ＳＢ） …… 28
土坑（ＳＫ） …… 30
貯蔵穴（ＳＰ） …… 35
円形周溝（ＳＶ） …… 36
溝（ＳＤ） …… 37
その他の遺構 …… 39
その他の遺物 …… 39
第３節　Ⅱ区の調査 …… 45
土坑（ＳＫ） …… 45
溝（ＳＤ） …… 47
谷部 …… 49
谷部以外 …… 97
第４節　Ⅲ区の調査 …… 106
溝（ＳＤ） …… 106
第５節　Ⅳ区の調査 …… 110
土坑（ＳＫ） …… 111
溝（ＳＤ） …… 114
道路状遺構（ＳＦ） …… 116
その他の遺物 …… 118

第４章　理化学的分析 …… 121

第１節　永岡岸元遺跡出土石器の材質鑑定について（補足） …… 121
第２節　永岡岸元遺跡出土青銅製鋤先の材質調査について …… 122

第５章　総　括 …… 123

第１節　永岡岸元遺跡Ⅰ区のまとめ …… 123
第２節　永岡岸元遺跡Ⅱ区のまとめ …… 127
第３節　永岡岸元遺跡Ⅲ・Ⅳ区のまとめ …… 129
第４節　永岡岸元遺跡出土の遺物について …… 129

挿図目次

第 １図　永岡岸元遺跡周辺分布図（Ｓ＝１/10,000）…… 4
第 ２図　永岡岸元遺跡周辺地形図（Ｓ＝１/2,500）…… 6
第 ３図　永岡岸元遺跡Ⅰ・Ⅱ区調査地区割図（Ｓ＝１/1,000）…… 7
第 ４図　永岡岸元遺跡Ⅰ区遺構配置図（Ｓ＝１/200）…… 8
第 ５図　Ⅰ区ＳＣ１実測図（Ｓ＝１/60）…… 9
第 ６図　Ⅰ区ＳＣ１出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 9
第 ７図　Ⅰ区ＳＣ２実測図（Ｓ＝１/60）…… 10
第 ８図　Ⅰ区ＳＣ３実測図（Ｓ＝１/60）…… 11
第 ９図　Ⅰ区ＳＣ３出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 11
第 10 図　Ⅰ区ＳＣ４実測図（Ｓ＝１/60）…… 12
第 11 図　Ⅰ区ＳＣ４カマド実測図（Ｓ＝１/20）…… 13
第 12 図　Ⅰ区ＳＣ４出土土器実測図（Ｓ＝１／２・１／４）…… 14
第 13 図　Ⅰ区ＳＣ５実測図（Ｓ＝１/60）…… 16
第 14 図　Ⅰ区ＳＣ５出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 17
第 15 図　Ⅰ区ＳＣ６実測図（Ｓ＝１/60）…… 19
第 16 図　Ⅰ区ＳＣ６出土土器実測図（Ｓ＝１／２・１／４）…… 20
第 17 図　Ⅰ区ＳＣ７実測図（Ｓ＝１/60）…… 21
第 18 図　Ⅰ区ＳＣ７出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 22
第 19 図　Ⅰ区ＳＣ８実測図（Ｓ＝１/60）…… 23
第 20 図　Ⅰ区ＳＣ８出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 24
第 21 図　Ⅰ区ＳＣ９実測図（Ｓ＝１/60）…… 26
第 22 図　Ⅰ区ＳＣ９出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 27
第 23 図　Ⅰ区ＳＣ１０実測図（Ｓ＝１/60）…… 27
第 24 図　Ⅰ区ＳＣ１０出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 28
第 25 図　Ⅰ区ＳＢ１実測図（Ｓ＝１/60）…… 29
第 26 図　Ⅰ区ＳＢ２実測図（Ｓ＝１/60）…… 29
第 27 図　Ⅰ区ＳＢ３実測図（Ｓ＝１/60）…… 30
第 28 図　Ⅰ区ＳＫ１～６実測図（Ｓ＝１/30）…… 31
第 29 図　Ⅰ区ＳＫ７・８・１０～１３実測図（Ｓ＝１/30）…… 33
第 30 図　Ⅰ区ＳＫ９実測図（Ｓ＝１/30）…… 34
第 31 図　Ⅰ区ＳＰ１実測図（Ｓ＝１/30）…… 35
第 32 図　Ⅰ区ＳＶ１実測図（Ｓ＝１/60）…… 36
第 33 図　Ⅰ区ＳＶ２実測図（Ｓ＝１/60）…… 36
第 34 図　Ⅰ区ＳＤ１・２土層図（Ｓ＝１/20）…… 37
第 35 図　Ⅰ区ＳＢ・ＳＫ・ＳＰ・ＳＶ・ＳＤ・包含層
出土土器・土製品実測図（Ｓ＝１／４）…… 38
第 36 図　Ⅰ区出土縄文土器実測図・拓影図（Ｓ＝１／３）…… 40
第 37 図　Ⅰ区出土石器実測図①（Ｓ＝１／２）…… 41
第 38 図　Ⅰ区出土石器実測図②（原寸）…… 42
第 39 図　Ⅰ区出土金属器実測図（Ｓ＝１／２）…… 42
第 40 図　Ⅱ区遺構配置図（Ｓ＝１/200）…… 43～44
第 41 図　Ⅱ区ＳＫ１～５実測図（Ｓ＝１/30）…… 46
第 42 図　Ⅱ区ＳＤ６・７土層図（Ｓ＝１/20）…… 47
第 43 図　Ⅱ区ＳＤ８・９土層図（Ｓ＝１/20）…… 48
第 44 図　Ⅱ区ＳＤ６・７・９出土石器実測図（原寸・Ｓ＝１／２）…… 48

第45図　Ⅱ区谷部出土遺物水平・垂直分布図 …… 50
第46図　Ⅱ区谷部ＴＬ１～３土層図（Ｓ＝１/40)…… 51～52
第47図　Ⅱ区谷部出土土器の水平分布図と実測図の対応図 …… 53
第48図　Ⅱ区谷部出土石器・金属器の水平分布図と実測図の対応図 …… 54
第49図　Ⅱ区谷部出土土器実測図①（Ｓ＝１/４） …… 56
第50図　Ⅱ区谷部出土土器実測図②（Ｓ＝１/４） …… 57
第51図　Ⅱ区谷部出土土器実測図③（Ｓ＝１/４） …… 58
第52図　Ⅱ区谷部出土土器実測図④（Ｓ＝１/４） …… 59
第53図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑤（Ｓ＝１/４） …… 60
第54図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑥（Ｓ＝１/４） …… 61
第55図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑦（Ｓ＝１/４） …… 62
第56図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑧（Ｓ＝１/４） …… 63
第57図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑨（Ｓ＝１/４） …… 64
第58図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑩（Ｓ＝１/４） …… 66
第59図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑪（Ｓ＝１/４） …… 67
第60図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑫（Ｓ＝１/４） …… 68
第61図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑬（Ｓ＝１/４） …… 69
第62図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑭（Ｓ＝１/４） …… 70
第63図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑮（Ｓ＝１/４） …… 72
第64図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑯（Ｓ＝１/４） …… 73
第65図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑰（Ｓ＝１/４） …… 74
第66図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑱（Ｓ＝１/４） …… 75
第67図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑲（Ｓ＝１/４） …… 75
第68図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑳（Ｓ＝１/４） …… 76
第69図　Ⅱ区谷部出土石器実測図①（原寸） …… 87
第70図　Ⅱ区谷部出土石器実測図②（Ｓ＝１/２） …… 88
第71図　Ⅱ区谷部出土石器実測図③（Ｓ＝１/２） …… 89
第72図　Ⅱ区谷部出土石器実測図④（Ｓ＝１/２） …… 90
第73図　Ⅱ区谷部出土石器実測図⑤（Ｓ＝１/２） …… 91
第74図　Ⅱ区谷部出土石器実測図⑥（Ｓ＝１/２） …… 92
第75図　Ⅱ区谷部出土金属器実測図①（Ｓ＝１/２）…… 95
第76図　Ⅱ区谷部出土金属器実測図②（Ｓ＝１/２）…… 96
第77図　Ⅱ区谷部以外出土土器実測図①（Ｓ＝１/４）…… 98
第78図　Ⅱ区谷部以外出土土器実測図②（Ｓ＝１/４）…… 99
第79図　Ⅱ区谷部以外出土土器実測図③（Ｓ＝１/４）……100
第80図　Ⅱ区谷部以外出土石器実測図①（原寸・Ｓ＝１/２）……103
第81図　Ⅱ区谷部以外出土石器実測図②（Ｓ＝１/２）……104
第82図　Ⅱ区谷部以外出土金属器実測図（Ｓ＝１/２）……105
第83図　永岡岸元遺跡Ⅲ・Ⅳ区調査地区割図（Ｓ＝１/1,000)……106
第84図　永岡岸元遺跡Ⅲ・Ⅳ区遺構配置図（Ｓ＝１/200）……107～108
第85図　Ⅲ区ＳＤ１～３土層図（Ｓ＝１/20）……109
第86図　Ⅲ区ＳＤ２出土土器実測図（Ｓ＝１/４）……109
第87図　Ⅳ区ＳＫ１土器出土状況実測図（Ｓ＝１/20)……110
第88図　Ⅳ区ＳＫ２～７実測図（Ｓ＝１/30）……112
第89図　Ⅳ区ＳＫ８・９実測図（Ｓ＝１/30）……113
第90図　Ⅳ区ＳＤ５土器出土状況実測図（Ｓ＝１/20)……115
第91図　Ⅳ区ＳＤ８出土金属器実測図（Ｓ＝１/２） ……115

第 92 図　Ⅳ区ＳＦ１実測図（Ｓ＝１/120）　……117
第 93 図　Ⅳ区ＴＬ１土器出土状況実測図（Ｓ＝１/20）　……118
第 94 図　Ⅳ区出土土器実測図（Ｓ＝１／４）　……119
第 95 図　Ⅳ区出土縄文土器実測・拓影図（Ｓ＝１／３）　……120
第 96 図　Ⅰ区の遺構配置と出土遺物の対応図　……124
第 97 図　Ⅱ区谷部以外の試掘坑・グリッド配置と出土遺物の対応図　……128
第 98 図　永岡岸元遺跡出土の縄文土器・石器集成図（Ｓ＝1/2・1/4・1/6）……130
第 99 図　永岡岸元遺跡出土の砥石と農・工具他集成図（Ｓ＝１／６）　……132

表 目 次

第 １表　周辺遺跡一覧表　……　5
第 ２表　調査区一覧表　……　7
第 ３表　Ⅰ区ＳＣ１出土土器観察表　……　9
第 ４表　Ⅰ区ＳＣ３出土土器観察表　……　11
第 ５表　Ⅰ区ＳＣ４出土土器観察表　……　15
第 ６表　Ⅰ区ＳＣ５出土土器観察表　……　18
第 ７表　Ⅰ区ＳＣ６出土土器観察表　……　21
第 ８表　Ⅰ区ＳＣ７出土土器観察表　……　22
第 ９表　Ⅰ区ＳＣ８出土土器観察表　……　25
第 10 表　Ⅰ区ＳＣ９出土土器観察表　……　27
第 11 表　Ⅰ区ＳＣ１０出土土器観察表　……　28
第 12 表　Ⅰ区ＳＢ・ＳＫ・ＳＰ・ＳＶ・ＳＤ・包含層出土土器観察表　……　39
第 13 表　Ⅰ区出土縄文土器観察表……　40
第 14 表　Ⅰ区出土石器観察表　……　40
第 15 表　Ⅰ区出土金属器観察表　……　42
第 16 表　Ⅱ区ＳＤ６・７・９出土石器観察表　……　48
第 17 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表①　……　77
第 18 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表②　……　78
第 19 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表③　……　79
第 20 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表④　……　80
第 21 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑤　……　81
第 22 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑥　……　82
第 23 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑦　……　83
第 24 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑧　……　84
第 25 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑨　……　85
第 26 表　Ⅱ区谷部出土石器観察表①　……　92
第 27 表　Ⅱ区谷部出土石器観察表②　……　93
第 28 表　Ⅱ区谷部出土金属器観察表　……　94
第 29 表　Ⅱ区谷部以外出土土器観察表①　……101
第 30 表　Ⅱ区谷部以外出土土器観察表②　……102
第 31 表　Ⅱ区谷部以外出土石器観察表　……105
第 32 表　Ⅱ区谷部以外出土金属器観察表　……105
第 33 表　Ⅲ区ＳＤ２出土土器観察表　……109
第 34 表　Ⅳ区ＳＤ８出土金属器観察表　……116
第 35 表　Ⅳ区出土土器観察表　……120

図版目次

巻頭図版
永岡岸元遺跡遠景（北から）
Ⅱ区谷部出土の青銅製鋤先（左表面・右裏面）

図版１　Ⅰ区
Ⅰ区全景（上空から）
ＳＣ５付近（上空から）
ＳＣ１（東から）
図版２　Ⅰ区
ＳＣ１遺物出土状況（東から）
ＳＣ２（東から）
ＳＣ３（北西から）
図版３　Ⅰ区
ＳＣ３土坑１遺物出土状況（北西から）
ＳＣ３遺物出土状況（北西から）
ＳＣ４（南東から）
図版４　Ⅰ区
ＳＣ４遺物出土状況（北西から）
ＳＣ４カマド（南東から）
ＳＣ４カマド遺物出土状況（南東から）
図版５　Ⅰ区
ＳＣ５（西から）
ＳＣ５遺物出土状況（北から）
ＳＣ５遺物出土状況（北東から）
図版６　Ⅰ区
ＳＣ６（東から）
ＳＣ６遺物出土状況（東から）
ＳＣ６遺物出土状況（南から）
図版７　Ⅰ区
ＳＣ６遺物出土状況（西から）
ＳＣ７（北西から）
ＳＣ８（北東から）
図版８　Ⅰ区
ＳＣ８土坑２遺物出土状況（北東から）
ＳＣ８(奥)・ＳＣ９(手前)（北西から）
ＳＣ１０（東から）
図版９　Ⅰ区
ＳＢ１（北東から）
ＳＢ２（東から）
ＳＢ３（北から）
図版 10　Ⅰ区
ＳＫ１（西から）
ＳＫ２（南から）
ＳＫ３（北東から）
ＳＫ４（南西から）
ＳＫ５（北から）
ＳＫ６（北東から）
ＳＫ７（南西から）
ＳＫ８（南から）
図版 11　Ⅰ区
ＳＫ９（南西から）
ＳＫ１０（北東から）
ＳＫ１１（南西から）
ＳＫ１２（北から）
ＳＫ１３（南から）
ＳＰ１（南西から）
Ｐ８２遺物出土状況（南西から）
作業風景
図版 12　Ⅰ区
ＳＶ１（南東から）
ＳＶ２（南西から）
作業風景
図版 13　Ⅰ区
ＳＤ１土層（西から）
ＳＤ２遺物出土状況（南西から）
ＳＤ２土層（南西から）

図版 14　Ⅰ区
　ＳＣ１・３・４・５出土土器
図版 15　Ⅰ区
　ＳＣ５・６出土土器
図版 16　Ⅰ区
　ＳＣ６・７・８出土土器
図版 17　Ⅰ区
　ＳＣ８・９・１０，ＳＫ３・１２
　　・９出土土器
図版 18　Ⅰ区
ＳＣ６,ＳＫ９，ＳＰ１，ＳＤ２，
　包含層,ＴＬ１出土土器・土製品
　Ⅰ区出土石器①
図版 19　Ⅰ区
　Ⅰ区出土石器②
　Ⅰ区出土金属器
図版 20　Ⅱ区
　Ⅰ区（奥）・Ⅱ区（手前）遠景
　　（西から）
　Ⅱ区全景（上空から）
図版 21　Ⅱ区
　ＳＫ１・２（北西から）
　ＳＫ３（北西から）
　ＳＫ４（北東から）
　ＳＫ５（南西から）
　ＳＤ６・７土層Ａ（南から）
　ＳＤ７土層Ｂ（南から）
　ＳＤ７土層Ｃ（南東から）
　ＳＤ１０（北から）
図版 22　Ⅱ区
　谷部遺物出土状況（北西から）
　谷部遺物出土状況（南西から）
　谷部３Ｔ土層（北西から）
図版 23　Ⅱ区
　谷部完掘状況（北西から）
　谷部完掘状況（南西から）
　谷部遺物出土状況①
図版 24　Ⅱ区
　谷部遺物出土状況②
　谷部遺物出土状況③
　作業風景
図版 25　Ⅱ区
　谷部出土土器①
図版 26　Ⅱ区
　谷部出土土器②
図版 27　Ⅱ区
　谷部出土土器③
図版 28　Ⅱ区
　谷部出土土器④
図版 29　Ⅱ区
　谷部出土土器⑤
図版 30　Ⅱ区
　谷部出土土器⑥
図版 31　Ⅱ区
　谷部出土土器⑦
図版 32　Ⅱ区
　谷部出土土器⑧
図版 33　Ⅱ区
　谷部出土土器⑨
図版 34　Ⅱ区
　谷部出土土器⑩
図版 35　Ⅱ区
　谷部出土土器⑪
図版 36　Ⅱ区
　谷部出土土器⑫
図版 37　Ⅱ区
　谷部出土土器⑬
図版 38　Ⅱ区
　谷部出土土器⑭
図版 39　Ⅱ区
　谷部出土土器⑮
図版 40　Ⅱ区
　谷部出土土器⑯
図版 41　Ⅱ区
　谷部出土土器⑰

図版 42　Ⅱ区
谷部出土土器⑱
図版 43　Ⅱ区
谷部出土土器⑲
谷部以外出土土器①
図版 44　Ⅱ区
谷部以外出土土器②
図版 45　Ⅱ区
谷部以外出土土器③
図版 46　Ⅱ区
谷部以外出土土器④
ＳＤ６・７・９出土石器
谷部出土石器①
図版 47　Ⅱ区
谷部出土石器②
図版 48　Ⅱ区
谷部出土石器③
図版 49　Ⅱ区
谷部出土石器④
谷部出土金属器①
図版 50　Ⅱ区
谷部出土金属器②
図版 51　Ⅱ区
谷部以外出土石器・金属器
図版 52　Ⅲ区
Ⅲ区全景（南西から）
ＳＤ１（北から）
ＳＤ１土層（南から）
図版 53　Ⅲ区
ＳＤ２（左）・ＳＤ３（右）
（北西から）
ＳＤ２土層（南東から）
ＳＤ３土層（南から）
図版 54　Ⅳ区
Ⅳ区全景（上空から）
ＳＫ１遺物出土状況（北から）
ＳＫ１遺物出土状況（南から）
図版 55　Ⅳ区
ＳＦ１遠景（東から）
ＳＦ１付近（上空から）
ＳＦ１（東から）
図版 56　Ⅳ区
ＳＤ７～１０（北西から）
ＳＤ７～１０（南東から）
５Ｆ遺物出土状況（南西から）
図版 57　Ⅲ・Ⅳ区
Ⅲ・Ⅳ区出土土器・土製品・金属器

第１章　調査の経過と組織

第１節　調査の経過

平成 11 年 11 月 2 日付けで福岡県教育庁福岡教育事務所から、平成 12 年度施行の県土木部道路建設課による開発事業に係る埋蔵文化財の有無について照会があった。主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事(以下、「事業」という。)予定箇所の一部が周知の遺跡の範囲内に入るため、平成 12 年 10 月 26・27・30 日、11 月 7・8 日および平成 13 年 3 月 27・28 日に試掘・確認調査を行った。その結果、遺構・遺物を確認し発掘調査が必要と判断されたことから、事業に関係する福岡県那珂土木事務所・福岡教育事務所・筑紫野市教育委員会の三者で協議を重ね、工事に先立つ平成 13 年度に発掘調査を実施することとした。

那珂土木事務所は、平成 13 年 4 月 19 日付けで文化財保護法第 57 条の 3 第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を福岡県教育委員会へ行い、同月 27 日付で筑紫野市と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

それを受け、筑紫野市教育委員会は平成 13 年 5 月 7 日発掘調査に着手し、同月 22 日付けで文化財保護法第 58 条の 2 第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を福岡県教育委員会へ行った。

発掘作業は、天候不順や現場水没などで思うように捗らなかったが、現場作業員を増員し 9 月から 2 班体制をとった結果、平成 14 年 1 月 16 日に終了することができた。

整理作業は、日程を繰り上げて平成 13 年 11 月から始めたが、遺物量が多かった(パンケース 269 個分)ため 13 年度内には終了できなかった。那珂土木事務所と協議の結果、整理にかかる費用のうち平成 14 年度までの分を同土木事務所、それ以降の分を筑紫野市がそれぞれ負担することとした。遺物の整理・復元、土器の写真撮影・実測図化を平成 13・14 年度に行い、石器・金属器の写真撮影・実測図化、図面トレース、写真トリミング焼付、金属器の透過Ｘ線撮影および保存処理、石器の材質分析、青銅製鋤先の成分分析、報告書作成を平成 16～18 年度に行った。

第２節　調査の組織

調査に伴う組織は次の通りである。なお、組織改編に伴い文化課は平成 14 年度より文化財課、平成 18 年度より文化振興課と改称している。

組　織（平成 13 年度～平成 18 年度）

主　体　筑紫野市教育委員会

担　当　筑紫野市教育委員会

総　括	教育長	髙嶋　正武
庶　務	教育部長	岡部　隆充（～平成 15 年 3 月 31 日）
		伊藤　清隆（～平成 15 年 6 月 17 日）
		香野　國治（～平成 18 年 3 月 31 日）
		松尾　和幸（平成 18 年 4 月 1 日～）
	文化課長	田中　哲也（～平成 14 年 3 月 31 日）

文化財課長　　山内　幸雄（～平成16年3月31日）
　　米元　和夫（～平成18年3月31日）
文化振興課長　高石　敏幸（平成18年4月1日～）
課長補佐兼文化財担当係長
　　古賀　幸信（～平成15年3月31日）
　　木村　政弘（～平成16年3月31日）
　　満生　裕亮（平成16年4月1日～）
主　査(平成16年4月1日～主任主査)
　　野美山　勝（～平成17年6月30日）
技　師　　池松　幸路

試　掘・事前協議　市教育委員会　課長補佐兼文化財担当係長　古賀　幸信
　　技　師(平成17年4月1日～主査)　渡邊　和子
　　技　師　　小鹿野　亮
県福岡教育事務所　　伊崎　俊秋

調　査　技　師(平成17年4月1日～主査)
　　森山　栄一
技　師　　池松　幸路
石材分析　　唐木田芳文（西南学院大学文学部名誉教授）
青銅器分析　　比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター文化財主事）

調査協力者　福岡県教育庁福岡教育事務所生涯学習課文化班
　主任技師　　吉村　靖徳

指導・助言　橋口　達也　　馬田　弘稔（九州歴史資料館）

調査関係者

現場作業員　天本　貞子　天本　利美　飯田　五月　池田　光義
石井　繁太　石橋　一則　伊東　久夫　今村　剛　内田　直　江藤　和子
江藤　忠造　岡部　武史　小川美加子　梶原　忠男　梶原　登　片嶌　勝
片田　清子　片原　静子　片原　鶴男　片原　徳雄　加峯　眞勝　川尻　正人
川野　数代　神田　順子　岸　ミチヱ　久保　幸男　栗波ひさ子　栗本　和枝
小辻　和子　柴藤佳代子　杉本　一男　須藤新一郎　髙田　幸雄　田川　秀美
武田　敬子　多田フヂ子　田中千賀子　中川　和子　中村　昭　仁田原京子
橋本トチ子　橋本　尚子　平山　勉　藤本　愛子　藤本小枝子　藤本ユウ子
船越ヨシ子　松下　菊枝　宮原サツキ　牟田　艶子　村本　博信　森岡ハル子
森川　浩　森川　光義　八尋　妙子　八尋フジ子　山内　茂惠　山内　千惠
山内　富子　山内　百香　横尾フジ子　吉郷モモヱ　渡辺　久美

室内作業員　浅谷　芳江　石田　花子　市川ハツヨ　加藤美智子
金子江理子　北野　正子　宗　和代　田中富美子　鶴　浄美　鶴　貴法
中川キヨ子　西村　真美　萩原　正直　松尾　敦子　松窪美智子　山内　妙子
山内　由美　山田　朝恵　芳野　和代　渡辺　久美

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境（中表紙図・第１・２図・巻頭図版２）

筑紫野市は、福岡県の中央よりやや西、福岡市の南東 15 ㎞ほどの内陸部に位置する。東部は三郡山地とそれに連なる丘陵、西部は脊振山地とその前面の丘陵からなり、その間を二日市低地帯と呼ばれる狭長な低地が北西―南東方向に貫いている。この低地は、福岡平野と筑後平野とを結び、北側は博多湾に注ぐ御笠川水系の鷺田川流域、その他は有明海に注ぐ筑後川水系の宝満川流域となっている。三郡山地に源を発する宝満川は、宮地岳西麓の吉木・阿志岐・牛島に狭いながらも平野を形成しながら南へ流れ、脊振山地から東へ流れてきた山口川と合流したところで南東へ向きを変える。

永岡岸元遺跡は、宝満川と山口川の合流点のすぐ北、島状の小高い段丘上に位置する。この付近は宮地岳から延びる丘陵と永岡～常松にかけて舌状に延びる丘陵とが東西から迫り、その間を流れる宝満川沿いに沖積低地が広がっている。段丘の東側は低位段丘Ⅱ面、西側は低位段丘Ⅲ面で、どちらもかつての川原の跡を残す平坦な段丘面(砂層)をもつ河成段丘であるが、Ⅱ面は黄砂が大部分を占める風成土壌(黄褐色粘質土)、Ⅲ面は黒ボク土と呼ばれる６３００年前の鬼界－アカホヤ火山灰(Ｋ－Ａｈ)を起源とする土が表面を覆っている。

参考文献　筑紫野市史編さん委員会編 『筑紫野市史』上巻 自然環境 原始・古代・中世　筑紫野市 1999

筑紫野市史編さん委員会編 『筑紫野市史』資料編(上) 考古資料　筑紫野市　2001

第２節　歴史的環境（第１図・第１表）

宮地岳西麓の宝満川流域に広がる平野を中心にみていくこととする。

旧石器時代から縄文時代にかけては、平野周辺の阿蘇４火砕流台地や丘陵地が主に利用された。

旧石器時代は、峠山遺跡(９)・永岡遺跡(13)・常松遺跡(14)・御笠地区遺跡Ｅ地点(17)で後期中頃以降の石器が出土した。

縄文時代は、シメノグチ遺跡１(26)で方形プランを呈す竪穴住居が検出され、晩期の土器が出土した。そのほか、永岡遺跡(13)で早期？の土器や石器、常松遺跡(14)・岡田地区遺跡(30)で晩期の土器や石器が出土した。

弥生時代になると、平野部にある低位段丘Ⅲ面も利用されるようになった。

弥生時代は、御笠地区遺跡Ｄ～Ｇ地点(16～19)（Ｆ・Ｇ地点では鏡が出土している）・牛島宮崎遺跡(21)で後期以降の集落、永岡遺跡(13)・常松遺跡(14)・シメノグチ遺跡２(27)では中期の甕棺墓を主体とする墓地が見つかっている。

古墳時代は、御笠地区遺跡Ｃ～Ｇ地点(15～19)に集落があり、宝満川の西側丘陵部には柚ノ木第１号墳(２)・上ノ浦第１号墳(５)・イカリノ上古墳(８)・銭塚古墳(11)・鳥井元古墳(12)、東側の宮地岳には阿志岐古墳群Ｂ群(23)・阿志岐古墳群Ａ群(25)など多くの古墳が分布する。

古代は、牛島宮崎遺跡(21)・岡田地区遺跡(30)で官道などが見つかっている。

第１図　永岡岸元遺跡周辺遺跡分布図（１／１０，０００）

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	種　別	時　代	立　地	出土遺構	出　土　遺　物	文献
1	吉ケ浦遺跡	集落 墓地	弥生～古墳時代	丘陵	住居跡 甕棺墓、木棺墓、円墳	土師器、須恵器、鉄器	① ②
2	柚ノ木第１号墳	円墳	古墳時代	丘頂	径 15m。横穴式石室	須恵器、土師器、鉄器	③
3	高雄遺跡	集落 墓地	弥生時代	丘陵	住居跡 甕棺墓	弥生土器、石鏃	④
4	上ノ浦遺跡	散布地	縄文～弥生時代	丘陵		縄文土器、弥生土器、石器	
5	上ノ浦第１号墳	円墳	古墳時代	丘頂	径 17m。横穴式石室	須恵器、土師器	⑤
6	上ノ浦第２号墳	方形周溝墓	中世	丘陵	辺 7.7m。	土師器	⑤
7	イカリノ上遺跡	散布地	縄文～弥生時代	丘陵		弥生土器、石器	
8	イカリノ上古墳	円墳	古墳時代	丘陵	径 15m。		
9	峠山遺跡	散布地 円墳、方墳	旧石器時代 古墳時代	丘陵	割竹形木棺、小型竪穴式石室	石器 土師器	⑥
10	鳥井元遺跡	集落	中世	低台地	柱穴、溝	土師器	
11	銭塚古墳	円墳	古墳時代	台地	径 15m。		
12	鳥井元古墳	円墳	古墳時代	台地	径 16m。		
13	永岡遺跡	墓地	弥生時代	台地	甕棺墓、祭祀遺構、溝、土壙 木棺墓	弥生土器	⑦ ～ ⑪
14	常松遺跡	墓地他	旧石器～中世	台地	甕棺墓、土壙、竪穴状遺構、方形周溝墓、 住居跡、溝状遺構、土坑	縄文土器、石器、弥生土器 白磁、陶器、土師器	⑦ ⑫ ⑬
15	御笠地区遺跡Ｃ地点	集落	弥生～古墳時代	台地	住居跡	土師器	
16	御笠地区遺跡Ｄ地点	集落	弥生～奈良時代	台地	住居跡、掘立柱建物、土壙、溝状遺構	土師器	⑭
17	御笠地区遺跡Ｅ地点	集落	旧石器～古墳時代	台地	住居跡、掘立柱建物、土壙、溝状遺構、 ピット	土師器、鉄斧、石器、旧石器	⑭
18	御笠地区遺跡Ｆ地点	集落	弥生～古墳時代	台地	住居跡、溝状遺構、土壙、ピット	土師器、石斧、砥石、弥生土器、 鏡片	⑭
19	御笠地区遺跡Ｇ地点	集落	古墳時代	台地	住居跡、貯蔵穴、井戸、溝状遺構、 円形周溝、集石遺構、土壙、ピット	須恵器、土師器、仿製鏡、弥生土器	⑭
20	御笠地区遺跡Ｈ地点		弥生時代	台地	ピット	弥生土器	⑭
21	牛島宮崎遺跡	散布地 集落 墓地	縄文～古墳時代 古代、中世	微高地	住居跡、掘立柱建物、溝、ピット、土壙 木棺墓、土壙墓	須恵器、土師器、縄文土器 弥生土器 青磁	
22	永岡岸元遺跡	集落	縄文～古墳時代	微高地			本書
23	阿志岐古墳群Ｂ群	円墳 方墳	古墳時代	山腹 尾根	30 基。径５～12m。横穴式石室 4×5m、20×17m。割竹形木棺	須恵器 鉄器、土師器	⑮ ⑯
24	宮崎遺跡	墓地	弥生時代	山麓			
25	阿志岐古墳群Ａ群	円墳	古墳時代	尾根	10 基。径 10～18m。	鉄剣、ガラス小玉、鉄鏃	⑰
26	シメノグチ遺跡１	集落	縄文時代	丘腹	住居跡	縄文土器、石鏃	⑰
27	シメノグチ遺跡２	墓地？	弥生時代	丘腹		弥生土器、石器	⑰
28	柴田城	城郭	中世	山稜			⑱
29	鞭掛遺跡	集落	弥生～古墳時代	台地	土壙、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器	⑲
30	岡田地区遺跡	官道・官衙？	縄文～中世	微高地	官道、掘立柱建物、溝、住居跡、土坑、 柵、井戸、墓、ピット	土師器、須恵器、石帯、陶器、瓦、 縄文土器、石器、弥生土器、白磁	⑳ ㉑

第１表　周辺遺跡一覧

①『高雄地区遺跡群』太宰府市の文化財第 22 集　太宰府市教育委員会　1994

②『太宰府市史』考古資料編　太宰府市　1992

③『柚ノ木遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第 67 集　筑紫野市教育委員会　2001

④『高雄遺跡Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第 48 集　筑紫野市教育委員会　1997

⑤『上の浦遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第 14 集　筑紫野市教育委員会　1986

⑥『峠山遺跡』福岡県文化財調査報告書第 51 集　福岡県教育委員会　1973

⑦『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第１集　福岡県教育委員会　1970

⑧『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第４集　福岡県教育委員会　1976

⑨『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第５集　福岡県教育委員会　1977

⑩『永岡遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第６集　筑紫野市教育委員会　1981

⑪『永岡遺跡Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第 26 集　筑紫野市教育委員会　1990

⑫『別府大学文学部考古学研究報告』1　別府大学　1970

⑬『常松遺跡第２次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第 55 集　筑紫野市教育委員会　1997

⑭『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第 15 集　筑紫野市教育委員会　1986

⑮『阿志岐古墳群』筑紫野市文化財調査報告書第７集　筑紫野市教育委員会　1982

⑯『阿志岐古墳群Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第 12 集　筑紫野市教育委員会　1985

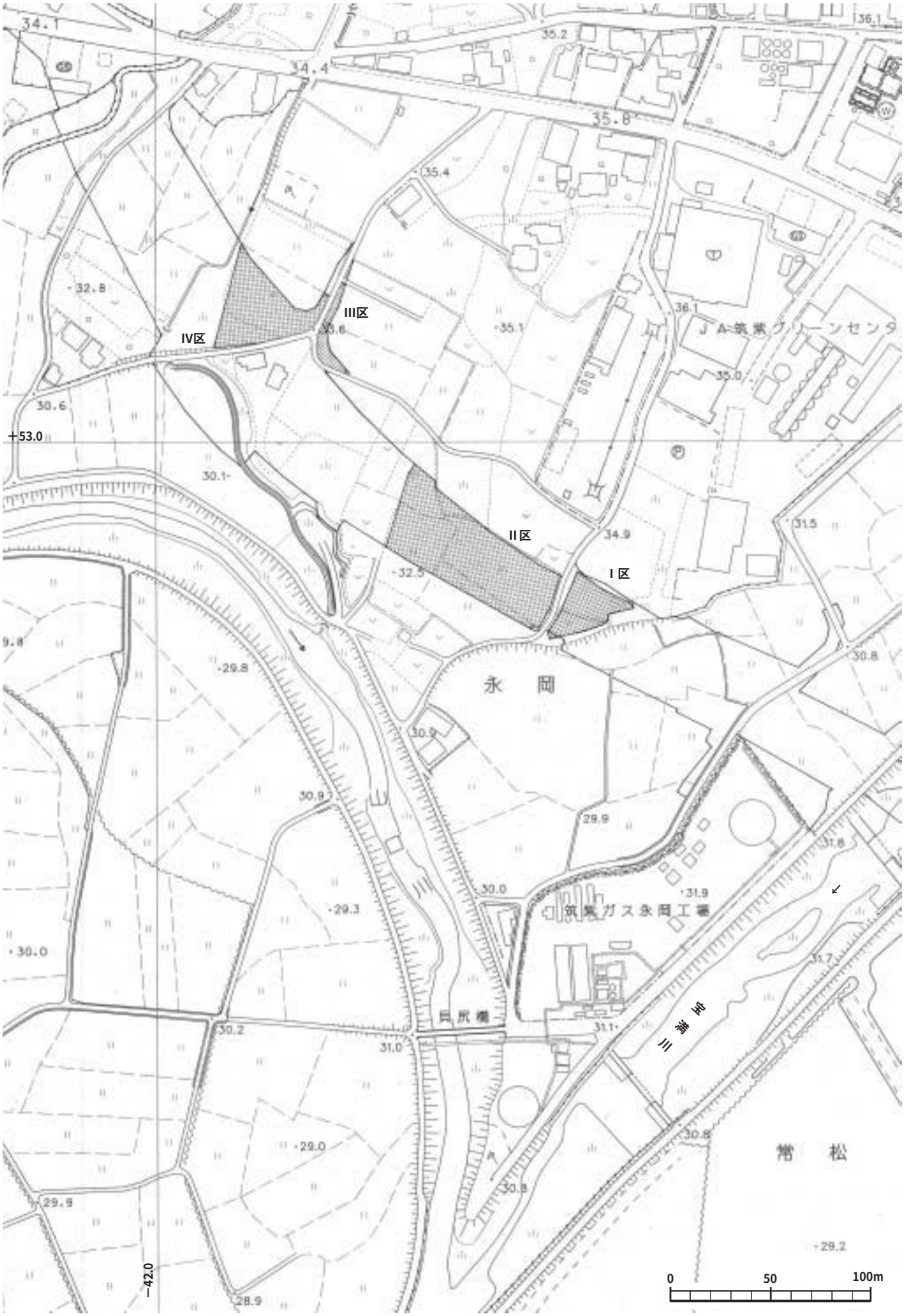
⑰『阿志岐シメノグチ遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第１集　筑紫野市教育委員会　1972

⑱『柴田城　峯畑遺跡第７次調査』筑紫野市文化財調査報告書第 71 集　筑紫野市教育委員会　2002

⑲『鞭掛遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第 17 集　筑紫野市教育委員会　1987

⑳『岡田地区遺跡群Ⅰ』筑紫野市文化財調査報告書第 51 集　筑紫野市教育委員会　1996

㉑『岡田地区遺跡群Ⅱ・Ⅲ』筑紫野市文化財調査報告書第 56 集　筑紫野市教育委員会　1998



第２図　永岡岸元遺跡周辺地形図（S=1/2,500）

第３章　調査の成果

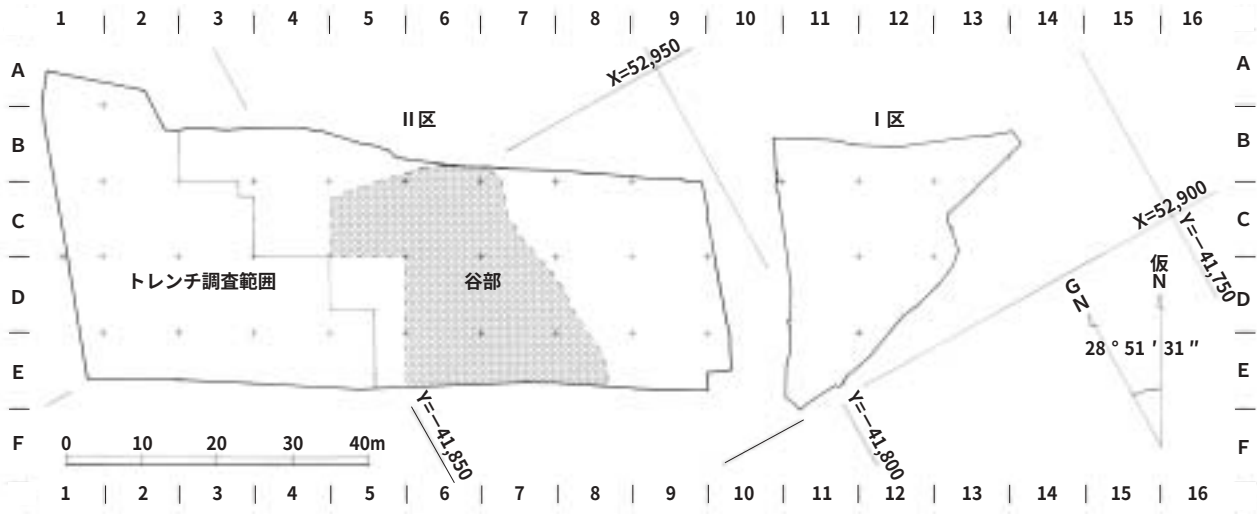
第１節　遺跡名の変更と調査区の設定（第１～３図、第２表）

本遺跡は、県の遺跡等分布地図 1980 年版に大字天山所在の「宮崎遺跡」、また市の市内遺跡分布図 1998 年版には「天山宮崎遺跡」と登録されていた（第１図 21・22 の両範囲）。その後、所在地の天山は牛島の誤りのため、「牛島宮崎遺跡」として訂正・周知されていた。しかしながら本調査地が「大字永岡字岸元」にあることから所在地について混乱を生じていた。そのため、平成 13 年 6 月 14 日付けで「牛島宮崎遺跡」を牛島と永岡の行政区境である旧日田街道で区切り、南側の遺跡名を「永岡岸元遺跡」に変更した（第１図 22 の範囲）。これに伴い、業務名称も 7 月 13 日付けで「牛島宮崎遺跡第３次発掘調査」から「永岡岸元遺跡発掘調査」に変更した(第２図参照)。

調査にあたり、調査地内を横切る道を境として調査区(Ⅰ～Ⅳ区)を設定した(第２図・第２表参照)。

第２表　調査区一覧表

	調　査　地　番	調査面積(㎡)	調　査　期　間
Ⅰ 区	永岡 70 および 71-1・71-2・72-1・72-2・72-4 の一部	661	2001.08.21～2001.11.20
Ⅱ 区	永岡 62-1・65・66・67-1 の一部	2,747	2001.05.07～2001.12.04
Ⅲ 区	永岡 125-1 の一部	176	2001.10.24～2001.12.02
Ⅳ 区	永岡 135-1・140-1 の一部	1,318	2001.10.26～2002.01.16
計		4,902	

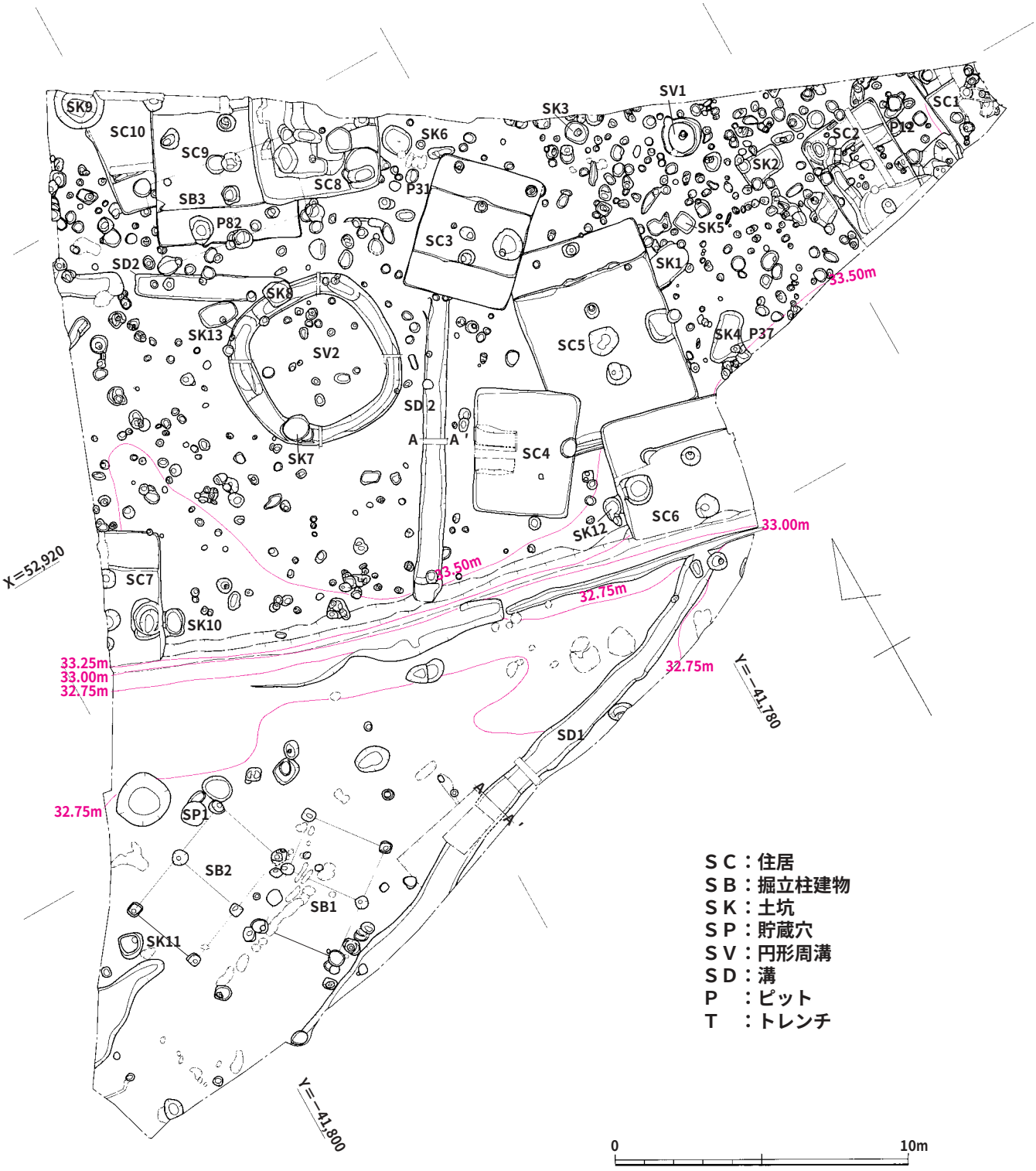


第３図　永岡岸元遺跡Ⅰ・Ⅱ区調査地区割図（S=1/1,000）

第２節　Ⅰ　区の調査（第３・４～39 図、図版１～19）

低位段丘Ⅱ面である。かつての川原の跡を残す平坦な段丘面(砂層)を層厚１m 前後の風成土壌(黄褐色粘質土)が覆っており、その上面が遺構面となっている。

北半の高い部分を上段、南半の低い部分を下段とする。



第４図　永岡岸元遺跡Ⅰ区遺構配置図（S=1/200）

上段は、黄褐色粘質土を暗茶褐色粘質土が覆っており、試掘・確認調査でこの上面を遺構面としていたが、遺構検出が非常に難しかったためこの層を剥いで調査した。

下段は、田を作るため0.7mほど削平されていた。

上段を中心に竪穴住居10・掘立柱建物３・貯蔵穴１・土坑13・円形周溝２・溝２・ピット多数を検出した。

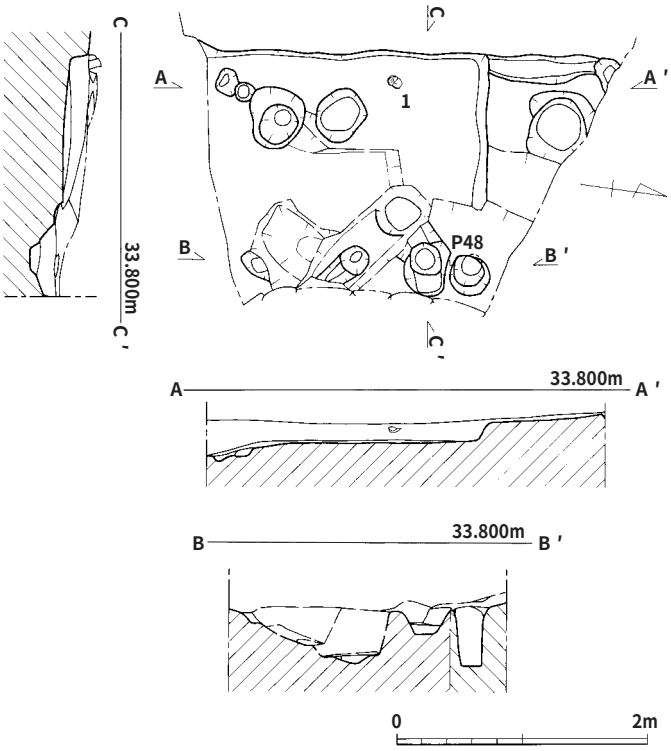
竪 穴 住 居（ＳＣ）

上段で10軒検出した。

ＳＣ１（第４・５図、図版１・２）

上段東隅に位置する。規模は3.26m以上×2.06m以上で、南側は調査区外へつづく。北側は東へカーブしており、住居の北西隅であろう。平面形は長方形と考える。残存の深さ16cmを測るが、東側は床面まで攪乱され遺構の残りは悪い。北側に幅 1.0m前後・高さ13cm 前後の地山削り出しで作られたベッド状遺構があり、西壁際には壁溝とみられる溝が走る。ベッド際の径32cmのピット(Ｐ48)は、この住居の主柱穴の１つと考えられる。

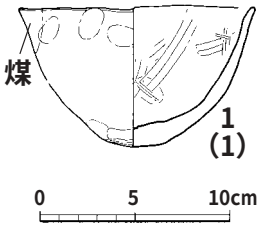
西壁中央付近の床上６cm から鉢(1)が出土した。



第５図　Ｉ区ＳＣ１実測図（Ｓ＝1/60）

土　器（第６図、第３表、図版14－１）

鉢（1）　凸レンズ状にふくらむ底をもち、口縁はわずかに外反する。内面にナデのち粗いハケ、外面にナデ・底部のみケズリを施すが、成形・調整ともに粗雑である。外面胴部下半に黒斑があり、外面口縁部には煤が付着している。



第６図　Ｉ区ＳＣ１出土土器実測図(S=1/4)

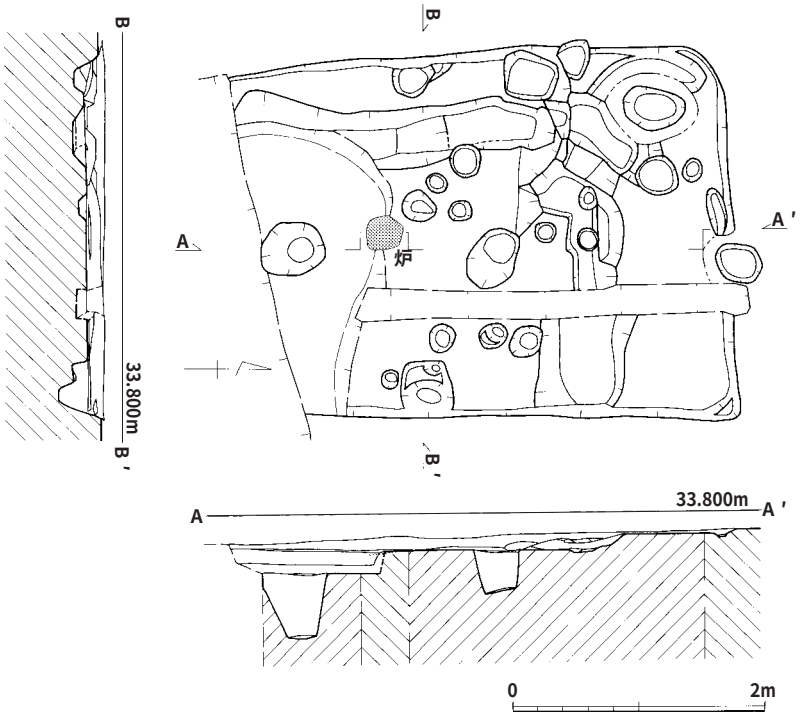
第３表　Ｉ区ＳＣ１出土土器観察表

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
6-1	Ｉ	SC1No1	鉢	(12.45)		7.35	内外.にぶい黄橙	0.1～3.6mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	不良	内.ナデ・指頭圧痕→ナデ→ハケ・工具ナデ　外.ナデ・指頭圧痕→ナデ・ケズリ	外.黒斑・煤	1

ＳＣ２（第４・７図、図版２）

ＳＣ１の西約 1.4mに位置する。規模は 3.92m以上×3.00mで、南側は調査区外へつづく。平面形は長方形である。残存の深さ 11cm を測る。検出時、西側から北側にかけて幅 1.0～1.5m・高さ 10cm 前後のベッド状遺構（┓型）がはっきりと見えていたが、一部貼り付けで作られていたため掘りそこない、元の形がわからなくなった。主柱穴は２つで東壁中央に 46cm×42cm･深さ 23cm の屋内土坑をもつ。主柱穴を結んだラインのやや西側にある径 30cm の焼土粒の広がりは炉と考えられるが、炉本体は検出できなかった。



第７図　Ｉ区ＳＣ２実測図（S=1/60）

石製品・金属器が出土した。土器も出土したが、図示できるものはない。

石製品（第 37 図、第 14 表、図版 19）

不明石製品（第 37 図７、図版 19－３）　珪質片岩製か。両側縁ともわずかに外弯し石庖丁の形に似るが、刃部が見当たらないため断定できない。研磨により全体に光沢がある。

金属器（第 39 図、第 15 表、図版 19）

袋状鉄斧（第 39 図１、図版 19－９）　接点は見つからなかったが、同一個体である。刃先はわずかに撥状に開く。

ＳＣ３（第４・８図、図版２・３）

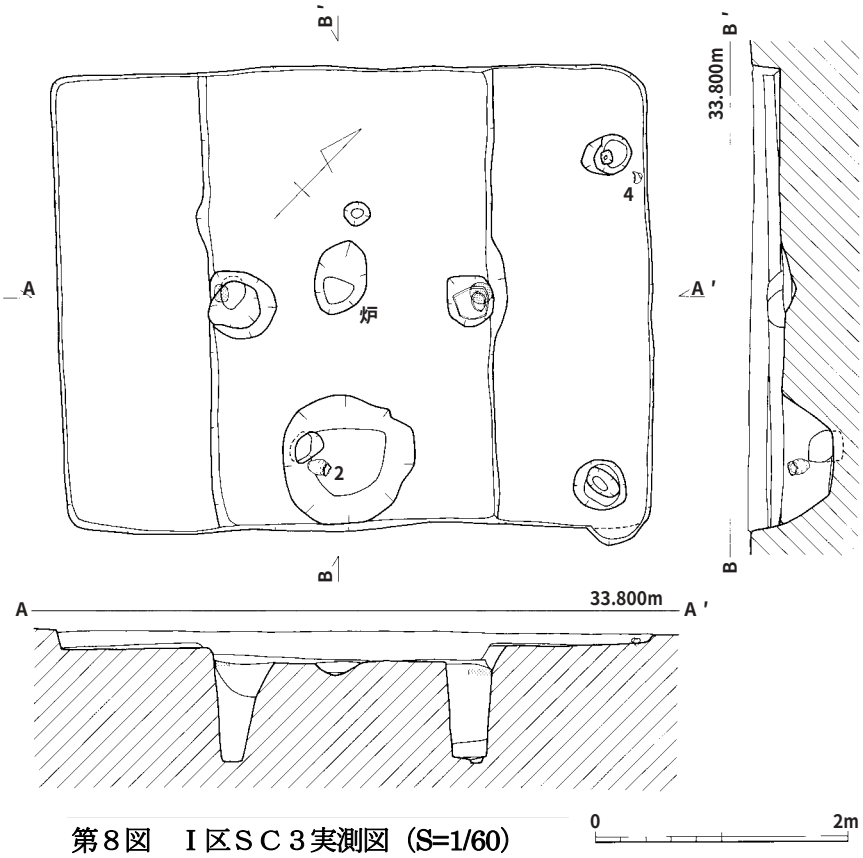
上段中央に位置し、ＳＣ５を切るが、ＳＤ２との重複関係は不明確である。規模は 4.74m×3.72mで、平面形は長方形である。残存の深さ 24.5cm を測り、遺構の残りは比較的よい。主軸は他の住居に比べ東へ振る。南北に幅 1.2m前後・高さ 12cm 前後の地山削り出しで作られたベッド状遺構、その際に主柱穴がある。主柱穴は２つで中央に 62cm×41cm の炉、東壁中央に径 103cm・深さ 41cm の屋内土坑がある。

屋内土坑上層から甕(２)、北側ベッド床直上から手づくね土器(４)が出土した。

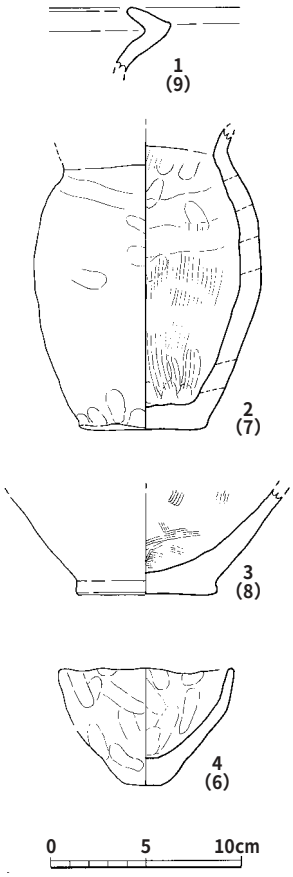
土器・土製品（第９図、第４表、図版 14－２～４）

二重口縁壷（第９図１）　口縁は短くやや内屈する。内面に一部ナデが残る。

甕（第９図２、図版 14－２）　平底で胴部最大径を中位にもつがあまり外へ張らない。頸部のし



第８図　Ｉ区ＳＣ３実測図（S=1/60）



第 9 図　Ｉ区ＳＣ３出土土器実測図（S=1/4）

まりはやや弱い。内面に指オサエのちハケ、外面にナデのち胴部下半～底部にケズリを施す。内面には粘土の接合痕が残っている。成形・調整ともに粗雑である。外面胴部下位に黒斑がある。

壷(第９図３、図版 14－３）　平底である。内面に細かいハケのちナデを施す。外面底部・胴部下位に煤が付着し、赤変している。

手捏ね土器（第９図４、図版 14－４）　鉢形を呈す。凸レンズ状にふくらむ厚底をもち、口縁は直立近く立ち上がる。

第４表　Ｉ区ＳＣ３出土土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

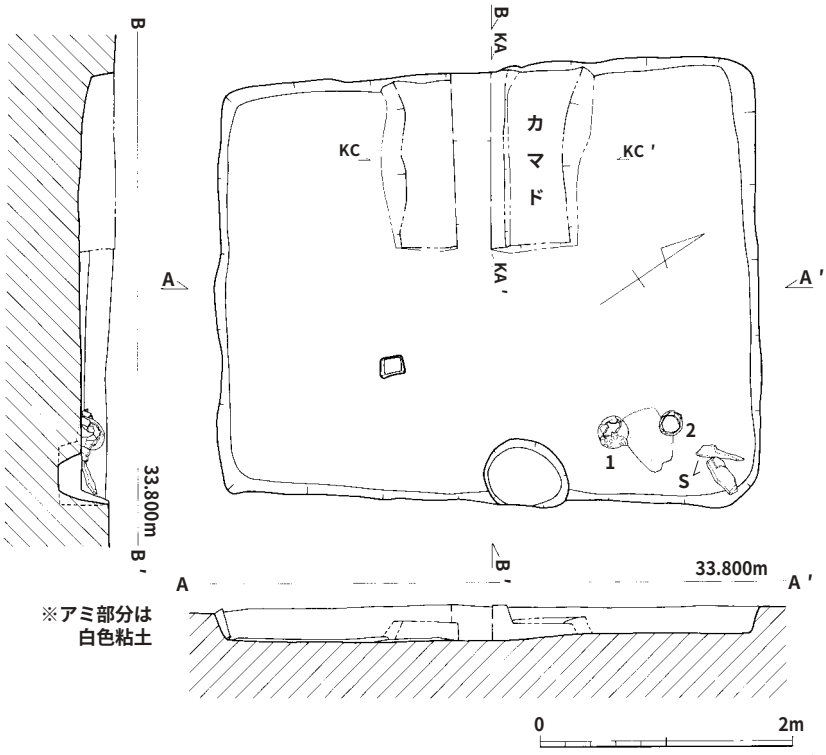
挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
9-1	Ｉ	SC3D	二重口縁壷			(3.30)	内外. 浅黄橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ		9
9-2	Ｉ	SC3No2	甕		底径6.60 胴部径11.90	(15.90)	内.灰褐　外.浅黄	砂粒を多量,0.4～5.0mmの長石・石英を多少,0.1～0.7mmの雲母・輝石を少量含む	良	内.ナデ・指頭圧痕→ハケ・指頭圧痕 外.指頭圧痕・ナデ→ケズリ・ケズリ	内外・黒斑	7
9-3	Ｉ	SC3D	壷		7.30	(5.60)	内.浅黄橙 外.にぶい黄橙	0.5～5.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石を少量含む	良	内.ハケ→ナデ　外.ナデ・指頭圧痕	外. 煤・赤変	8
9-4	Ｉ	SC3No1	手づくね土器	9.40	2.00	6.10	内.にぶい黄橙 外.灰黄	2.0～3.0mmの石英を多量,1.0mm以下の長石を多少,1.0mm以下の雲母を少量,1.0～3.0mmの赤色粒を含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕・ナデ？ 外.ナデ・指頭圧痕・ナデ？		6

金属器（第 39 図、第 15 表、図版 19）

袋状鉄斧（第 39 図２、図版 19－10）　明確な段を持たず、なで肩である。刃先はやや撥状に開く。袋部内面に木質が付着している。

ＳＣ４（第４・10・11 図、図版３・４）

上段中央に位置し、ＳＣ５を切る。規模は 4.32m×3.26～3.59m で、平面形は長方形である。南壁に比べ北壁の方が若干長い。残存の深さ 19.0cm である。主軸は他の住居と比べやや東へ振る。内部から 18cm×14cm・深さ 14cm のピットを１つ検出したが、小さすぎて主柱穴とは断定できない。東壁中央に 65cm×55cm・深さ 19m の屋内土坑、西壁中央にカマドがある。



第 10 図　Ⅰ区ＳＣ４実測図（S=1/60）

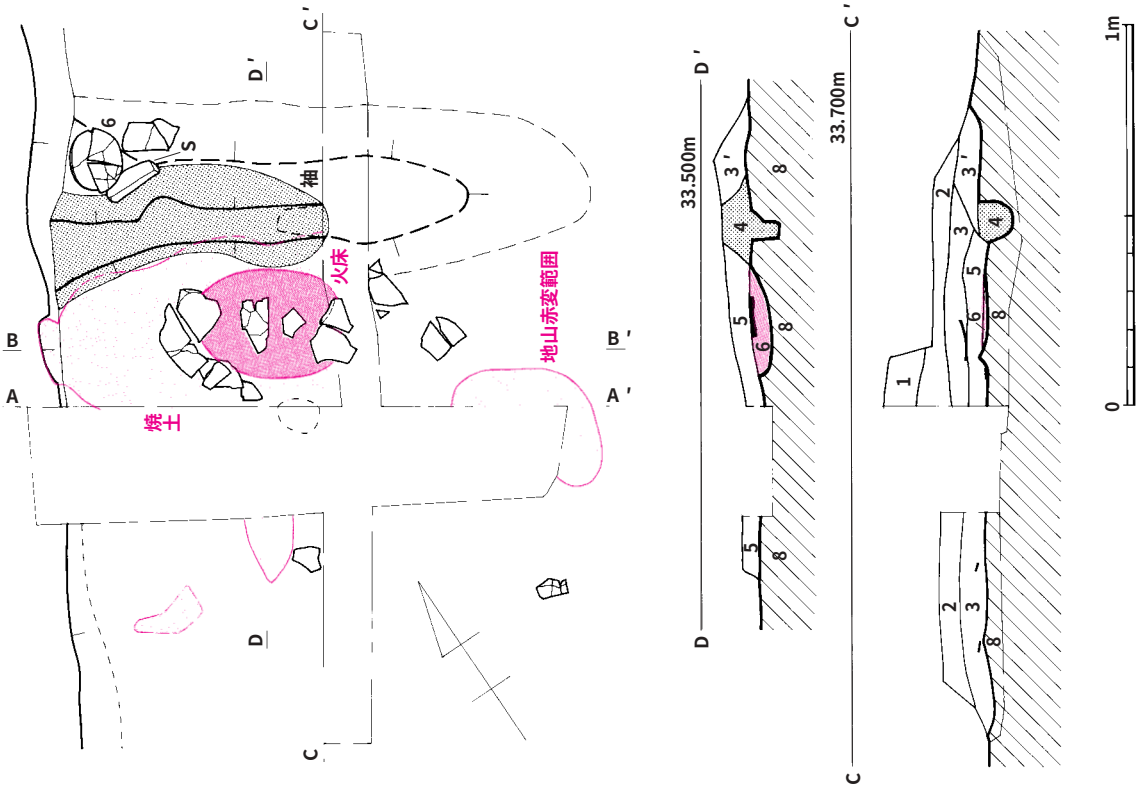
東壁北側に白色粘土の塊りがあり、その上に使い込まれた甑(１)と甕(２)が倒立状態で並べられるように置かれていた。また、北東隅から 49cm×13cm×10cm の扁平な石が２つに割れて見つかったが、加工・使用の痕跡がなかったため図化しなかった。なお、須恵器は出土していない。

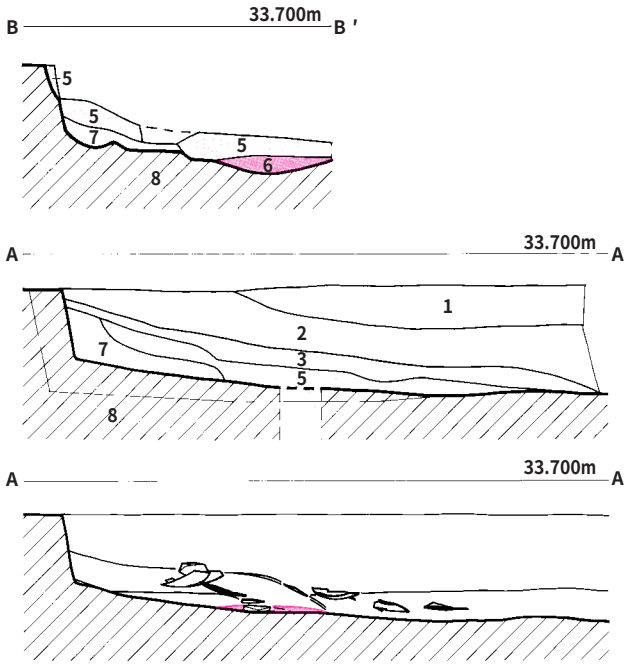
土器・土製品（第 12 図、第５表、図版 14）

甑（第 12 図１、図版 14－９）　丸底で口縁はやや外反する。底部中央に１個、その周囲に復元すると６個の穿孔があったとみられる。把手は胴部中位に穿孔後ソケット状に差込んで接合している。内面にケズリ、外面にハケ、把手にナデを施す。外面胴部下位～口縁部に黒斑がある。また、胴部下半は被熱し器壁が一部剥落している。

甕（第 12 図２、図版 14－８）　胴部の張りは弱く頸部のしまりも弱い。口縁はやや長くわずかに外傾する。内面胴部にケズリ・口縁部に細かいハケのちナデ、外面胴部にタタキのち細かいハケのちナデ・口縁部に細かいハケのちナデを施す。外面胴部中位～口縁部に黒斑があり、外面胴部下位～中位には煤が付着している。また、外面胴部下半は全体的に被熱し、赤変・器壁の剥落が著しい。

ミニチュア土器（第 12 図３、図版 14－７）　小片のため器種は不明である。外面にミガキを施





1	暗茶褐色土（住居埋土）	粒子は細かい。	φ2mm程の粗砂粒を若干含む。	粘性やや強い。しまりやや強い。
2	暗茶褐色土（住居埋土）	粒子は細かい。	φ2～4mm程の暗黄褐色土粒を多く含む。（地山由来？）	粘性普通。しまり普通。
3	淡黒褐色土（カマド構成土）	粒子は非常に細かい。	φ2～5mm程の暗黄褐色土粒を多く含む。	粘性強い。しまりやや強い。
3′	淡黒褐色土（カマド構成土）	やや明るい。	φ1cm程の焼土粒を若干含む。	
4	暗茶褐色土（袖）	粒子は細かい。	φ2～20mm程の暗黄褐色土粒（地山由来？）とφ5mm程の焼土粒を多く含む。	粘性強い。しまり強い。
5	赤褐色土（焼土）	粒子は非常に細かい。	3の土を若干含む。	粘性やや強い。しまり強い。
6	暗赤褐色土（火床）	粒子は非常に細かい。		粘性やや強い。しまり非常に強い。
7	暗茶褐色土	粒子は非常に細かい。	φ2mm程の粗砂粒を若干含む。	粘性やや弱い。しまりやや弱い。
8	暗黄褐色土（地山）	粒子は非常に細かい。		粘性強い。しまり非常に強い。

第 11 図　Ⅰ区ＳＣ４カマド実測図（S=1/20）

している。

ＳＣ４カマド（第 11 図、図版４）

南袖はトレンチにより失われた。北袖は長さ 74cm を残す。煙出は幅 18cm で住居外へ 3 cm 張り出す。奥壁から 55cm のところに長軸 40cm・短軸 29cm の火床があり、その中央で板状になっ

た粘土を検出した。Ｄ－Ｄ´上での火床最低部と北袖最高部の比高差は８cm である。

煙出と火床の中心を通る線を主軸として反転することで、長さ(煙出～火床) 81cm・焚口幅 29cm・燃焼部最大幅 42cm という規模であったと推定できる。

前面の地山赤変部分は、火床から遠く離れ、主軸から大きく南へずれており、直接カマドに伴うものではない。

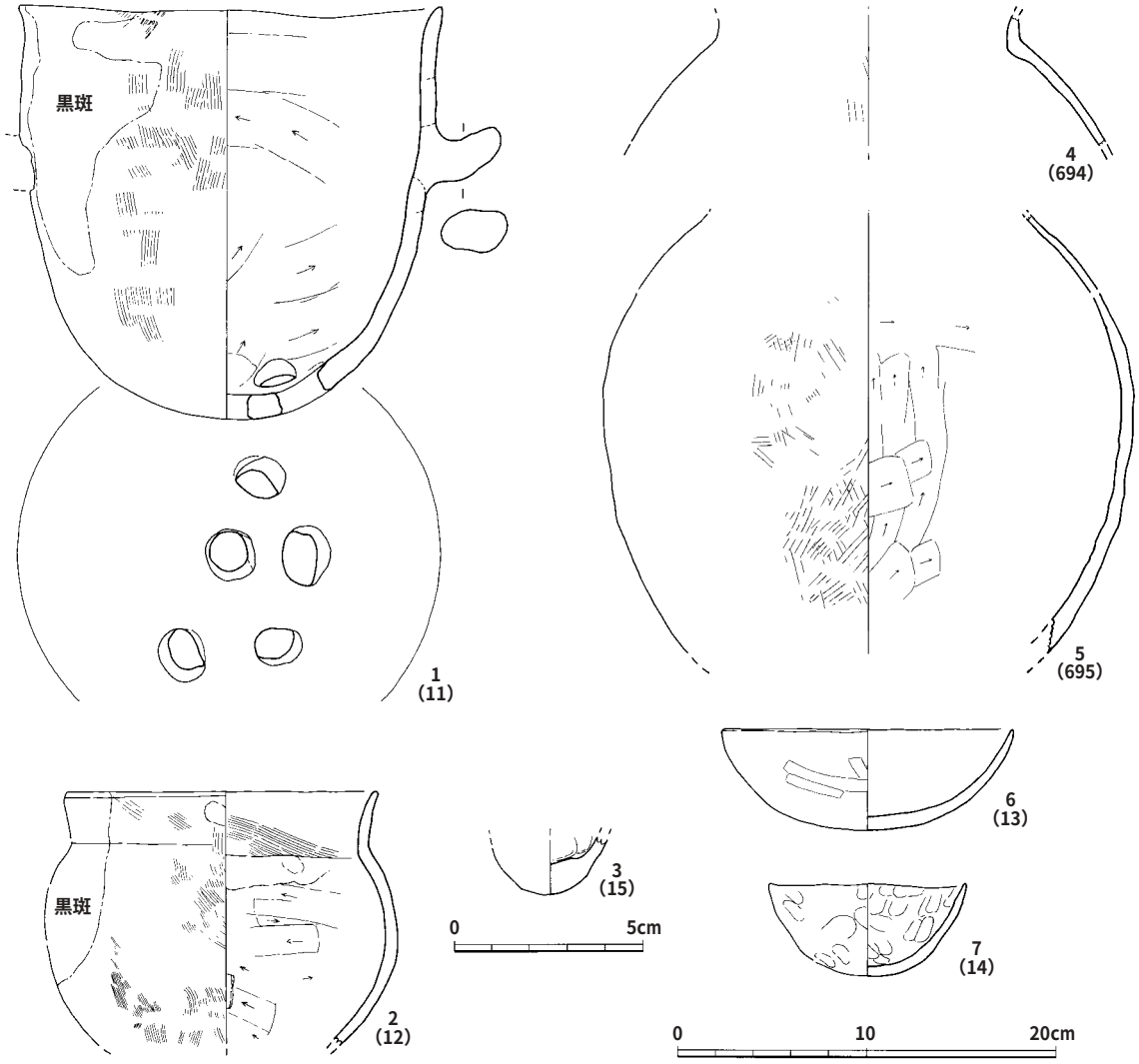
５層上面に広がるような形で甕(４・５)、北袖上面から鉢(６)、北袖内から手づくね土器(７)が出土した。

土器・土製品（第 12 図、第５表、図版 14）

甕（第 12 図４・５）　同一個体と考えられるが接点がないため別々に図化している。胴部最大径を中位にもつ。内面にケズリ、外面に粗いハケを施す。

鉢（第 12 図６、図版 14－５）　丸底でやや内弯しながら外へ開く。内面と外面口縁部にナデ、外面底部～胴部にケズリを施す。

手捏ね土器（第 12 図７、図版 14－６）　鉢形を呈す。丸底である。外面底部に黒斑がある。



第 12 図　Ｉ区ＳＣ４出土土器実測図（S= 1/2・1/4）

第５表　Ｉ区ＳＣ４出土土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
12－1	Ｉ	SC4No1	甑	22.30		(21.90)	内.橙 外.にぶい黄橙	0.1～3.0mmの石英を多量,0.3～2.0mmの長石を多少,0.3～1.0mmの角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・ケズリ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り(??)	11
12－2	Ｉ	SC4No2	甕	(16.50)	胴部径18.70	(13.40)	内.黄橙 外.橙	0.1～2.7mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ハケ→ナデ・指頭圧痕→ナデ・ケズリ 外.ハケ→ナデ・タタキ→ハケ→ナデ	外.黒斑・煤・赤変	12
12－3	Ｉ	SC4B	ミニチュア土器			(1.50)	内外.橙	0.2mm以下の長石・雲母を少量含む	良	内.指頭圧痕　外.ミガキ		15
12－4	Ｉ	SC4カマド No2	甕			(6.90)	内.白黄 外.にぶい黄橙	長石・石英を多量に含む	普通	内.ナデ・工具ナデ　外.ナデ・ハケ	同一個体？	694
12－5	Ｉ	SC4カマド No1～4	甕		胴部径(28.20)	(23.30)	内.白黄 外.にぶい黄橙	長石・石英を多量に含む	普通	内.工具ナデ・ケズリ→工具ナデ・ケズリ 外.ハケ		695
12－6	Ｉ	SC4カマド No7	鉢	15.40	5.65	5.35	内外.橙	赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ　外.ナデ・ケズリ		13
12－7	Ｉ	SC4カマド 北袖内	手捏ね土器	(10.40)		4.90	内.にぶい橙 外.橙	0.7～4.0mm石英を多量,0.2～1.0mmの長石を多少,0.3～1.0mmの角閃石・赤色粒を少量含む	不良	内外.指頭圧痕	外.黒斑	14

ＳＣ５（第４・13図、図版１・５）

上段中央に位置する。ＳＫ１を切り、ＳＣ３・ＳＣ４・ＳＣ６に切られる。規模は7.18m×4.94mで、平面形は長方形である。残存の深さ21.0cmを測る。北側に幅1.3m・高さ20cm前後の地山削り出しで作られたベッド状遺構がある。南東隅の状況などから南側にも幅0.65m前後のベッドがあったと考えられるが、一部貼り付けで作られていたため掘りそこない、元の形がわからなくなった。主柱穴は２つで中央に径100cmの炉、東壁中央に115cm×94cm・深さ27cmの屋内土坑がある。

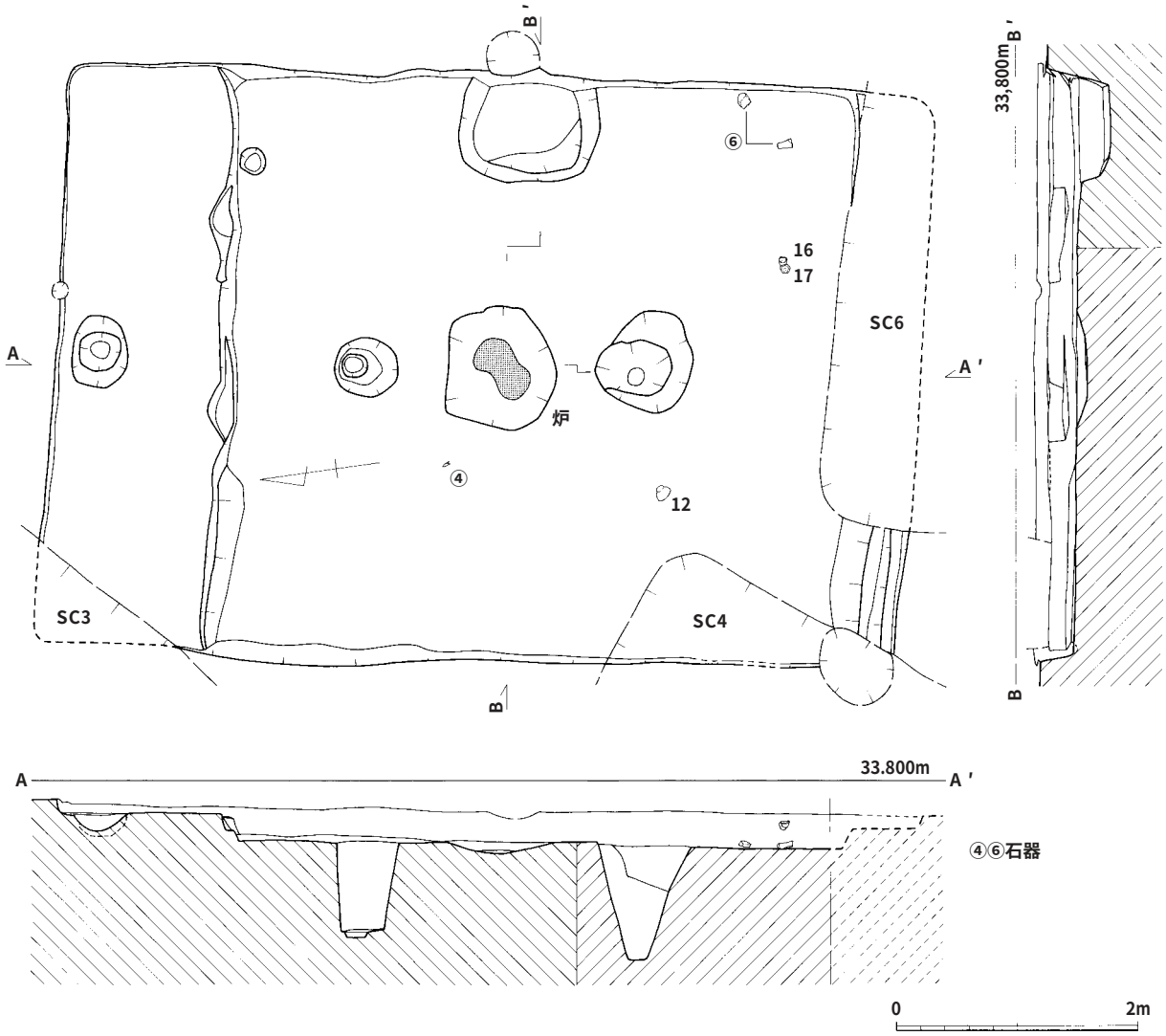
屋内土坑から甕(10)、南西の床上５cmから鉢(12)、北壁中央付近の検出面から沓形器台(13)、南東の床上16cm（ベッド上？）からセットになって鉢(16・17)、中央の床上10cmから打製石鏃（第38図４）、東壁南側床直上から２つに割れて台石（第37図６）が出土した。その他土器の多くは上層から出土した。

土器・土製品（第14図、第６表、図版14・15）

二重口縁壺（第14図１・２、図版14－10・11）　**1**は頸部が外反し、口縁はやや長くやや内弯する。内面頸部にハケ・口縁部にナデ、外面頸部にハケのちナデ・口縁部にナデを施している。**2**は頸部がやや外反し、口縁はやや内弯する。頸部下に１条の三角突帯がある。内面全体にナデ・口縁部下のみ工具ナデ、外面頸部にハケのちナデ・口縁部にナデを施している。外面口縁部に黒斑がある。

壺（第14図３・４・９、図版14－13・12、15－１）　**3**は最大径付近に３条の三角突帯がある。内面にナデ、外面胴部下位にケズリのちナデ・上位にハケを施している。外面胴部下位には黒斑がある。**4**は頸部のしまりがやや強く、口縁は強く外反する。肩部に１条の三角突帯がある。内面胴部上位にナデのちハケ・口縁部にナデ、外面胴部上位にハケ・口縁部にナデを施している。内面胴部上位に黒斑がある。**9**は凸レンズ状にふくらむ底をもつ。外面底部には粘土を貼りつけたような痕跡がある。内面に工具ナデ、外面にナデを施している。外面底部・胴部下位に黒斑がある。

甕（第14図５～８・10、図版14－14～17、15－２）　**5**は頸部のしまりがやや弱く、口縁はやや強く外反しながらのびている。内面胴部上位と外面にハケのちナデを施す。**6**はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。内外面ともハケを施している。外面胴部中位には黒斑があり、外面



第 13 図　Ⅰ区ＳＣ５実測図（S=1/60）

底部・胴部下位は被熱により赤変している。 **7** は胴部の外への張り方が場所により異なり、いびつである。頸部のしまりが弱く、口縁はやや強く外傾する。内面にナデ、外面にハケを施す。内面胴部に黒斑があり、内面口縁部・外面上半には煤が付着している。また、外面下半は被熱し全体的に赤変している。 **8** は薄い作りである。頸部のしまりはやや強く、口縁は短く強く外反する。内外面口縁部にナデを施す。胴部に工具痕らしきものがみられる。**10** は壷の可能性もある。平底である。内面にナデ、外面胴部下位にハケを施す。外面底部全体に煤が付着している。

鉢（第 14 図 11・12・16・17、図版 15－３・４・８・９）　**11** は内弯しながら立ち上がり、口縁はわずかに内傾する。内面に指ナデ、外面胴部にタタキのちケズリ・口縁部にタタキのちナデを施している。**12** は凸レンズ状にふくらむ底から直線的に外へ開く。手づくねで成形したのち、内外面とも工具ナデを施している。**16** は凸レンズ状にふくらむ底からあまり外へ開かないまま立ち上がり、口縁はほぼ直立する。**17** は厚い平底から内弯しながら立ち上がり、口縁はわずかに内傾し、端部は水平に仕上げている。外面には黒斑がある。16・17 とも内面に指オサエ、外面に棒状工具によるオサエを施している。

沓形器台（第 14 図 13、図版 15－５）　庇状突起をもつタイプである。脚部は直線的に外へ開く。

受部中央に穿孔が１つあり、その下には孔とほぼ同じ大きさで凸レンズ状の粘土塊がぶら下がっている。内面調整後に外面から先の丸いもので穿孔されたものとみられる。内面にシボリのち指ナデ・ハケ、外面にタタキを施す。内外面に黒斑があり、内面裾部と外面は赤変している。

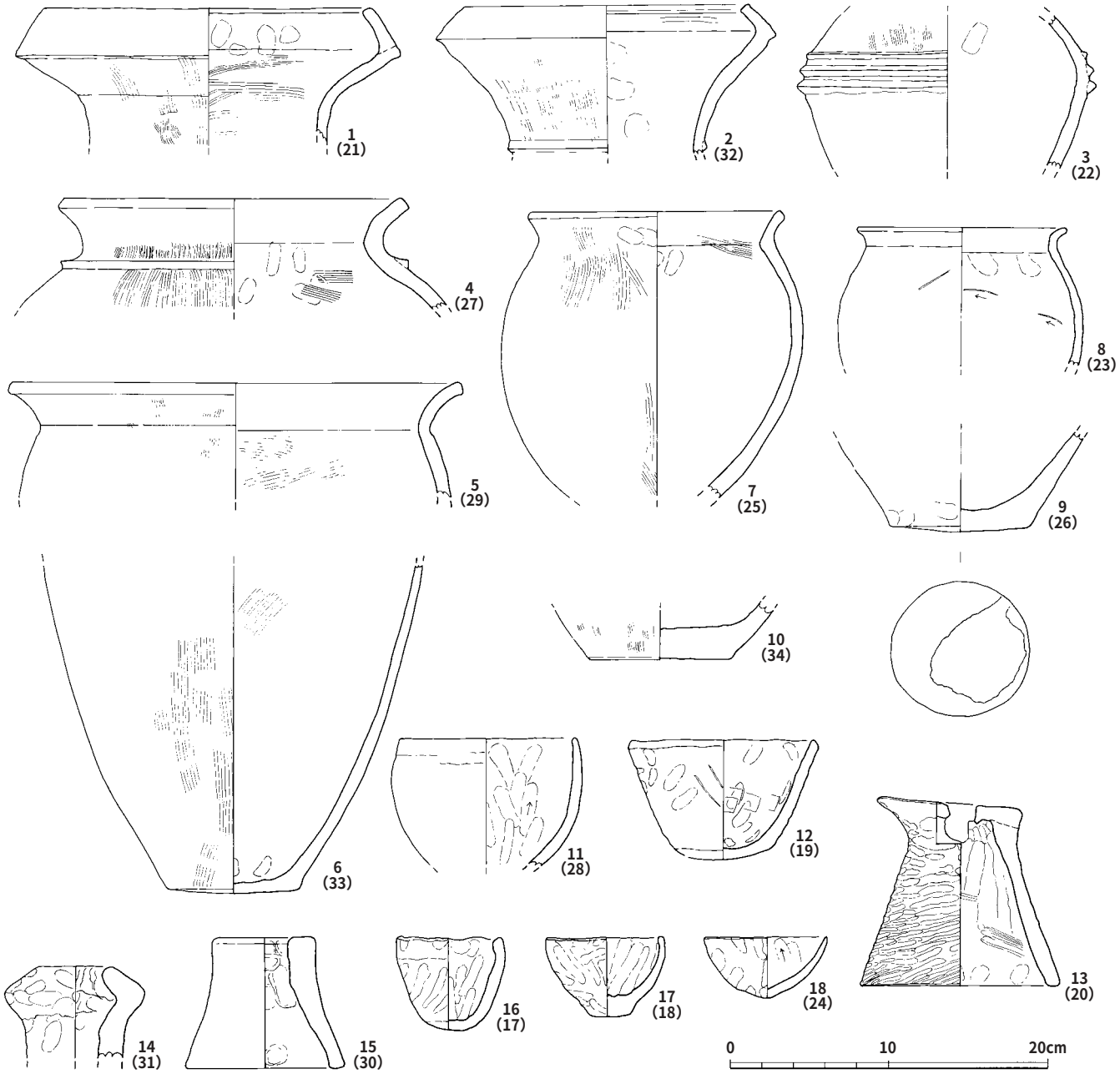
器台（第 14 図 14・15、図版 15－６・７）　**14** は全体的に厚ぼったいつくりでいびつである。端部はシボリで内屈させている。内面にシボリのち指オサエ、外面に指オサエ(シボリ)のちナデを施す。**15** は脚部が直線的に外へ開く。内面受部に指オサエ、内面脚部と外面にナデを施す。内外面裾部と外面受部は赤変している。

手捏ね土器（第 14 図 18、図版 15－10）　鉢形を呈す。尖底からやや内弯しながら外へ開く。内面胴部・外面口縁部に黒斑がある。

石　器（第 37・38 図、第 14 表、図版 18・19）

台石（第 37 図１、図版 19－１）　花崗斑岩製である。中央にわずかな窪みがある。

打製石鏃（第 38 図４、図版 18－17）　サヌカイト製の凹基無茎鏃である。浅い抉りをもつ。



第 14 図　Ｉ区ＳＣ５出土土器実測図（S=1/4）

第６表　Ｉ区ＳＣ５出土土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
14－1	Ⅰ	SC5B	二重口縁壷	(20.40)		(8.70)	内.浅黄橙 外.にぶい黄橙	0.1～3.3mmの長石・石英を多少,1.7mm以下の輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ		21
14－2	Ⅰ	SC5D	二重口縁壷	(17.90)		(9.40)	内外.明赤褐色	0.5～4.0mmの長石・石英を多量,0.5mm前後の雲母・1.0～2.0mmの輝石・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・工具ナデ？・ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑	32
14－3	Ⅰ	SC5C	壷			(9.70)	内.褐灰 外.にぶい橙	0.1～2.8mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ 外.ハケ・ナデ・ケズリ→ナデ	外.黒斑 突帯有り(3)	22
14－4	Ⅰ	SC5D	壷	(22.00)		(6.80)	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	やや良	内.ナデ・指頭圧痕→ナデ・指頭圧痕→ナデ→ハケ 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ	内.黒斑 突帯有り	27
14－5	Ⅰ	SC5D	甕	(28.60)		(7.30)	内.淡黄 外.にぶい橙	0.2～2.0mm長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石を少量含む	良	内外.ナデ・ハケ→ナデ		29
14－6	Ⅰ	SC5C・D	甕		(8.30)	(20.75)	内外.にぶい黄橙	0.4～3.0mmの石英を多量,0.1～3.0mmの長石を多少,0.5～1.0mmの赤色粒を少量含む	良	内.ハケ・指頭圧痕→ナデ？ 外.ハケ・指頭圧痕	外.赤変	33
14－7	Ⅰ	SC5D	甕	(16.20)	胴部径 (19.00)	(18.15)	内.橙 外.にぶい橙	0.1～6.3mmの長石・石英を多量,1.9mm以下の雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・指頭圧痕→ハケ・ナデ 外.ナデ・ハケ	外.赤変	25
14－8	Ⅰ	SC5C	短頸壷	(13.20)	胴部径(15.40)	(8.80)	内.オリーブ黒 外.黄褐	0.5～2.0mmの長石・石英を多量に含む	やや不良	内.ナデ・指頭圧痕・工具ナデ？　外.ナデ		23
14－9	Ⅰ	SC5D	壷か甕		8.70	(6.30)	内外.にぶい黄橙	0.3～4.0mmの石英を多量,0.1～1.0mmの長石を多少,1.5mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.工具ナデ　外.ナデ・指頭圧痕・ナデ	外.接合線	26
14－10	Ⅰ	SC5土1	甕か壷		8.80	(3.10)	内外.灰白	2.0mm以下の長石・石英・角閃石を多量,0.5mm前後の雲母を含む	良	内.ナデ　外.ハケ・ナデ？	外.黒斑	34
14－11	Ⅰ	SC5D	鉢	(11.30)		(8.00)	内.にぶい橙 外.にぶい黄橙	0.1～4.0mmの石英を多量,0.1～3.5mmの長石を多少,1.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	やや不良	内.ナデ・指ナデ 外.ナデ・タタキ→ナデ・タタキ→ケズリ		28
14－12	Ⅰ	SC5No5	鉢	(12.00)	(6.00)	7.60	内.黒褐　外.褐灰	0.5～3.5mmの石英を多量,0.1～2.0mmの長石を多少,4.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内外.ナデ・指圧痕→工具ナデ		19
14－13	Ⅰ	SC5A	沓形器台	受部径 (9.10)	裾部径12.50	12.00	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	0.1～3.1mmの長石・石英を多少,2.3mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・指頭圧痕・シボリ・指ナデ→ハケ→ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・指頭圧痕→ナデ・タタキ	外.黒斑・赤変 穿孔有り	20
14－14	Ⅰ	SC5D	器台	受部径 (5.40)		(5.80)	内外.橙	0.4～4.5mmの石英を多量,0.1～2.0mmの長石を多少,1.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内.シボリ・指頭圧痕 外.ナデ・指頭圧痕→ナデ		31
14－15	Ⅰ	SC5D	器台	受部径 (6.30)	裾部径(10.00)	8.30	内外.黄橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多量,0.2mm以下の雲母を少量含む	良	内.ナデ・指頭圧痕・ナデ　外.ナデ		30
14－16	Ⅰ	SC5No3	手捏ね土器	6.60	3.55	5.80	内.浅黄橙 外.灰白	2.0mm以下の長石・石英を多少,0.2mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内外.指頭圧痕・指ナデ	外.赤彩？	17
14－17	Ⅰ	SC5No4	手捏ね土器	7.40	2.50	5.00	内外.にぶい橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,0.1～3.0mmの雲母・赤色粒を多少,1.0mm以下の角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・指ナデ 外.ナデ・指ナデ？・ナデ		18
14－18	Ⅰ	SC5D	手捏ね土器	7.80		3.90	内.灰白 外.浅黄橙	0.1～1.5mmの長石を多少,2.0mm以下の石英・雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	不良	内.ナデ・指ナデ　外.ナデ・指頭圧痕		24

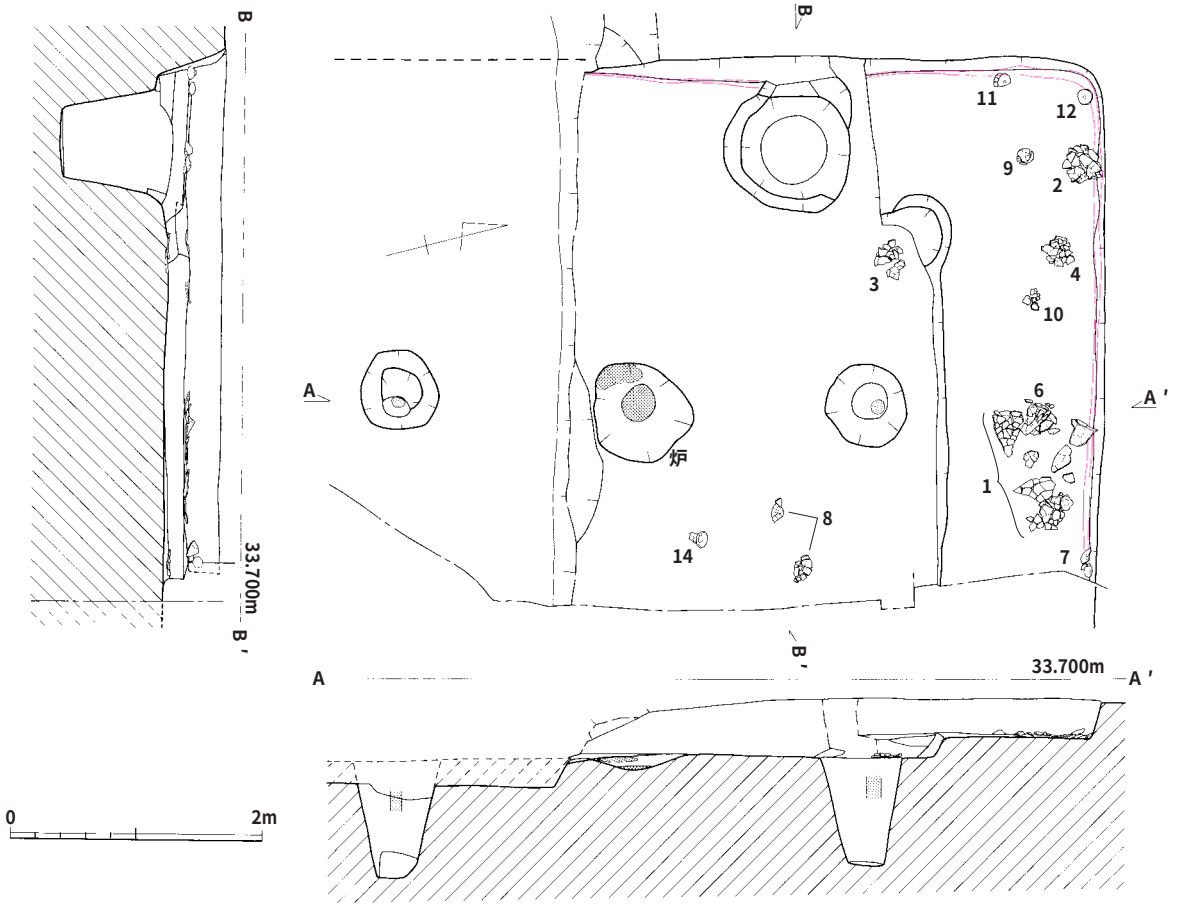
ＳＣ６（第４・15図、図版６・７）

上段南側に位置し、ＳＣ５・ＳＫ12を切る。東側は調査区外へつづく。南側は削平により壁面・床面を失うが、主柱穴だけが辛うじて残っていた。規模は5.92m以上×4.40m以上で、平面形は長方形である。残存の深さ34cmを測る。西側から北側にかけて幅1.1～1.2m・高さ14cm前後の地山削り出しで作られたベッド状遺構（┐型）があったが、トレンチで西側の端部を失った。主柱穴は２つで中央に径80cmの炉、西壁やや北よりには径100cm・深さ89cmの屋内土坑がある。また、壁際には壁溝がめぐっている。

東側床直上で鉢(８)・器台(14)、北側ベッド床直上で甕(１・２・４)・鉢(６・７・９～11・12)、北側ベッド際床直上から甕(３)、屋内土坑から甕(５)、北側主柱穴から手捏ね土器(15)が出土した。

土器・土製品（第16図、第36図３、第７・13表、図版15・16・18）

甕（第16図１～５、第７表、図版15－11～15）　いずれも胴部最大径を中位にもつ。**１**はやや凸レンズ状にふくらむ底をもつ。頸部のしまりはやや弱く、口縁はやや外傾する。内面底部に指オサエのちハケ・胴部に細かいハケ・口縁部にナデ、外面底部～胴部に粗いハケ・口縁部にナデを施す。外面胴部に煤が付着し、外面胴部下位～中位は被熱し赤変している。**２**はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。頸部のしまりはやや強く、口縁はやや強く外傾する。内外面とも口縁部にナデ・胴部に粗いハケ、内面底部に指オサエのちナデを施す。内面胴部下位と外面胴部に黒斑がある。**３**はやや凸レンズ状にふくらむ底をもつ。頸部のしまりは弱い。口縁はやや長く、やや強く



第 15 図　Ⅰ区ＳＣ６実測図（S=1/60）

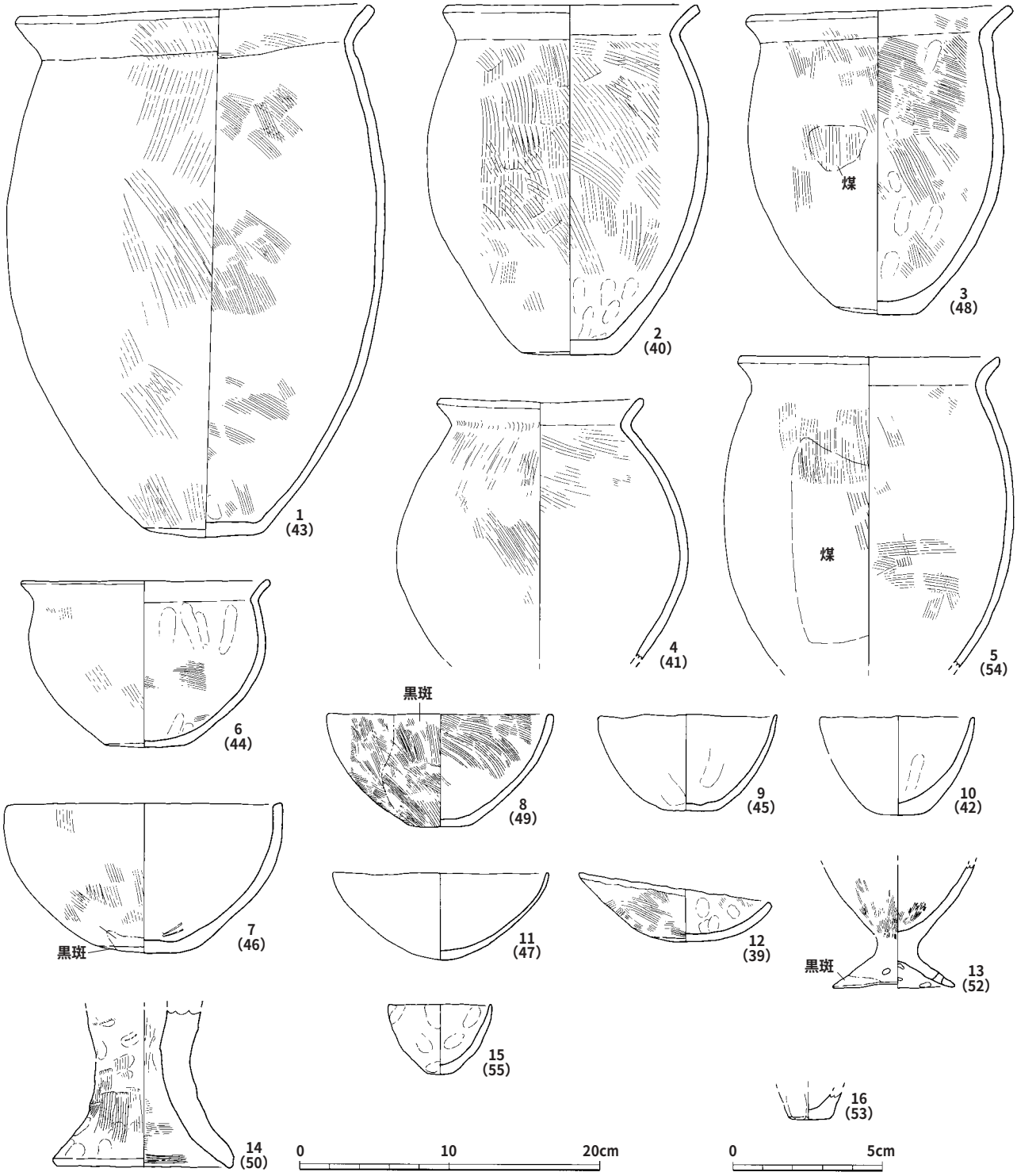
外傾する。内外面とも細かいハケのちナデを施す。外面胴部下位～中位に煤が付着している。**4** はなで肩である。頸部のしまりは強く、口縁は強く外傾する。内面にハケ、外面にハケを施す。外面胴部中位に黒斑がある。**5** は頸部のしまりがやや弱く、口縁はやや強く外反する。内面胴部にハケ・口縁部にナデ、外面胴部上半にハケ・口縁部にナデを施す。外面胴部・口縁部に煤が付着している。

鉢（第 16 図６～12、第 7 表、図版 15－16・17、16－１～５）　**6** はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもち、頸部のしまりはやや弱く、口縁は短くやや強く外傾する。内面に細かいハケのちナデ、外面にハケを施している。外面胴部下半に黒斑がある。**7** は丸底に近い凸レンズ状にふくらむ底をもつ。口縁はわずかに内傾し、端部もわずかに内傾させている。内面にナデ、外面にハケのちナデを施す。外面底部～胴部下半に黒斑がある。**8** はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。内外面とも細かいハケを施している。外面胴部に黒斑がある。**9** は薄手のつくりで、平底である。内面に指ナデ、外面底部と胴部下半にケズリ？・胴部上半にナデを施している。**10** はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。内面に指ナデ、外面底部と胴部下半にケズリ？・胴部上半にナデを施す。外面胴部上半に若干割れを生じている。**11** は薄手のつくりで、丸底に近い小さな凸レンズ状にふくらむ底をもつ。内面口縁部にナデを施す。**12** は壷の底部を再利用したものである。わずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。割り口をきれいに整えている。内外面ともに細かいハケを施す。

台付鉢（第 16 図 13、第 7 表、図版 16－６）　鉢部はやや内弯しながら外へ開く。台部は短く中実の筒部をもち裾部は直線的に外へ開く。裾部には穿孔が４つある。鉢部に細かいミガキ、台部にナデを施している。裾部には黒斑がある。

器台（第 16 図 14、第 7 表、図版 16－８）　当初脚部と考えていたが、受部である可能性が高い。厚ぼったいつくりで、受部と脚部の境が明確でない。内面くびれ部付近にシボリのちナデ・受部にハケ、外面に指オサエ(シボリ)のちハケを施している。外面くびれ部付近に黒斑がある。

手捏ね土器（第 16 図 15、第 7 表、図版 16－９）　鉢形を呈す。凸レンズ状にふくらむ底をもつ。内外面とも胴部に黒斑がある。



第 16 図　Ⅰ区ＳＣ６出土土器実測図（S=1/2・1/4）

第７表　Ｉ区ＳＣ６出土土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

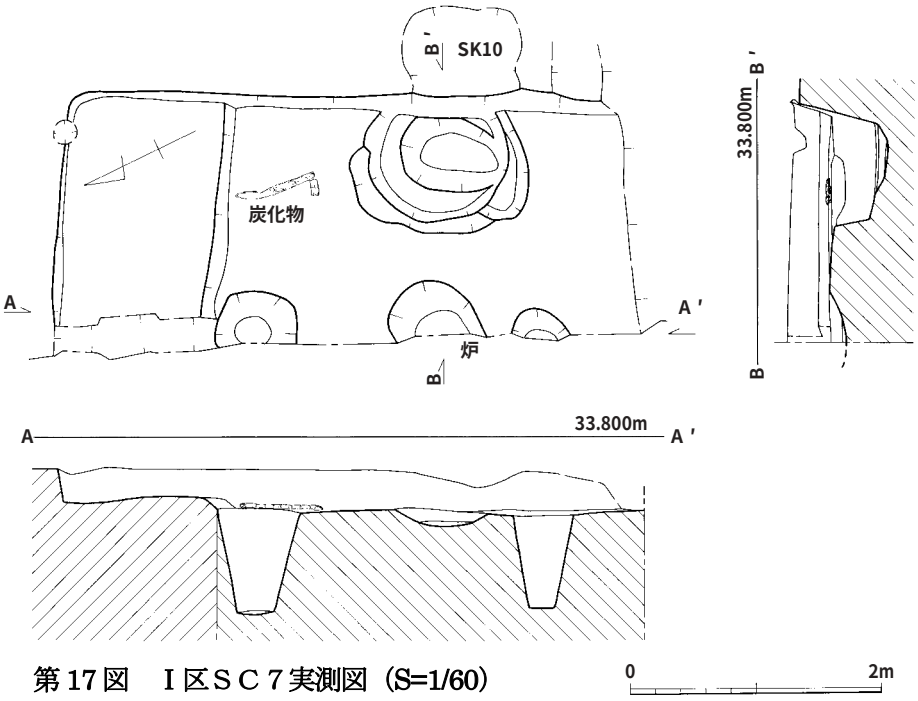
挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
16－1	Ⅰ	SC6No5・6・8～12	甕	23.90	底径8.00 胴部径25.00	35.60	内.浅黄橙 外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの石英を多量,0.2～3.0mmの長石を多少,1.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	やや不良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ	外.黒斑・赤変	43
16－2	Ⅰ	SC6No2	甕	17.10	底径6.40 胴部径18 70	23.20	内外.にぶい黄橙	0.1～8.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	やや不良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ	外.スリップ	40
16－3	Ⅰ	SC6B・No15	甕	(17.80)	底径5.60 胴部径17.00	20.50	内外.にぶい黄橙	0.1～5.5mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	不良	内外.ナデ・ハケ→ナデ	外.煤	48
16－4	Ⅰ	SC6No3	甕	(13.80)	胴部径(19.35)	(17.30)	内.淡黄　外.黄橙	3.6mm以下の長石・石英・雲母・角閃石を少量含む	やや不良	内.ナデ・ナデ→ハケ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ		41
16－5	Ⅰ	SC6土1	甕	17.40	胴部径(19.25)	(20.55)	内外.にぶい黄橙	0.8～4.0mmの石英を多量,0.5～2.0mmの長石を多少,1.5mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内外.ナデ・ハケ	外煤	54
16－6	Ⅰ	SC6No11	鉢	16.60	5.40	11.00	内外.にぶい黄橙	0.1～4.5mmの長石・石英を多量,2.0mm以下の角閃石・赤色粒を少量含む	不良	内.ナデ・ハケ→ナデ　外.ナデ・ハケ		44
16－7	Ⅰ	SC6No19	鉢	18.30	(6.70)	9.90	内外.にぶい黄橙	0.8～4.0mmの石英を多量,0.3～2.0mmの長石を多少1.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	やや不良	内.ナデ・指頭圧痕→工具ナデ 外.ハケ→ナデ	外.黒斑	46
16－8	Ⅰ	SC6No16・17	鉢	15.05	4.05	7.50	内.淡黄　外.浅黄	0.2～4.7mmの長石・石英を多少,0.8mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内外.ナデ・ハケ	外.黒斑	49
16－9	Ⅰ	SC6No13	鉢	11.09	3.70	6.40	内.黄橙 外.浅黄橙	1.9mm以下の長石・石英を多少含む	やや不良	内.指ナデ・指頭圧痕　外.ナデ・ケズリ？		45
16－10	Ⅰ	SC6No4	鉢	(10.30)	4.05	6.55	内外.にぶい黄橙	0.1～5.0mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	不良	内.ナデ？・指ナデ　外.ナデ？		42
16－11	Ⅰ	SC6No14	鉢	(14.40)	2.50	5.80	内.橙 外.にぶい橙	0.4～4.8mmの石英・雲母を多量,0.2～2.8mmの長石を多少,0.1～0.3mmの赤色粒を少量含む	普通	内外.ナデ		47
16－12	Ⅰ	SC6No1	椀	13.00	5.00	4.60	内.にぶい橙 外.橙	3.0mm以下の長石・石英・雲母を多量,0.1～1.5mmの赤色粒を含む	やや不良	内.割り→ケズリ・ハケ・指頭圧痕 外.割り→ケズリ・ハケ	壷底部再利用	39
16－13	Ⅰ	SC6B	台付鉢？		裾部径8.10	(8.20)	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの石英を多量,0.2～3.0mmの長石を多少,0.2～2.0mmの雲母・角閃石を少量含む	やや不良	内鉢.ナデ・ミガキ　台.指頭圧痕・ハケ・ナデ 外鉢.ミガキ　台.ナデ・指頭圧痕・ナデ	外.黒斑 穿孔有り(4)	52
16－14	Ⅰ	SC6No18	器台		裾部径12.0	(10.40)	内外.橙	0.3～4.0mmの石英を多量,0.1～4.0mmの長石を多少,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	良	内.シボリ→ナデ・ハケ・指頭圧痕・ナデ 外.指頭圧痕→ハケ・指頭圧痕・ナデ	歪である.	50
16－15	Ⅰ	SC6P2	手捏ね土器	(6.90)	(1.70)	4.70	内.橙 外.にぶい黄橙	1.5mm以下の長石・石英・雲母・赤色粒を少量含む	良	内外.指頭圧痕	外.黒斑	55
16－16	Ⅰ	SC6B	手捏ね土器		1.40	(1.00)	内外.明赤褐	0.5mm以下の長石・石英を多量に含む	良	内外.ナデ		53

不明土製品（第 16 図 16、第７表、図版 16－７）　底部は平らでほぼ六角形を呈し、それぞれ面取りする。そのうちの四辺からは立ち上がりが認められる。内外面とも指オサエを施す。

縄文土器（第 36 図３、第 13 表、図版 18－12）　精製浅鉢の口縁部小片か。リボン状の突起の下に小さな穿孔がある。

ＳＣ７（第４・17 図、図版７）

上段西隅に位置し、ＳＫ10 を切る。南側は削平を受けて残っておらず、西側は調査区外へつづく。規模は 4.70ｍ以上×2.18m 以上で、平面形は長方形である。残存の深さ 30cm を測る。北側に幅 1.2ｍ・高さ７cm 前後



第 17 図　Ｉ区ＳＣ７実測図（S=1/60）

第８表　Ｉ区ＳＣ７出土土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

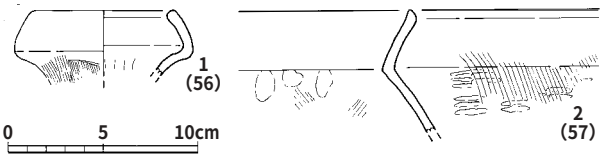
挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
18－1	Ⅰ	SC7	器台？	(7.60)		(3.40)	内外.浅黄	1.0mm以下の長石を多量,1.5mm以下の石英・雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・シボリ→ナデ　外.ナデ・ハケ		56
18－2	Ⅰ	SC7	甕			(6.30)	内.浅黄橙 外.にぶい黄橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多量,2.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ハケ 外.ナデ・タタキ→ハケ		57

の地山削り出しで作られたベッド状遺構、その際に主柱穴がある。主柱穴は２つで中央に径 70cm の炉、東壁中央に 142cm×108cm・深さ 43cm の屋内土坑がある。

床直上で斧の柄のような形をした炭化物を検出した。

土　器（第 18 図、第８表、図版 16）

器台（第 18 図１、第８表、図版 16－10）　あまい稜をもって内傾している。内面受部下半にシボリのちナデ、外面受部下半に細かいハケを施している。



第 18 図　Ｉ区ＳＣ７出土土器実測図（S=1/4）

甕（第 18 図２、第８表、図版 16－11）　口縁はやや強く外傾する。端部はややつまみ上げている。内面にハケ、外面胴部上位にタタキのちハケ・口縁部にナデを施す。

石　器（第 37・38 図、第 14 表、図版 18・19）

砥石（第 37 図２、第 14 表、図版 19－７）　中粒砂質片岩製で、板状を呈す。左側面が特に使われている。

打製石鏃（第 38 図１、第 14 表、図版 18－14）　黒色黒曜石製の凹基無茎鏃である。浅い抉りをもつ。切先と一方の基部を欠失する。

ＳＣ８（第４・19 図、図版７・８）

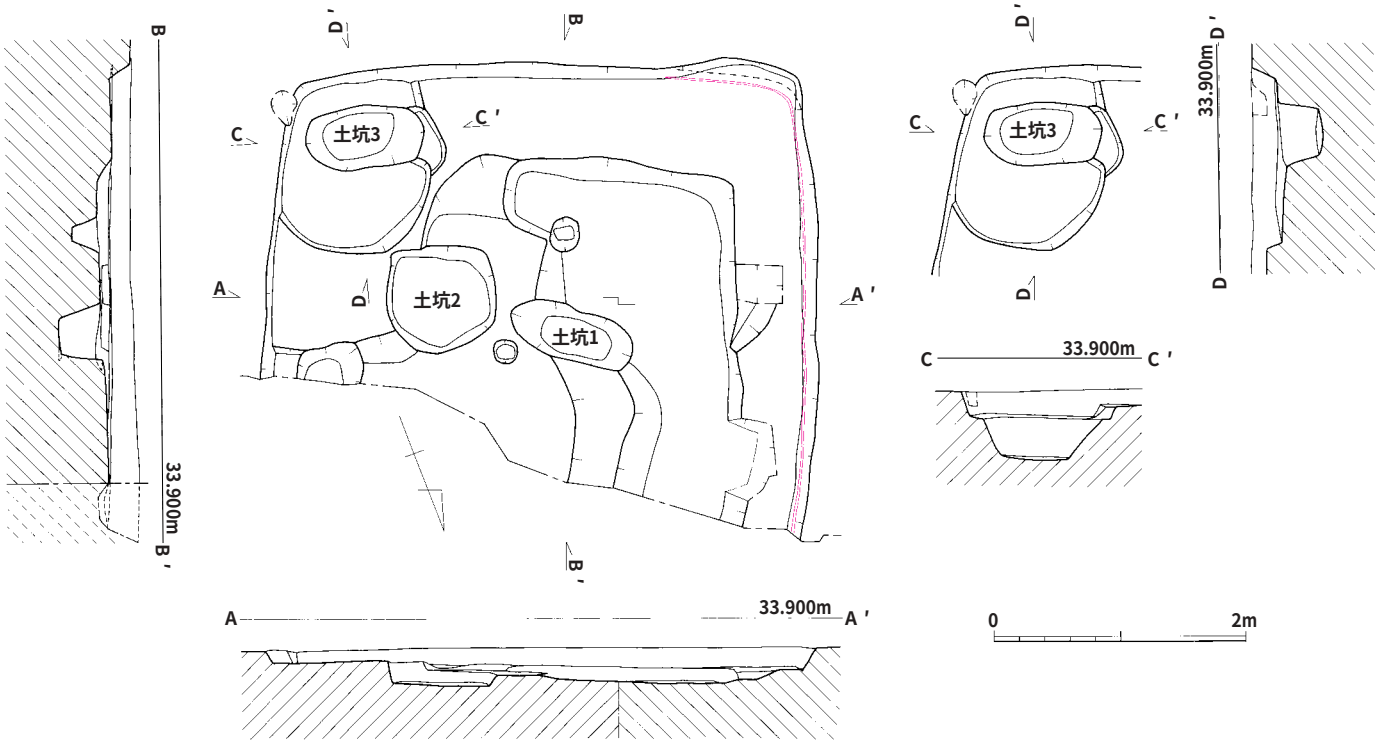
上段北側に位置し、ＳＣ９・ＳＢ３を切る。規模は 4.40m×3.60m 以上と主軸を東西にとるが、北側は調査区外へつづくため南北が主軸となるかもしれない。南西隅の張り出しは掘りすぎによるものである。平面形はやや胴の張った方形もしくは長方形である。残存の深さ９cm を測る。ベッド状遺構の有無は、床面を掘りそこなったためわからない。中央から径 26cm 前後・深さ 22cm のピットを検出したが、小さすぎて主柱穴とは断定できない。屋内土坑１・２は上面を地山風の貼り土（ＳＣ８床？）で覆われていたことから、ＳＣ８より古いものと考えられる。屋内土坑３は中央部分の形状および底面の高さが屋内土坑１とほぼ同じであり、これもＳＣ８に伴うものではないと考えられる。ＳＣ９を切る部分の壁際で壁溝を検出した。

屋内土坑１・２の北側に土器溜り（図版８上段）があった。土器の配置に規則性が見受けられず石も混入していたことから、これらの土器は廃棄されたものと考えられる。また、出土したのは検出面直下であるが、住居そのものの残り自体悪かったことからすると、これらはＳＣ８に伴うか、廃絶から間もない時期のものである可能性が高い。

土器溜りから二重口縁壷(１)・壷(２～７)・甕(８)・鉢(11・12)・高坏(14・15・17・18)・器台(19)・ミニチュア土器(20)が出土した。

土器・土製品（第 20 図、第９表、図版 16・17）

二重口縁壷（第 20 図１、第９表、図版 16－12）　薄手のつくりである。頸部のしまりは強く、



第 19 図　Ⅰ区ＳＣ８実測図（S=1/60）

直立から上位で強く外へ開く。口縁はやや長くやや外傾する。外面口縁部に黒斑がある。

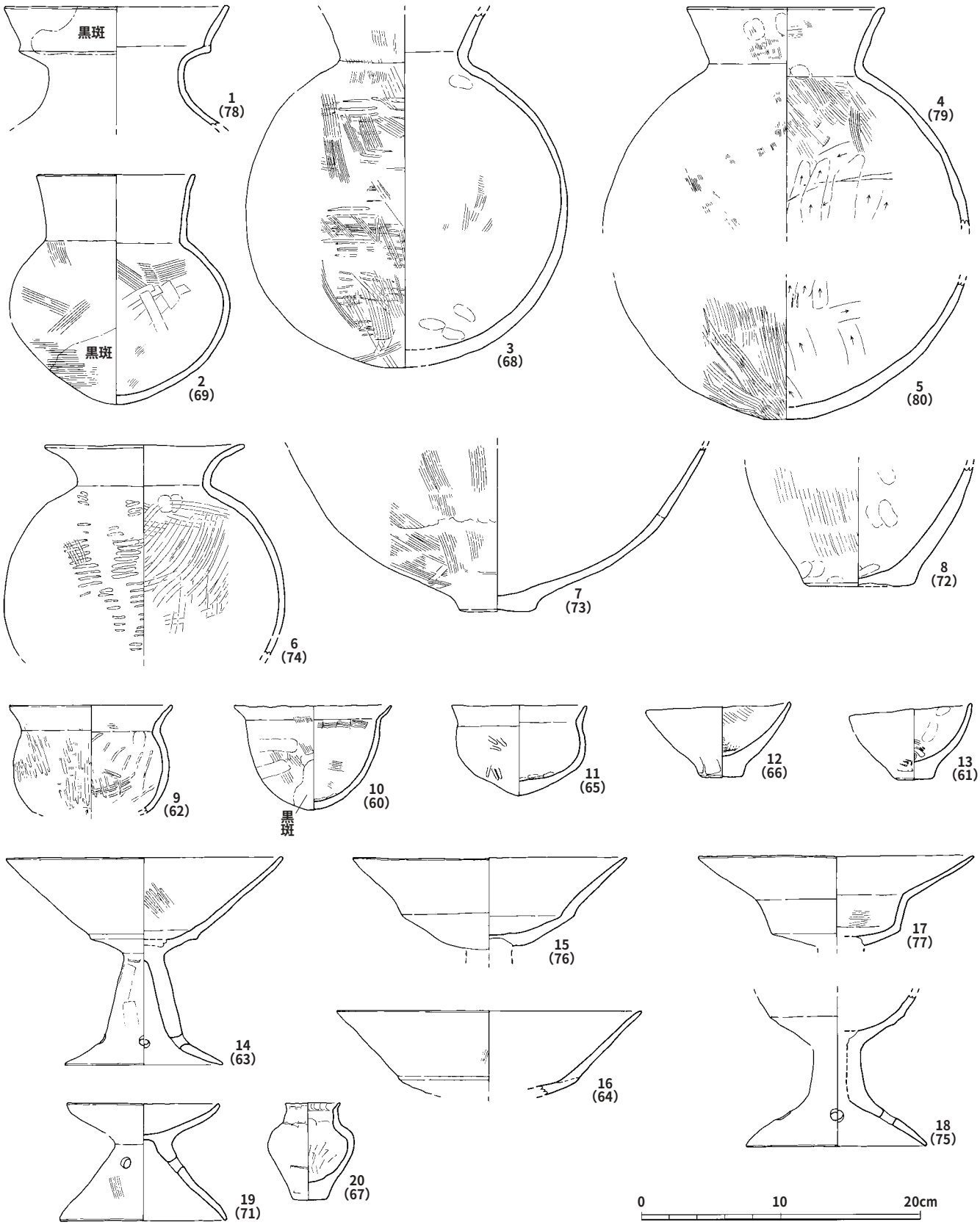
長頸壷（第 20 図２、第９表、図版 16－13）　**2** は丸底に近い小さな平底である。胴部最大径は中位にある。頸部のしまりはやや強く、わずかに外傾し長くのびる。内面底部～胴部下位にハケ・中位にケズリ・上位にハケ・口縁部にナデ、外面底部～胴部にハケのちナデ・口縁部にナデを施している。外面底部～胴部中位には黒斑がある。

壷（第 20 図３～７、第９表、図版 16－14～18）　**3～5** は球形胴で頸部のしまりが強く、口縁はやや外傾しながら直線的に長くのびる。**3** は丸底である。内面胴部下位に指ナデ・中位～上位にハケのち工具ナデ・頸部にナデ、外面胴部にタタキのちハケ・口縁部にハケのちナデを施す。外面胴部下位・上位、内面胴部下位に黒斑がある。**4** は３に比べ頸部のしまりが弱い。内面胴部中位にケズリ・胴部上位～口縁部に粗いハケ、外面胴部にハケ・口縁部にナデのちハケを施す。外面胴部中位～上位に黒斑がある。**5** は非常に小さな平底である。内面にケズリ、外面にタタキのちハケを施す。外面底部～胴部下位に黒斑がある。**6** は胴部最大径を中位にもち、頸部のしまりは強い。口縁はやや長く強く外反する。内面胴部にハケ、外面胴部中位にタタキのちハケ・胴部上位にタタキを施す。**7** はＶ様式系で突出する底部をもつ。内面にナデ、外面に細かいハケを施している。内外面とも底部に黒斑があり、外面胴部下位には煤が付着する。全体的に被熱し赤変している。

甕（第 20 図８、第９表、図版 16－19）　平底である。内面に指オサエのちナデ、外面底部に指オサエのちナデ・胴部下半にハケのちナデを施す。

小形丸底壷（第 20 図９～11、第９表、図版 17－１～３）　**9** は胴部最大径を中位にもつ。頸部のしまりは弱く口縁は外反するが、端部はわずかに内弯する。内面胴部にミガキ、外面胴部下半にケズリのちミガキ・上半にハケのちミガキ・口縁部にナデを施す。外面胴部上位～口縁部に黒斑がある。**10** は丸底で、口縁が薄く短くやや外傾する。内面にハケのちナデ、外面底部～胴部下半にケ

ズリのちハケ・上半にハケを施している。外面底部～胴部下半に黒斑がある。**11** は尖底から直線的に外へ開いたのち、直立に近く立ち上がる。頸部のしまりは弱く、口縁は短くやや外傾する。内面口縁部にナデ、外面底部～胴部にミガキ状のナデ・口縁部にナデを施す。



第 20 図　Ⅰ区ＳＣ８出土土器実測図（S=1/4）

第９表　Ｉ区ＳＣ８出土土器観察表

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
20－1	Ⅰ	SC8±2	二重口縁壺	16.20		(8.50)	内外.浅黄橙	1.0mm以下の角閃石を少量,0.1～2.0mmの長石・石英・赤色粒を含む	やや不良	内外.ナデ	外.黒斑	78
20－2	Ⅰ	SC8±2	直口壺	(11.35)	底径1.40 胴部径15.70	16.50	内外.にぶい黄橙	0.1～3.5mmの長石・石英を多量,0.5mm以下の雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・ケズリ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ	外.黒斑	69
20－3	Ⅰ	SC8±2	壷		胴部径23.1	(25.50)	内.にぶい黄橙 外.橙	0.1～3.1mmの長石・石英を多少,0.6mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕・ハケ→工具ナデ・指ナデ　外.ハケ→ナデ・タタキ→ハケ	外.黒斑	68
20－4	Ⅰ	SC8±2	壷	(14.20)		(15.70)	内.明赤褐 外.にぶい黄橙	3.0mm以下の長石・石英を多量,0.5mm以下の雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・ケズリ 外.ナデ・ナデ→ハケ・ナデ・ハケ	外.黒斑	79
20－5	Ⅰ	SC8±2	壷？		3.40	(10.00)	内外.明赤褐	0.3～3.5mmの石英を多量,0.1～4.0mmの長石を多少,1.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ケズリ　外.ハケ	外.黒斑	80
20－6	Ⅰ	SC8±2	壷	(14.30)	胴部径(20.0)	(15.20)	内.灰黄褐 外.にぶい橙	0.2～3.2mmの長石を多量,0.4～2.0mmの石英を多少,2.1mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ？・指頭圧痕→ハケ・ハケ 外.タタキ・タタキ→ハケ・タタキ		74
20－7	Ⅰ	SC8±2	壷		(5.40)	(11.75)	内.にぶい橙 外.橙	0.5～5.0mmの石英を多量,0.1～2.0mmの長石を多少,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.指頭圧痕→ナデ 外.ハケ・ハケ→ナデ・ナデ・指頭圧痕	内.黒斑 外.黒斑・煤	73
20－8	Ⅰ	SC8±2	甕		(8.00)	(8.60)	内外.橙	4.0mm以下の長石・石英・赤色粒を少量含む	普通	内.指頭圧痕→ナデ 外.ハケ→ナデ・指頭圧痕→ナデ		72
20－9	Ⅰ	SC8A	鉢	(11.60)		(7.70)	内外.にぶい黄橙	1.0mm以下の長石・石英・赤色粒・白色粒を多量に含む	不良	内.ミガキ　外.ナデ・ハケ→ミガキ・ケズリ→ミガキ・ケズリ	外.黒斑	62
20－10	Ⅰ	SC8	鉢	11.20		7.50	内.にぶい橙 外.にぶい黄橙	2.0mm以下の角閃石・赤色粒を少量,2.5mm以下の長石・石英・雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ・ハケ→工具ナデ	外.黒斑	60
20－11	Ⅰ	SC8±2	鉢	9.60		6.50	内.橙 外.にぶい橙	0.1～2.5mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母を少量,1.0～3.0mmの赤色粒を含む	不良	内.ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ミガキ状ナデ		65
20－12	Ⅰ	SC8±2	鉢	10.40	3.10	5.40	内.にぶい橙 外.橙	0.1～4.0mmの石英を多少,1.0mm以下の長石・雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	やや不良	内.ハケ　外.ケズリ		66
20－13	Ⅰ	SC8	鉢	(8.80)	2.80	5.50	内外.橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,3.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	やや不良	内.指頭圧痕・指頭圧痕→ハケ 外.指頭圧痕・ケズリ？・ケズリ		61
20－14	Ⅰ	SC8B±2	高坏	(19.80)	裾部径(11.30)	14.90	内.にぶい橙 外.橙	0.1～5.0mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内坏.ナデ・ミガキ　脚.シボリ・ナデ 外坏.ナデ・ミガキ・工具ナデ→ナデ　脚.ケズリ・ナデ	穿孔有り(4)	63
20－15	Ⅰ	SC8±2	高坏	19.60		(6.55)	内外.橙	0.3～3.5mmの石英を多量,0.1～3.0mmの長石・赤色粒を多少,2.5mm以下の雲母・輝石を少量含む	良	内.ナデ		76
20－16	Ⅰ	SC8B	高坏	(21.80)		(6.00)	内外.赤橙	2.0mm以下の長石・石英を多量,0.5mmの雲母・1.0mm前後の赤色粒を含む	良	外.ハケ		64
20－17	Ⅰ	SC8±2	高坏	19.70		(6.50)	内外.橙	1.0mm以下の輝石を少量,2.5mm以下の長石・石英・雲母・赤色粒を含む	不良	内.ナデ・ハケ　外.ナデ		77
20－18	Ⅰ	SC8±2	高坏		裾部径13.00	(10.90)	内.にぶい橙 外.橙	0.1～3.5mmの石英を多量,1.0mm以下の雲母・赤色粒を多少,0.1～2.5mmの長石を含む	不良		穿孔有り(4)	75
20－19	Ⅰ	SC8±2	器台		受部径10.90 裾部径12.0	8.40	内.にぶい橙 外.橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母を少量,0.1～1.5mmの赤色粒を含む	やや不良	内受.ナデ　脚.指頭圧痕・ナデ 外受.ナデ　脚.ハケ・ナデ	脚.穿孔有り	71
20－20	Ⅰ	SC8±2	ミニチュア土器	3.90	2.40	7.00	内外.橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多少,1.5mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.指頭圧痕・ナデ・ケズリ　外.指頭圧痕・ケズリ・ナデ・ケズリ・ナデ・指頭圧痕→ナデ	外.黒斑	67

鉢（第 20 図 12・13、第 9 表、図版 17－４・５）　**12** は厚い平底である。内面にハケ、外面底部にケズリを施す。**13** はわずかながら凸レンズ状にふくらむ厚底で、口縁は直立近く立ち上がる。内面に指オサエ、外面底部～胴部下半にケズリを施している。

高坏（第 20 図 14～18、第 9 表、図版 17－６～10）　**14** は坏部の稜が明確な段状を呈し、上半は長く直線的に外へ開く。脚部はやや外へ開く筒部から外折し、裾部は短く開く。屈曲部に４つの穿孔がある。脚頂部には軸芯痕があり、坏と脚は付加法で接合する。坏部は内外面ともミガキ、脚部は筒部内面にシボリ・筒部外面にケズリが施されている。15～17 は坏部である。**15** は稜が明確な段状を呈し、上半は外反する。内面の稜は工具を使って断続的につけられている。坏部の中心はややずれている。**16** は 14 とほぼ同じであるが、上半はわずかに外反する。**17** は畿内系の有段高坏

である。屈曲し口縁は長く直線的に開く。18の坏部は上半との稜がわずかに残っている。底部に粘土が剥がれたような形で孔が開いていることから、充填法で坏部と脚部を接合したと考えられる。脚部はやや外へ開く筒部から外折し、裾部はわずかに内弯しながら開く。裾部中位に４つの穿孔がある。

器台（第20図19、第9表、図版17－11）　畿内系の小形器台である。受部は皿状で、端部はやや内弯する。脚部は受部との接点から直接外に開き、脚部中位からわずかに内弯する。脚部上位に３つの穿孔がある。受部は内外面ともナデ、脚部は内面にナデ・外面にハケが施されている。

ミニチュア土器（第20図20、第9表、図版17－12）　壷形を呈す。厚い平底で、胴部最大径は上位にある。頸部は内傾し、口縁は短く外反している。内面底部～胴部下半にケズリ・胴部上半～頸部にナデ・口縁部に指オサエ、外面底部にナデ・胴部下半にケズリ・上半にナデ・頸部～口縁部に工具ナデを施す。外面胴部下半に黒斑がある。

石　器（第37・38図、第14表、図版18・19）

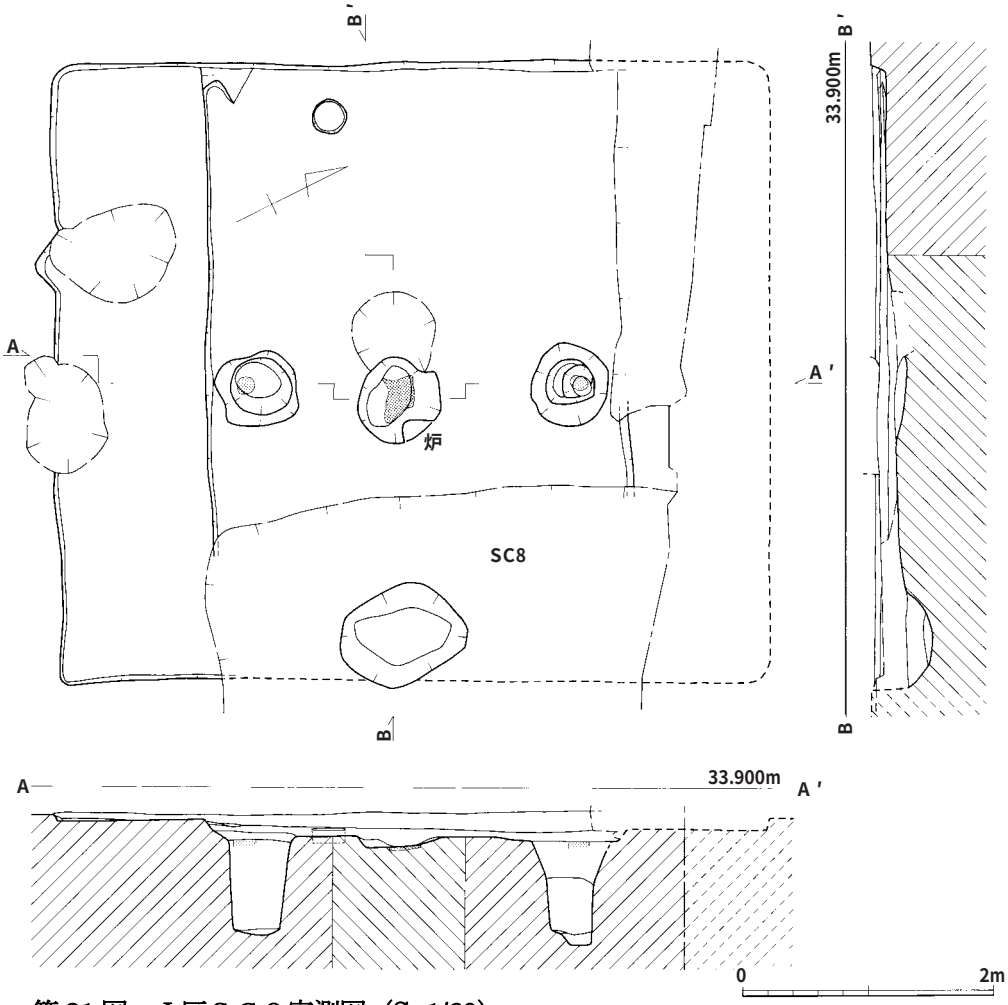
砥石（第37図３・４、第14表、図版19－６・５）　第37図４は中粒砂岩製で撥形を呈す。第37図３は細～中粒砂岩製で、元は撥形であったものの一部か。

打製石鏃（第38図３、第14表、図版18－16）　サヌカイト製の凹基無茎鏃である。浅い抉りをもつ。

ＳＣ９

（第４・21図、図版８）

上段北側に位置する。ＳＣ10・ＳＢ３を切り、ＳＣ８に切られる。規模は 4.96m以上×4.94mで、北側は調査区外へつづく。平面形は長方形である。残存の深さ7.5cmを測る。南北に幅1.2m・高さ５cm 前後の地山削り出しで



第21図　Ｉ区ＳＣ９実測図（S=1/60）

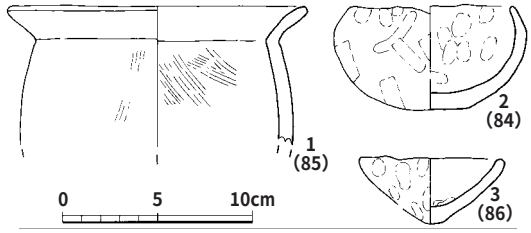
第10表　Ⅰ区ＳＣ９出土土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
22－1	Ⅰ	SC9C	甕	(15.80)		(7.35)	内外.にぶい黄橙	0.1～2.3mmの長石・石英を多量,1.6mm以下の雲母・輝石を少量含む	良	内外.ナデ・ハケ		85
22－2	Ⅰ	SC9A	鉢	(8.70)	底径3.30 胴部径(10.20)	5.50	内.にぶい黄橙 外.灰黄褐	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の輝石・赤色粒を少量,0.5mm以下の雲母を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕→ナデ 外.指頭圧痕→工具ナデ・ナデ		84
22－3	Ⅰ	SC9C	手捏ね土器	(7.70)	1.10	3.60	内外.にぶい黄橙	0.1～2.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の輝石・赤色粒を少量含む	不良	内外.ナデ・指頭圧痕		86

作られたベッド状遺構があるが、ＳＣ10との切り合い部分は貼り付けで作られていたことから掘りそこなった。この部分を貼り床の高さまで掘り下げたところ、貼り床とは質の異なる土が入っていた。ベッドを作ったあとに貼り床したものと考えられる。ベッド際に主柱穴がある。主柱穴は２つで中央に径65cmの炉、東壁中央に100cm×80cm・深さ23cmの屋内土坑がある。

土器・土製品（第22図、第10表、図版17）

甕（第22図１、第10表、図版17－15）　当初考えていた土器の傾きより、実際は中心線から口縁端部までの距離と中心線から割れ口外面までの距離がほぼ同じになるくらいにまで傾くようである。頸部のしまりはやや弱く、口縁はやや強く外傾する。内外面口縁部にナデ・胴部にハケを施す。外面胴部中位に黒斑がある。



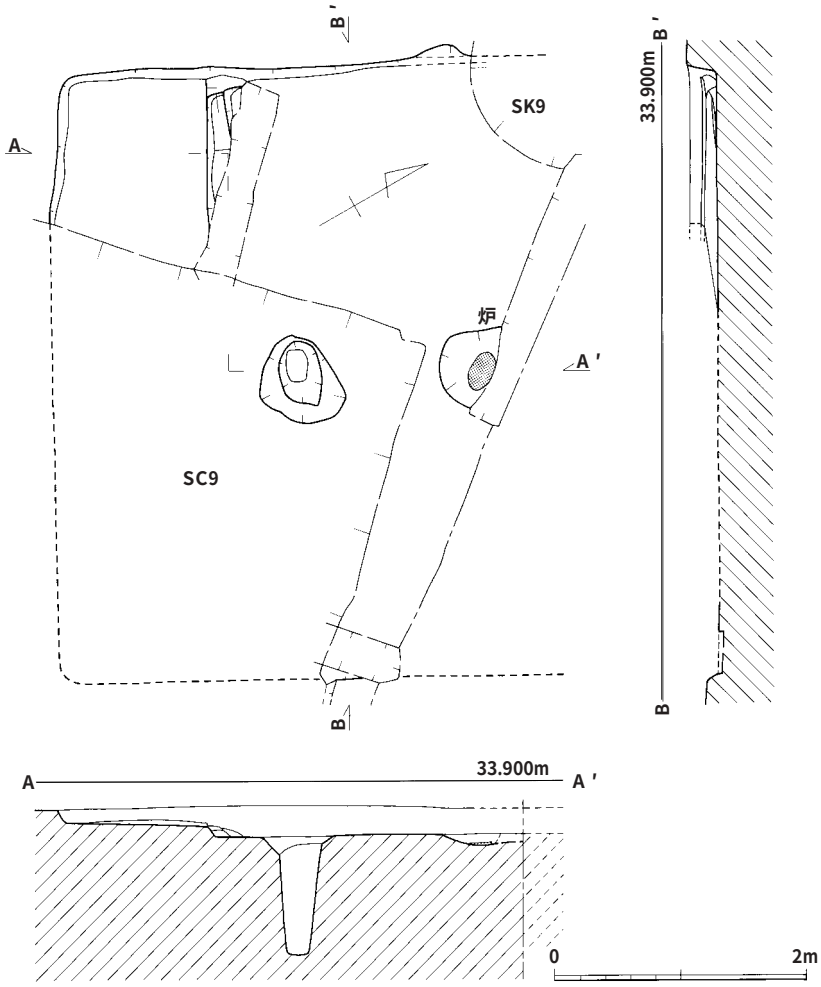
第22図　Ⅰ区ＳＣ９出土土器実測図
(S=1/4)

鉢（第22図２、第10表、図版17－13）　平底で、口縁は内傾する。口縁端部の高さが一定せず、つくりは雑である。内面に指オサエのちナデ、外面底部にナデ・胴部に指オサエのち工具ナデ・口縁部にナデを施す。

手捏ね土器（第22図３、第10表、図版17－14）　鉢形を呈す。ほぼ尖底から直線的に外へ開き、口縁はわずかに内傾する。内面胴部～口縁部に黒斑がある。

石　器（第37図、第14表、図版19）

砥石（第37図６、第14表、図版19－４）　細粒砂岩製で不定形を呈す。中央に断面が浅いＵ字形の溝がある。



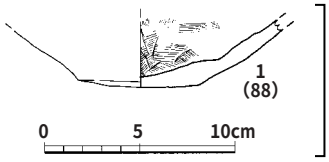
第23図　Ⅰ区ＳＣ10実測図（S=1/60）

ＳＣ10（第４・23 図、図版８）

上段北側に位置する。ＳＢ３を切り、ＳＣ９・ＳＫ９に切られる。4.12m以上×4.90mで、北側は調査区外へつづく。東壁は大半を失っているが、ＳＣ９が地山削り出しでベッドを作ったためこの部分だけが辛うじて残っている。平面形は長方形である。残存の深さ 22.5cm を測る。南側に幅 1.1m・高さ９cm 前後の地山削り出しで作られたベッド状遺構がある。主柱穴１つを検出した。中央に径 60cm の炉がある。

土　器（第 24 図、第 11 表、図版 17）

壷（第 24 図１、第 11 表、図版 17－16）　わずかながら凸レンズ状にふくらむ底部である。内面にハケ、外面底部にナデを施している。外面底部～胴部下位に黒斑がある。



第 24 図　Ⅰ区ＳＣ10 出土土器実測図（S=1/4）

第 11 表　Ⅰ区ＳＣ10 出土土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
24－1	Ⅰ	SC10B	壷		6.40	(3.50)	内外.灰白	2.0mm以下の長石・石英・雲母を多量,1.0mm前後の角閃石を少量含む	やや不良	内.ハケ　外.ナデ	外.黒斑	88

掘立柱建物（ＳＢ）

上段で１軒、下段で２軒検出した。

ＳＢ１（第４・25 図、図版９）

下段西側に位置する。１×２間の建物で、主軸をＮ－53.5°－Ｅにとる。梁行 2.76m・桁行 4.13mを測る。柱穴は一辺 45cm 前後のほぼ方形の掘り方をもつが、深さ 24cm 以下と残りは悪い。径 12cm 前後の柱痕を検出した。

Ｐ２から縄文土器？(１)が出土した。

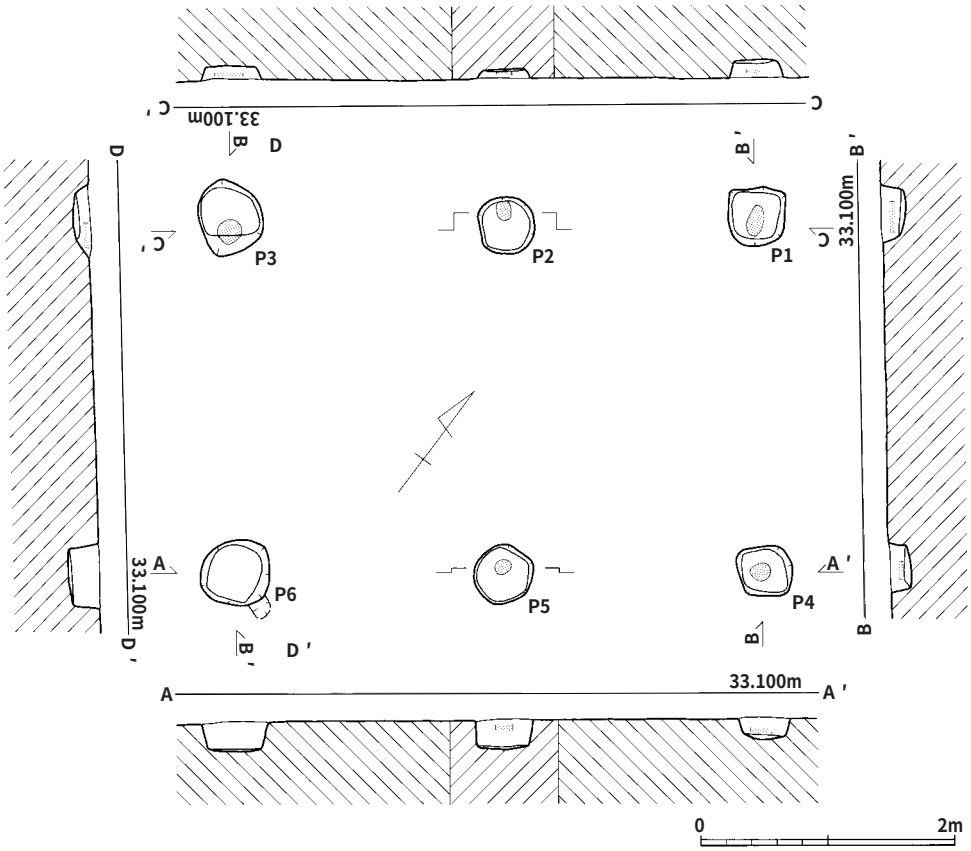
土　器（第 35 図、第 12 表）

縄文土器？（第 35 図１、第 12 表）　粗製鉢の底部付近か。

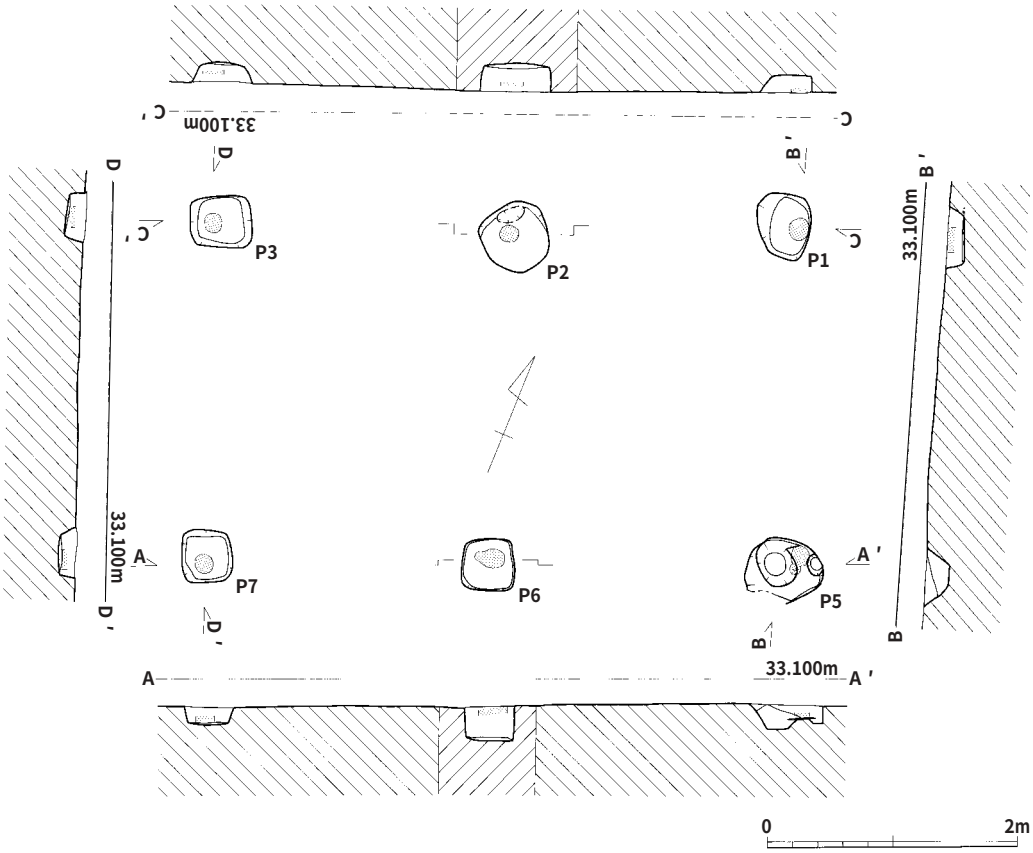
ＳＢ２（第４・26 図、図版９）

ＳＢ１北側に位置する。１×２間の建物で、主軸をＮ－68.0°－Ｅにとる。梁行 2.65m・桁行 4.60mを測る。柱穴は一辺 40cm 前後のほぼ方形の掘り方をもつが、深さ 28cm 以下と残りは悪い。径 15cm 前後の柱痕を検出した。

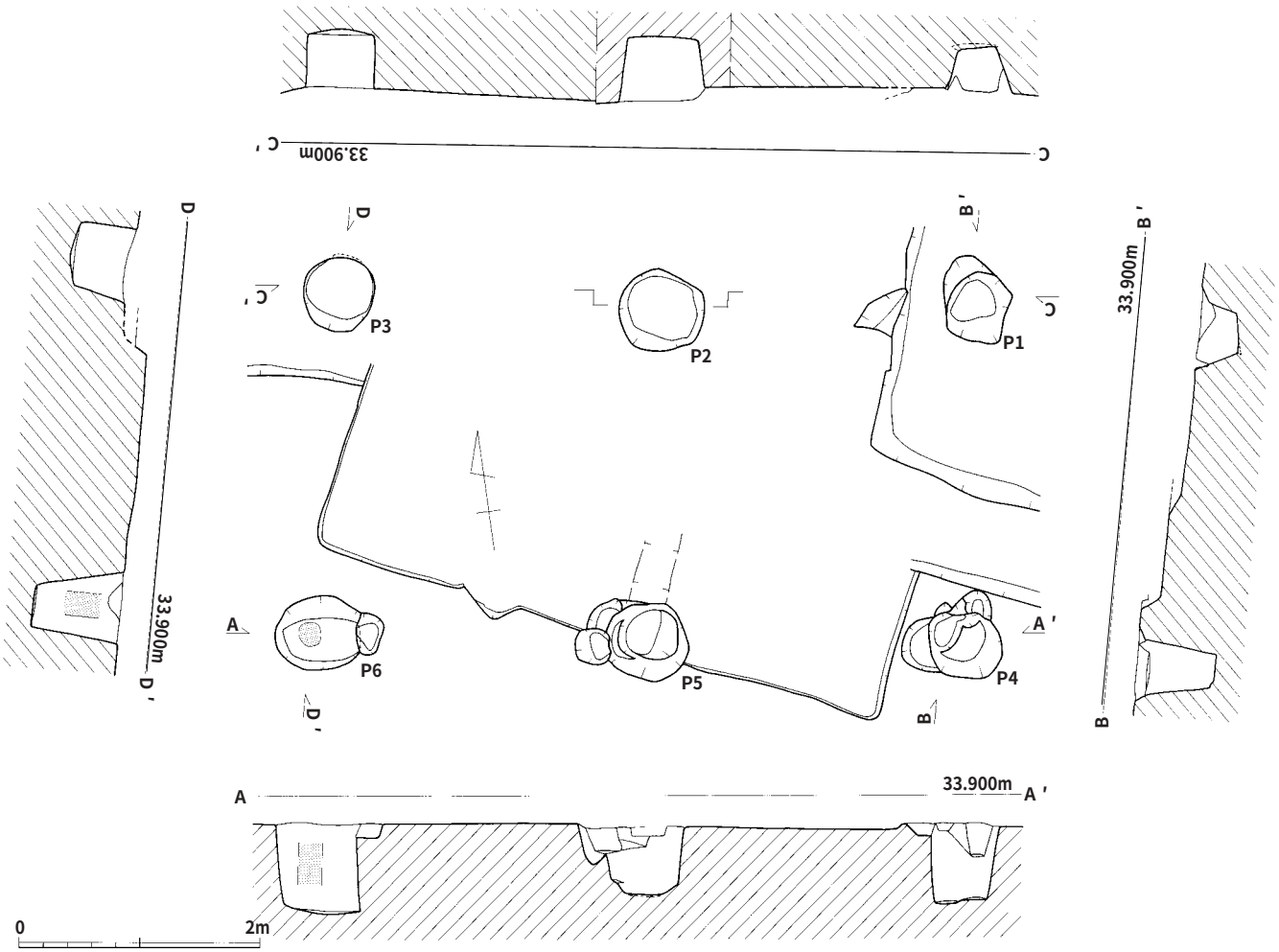
Ｐ４から甕か鉢(２)が出土した。



第25図　Ⅰ区ＳＢ１実測図（S=1/60）



第26図　Ⅰ区ＳＢ２実測図（S=1/60）



第 27 図　Ⅰ区ＳＢ３実測図（S=1/60）

土　器（第 35 図、第 12 表）

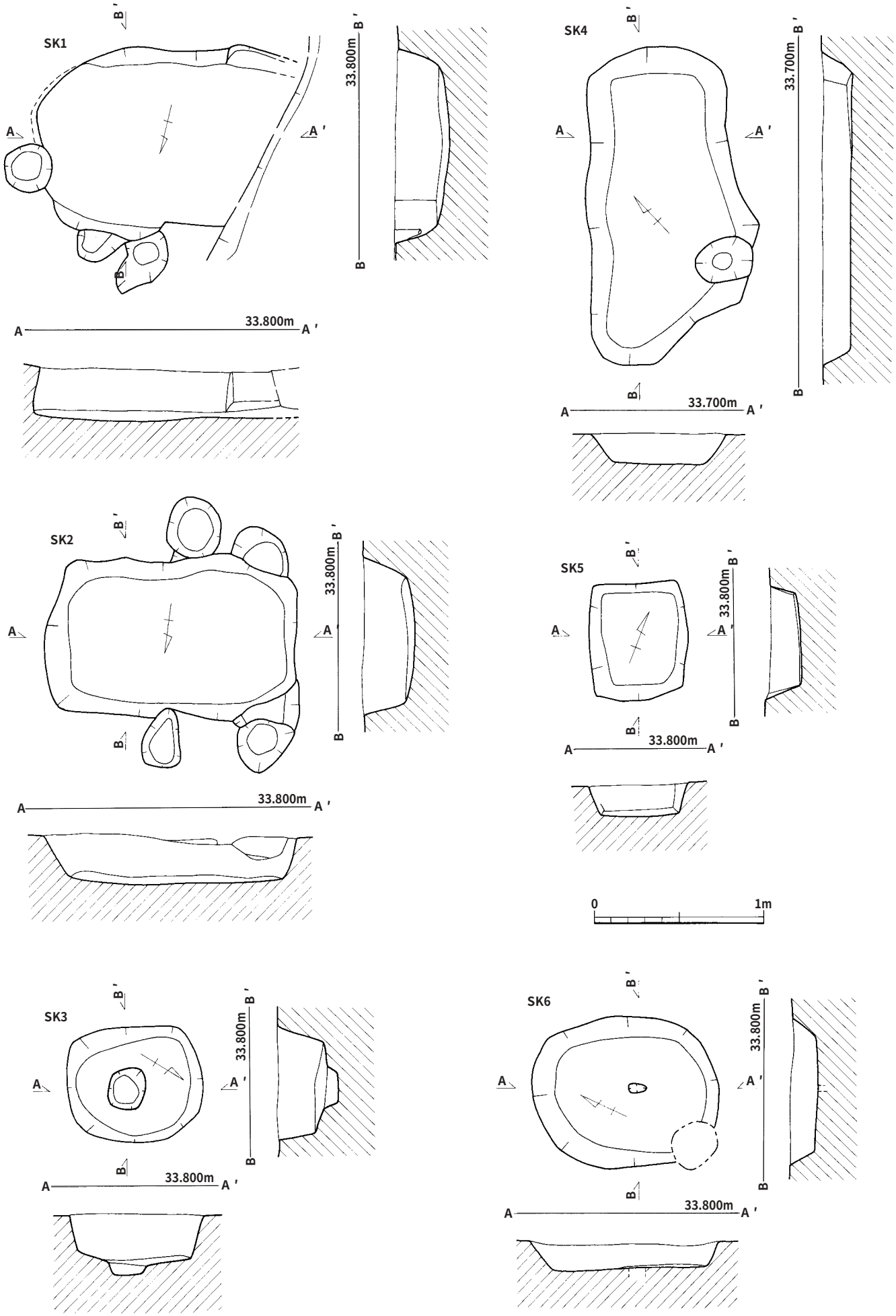
甕か鉢（第 35 図２、第 12 表）　平底である。内面にハケ、外面底部にナデ・胴部下位にハケを施す。

ＳＢ３（第４・27 図、図版９）

上段北側に位置する。ＳＤ２を切り、ＳＣ８～10 に切られる。１×２間の建物で、主軸をN－82.0°－Wにとる。梁行 2.80m・桁行 5.23mを測る。柱穴は径 60cm 前後の円形の掘り方をもち、深さ 63cm と残りがいい。径 19cm 前後の柱痕を検出した。

土　坑（ＳＫ）

上段で 12 基、下段で１基検出した。



第28図　Ⅰ区ＳＫ１～６実測図 (S=1/30)

ＳＫ１（第４・28 図、図版 10）

上段中央やや東に位置し、ＳＣ５に切られる。長軸 1.48m以上・短軸 1.15mの楕円形を呈し、深さ 33cm を測る。

ＳＫ２（第４・28 図、図版 10）

上段東側に位置する。長軸 1.50m・短軸 0.99mの長方形を呈し、深さ 30cm を測る。

ＳＫ３（第４・28 図、図版 10）

上段中央やや東に位置する。長軸 0.82m・短軸 0.69mの不整円形を呈し、深さ 30cm を測る。底面中央に径 23cm・深さ８cm のピットを伴う。

土　器（第 35 図、第 12 表、図版 17）

甕（第 35 図３、第 12 表、図版 17－17）　頸部はしまりが強く、口縁はやや外傾する。内面にナデ、外面胴部上位はハケ・口縁部はナデを施す。

ＳＫ４（第４・28 図、図版 10）

上段中央やや東に位置する。長軸 1.88m・短軸 1.04mの不整形を呈し、深さ 19cm を測る。Ｐ37（径 30cm・深さ 16cm）がこれに伴うかは不明である。

ＳＫ５（第４・28 図、図版 10）

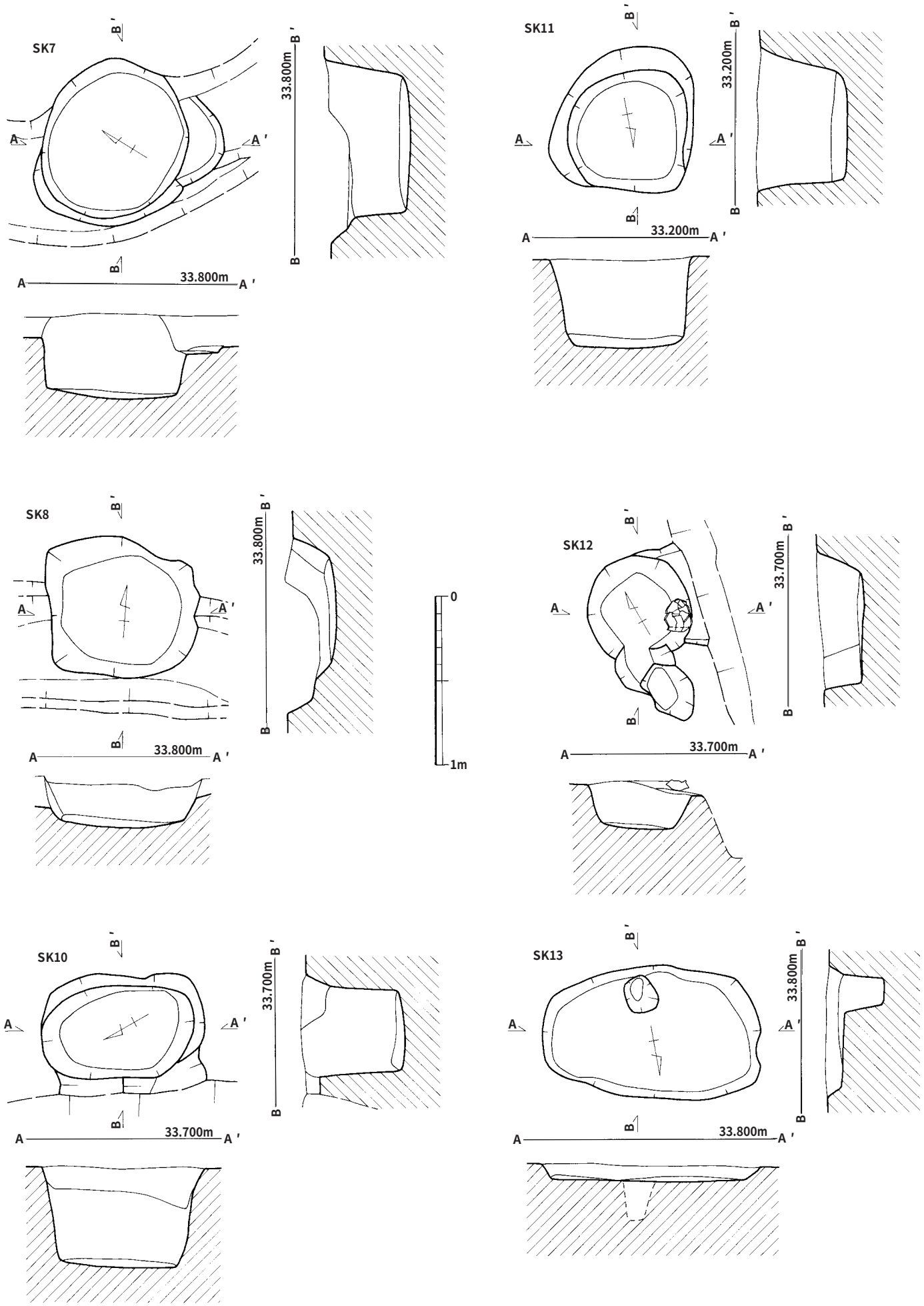
上段中央やや東に位置する。長軸 0.72m・短軸 0.59mの長方形を呈し、深さ 21cm を測る。

ＳＫ６（第４・28 図、図版 10）

上段北側に位置する。長軸 1.12m・短軸 0.90mの不整円形を呈し、深さ 17cm を測る。検出時、底面中央で一定の間隔をおいて並ぶ杭痕？が３つ（１つのみ図化）見えていたことから、落とし穴であった可能性が高い。

ＳＫ７（第４・29 図、図版 10）

上段中央やや西に位置する。ＳＶ２との切り合い関係は不明である。長軸 1.01m・短軸 0.92mの楕円形を呈し、深さ 50cm を測る。南東側のＳＶ２周溝底面に幅 0.54m・奥行 0.22m・深さ３cm 前後のテラスをもつ。



第29図　Ⅰ区ＳＫ７・８・10～13実測図（S=1/30）

ＳＫ８（第４・29 図、図版 10）

上段中央やや北に位置する。ＳＶ２・ＳＤ２との切り合い関係は不明である。長軸 0.93m・短軸 0.86mの不整形を呈し、深さ 31cm を測る。

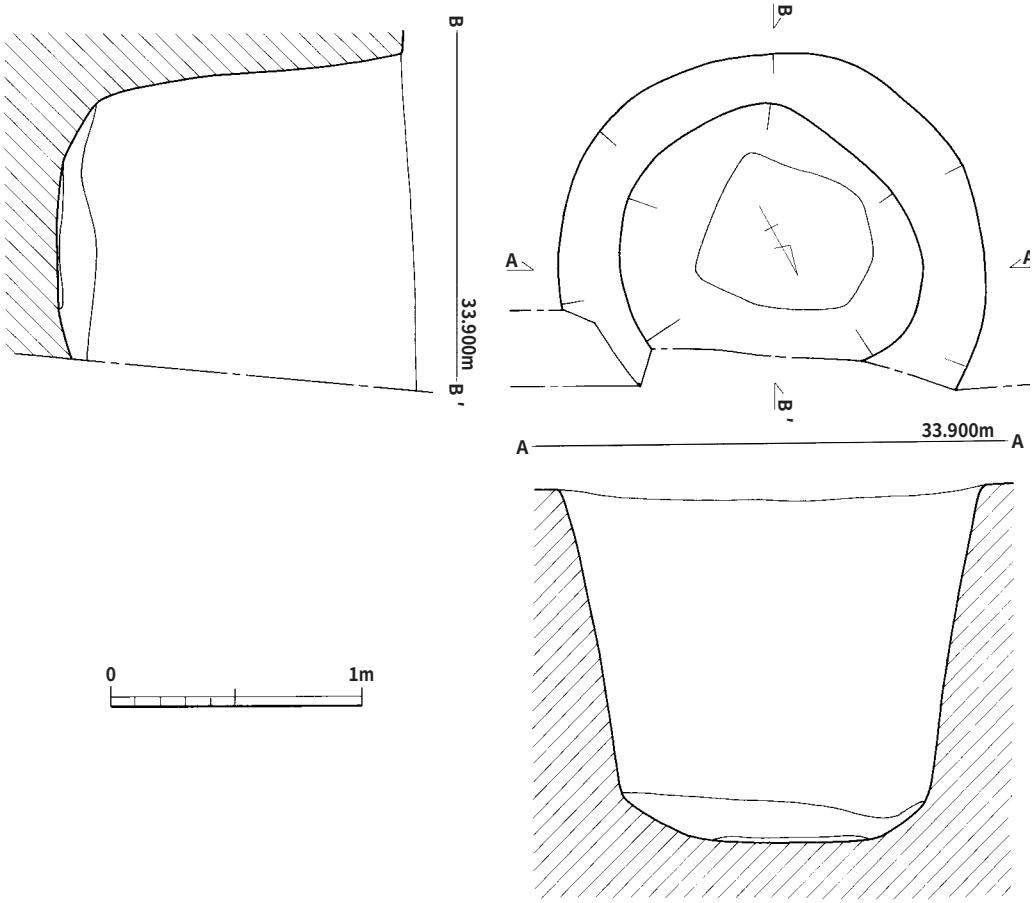
ＳＫ９（第４・30 図、図版 11）

上段北隅に位置し、ＳＣ10 を切る。北側は調査区外へ拡がる。径 1.68～1.74m の円形を呈し、深さ 142cm を測る。埋土は黄褐色粘質土ブロックを多量に含む黒色土で、底面は段丘面の砂である。

土　器（第 35 図、第 12 表、図版 17・18）

二重口縁壷（第 35 図４、第 12 表）　口縁はやや長くやや内屈する。外面頸部にハケ、他の部分はナデを施す。

高坏（第 35 図５、第 12 表、図版 17－19）筒部は長めでほぼ垂直におり、裾部は外へ開く。その開き始めの部分に穿孔がある。坏部と脚部は、充填法で接合されたと考えられる。脚部は筒部内面に工具ナデ・筒部外面にケズリ、裾部外面にナデを施す。



第 30 図　Ｉ区ＳＫ９実測図（S=1/30）

甕（第 35 図６、第 12 表、図版 18－１）　接点はないが同一個体である。丸底に近く凸レンズ状にふくらむ底をもち、頸部のしまりはやや弱く、口縁は長くやや外傾する。内外面ともハケを施す。外面底部～胴部下位・上位・口縁部に黒斑がある。

ＳＫ10（第４・29 図、図版 11）

上段西側に位置する。ＳＣ７との切り合い関係は不明である。長軸 0.98m・短軸 0.63mの楕円形を呈し、深さ 60cm を測る。

ＳＫ11（第４・29 図、図版 11）

下段西側に位置する。長軸 0.88m・短軸 0.87mの不整円形を呈し、深さ 51cm を測る。

ＳＫ12（第４・29 図、図版 11）

上段南側に位置する。ＳＣ６との切り合い関係は不明である。長軸0.63m・短軸0.62m（推定）の円形を呈し、深さ 28cm を測る。南側のピットに切られる。

東側検出面から甕（７）が出土した。

土　器（第 35 図、第 12 表、図版 17）

甕（第 35 図７、第 12 表、図版 17－18）　胴部最大径は上位にある。頸部のしまりはやや弱く、口縁はやや外反する。内面胴部下半に工具ナデ・上半にナデ、外面胴部下位に工具ナデ・中位～上位にハケ・口縁部にナデを施す。外面胴部中位～口縁部に煤が付着している。

ＳＫ13（第４・29 図、図版 11）

上段中央やや北に位置する。長軸 1.31m・短軸 0.81mの長楕円形を呈し、深さ 11cm を測る。底面に径 20cm・深さ 24cm のピットを伴う。

貯　蔵　穴（ＳＰ）

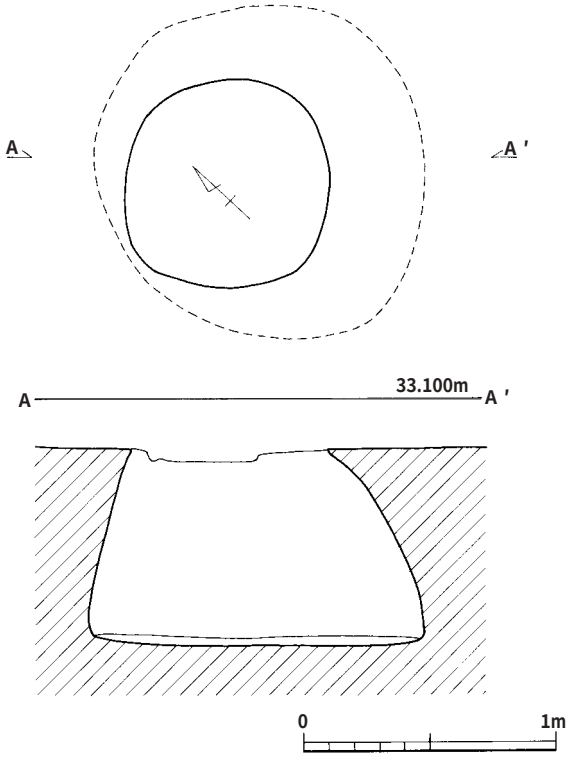
下段で１基検出した。

ＳＰ１（第４・31 図、図版 11）

下段西側に位置する。上面・床面ともに円形を呈す袋状貯蔵穴である。上面径 0.86m・床面径 1.32m・深さ 78cm を測る。

土　器（第 35・36 図、第 12・13 表、図版 18）

縄文土器（第 35 図８、第 12 表、図版 18－２）　粗製深鉢の口縁部で、外面に幅の広い



第 31 図　Ｉ区ＳＰ１実測図（S=1/30）

突帯がある。

縄文土器（第 36 図１、第 13 表、図版 18－10）　精製浅鉢の口縁部で、内外面に沈線がある。

金属器（第 39 図、第 15 表、図版 19）

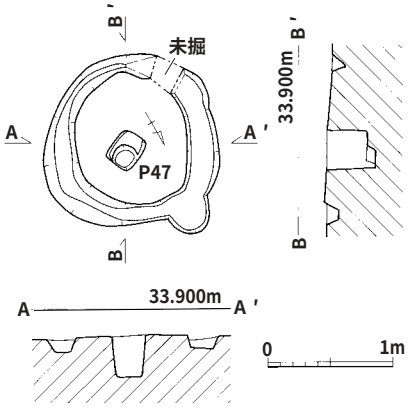
鉄鏃の茎（第 39 図３、第 15 表、図版 19－11）　天地は不明である。巻きつけていた糸の痕跡がある。

円 形 周 溝（ＳＶ）

上段で２基検出した。

ＳＶ１（第４・32 図・図版 12）

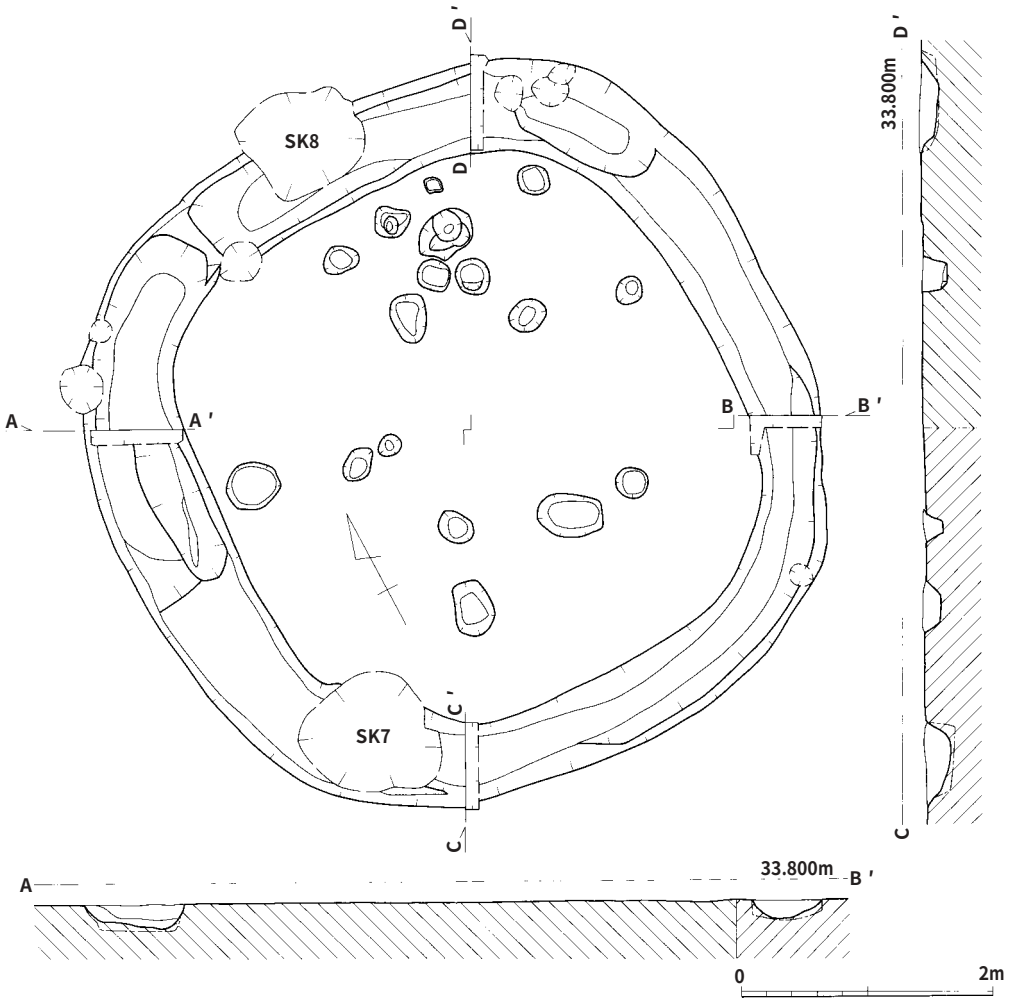
上段東側に位置する。長軸 1.51m・短軸 1.34mの円形を呈す。北側の張り出しは切り合っていたピットである。周溝は幅 0.14～0.30m・深さ８～14cm を測り、断面形はＶ字～逆台形である。周溝の内側は、地山が中央に向かって盛り上がっていたが誤って削平してしまった。また、中央には二段掘りのピット（Ｐ47）があり、一段目は長軸 28cm・短軸 24cm の長方形で深さ 33cm、二段目は径 20cm・深さ７cm を測る。



第 32 図　Ｉ区ＳＶ１実測図（S=1/60）

ＳＶ２（第４・33 図、図版 12）

上段中央に位置する。ＳＤ２・ＳＫ７・ＳＫ８との切り合い関係は不明である。長軸 5.64m・短軸 5.59m の隅丸方形を呈す。周溝は幅 0.46～0.88m・深さ６～23cm を測り、断面形は逆台形である。周溝の内側には



第 33 図　Ｉ区ＳＶ２実測図（S=1/60）

ピットがあるものの、その並びに規則性は見受けられない。

土　器（第 35・36 図、第 12 表）

壷（第 35 図９、第 12 表）　わずかながら凸レンズ状にふくらむ底部である。内外面ともハケを施す。

高坏（第 35 図 10、第 12 表）　口縁は短く内屈する。

縄文土器？（第 36 図５、第 13 表）　粗製鉢の底部か。

溝（ＳＤ）

上・下段で各１条検出した。

ＳＤ１（第４図、図版 13）

下段の南端沿いを西南西－東北東方向へのびる。幅 0.68～1.04m・深さ５～24 cm で断面形は逆台形である。東端が上・下段境の崖下にまで及ぶことから、下段削平後に掘られた新しい溝であると考えられる。

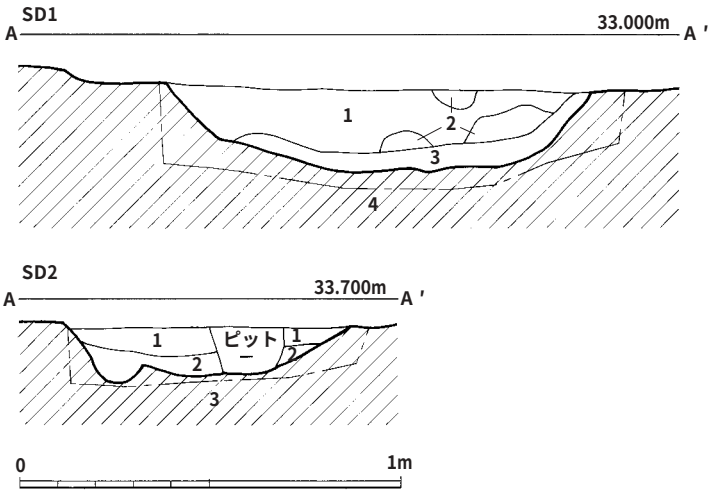
ＳＤ２（第４図、図版 13）

調査区北西端から東南東へ進み、ＳＣ３南付近で南南西へほぼ直角方向に向きを変え、上段の端までつづく。ＳＣ３・ＳＢ３・ＳＫ８・ＳＶ２との切り合い関係は不明である。幅 0.72～0.98m・最深 16cm で断面形は逆台形である。検出時はひとつづきであったが、残りが悪かったため、完掘時には３つに分かれてしまった。区画溝であった可能性がある。

ＳＣ４南西付近の底上６cm から二重口縁壷(12)が出土した。

土　器（第 35 図、第 12 表、図版 13・18）

二重口縁壷（第 35 図 11・12、第 12 表、図版 18－３・４）　**11** は頸部のしまりが強く、直立か



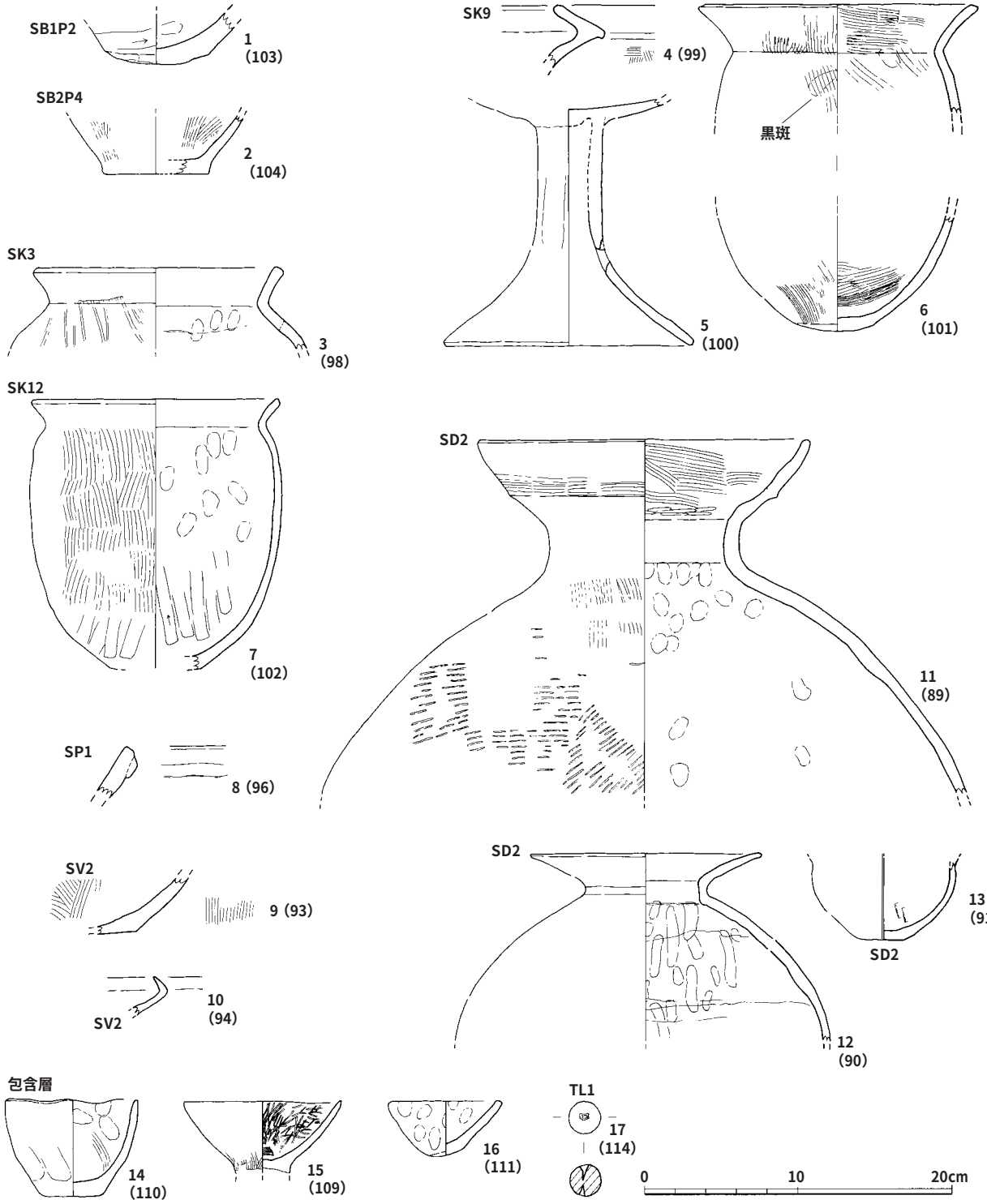
1	淡茶褐色土	粒子は細かい。 ～φ1mm程の細砂粒、4のブロックと土粒（φ5～11mm程）を若干含む。 粘性やや強い。しまり強い。
2	淡黄褐色土	4のブロック
3	１＋４	
4	淡黄褐色土（地山）	粒子は非常に細かい。 φ2～4mm程の炭化物、φ3～15mm程の赤褐色土粒、黒褐色粘着質土のブロックを若干含む。 粘性非常に強い。しまり非常に強い。

1	黒褐色土	多少赤みがかる。 粒子は細かい。 φ0.5mm程の細砂粒を多く含む。 粘性やや強い。しまり強い。
2	黒褐色土	粒子は細かい。 φ0.5mm程の細砂粒を多く含む。 3の土粒（φ10～15mm程）を若干含む。 粘性強い。しまり強い。
3	黄褐色土（地山）	粒子は非常に細かい。 粘性非常に強い。しまり非常に強い。

第 34 図　Ｉ区ＳＤ１・２土層図（S=1/20）

ら上位で強く外反する。頸部と口縁部の境が不明確であるが、稜が入ることで辛うじて両者を分けることができる。口縁はわずかに内弯する。内面胴部上位に指オサエのちケズリ・頸部にナデとミガキ・口縁部にハケのちナデ、外面胴部上位にタタキのちハケ・頸部にナデ・口縁部にナデのちハケを施す。外面胴部上位に黒斑がある。**12** は頸部のしまりが強く、短い直立から強く外反する。端部に外反する口縁がついていたとみられる。内面胴部中位に指オサエのちケズリ・上位に指オサエ・頸部にナデ、外面頸部にナデを施す。外面胴部上位に黒斑がある。

鉢（第 35 図 13、第 12 表、図版 18－５）　平底である。頸部が弱いながらもしまっていること



第 35 図　Ⅰ区ＳＢ・ＳＫ・ＳＰ・ＳＶ・ＳＤ・包含層出土土器・土製品実測図（S=1/4）

第12表　Ⅰ区ＳＢ・ＳＫ・ＳＰ・ＳＶ・ＳＤ・包含層出土土器観察表

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
35－1	Ⅰ	SB1P2	縄？粗製鉢？		(6.70)	(3.30)	内.黄灰 外.にぶい黄橙	0.3～4.3mmの石英を多量,0.1～5.9mmの長石を多少,0.8mm以下の雲母・輝石を少量含む	不良	内.指頭圧痕　外.ケズリ・ナデ		103
35－2	Ⅰ	SB2P4	甕か鉢		(6.80)	(3.80)	内.灰黄褐 外.にぶい黄橙	0.1～2.0mmの長石・石英を多少,0.5mm以下の雲母を少量含む	普通	内.ハケ　外.ハケ→ナデ・ナデ		104
35－3	Ⅰ	SK3	甕	(16.20)		(5.20)	内.灰黄褐 外.にぶい黄橙	0.1～2.5mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ　外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ		98
35－4	Ⅰ	SK9	二重口縁壷			(4.10)	内外.橙	5.5mm以下の長石・石英・雲母を多量,1.0mm以下の輝石を少量含む	普通	内.ナデ　外.ナデ・ハケ		99
35－5	Ⅰ	SK9	高坏		裾部径(16.20)	(16.00)	内外.浅黄橙	2.6mm以下の長石・石英・雲母を多少,1.1mm以下の赤色粒・輝石を少量含む	やや不良	内坏.ナデ　脚.工具ナデ・ナデ 外坏.ナデ　脚.ケズリ→ナデ？・ケズリ・ナデ	穿孔有り	100
35－6	Ⅰ	SK9	甕	(18.10)	(5.05)	(14.60)	内外.にぶい黄橙	0.2～3.2mmの石英を多量,0.1～1.8mmの長石を多少,1.2mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ハケ・ハケ・指頭圧痕→ハケ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑	101
35－7	Ⅰ	SK12	甕	(16.20)	胴部径16.40	(17.60)	内.にぶい黄橙 外.橙	0.1～4.5mmの石英を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石を少量,0.1～2.0mmの長石を含む	やや不良	内.ナデ・指頭圧痕・ナデ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ・工具ナデ	外.煤	102
35－8	Ⅰ	SP1	縄.粗製深鉢			(3.30)	内外.にぶい黄橙	0.2～2.8mmの長石・石英を多少,0.7mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内外.ナデ	外.突帯有り	96
35－9	Ⅰ	SV2B	壷			(3.60)	内.オリーブ黒 外.にぶい黄橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石を少量含む	普通	内外.ハケ		93
35－10	Ⅰ	SV2D	高坏？			(2.40)	内外.浅黄橙	0.1～2.0mmの長石を多量,0.1～3.5mmの石英を多少,1.0mm以下の赤色粒を少量含む	普通			94
35－11	Ⅰ	SD2	二重口縁壷	21.60		(23.10)	内.にぶい黄橙 外.橙	0.1～3.5mmの長石・石英,1.5mm以下の雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ→ナデ・ミガキ・ナデ・ケズリ→指頭圧痕　外.ナデ・ナデ→ハケ・ナデ・タタキ→ハケ・タタキ		89
35－12	Ⅰ	SD2	二重口縁壷？	(15.10)		(12.20)	内外.浅黄橙	0.2～3.0mmの長石・石英を多少,0.8mm以下の輝石・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・指圧痕・指圧痕→ケズリ 外.ナデ	外.黒斑	90
35－13	Ⅰ	SD2	鉢	(9.70)	2.90	(5.30)	内.灰黄褐 外.にぶい黄橙	0.1～2.0mmの長石・石英を多少,0.8mm以下の雲母・輝石・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・工具ナデ　外.ナデ・ケズリ		91
35－14	Ⅰ	包含層	鉢	(8.60)	(4.20)	6.30	内外.橙	0.1～2.2mmの長石を多少,6.0mm以下の石英・雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量,1.5mmの黒曜石チップを含む	普通	内.ナデ？・指圧痕→ハケ・ハケ・指頭圧痕 外.ナデ？・ケズリ？・ケズリ	内外.スリップ	110
35－15	Ⅰ	包含層	鉢？	(10.30)		(4.70)	内.橙 外.にぶい黄橙	0.2～2.5mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	良	内坏.ミガキ・ハケ　外坏.ハケ	内外.黒斑	109
35－16	Ⅰ	包含層	手捏ね土器	7.30	2.40	3.50	内外.浅黄橙	0.1～5.5mmの石英を多量,0.3mm以下の雲母を少量,0.1～2.0mmの長石を含む	不良	内外.ナデ・指頭圧痕・ナデ		111
35－17	Ⅰ	TL1	丸玉	径2.00～2.05			外.にぶい橙	0.1～1.8mmの長石・石英を多少,0.7mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	普通		未貫通穿孔有り	114

から、口縁は外反もしくは外傾すると考えられる。しかし、それが全周に及ぶものであるかは不明である。内面に工具ナデ、外面底部～胴部中位にケズリを施す。

その他の遺構

Ｐ82（第４図、図版 11）

上段北側に位置し、ＳＣ９に切られる。図化していないが柱痕の脇（片側のみ）に石で根固めをしたような形跡が見受けられた。

図化していないが、底から弥生時代の壷片が出土した。

その他の遺物

土器・土製品（第 35・36 図、第 12 表、図版 18）

鉢（第 35 図 14・15、第 12 表、図版 18－６・７）　14・15 とも包含層から出土した。**14** は厚い平底である。内面にハケ、外面にケズリを施す。内外面にスリップがかけられている。**15** は剥離痕があり、器台とも考えられる。内面底部にハケ・胴部～口縁部にミガキ、外面胴部下位にハケを

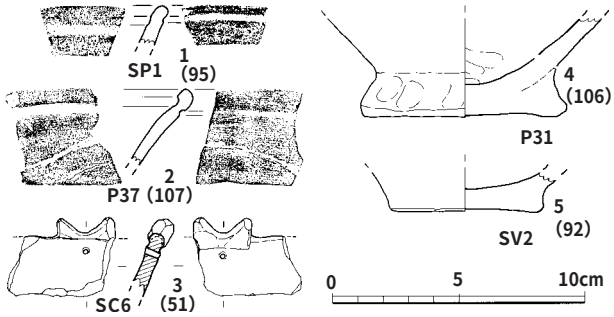
第 13 表　Ⅰ区出土縄文土器観察表　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
36－1	Ⅰ	SP1	縄.精製浅鉢			(1.50)	内外.橙	0.2mm以下の長石・雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内外.ナデ	内外.沈線有り	95
36－2	Ⅰ	P37	縄.精製浅鉢			(3.00)	内外.黒褐	0.5mm以下の長石・赤色粒を少量含む	良	内.研磨？　外.研磨？・研磨	内外.沈線有り	107
36－3	Ⅰ	SC6A	縄.精製浅鉢？			(3.00)	内.黒　外.浅黄	0.2mm以下の雲母を多量,1.0mm前後の石英を少量,0.5mm前後の長石を含む	良	内外.ナデ	穿孔有り	51
36－4	Ⅰ	P31	縄.粗製鉢		8.15	(3.90)	内.暗灰黄 外.にぶい黄褐	0.2～3.0mmの石英を多量,0.1～2.0mmの長石を多少,1.2mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内.指頭圧痕 外.指頭圧痕→ナデ・指頭圧痕		106
36－5	Ⅰ	SV2A	縄.粗製鉢？		6.10	(1.70)	内.にぶい橙　外.橙	0.1～2.0mmの長石・石英を多量,0.5mm以下の雲母を多少,1.5mm以下の角閃石を少量含む	普通	内.ハケ→ナデ　外.ナデ		92

施す。内面上半に黒斑がある。

縄文土器（第 36 図２、第 13 表、図版 18－11）　Ｐ37 から出土した。精製浅鉢の口縁部で、内外面に沈線がある。内外面とも研磨を施す。

縄文土器（第 36 図４、第 13 表、図版 18－13）　Ｐ31 から出土した。粗製鉢の底部である。内外面に指オサエを施す。



第 36 図　Ⅰ区出土縄文土器実測図・拓影図（S=1/3）

手捏ね土器（第 35 図 16、第 12 表、図版 18－８）　包含層から出土した。鉢形を呈す。わずかながら凸レンズ状にふくらむ底から直線的に外へ開く。外面底部～胴部下半に黒斑がある。

丸玉（第 35 図 17、第 12 表、図版 18－９）　１Ｔから出土した。両側から穿孔されるが、貫通していない。

石　器（第 37・38 図、第 14 表、図版 18・19）

砥石（第 37 図５、第 14 表、図版 19－８）　Ｐ47 から出土した。暗灰色頁岩製で、柱状を呈す。

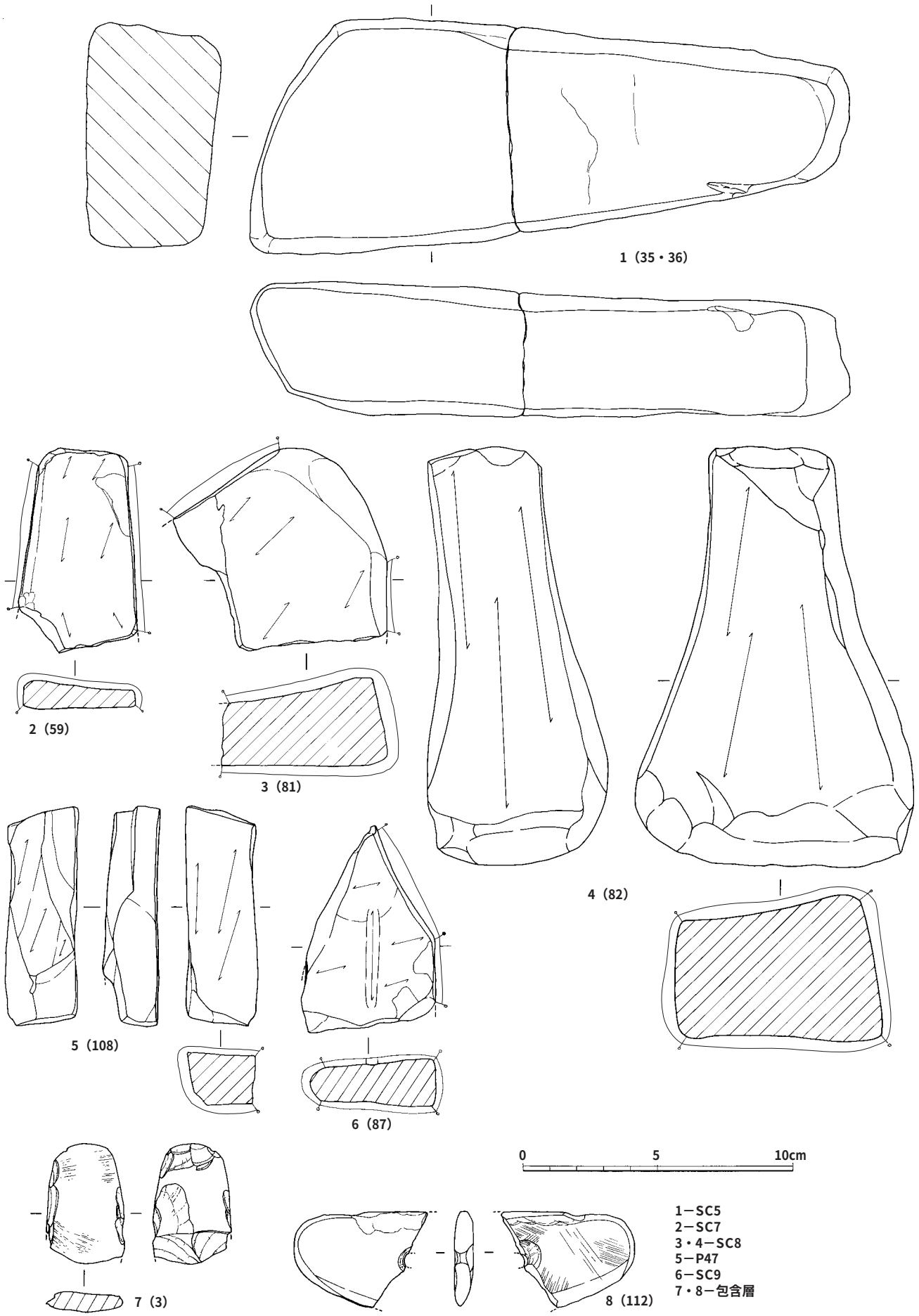
石庖丁（第 37 図８、第 14 表、図版 19－２）　包含層から出土した。縞状泥質片岩製である。穿孔途中に割れた未成品か。

打製石鏃（第 38 図２、第 14 表、図版 18－15）　包含層から出土した。サヌカイト製の凹基無茎鏃である。やや深い抉りをもつ。

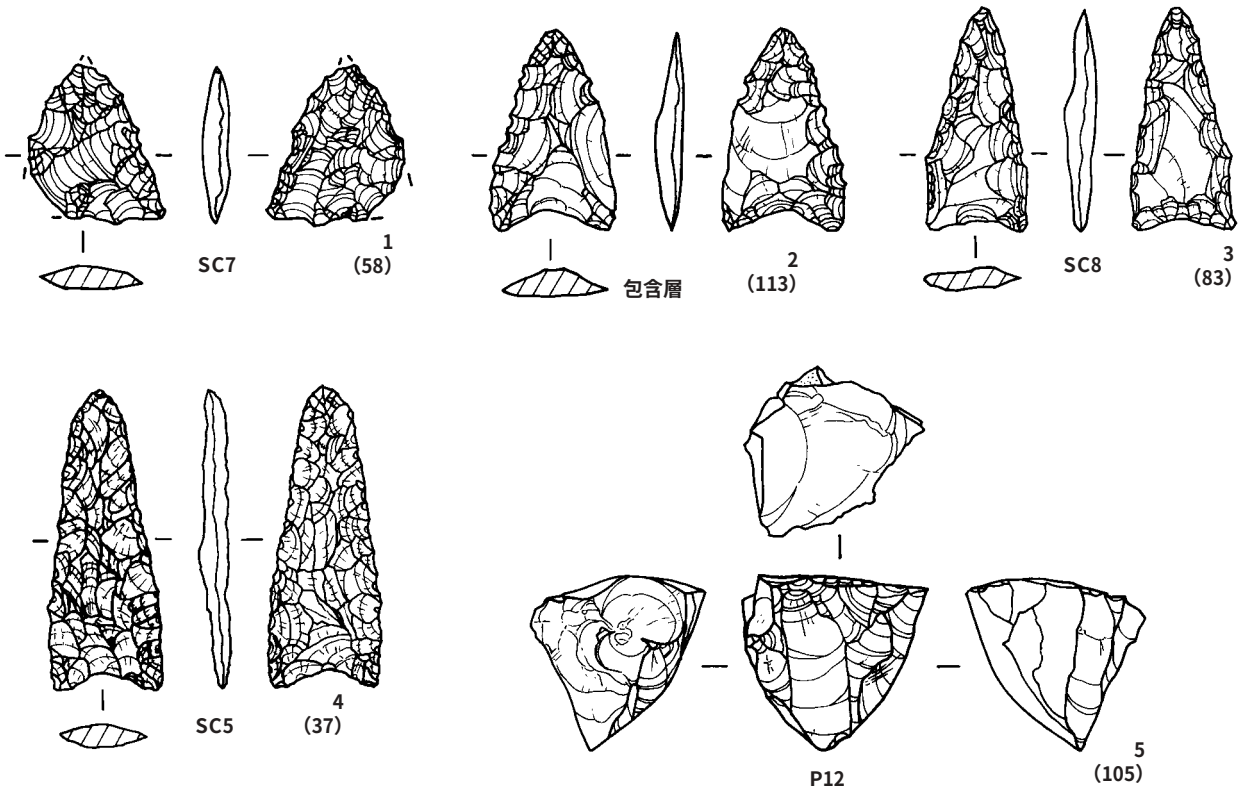
石核（第 38 図５、第 14 表、図版 18－18）　Ｐ12 から出土した。黒色黒曜石製である。

第 14 表　Ⅰ区出土石器観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	残存状況	法　量(cm)					鑑定結果	遺物番号
						長	幅	厚	重量(g)	その他		
37－１	Ⅰ	SC5No.1,2	石器	台石?	完形	22.4	8.95	4.9	1540.0		花崗斑岩	35･36
37－２	Ⅰ	SC7	石器	砥石	?	7.7+	4.4+	1.1	60.2		中粒砂質片岩	59
37－３	Ⅰ	SC8	石器	砥石	?	7.7+	8.0+	3.3	260.0		細～中粒砂岩	81
37－４	Ⅰ	SC8	石器	砥石	?	15.8	10.4	6.8	1200.0		中粒砂岩	82
37－５	Ⅰ	P47	石器	砥石	?	8.3	2.75	2.1	71.8		暗灰色頁岩	108
37－６	Ⅰ	SC9	石器	砥石	?	7.75+	4.8+	1.8	89.0		細粒砂岩	87
37－７	Ⅰ	SC2	石器	磨製石斧?	?	4.55+	2.9	0.7	15.8		珪質片岩?	3
37－８	Ⅰ	包含層	石器	石庖丁	3/5欠	4.95+	3.65+	0.7	15.8		縞状泥質片岩	112
38－１	Ⅰ	SC7	石器	石鏃	一方の基部欠	2.1	1.8+	0.4	1.2		黒色黒曜石	58
38－２	Ⅰ	包含層	石器	石鏃	完形	2.7	1.65	0.4	2.4		サヌカイト	113
38－３	Ⅰ	SC8	石器	石鏃	完形	2.95	1.35	0.4	1.2		サヌカイト	83
38－４	Ⅰ	SC5No.6	石器	石鏃	完形	4.0	1.45	0.4	2.2		サヌカイト	37
38－５	Ⅰ	P12	石器	石核	?	2.35	2.4	2.35	8.8		黒色黒曜石	105



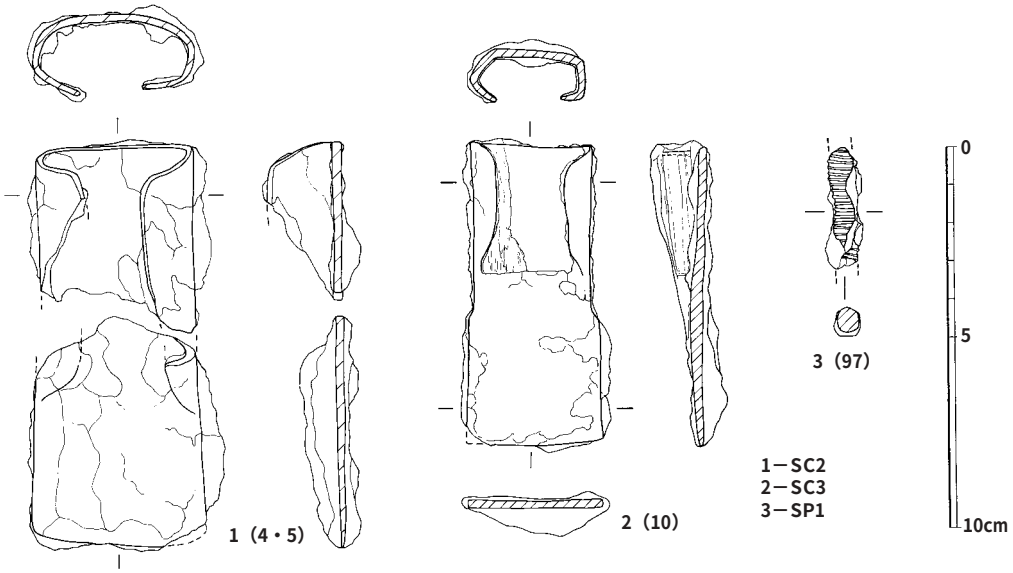
第 37 図　Ⅰ区出土石器実測図①（S=1/2）



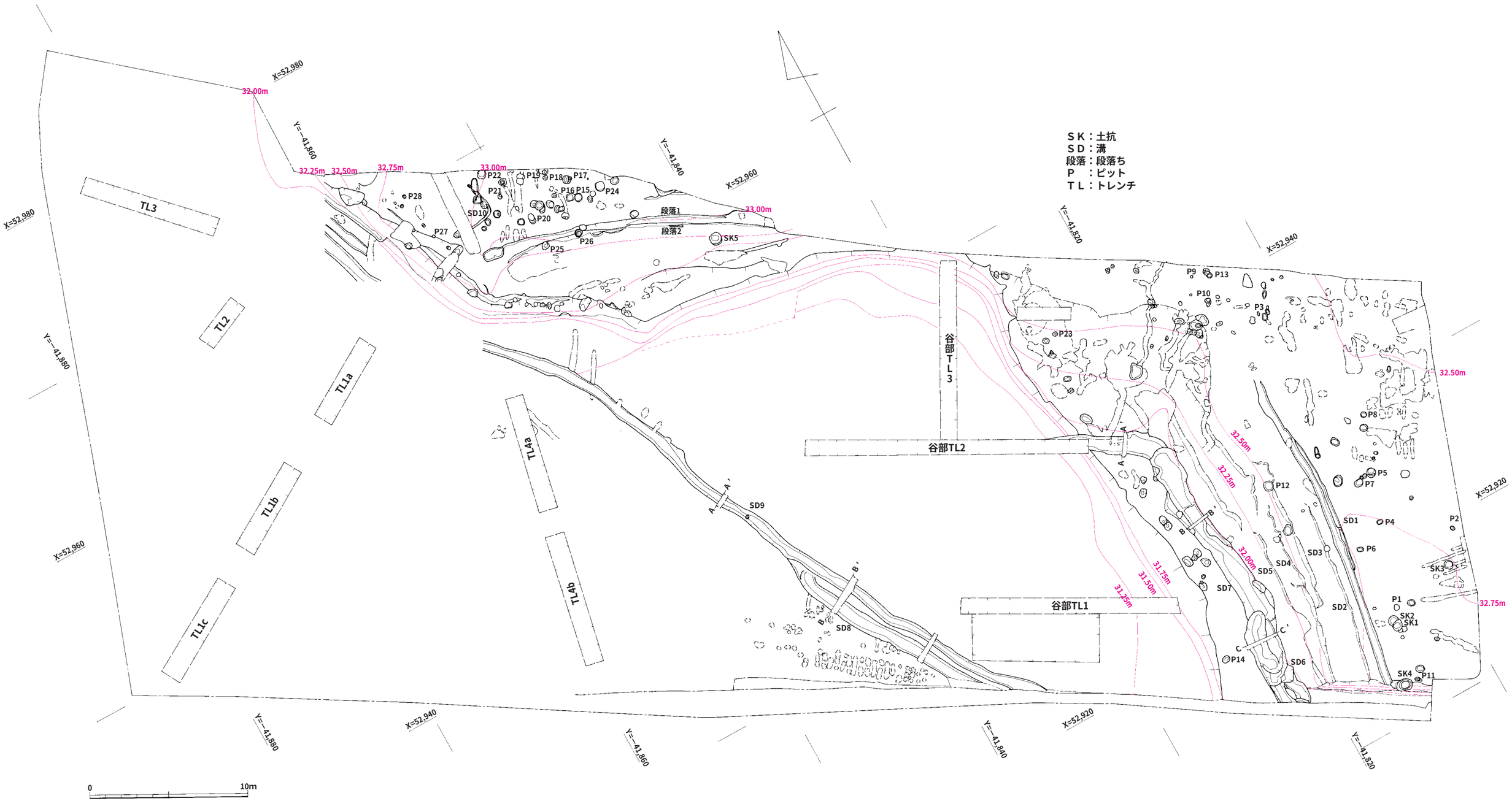
第 38 図　Ⅰ区出土石器実測図②（原寸）

第 15 表　Ⅰ区出土金属器観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法量(cm)					備　考	遺物番号
					長	幅	厚	重量(g)	その他		
39－1	Ⅰ	SC2B	鉄器	鉄斧	4.95+6.0	4.1・4.6	0.2	90.0			4・5
39－2	Ⅰ	SC3C	鉄器	鉄斧	7.95	3.6	0.4	46.6			10
39－3	Ⅰ	SP1	鉄器	鉄鏃の茎？	3.2+α	－	－	4.6	直径 0.6		97



第 39 図　Ⅰ区出土金属器実測図（S=1/2）



第 40 図　Ⅱ区遺構配置図（S=1/200）

第３節　Ⅱ 区の調査（第３・40～82図、図版20）

任意の方向に基準を定め、10m×10mのグリッドを組んで調査を実施した（第３図参照）。

北側・東側の高い部分を上段、その他の部分を下段とし、下段は谷部と谷部以外とに分けた。

上段は、低位段丘Ⅱ面である。かつての川原の跡を残す平坦な段丘面(砂層)を層厚１m 前後の風成土壌(黄褐色粘質土)が覆っており、その上面が遺構面となっている。東側は田を作るために削平されていた。

下段は、浸食された段丘の土砂が二次堆積したものである。北側崖面下や南東端付近では花崗岩が一部顔をのぞかせているが、これは段丘面を深く削り込んだことによって露出した基盤岩である。

上段を中心に土坑５・溝10・ピット多数を検出した。

土　坑（ＳＫ）

上段で５基検出した。

ＳＫ１（第40・41図、図版21）

上段南側に位置し、ＳＫ２を切る。長軸0.72m・短軸0.56mの不整円形を呈し、深さ53cmを測る。

ＳＫ２（第40・41図、図版21）

上段南側に位置し、ＳＫ１に切られる。径0.68mの略円形を呈し、深さ63 cmを測る。

ＳＫ３（第40・41図、図版21）

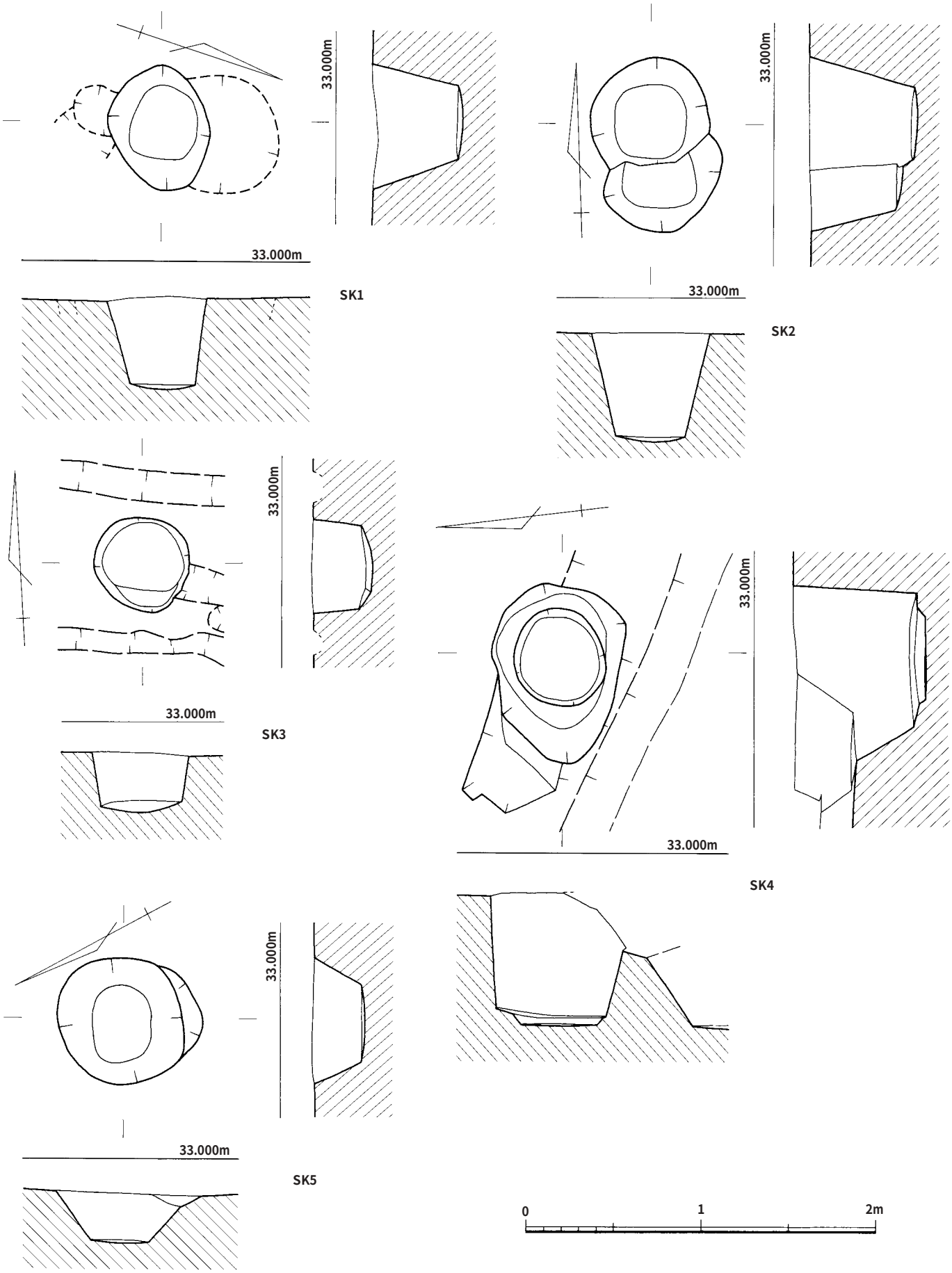
上段南東側に位置する。径0.53mの円形を呈し、深さ36cmを測る。

ＳＫ４（第40・41図、図版21）

上段南端付近に位置する。長軸1.00m・短軸0.75mの卵形を呈し、深さ69cmを測る。底面中央は径50cm・深さ６cm掘り込まれている。

ＳＫ５（第40・41図、図版21）

上段やや北側に位置する。径0.78mの略円形を呈し、深さ30cmを測る。



第41図　Ⅱ区ＳＫ１～５実測図（S=1/30）

溝（ＳＤ）

上段で２条、下段４条検出した。ＳＤ２～５は溝ではなかった。

ＳＤ１（第 40 図、図版 20）

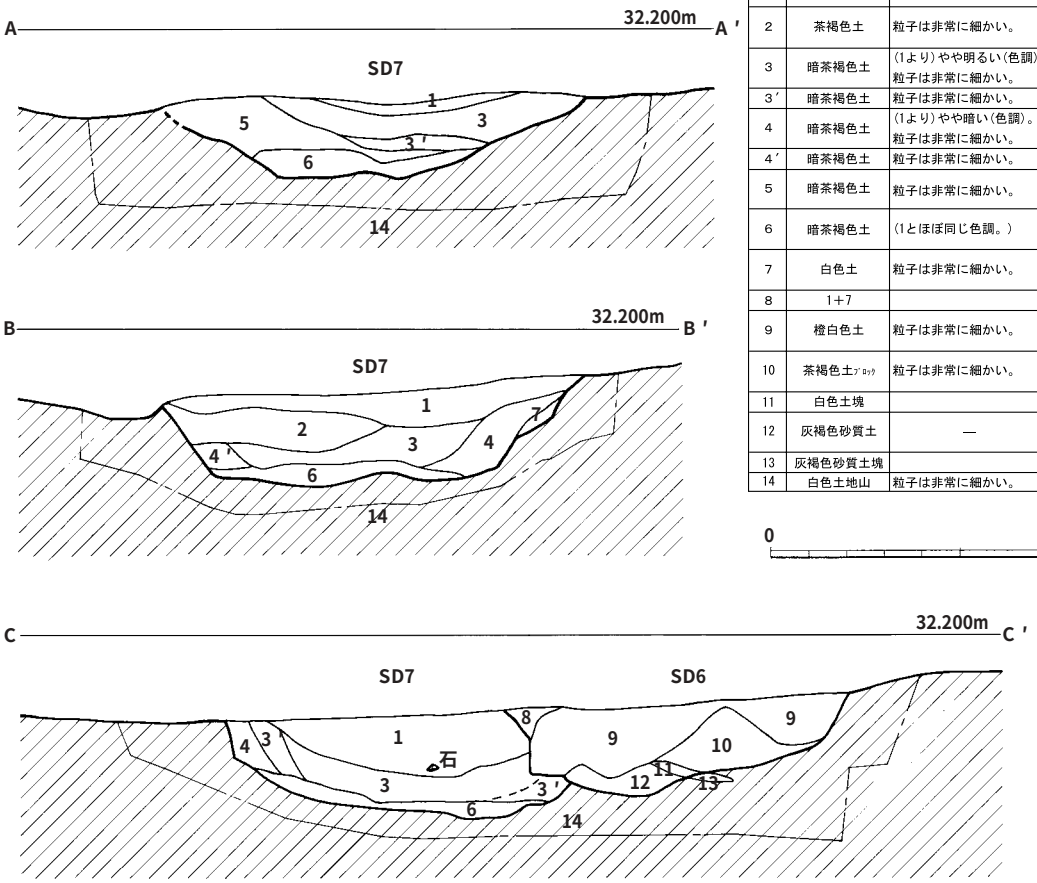
上段の谷への落ち際を南北方向へのびる。幅0.4m前後・深さ７cm前後で断面形は逆台形である。上段削平後に掘られた新しい溝であると考えられる。

ＳＤ６・７（第 40・42 図、図版 20・21）

下段東端を南北方向へのび、途中で北西方向へ向きを変える。上段から谷へ至る斜面が一旦水平になるところを走っている。幅 1.3m前後・深さ 40cm 前後で断面形は凸レンズ形である。ＳＤ７が谷部の黒褐色粘質土層を切る。ＳＤ６がＳＤ７を切っており、ＳＤ６はＳＤ７を一部掘りなおした部分と考えられる。

石　器（第 44 図、第 16 表、図版 46）

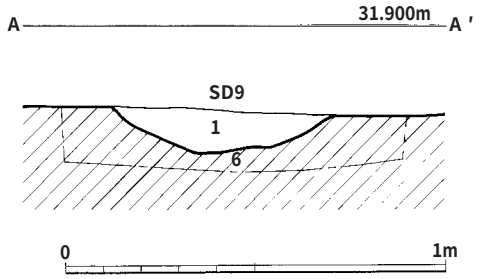
石庖丁？（第 44 図１、第 16 表、図版 46－６）　中粒角閃岩製である。穿孔中に割れた未成品のようにみえるが、刃もなく、割れ口にあたる部分に割れた形跡も認められなかった。自然石か。

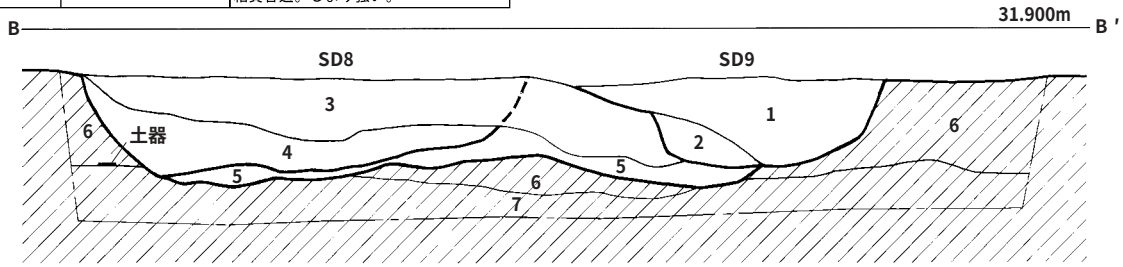


1	暗茶褐色土	粒子は非常に細かい。	～Φ2mm程の粗砂粒を若干含む。 粘性普通。しまり強い。
2	茶褐色土	粒子は非常に細かい。	Φ1～6mm程の粗細砂粒を若干含む。 橙白色の土粒（Φ6～8mm程）を多く含む。粘性普通。しまり強い。
3	暗茶褐色土	（1より）やや明るい（色調）。 粒子は非常に細かい。	～Φ2mm程の粗砂粒を若干含む。 粘性やや強い。しまりやや強い。
3′	暗茶褐色土	粒子は非常に細かい。	橙白色の土粒（Φ4～6mm程）を多く含む。
4	暗茶褐色土	（1より）やや暗い（色調）。 粒子は非常に細かい。	～Φ1mm程の細砂粒を若干含む。 粘性強い。しまりやや弱い。
4′	暗茶褐色土	粒子は非常に細かい。	橙白色の土塊（Φ3cm程）を含む。
5	暗茶褐色土	粒子は非常に細かい。	Φ1～3mm程の粗砂粒を若干含む。 橙白色の土粒（Φ6～10mm程）を多く含む。粘性普通。しまり強い。
6	暗茶褐色土	（1とほぼ同じ色調。）	Φ2～4mm程の粗砂粒を多く含む。 粘性やや強い。しまり普通。
7	白色土	粒子は非常に細かい。	11に4の土塊（Φ2～3cm程）を若干含む。 粘性やや強い。しまりやや弱い。
8	1＋7		
9	橙白色土	粒子は非常に細かい。	Φ4～5mm程の黒色土粒を若干含む。 粘性普通。しまり強い。
10	茶褐色土ﾌﾞﾛｯｸ	粒子は非常に細かい。	橙白色の土粒（Φ6～10mm程）を多く含む。 粘性普通。しまり強い。
11	白色土塊		
12	灰褐色砂質土	―	Φ2～4mm程の粗砂粒を非常に多く含む。 粘性普通。しまりやや弱い。
13	灰褐色砂質土塊		
14	白色土地山	粒子は非常に細かい。	粘性普通。しまり普通。

第 42 図　Ⅱ区ＳＤ６・７土層図（S=1/20）

1	茶褐色土	粒子は非常に細かい。	Φ1～2mm程の粗砂粒を若干含む。 粘質強い。しまりやや強い。
2	暗茶褐色土	同　上	
3	淡茶褐色土	粒子は細かい。	Φ1～4mm程の粗砂粒を若干含む。 粘質普通。しまり強い。
4	暗茶褐色土	(2より)暗い。 粒子は粗い。	Φ2～4mm程の粗砂粒を多く含む。 粘質やや弱い。しまりやや弱い。
5	茶褐色土	粒子は粗い。	Φ2～4mm程の粗砂粒を非常に多く含む。 粘質弱い。しまり弱い。
6	茶褐色土	やや赤みを帯びている。 粒子は細かい。	Φ1～2mm程の粗砂粒を若干含む。 粘質普通。しまり強い。
7	暗茶褐色土	粒子は細かい。	Φ1～2mm程の粗砂粒を若干含む。 粘質普通。しまり強い。





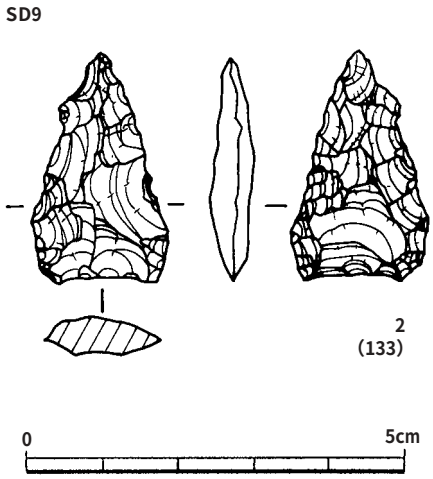
第43図　Ⅱ区ＳＤ８・９土層図（S=1/20）

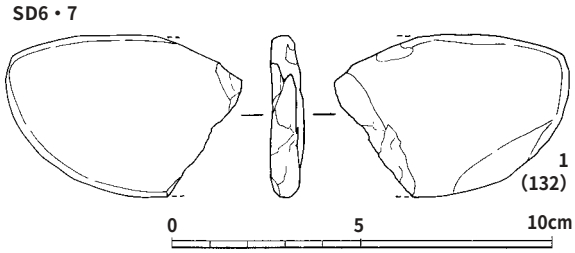
ＳＤ８・９（第40・43図、図版20）

下段中央を南東－北西方向へのびる。幅0.6m前後・深さ７cm前後で断面形は逆台形である。ＳＤ８（４層）が掘られたのち東壁が崩れて３層が堆積、その後ＳＤ９（１・２層）が掘られたものと考えられる。しかし、４・５層の判別が難しかったことから、ＳＤ８が３～５層におよぶ幅広いものであった可能性もある。

石　器（第44図、第16表、図版46）

打製石鏃（第44図２、第16表、図版46－７）　サヌカイト製の平基無茎鏃である。





第44図　Ⅱ区ＳＤ６・７・９出土石器実測図（原寸・S= 1/2 ）

第16表　Ⅱ区ＳＤ６・７・９出土石器観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	残存状況	法量(cm)					鑑定結果	遺物番号
						長	幅	厚	重量(g)	その他		
44－1	Ⅱ	SD6,7	石器？	石庖丁？	？	6.25	4.25	1.15	35.0		中粒角閃岩	132
44－2	Ⅱ	SD9	石器	石鏃	完形	3.0	1.8	0.55	2.4		サヌカイト	133

ＳＤ10（第40図、図版20・21）

上段北西に位置する。西端は攪乱に切られるが、東西方向へのびてカーブしたのち、南北へほぼ直角方向に向きを変える。幅 0.11m前後・深さ６cm 前後で断面形はU字形である。竪穴住居の壁溝か。

谷　部（第40・45～48図、図版22～24）

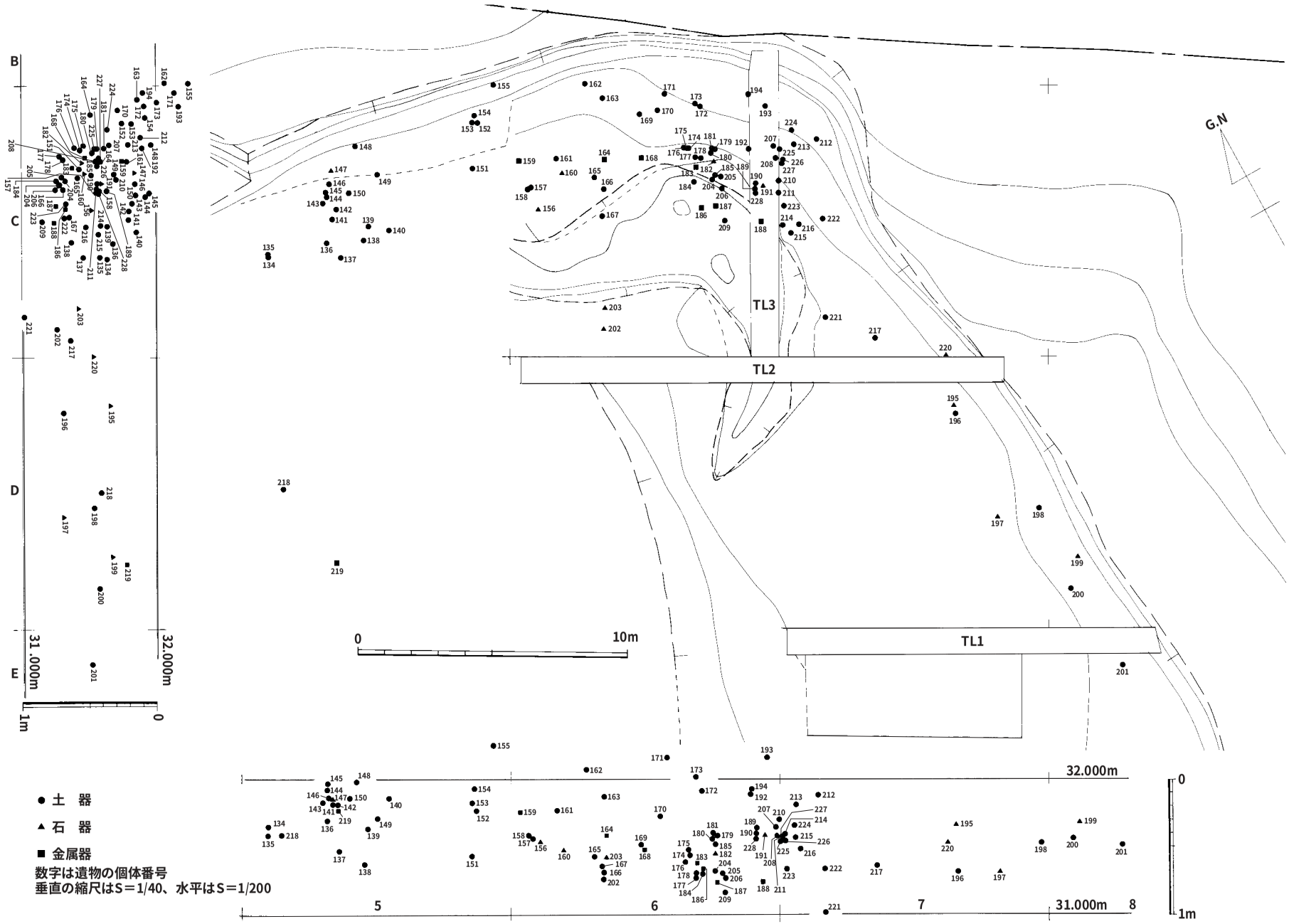
Ⅱ区の東側には略南北に走る丘陵があり、またⅡ区中央の北側には略東西に走る丘陵がある。両丘陵はおそらく同一丘陵であり、Ⅰ区で検出した弥生・古墳時代の集落が立地する丘陵と一連のものであろう。

現況水田の耕作土・床土除去後、両丘陵の間には多量の遺物を含む黒褐色粘質土の広がりが認められた。この範囲を丘陵開析の谷と考え、「谷部」として発掘調査を実施した。

先ず、谷部の土層観察と遺物の堆積状況を把握するために、横位に２本（谷部ＴＬ１・２）と縦位に１本（谷部ＴＬ３）の計３本のトレンチを設定した（第40図参照）。次に、谷部の遺物については、Ⅰ・Ⅱ区を通じて任意に設定した10m四方のグリッド（第３図）毎に発掘し取上げた。また、遺物の出土状況を把握するために、主だった遺物95点（遺物番号134～228、ただし188は４個体分）の水平・垂直分布のデータを記録した（第45図）。

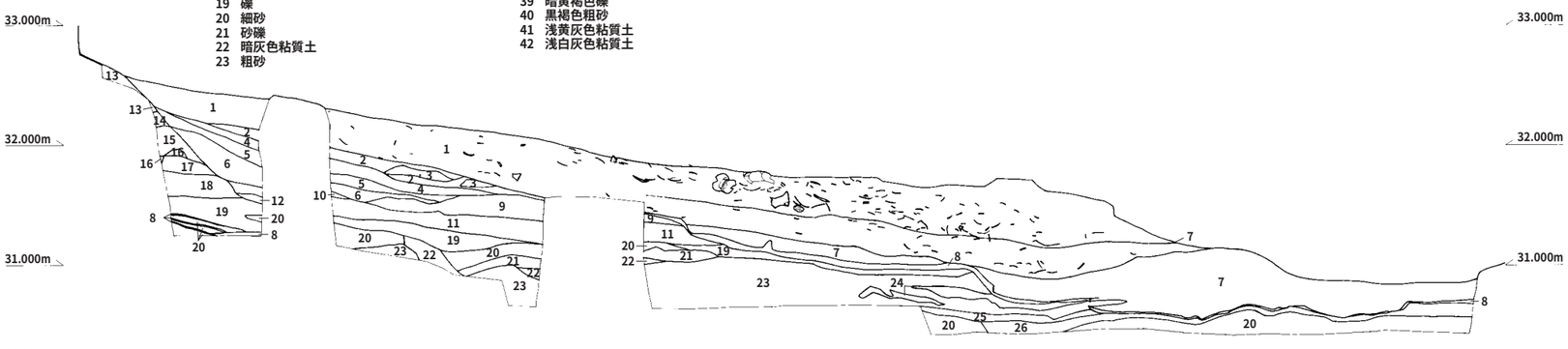
３本のトレンチによる土層観察（第46図）では、谷部の基盤は砂質土（９～56層）であり、開析を受けた谷底面には薄い鉄分の沈着層（８層）が形成されており、谷の堆積土としては暗青灰色の粘質土（７層）が認められる。しかしながら、谷の堆積土７層に含まれる遺物は多くはない。第46図の２・３Ｔ土層図に示すとおり、遺物の大多数は上層の黒褐色粘質土（１層）中に含まれている。このことは、谷部出土の遺物としたものの大半は、谷がある程度暗青灰色粘質土（７層）で埋まった後に、黒褐色粘質土（１層）とともに堆積したものと考えられる。特に、ＴＬ３土層図では高位の丘陵側から低位の谷側への多量の遺物の流れ込みが確認できる。このことは、谷部より出土した遺物の多くは、谷部本来の堆積に伴うものではなく、ある程度谷が堆積した後の後世の埋積に伴うものと考えたい。しかしながら、第47・48図に示した遺物の出土状況の中には、例えば谷部ＴＬ３より出土した遺物188は斧２・鋤先１・鎌１の４個体の鉄器が銹着していたものであり、単なる流れ込みとは考えにくいものもある。

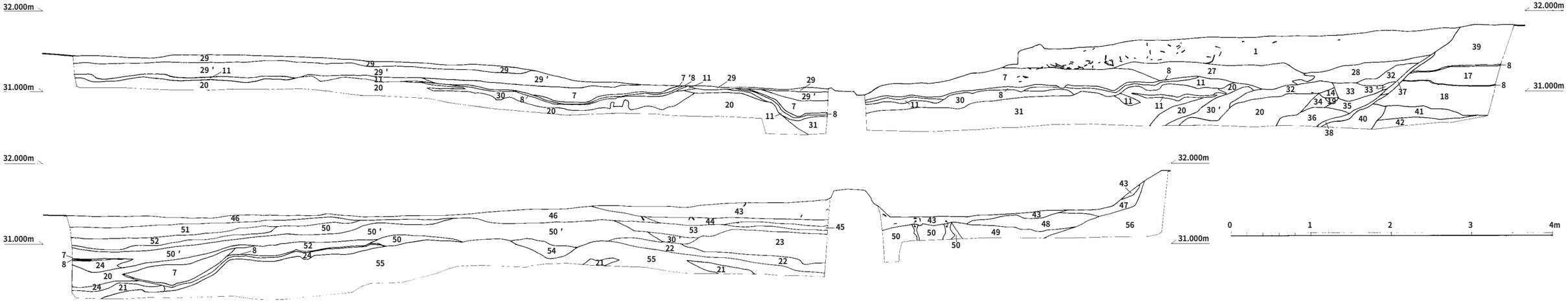
遺物の出土状況（第45図）でも、弥生時代後期の土器が主体を占めながらも、古墳時代前期の古式土師器も多く混在して出土している。おそらく、多くの遺物の谷部への流れ込みは、古墳時代前期以降と考えたい。



第 45 図　Ⅱ区谷部出土遺物水平・垂直分布図

1　多混白色石粒　黒褐色粘質土（遺物含む）
2　混黄色粘土粒　暗褐色土
2 ’多混黄色粘土粒　暗褐色土
3　明黄色粘土
4　朝黒色粘質土
5　浅黒褐色粘質土
6　浅褐色粘質土
7　暗青灰色粘質土
8　鉄分沈着層
9　混砂　暗褐色土
10　浅暗灰色砂質土
11　暗褐色粘質土
12　混白黄色砂　暗灰褐色土
13　暗黄褐色砂質土
14　黒褐色砂
15　白黄色砂
16　極細砂
17　茶色礫
18　浅暗灰色砂礫
19　礫
20　細砂
21　砂礫
22　暗灰色粘質土
23　粗砂
24　暗灰褐色粘質土
25　砂
26　混砂　浅暗灰褐色粘質土
27　混白色石粒　浅暗灰褐色土
28　暗灰褐色砂礫
29　多混白色石粒　暗褐色土
29 ’混白色石粒　暗褐色土
7 ’浅暗青灰色粘質土
30 ’暗灰褐色砂質土
30　混褐色土粒　暗灰褐色砂質土
31　粗砂と細砂の互層
32　黒褐色粘質土
33　黒色粘質土
33 ’混浅黄灰色土粒　黒色粘質土
34　暗白灰色砂質土
35　浅暗灰色粘質土
36　混砂　暗灰褐色粘質土
37　混礫　浅黄灰色粘質土
38　明橙色粘質土
39　暗黄褐色礫
40　黒褐色粗砂
41　浅黄灰色粘質土
42　浅白灰色粘質土
43　黒褐色粘質土（遺物含む）
44　多混白色石粒　暗灰褐色土（炭含む）
45　暗灰褐色土
46　多混白色石粒　浅暗褐色土（炭化粒含む）
47　混石粒　暗灰褐色土
48　浅黒褐色礫
49　混礫　明黄褐色粘質土
50　浅灰褐色砂質土
50 ’浅灰褐色砂質土（硬くしまる）
51　黒褐色土（硬くしまる）
52　暗浅灰褐色砂質土
53　浅灰褐色粘質土
54　暗灰褐色砂質土（硬くしまる）
55　細砂と細礫の互層
56　褐色砂礫（しまりあり）

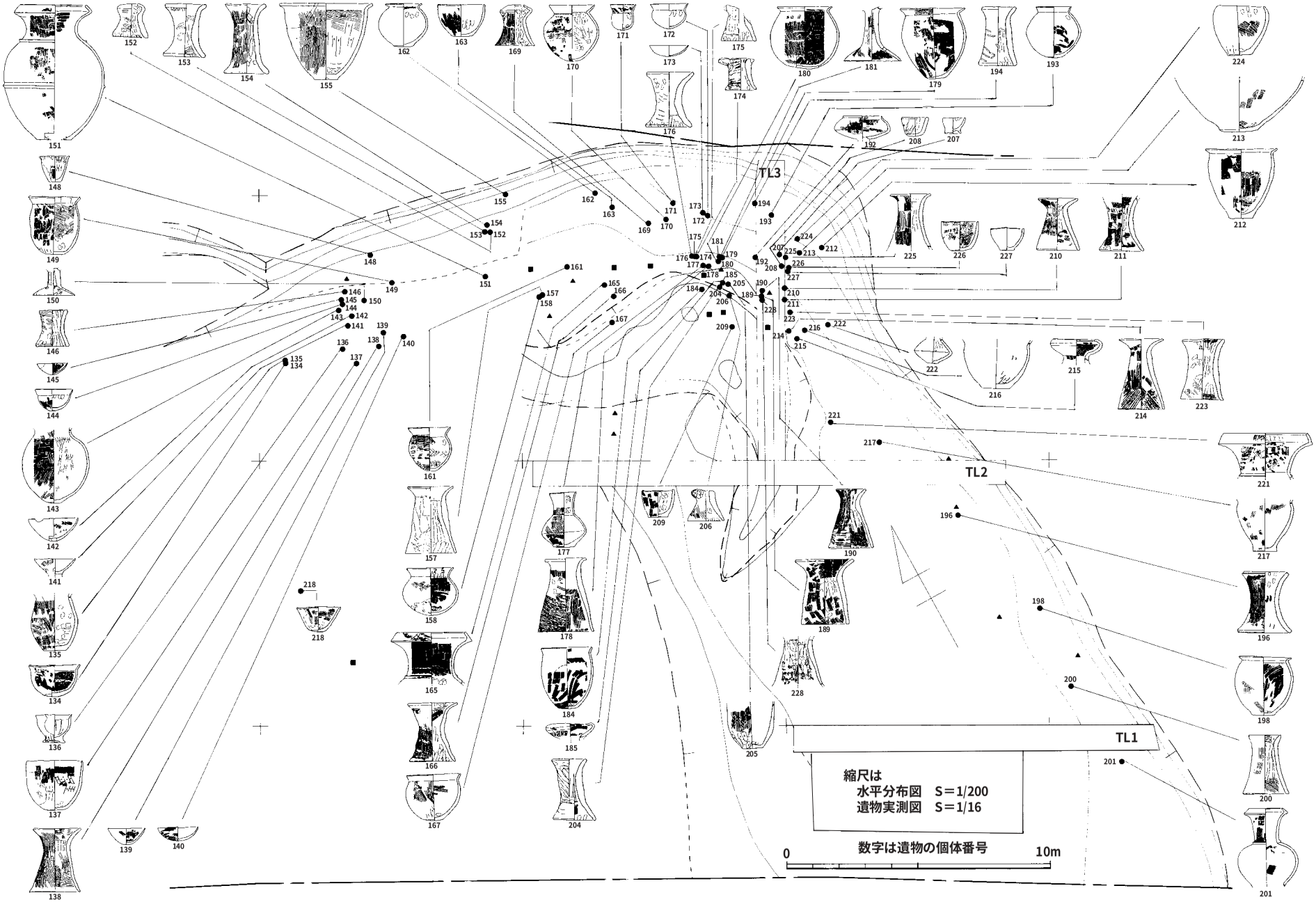




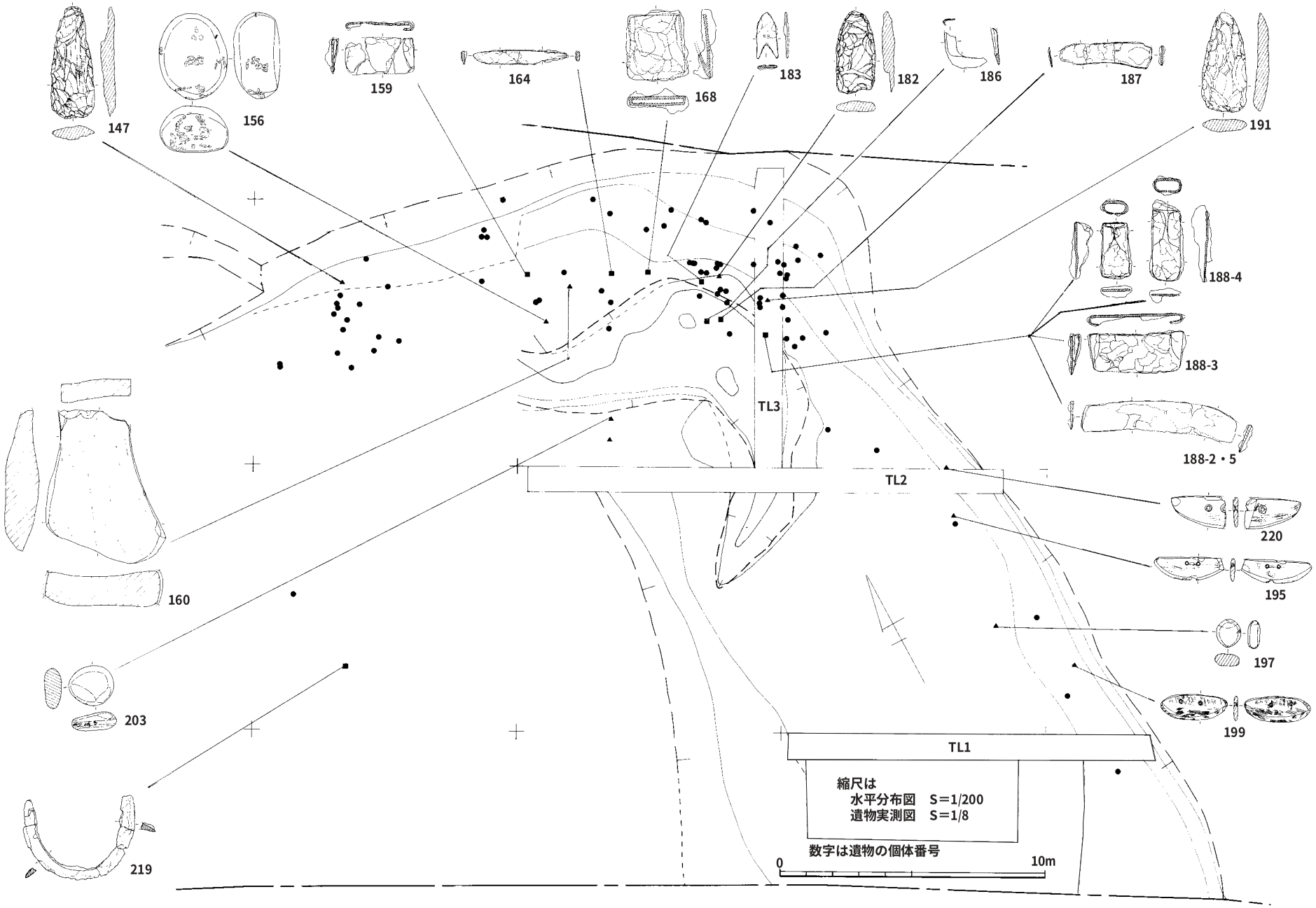
第46図　Ⅱ区谷部TL1～3土層図（S＝1/40）

（上）TL3（6B～6C）東壁
（中）TL2（6D～7D）北壁
（下）TL1（7E～8E）北壁

第 46 図　Ⅱ区谷部ＴＬ１～３土層図（S=1/40）



第 47 図　Ⅱ区谷部出土土器の水平分布図と実測図の対応図



第 48 図　Ⅱ区谷部出土石器・金属器の水平分布図と実測図の対応図

谷部の遺物（第 49～76 図、第 17～28 表、図版 25～43・46～50）

先に述べたように、谷部からは多種多量の遺物が出土した。土器が最も多く、他に土製品・石器・金属器も出土した。遺物の詳細については観察表に示しており、ここでは器種分類などの概略を述べるにとどめたい。

土器・土製品（第 49～68 図、第 17～25 表、図版 25～43）

谷部出土の土器は、弥生土器と古墳時代の土師器である。

弥生土器は弥生時代後期～終末期のものであり、その器種は壷・甕・鉢・高坏・器台である。

二重口縁壷（第 49・50 図、図版 25－１～13、26－１・２）

第 49・50 図は、いずれも大きく外弯する頸部から口縁部が内屈する二重口縁壷である。

第 49 図１の口縁部の内側への傾きは弱くやや立ち気味であるが、他は全て強く内傾している。第 49 図５は、長頸のものである。屈曲部は稜を有しており、著しいものは突帯状を呈しているもの（第 49 図６、第 50 図１・４）もある。底部は、平底のもの（第 49 図２）とレンズ状のもの（第 49 図４・８）がある。頸部と胴部の境に三角突帯を１条巡らせたもの（第 49 図２・４・５・８、第 50 図１～３・５・７）があり、他に胴部中位に１条巡らしたもの（第 49 図２、第 50 図７）と２条巡らしたもの（第 49 図８）もある。特に、第 50 図５の頸部突帯と第 50 図 7 の胴部突帯には刻み目が施されている。口縁部外面には箆描き文（第 50 図２）や刷毛状工具による波状文（第 50 図５）を描いたり、また、胴部上位外面に円形浮文を貼付したもの（第 49 図８）もある。調整は、内外面ともハケであるが、内面に指押えが残るものもある。また、胴部外面にタタキを施したものもある。

壷（第 51 図、第 17 表、図版 26－３～６）

第 51 図は、頸部が絞まり胴部中位に最大径を有する壷である。

１は、口縁部の内側端部をつまみ上げ、頸部と胴部の境に三角突帯を１条巡らせた、やや大型の壷である。２～４は中型の壷であるが、２は丸底、３はやや尖り気味の丸底で、４は長胴の壷である。調整は、内外面ともハケであるが、外面にタタキを、または内面に指ナデ・押えを残すものもある。

長頸壷（第 52 図１～３、第 17 表、図版 26－７～９）

第 52 図１～３は、素口の長頸壷である。

胴部形は、球形のもの（１）と算盤玉形を呈するもの（２・３）がある。底部は、２はレンズ状を、３は平底を呈するが、１は丸底と考える。

直口壷（第 52 図４・５、第 17 表、図版 26－10・11）

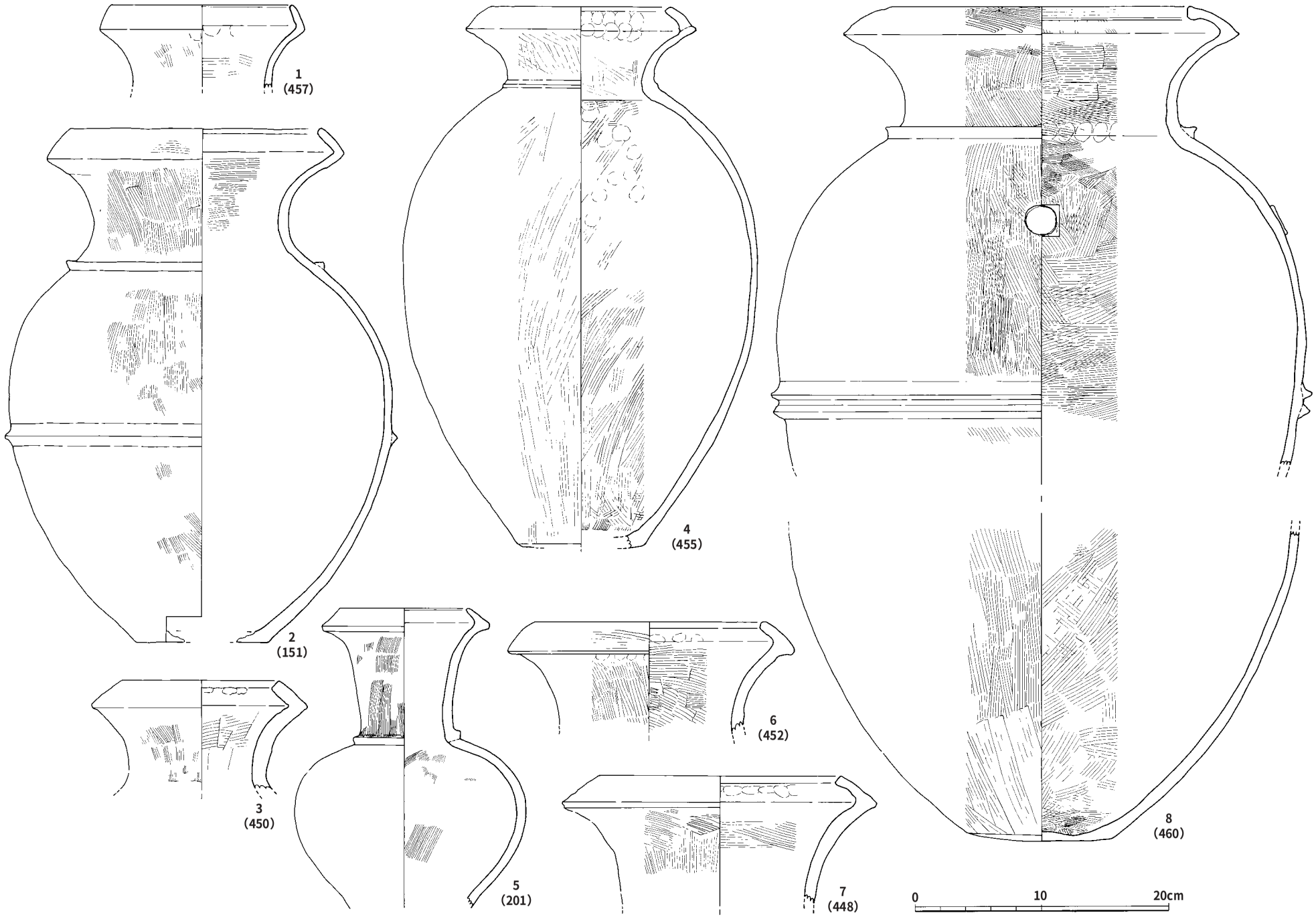
第 52 図４・５は、直口壷として扱った。

４の口縁部はやや内弯するのに対し、５はやや外傾している。いずれも口縁部内外面と胴部外面にミガキを施している。

無頸壷（第 52 図６～９、第 17 表、図版 26－12、27－１～３）

第 52 図６～９は、無頸壷である。

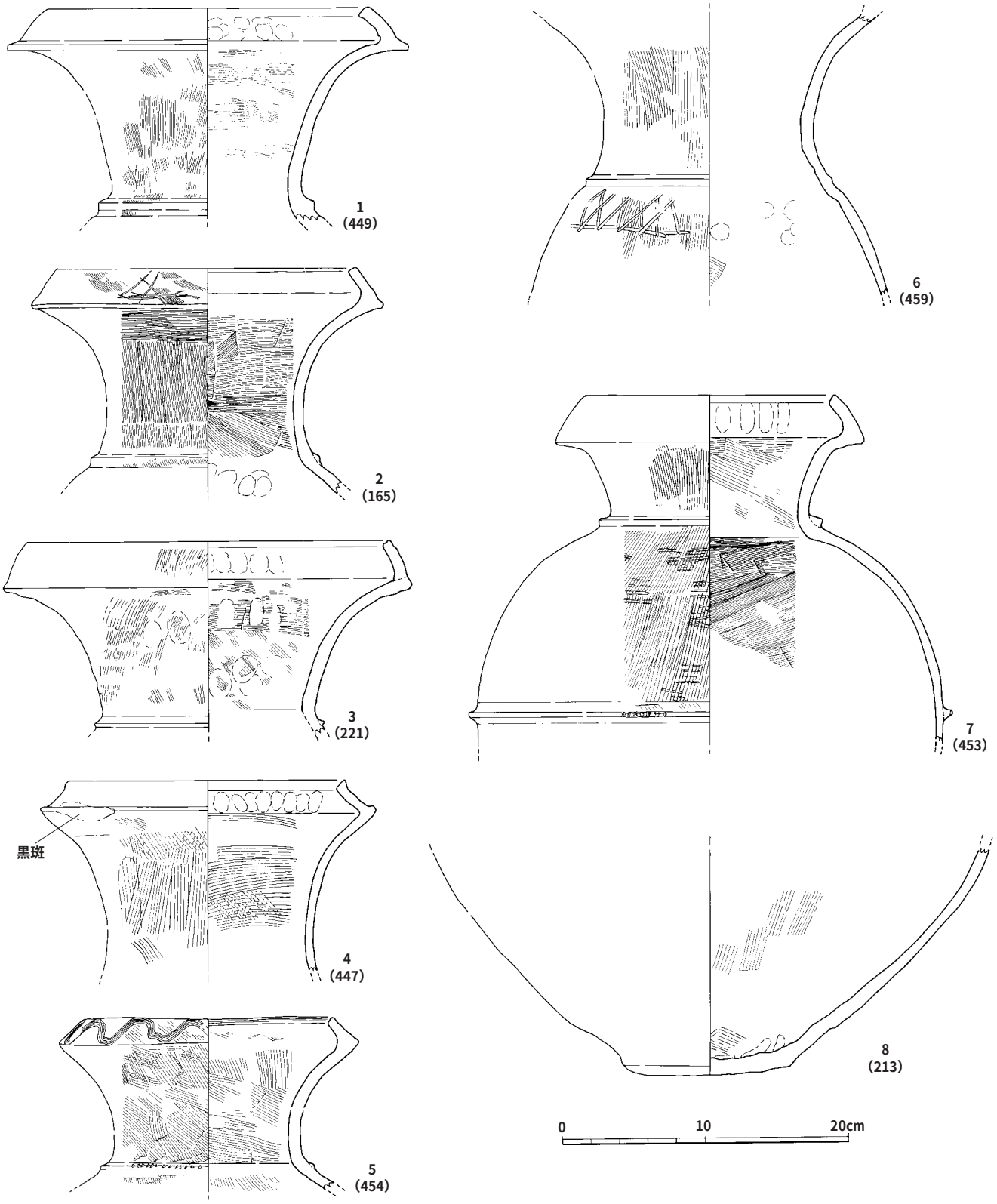
６・７は平底であるが、８はやや扁平な丸底を呈している。９は著しく扁平な胴部を呈し、底部



第 49 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図①（S=1/4）

の欠損状況から台付きのものと考える。

なお、短頸壷と鉢および小型の甕の区別が明確ではないが、第 52 図 10～13・16～18（第 17・18 表、図版 27－４～７・10～12）を**短頸壷**、第 52 図 14・15・19～21（第 17・18 表、図版 27



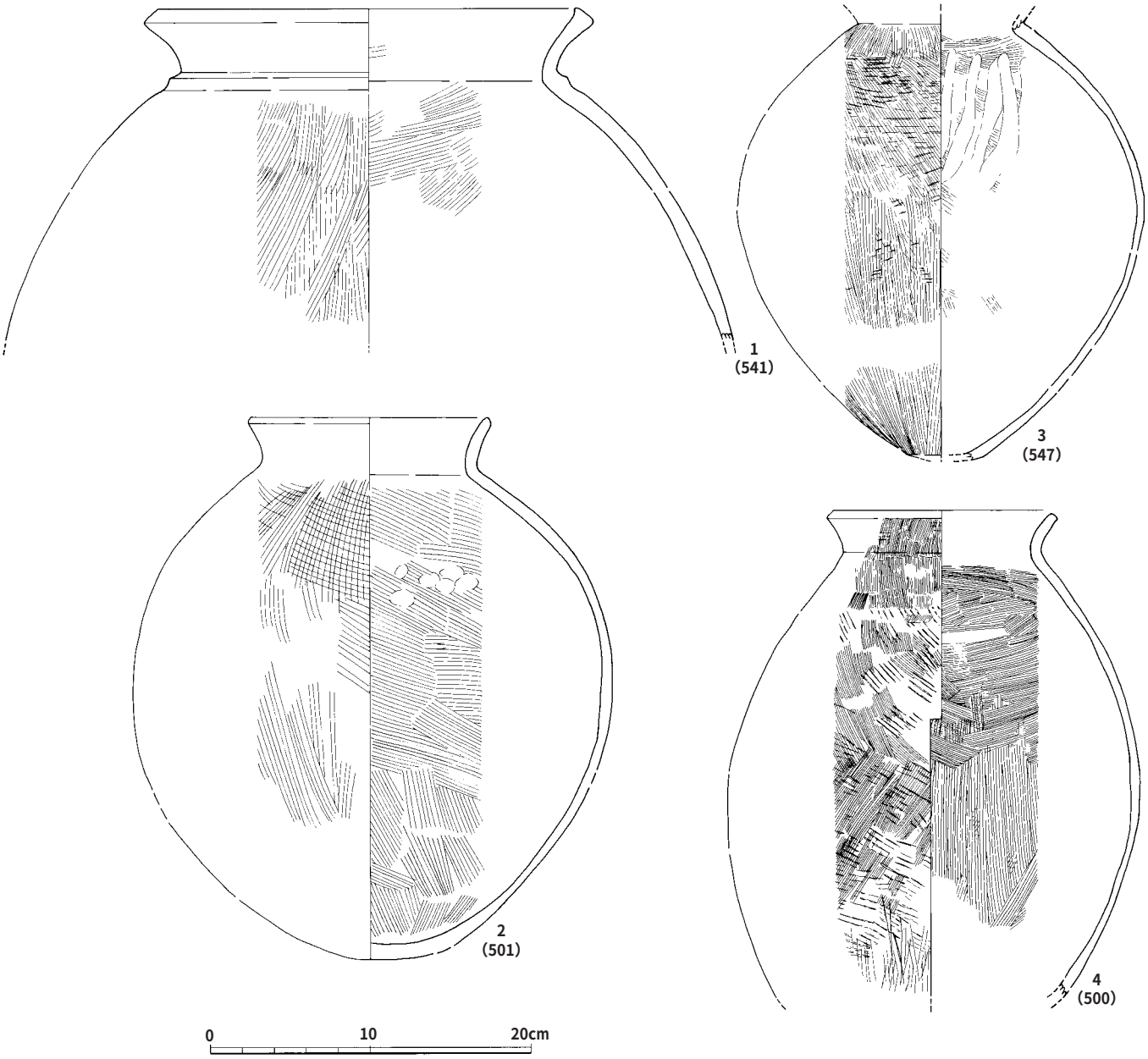
第 50 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図②（S=1/4）

－８・９・13～15）を**鉢**、第 52 図 22～24（第 18 表、図版 28－１～３）を**小型の甕**と分類した。小型の甕は平底であるが、鉢と短頸壷の底部は扁平なレンズ状を呈するもの（鉢 19～21、短頸壷 11・12）と、丸底を呈するもの（鉢 14・15、短頸壷 10・13・16・17）とがある。

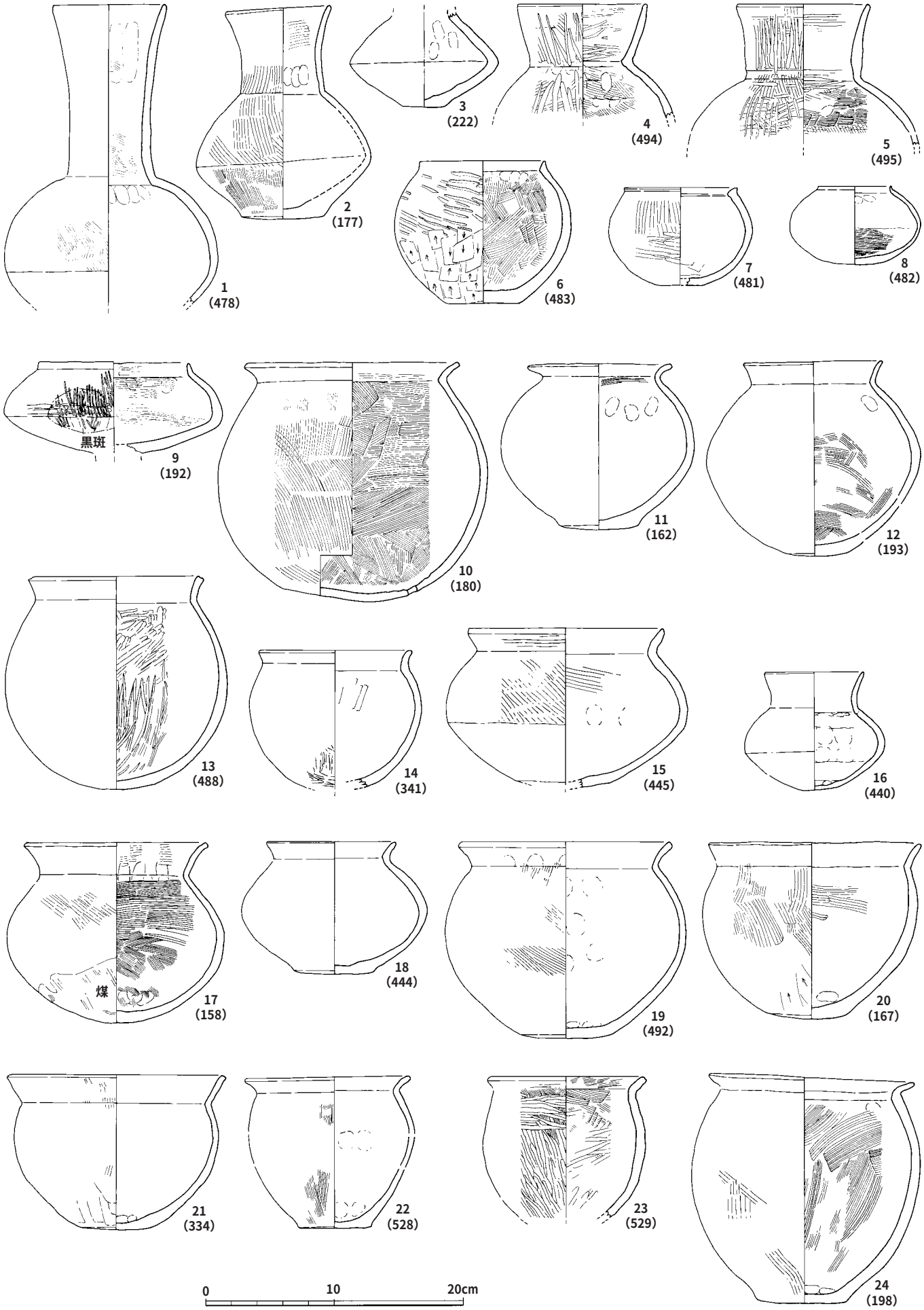
甕（第 53・54 図、第 18 表、図版 28－４～14、29－１～４）

第 53・54 図は、口縁部が「く」の字状に外反する甕である。

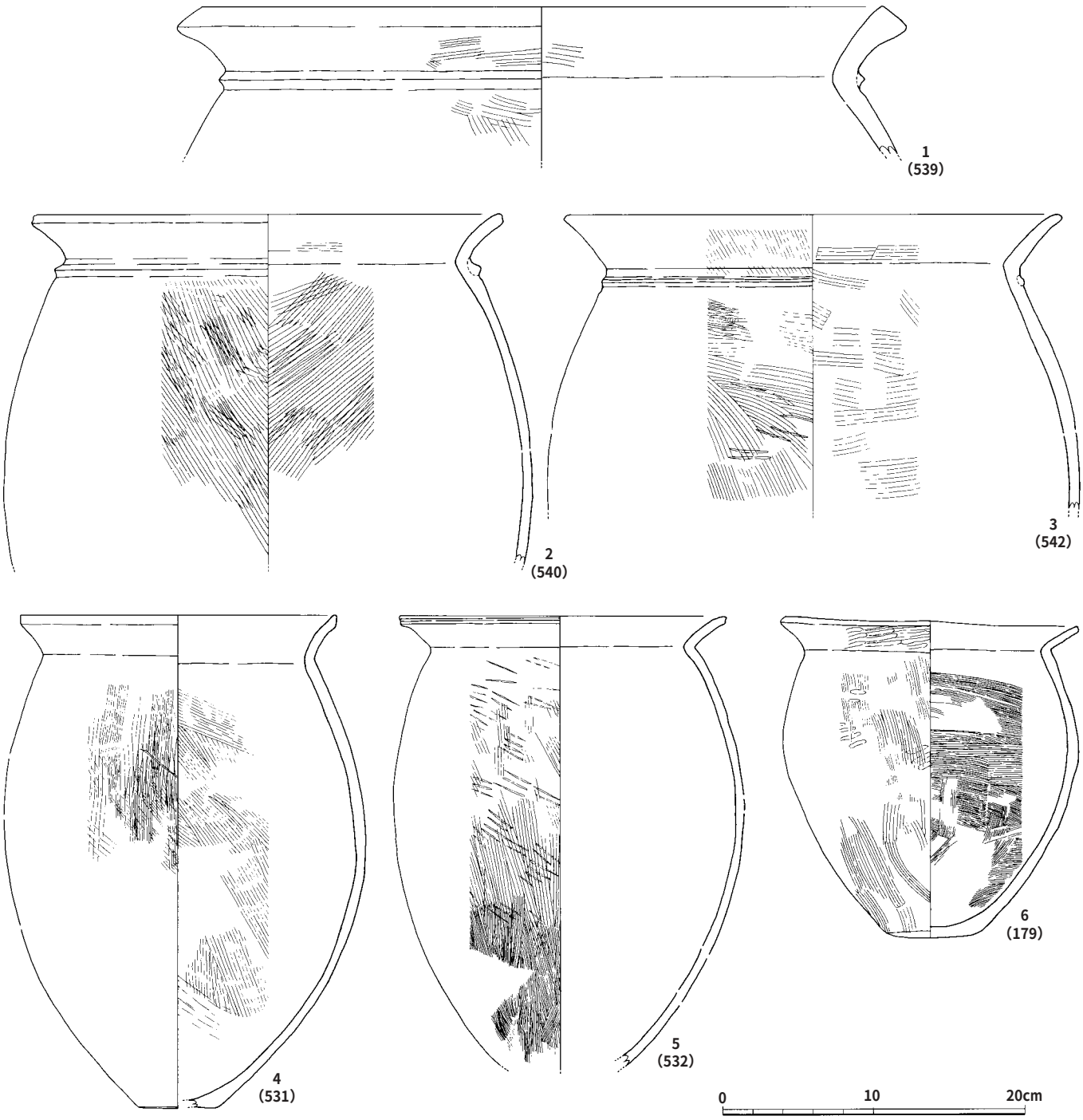
第 53 図の甕は、胴部中位に最大径を有し、胴部下位が底部にすぼまる形状を呈している。１～３はやや大型であり、頸部くびれ部に１条の三角形突帯をめぐらせている。４・５は中型、６は小型のものである。調整は、内外面ともハケであるが、３～６の胴部外面にはタタキが施されている。６の底部は、レンズ状を呈している。



第 51 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図③（S=1/4）

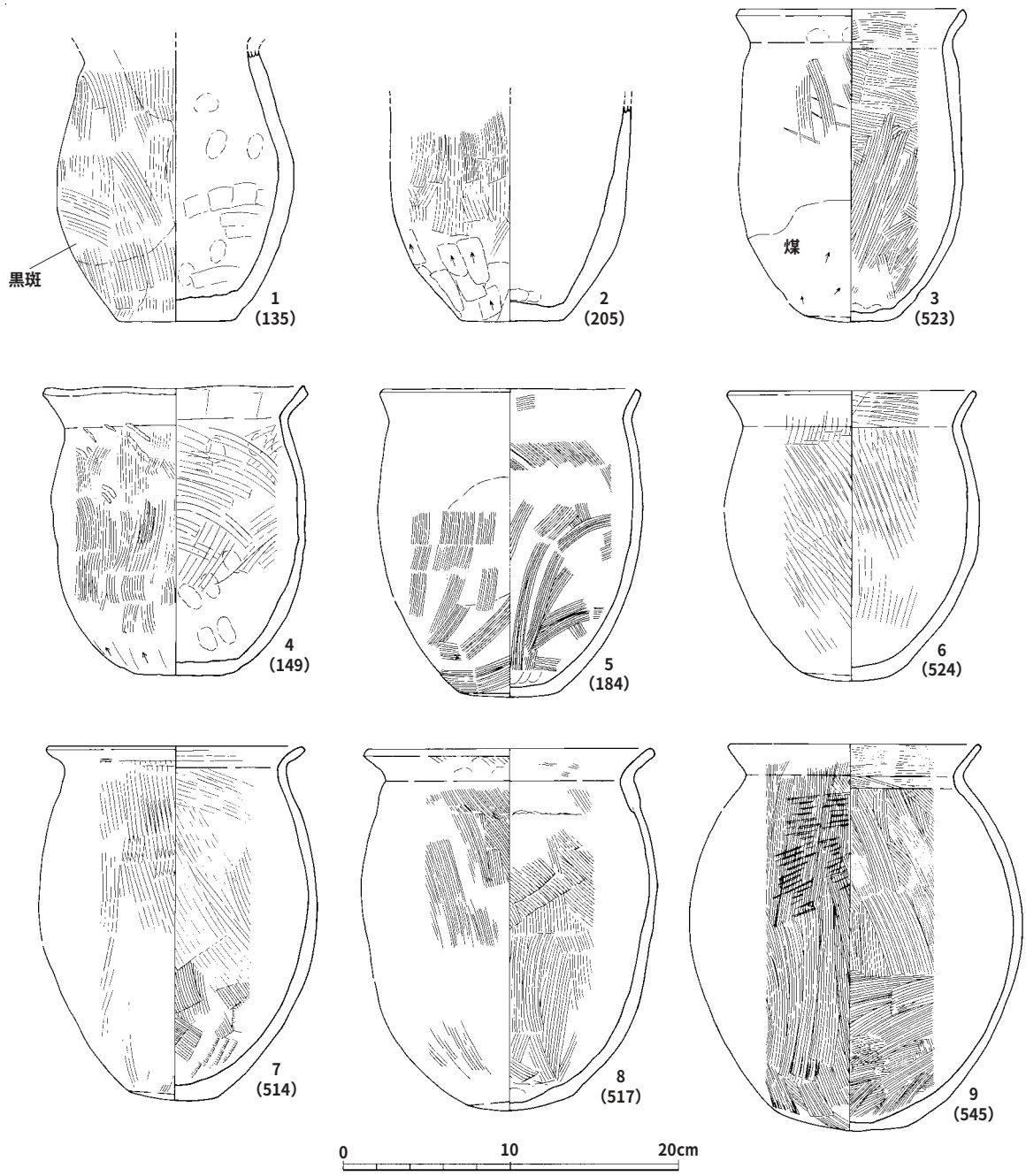


第 52 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図④（S=1/4）



第 53 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑤（S=1/4）

第 54 図の甕は、胴部最大径が下位に下がってズングリとした形状を呈した小型の甕である。底部は、平底のもの（１・２）、レンズ状を呈するもの（３・５～８）、丸底のもの（９）がある。調整は、内外面ともハケであるが、２～４の胴部外面下位にはケズリが施されている。また、９の胴部外面上半にはタタキが施されている。

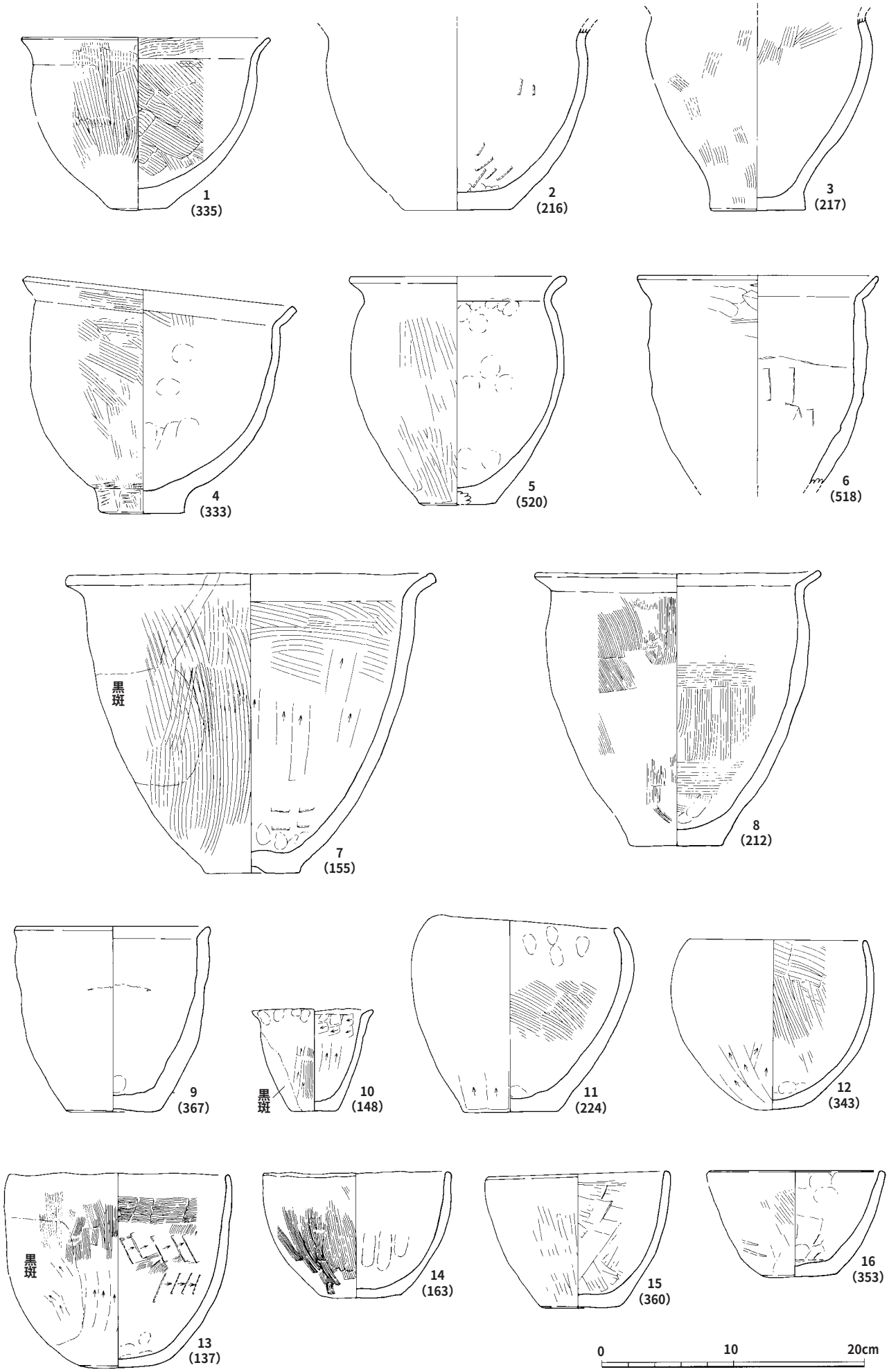


第 54 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑥（S=1/4）

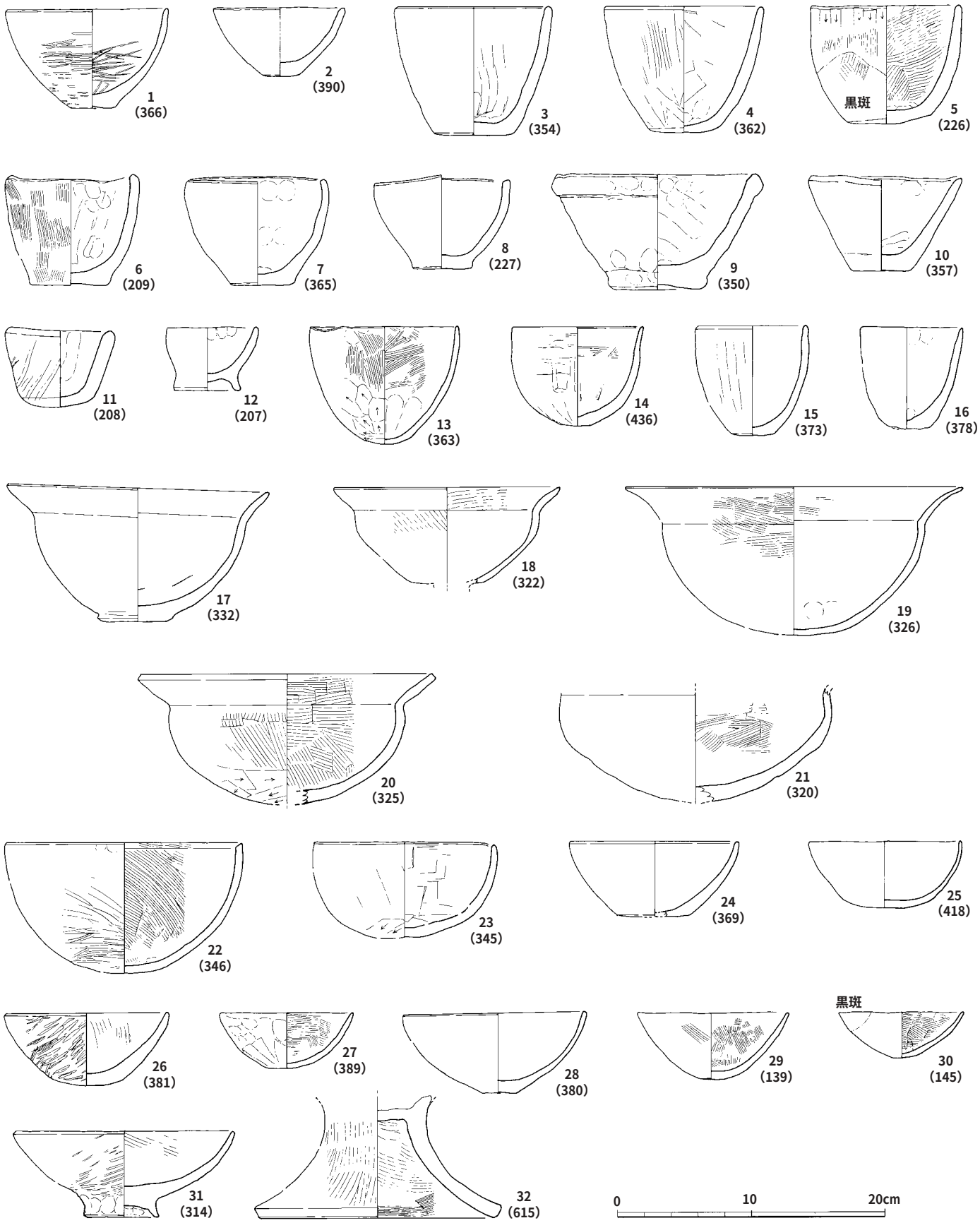
鉢（第 55・56 図、第 18・19 表、図版 29－５～14、30－１～17、31－１～21）

第 55・56 図は、最大径が口径にある鉢である。中には古墳時代初頭の土師器とされるものもあるが、終末期の弥生土器として扱った。

第 55 図１～８は、平底の底部から胴部がラッパ状に開き、さらに口縁部が「く」の字状に外傾する、深めの鉢である。３・５は、小型の甕の可能性もある。調整は、ハケの他に指押え・工具ナデを施したもの（２・４～７）もある。



第 55 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑦（S=1/4）



第 56 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑧（S=1/4）

第56図17～21は、内弯しながら大きく開く胴部に、さらに大きく外反する口縁部が付く、やや浅めの鉢である。底部は、丸底のもの（19～21）以外に、平底のもの（17）もある。また、18は底部の欠損状況から脚か台がつくものと考える。調整は、ハケ・ナデ・指押え・ケズリなどが施されている。

第55図９～16と第56図１～16・22～31は、無頸の鉢である。細部の形状をみると、多種多様である。

第55図９・10は、平底で、口縁端部を外につまみ上げた深めの鉢である。調整は、指押え・ナデが主体であり、10にはケズリが施されている。

第55図11・12は、胴部が内弯して口縁部がすぼまる形状を呈し、胴部上位に最大径を有する深めの鉢である。底部は、平底のもの（11）と扁平な丸底のもの（12）がある。調整は、内面にハケ・ナデ・指押え、外面にナデ・ケズリを施している。

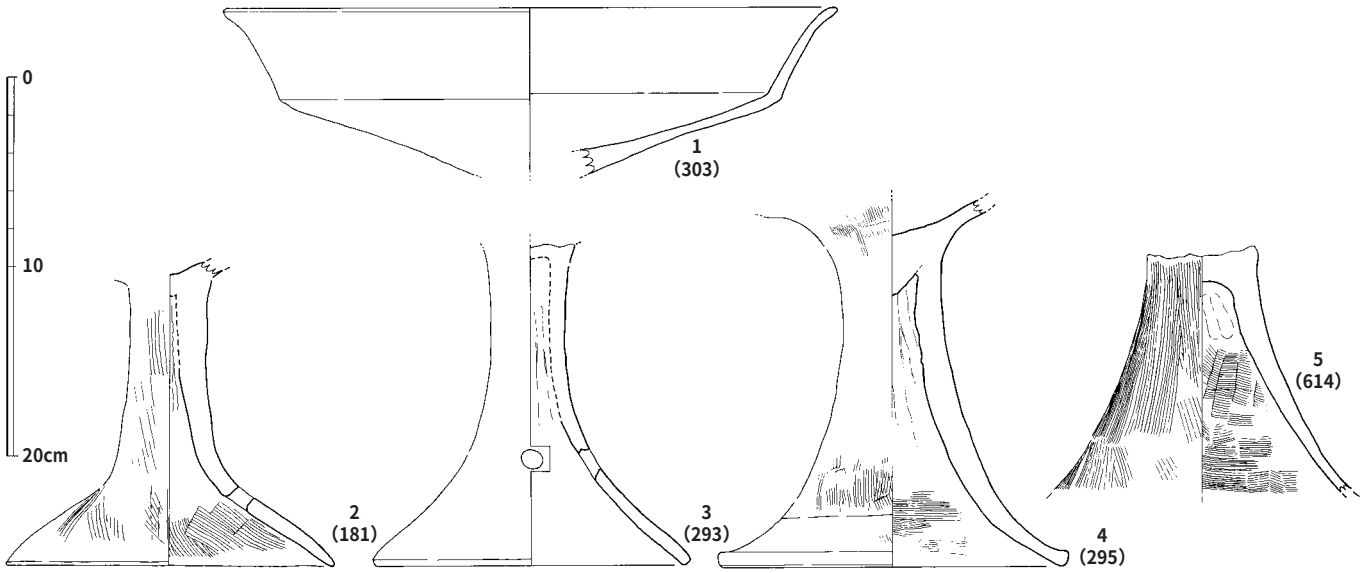
第55図13～16と第56図１～16は、口縁部に最大径を有するやや深めの鉢である。第56図９～11は胴部が直に外傾するのに対し、他は内弯しながら立ち上がっている。底部は、平底のもの（第56図１・６・10）、平底に近い扁平なレンズ状を呈したもの（第55図14～16、第56図２・３・７・８・15・16）、レンズ状のもの（第55図13、第56図４・５）丸底のもの（第56図11・13）がある。調整は、ハケ・ナデ・指押え・ケズリが主であるが、第56図１は外面にタタキ、内面にミガキが施されている。第56図９は、口縁部が玉縁状を呈し、底部が上底のものである。第56図12は、小型ながら高台が付いている。

第56図22～31は、椀形を呈する鉢である。底部は、丸底のもの（22・23・26・27）、平底のもの（24・28）、尖り気味の丸底のもの（29・30）、高台が付くもの（31）がある。調整は、ハケ・ナデ・ケズリが主であるが、26・31の外面にはタタキが施されている。

第56図32は、甕の台とも考えられる。

高坏（第57図１～４、第20表、図版31－22、32－１～３）

第57図１は、高坏の坏部である。坏部は、口縁部の外反があまり弯曲せずに長く伸びるものであるが、坏部下半の長さの約1/2程のものである。



第57図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑨（S=1/4）

第57図２～４は、高坏の脚部である。脚筒部はいずれも中空であるが、坏部との接合方法が２・３と４では異なっている。また、２・３は円形孔を有し裾部がやや内弯気味に拡がるのに対し、４の裾部は外弯しながら拡がり端部をつまみ出している。

台（第57図５）

第57図５は、接合部からそのまま外側へ開く形状から台もしくは脚部として扱った。

器台（第58～60図、第20・21表、図版32－５～15、33－１～14、34－１～13、35－１～15）

第58～60図は、器台である。

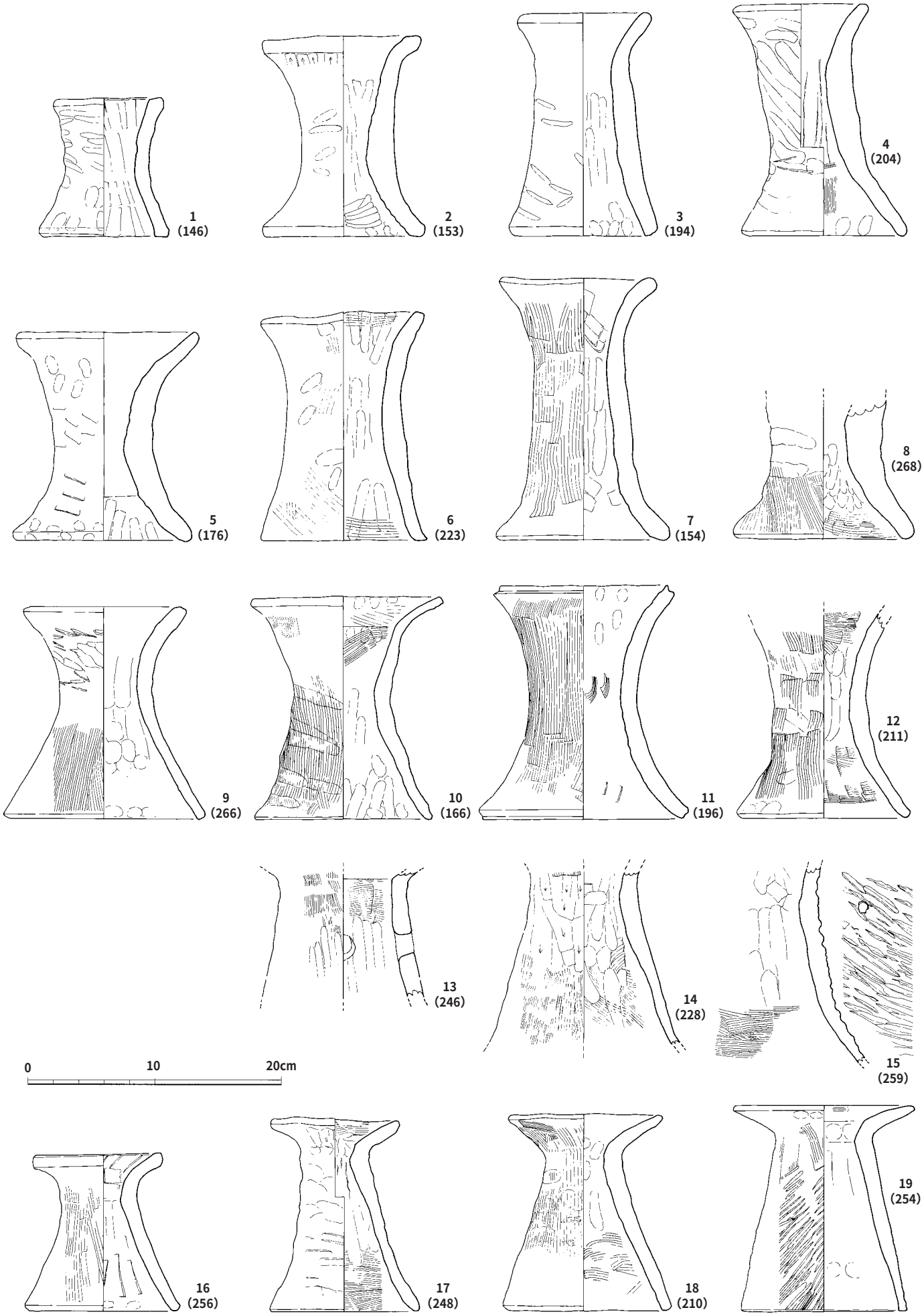
第58図１～12と第60図２は、筒部中程に最小径を有し、上下均等に開く器台である。第58図１と第60図２は、小型品である。調整は、ハケ・ナデ・指押えが施されている。

第58図13～19と第59図は、筒部の最小径が上位にあり、受け部と裾部の見分けが明瞭な器台である。大半は受け部径より裾部径の方が大きいが、逆に受け部径の方が大きいもの（第58図19、第59図６）もある。受け部の端部は、丸くおさめたものや面を有するものの他に、端部をつまみ上げて側面に凹線をめぐらしたもの（第59図14）や、側面に刻み目を施したもの（第59図16）もある。調整は、ハケ・ナデ・指押えが主であるが、外面にタタキを施したもの（第58図19、第59図３・７・11・13）もある。

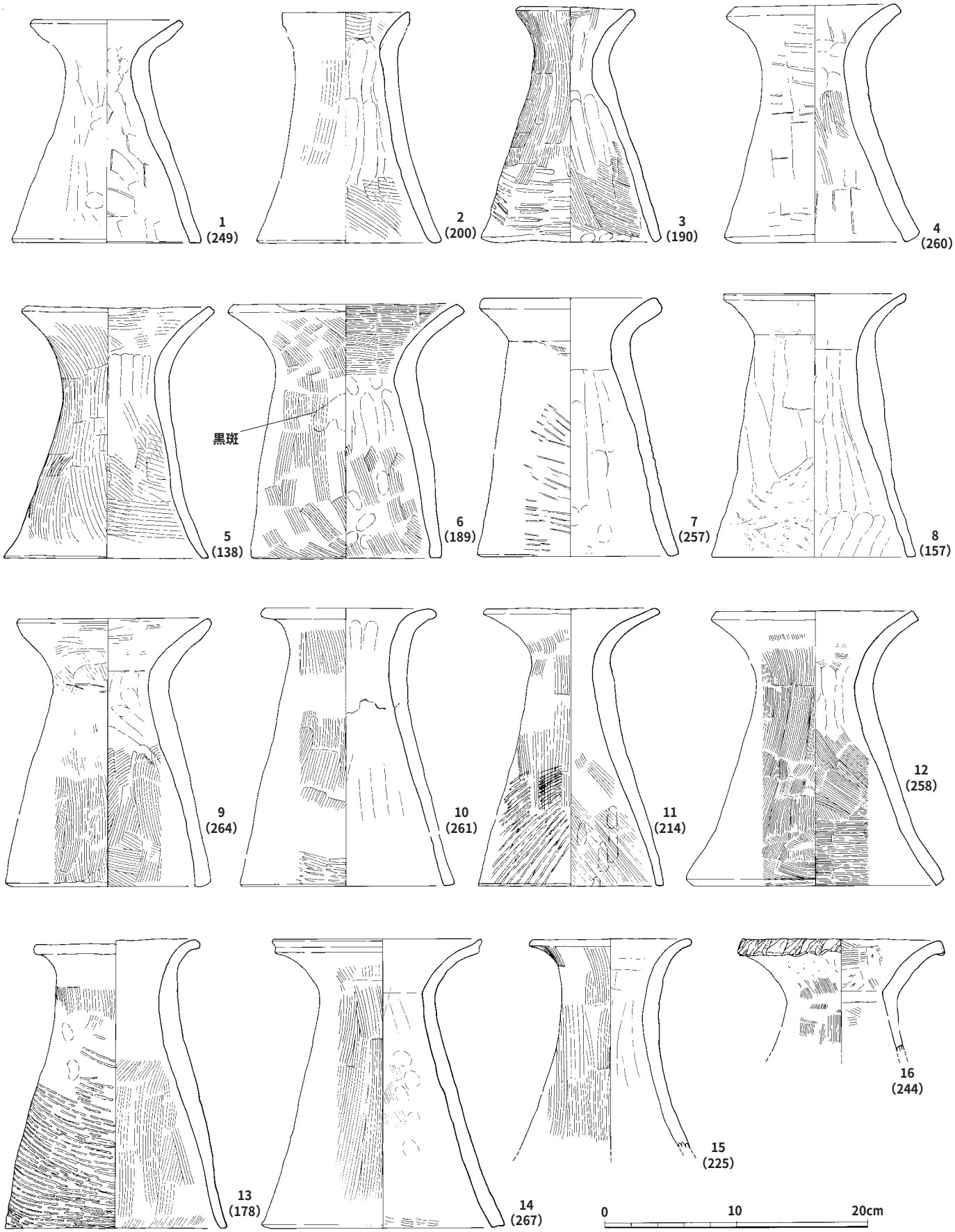
第58図13～15は器台として扱ったが、確定できない。13の筒部上位には、円形孔が穿たれている。

第60図３～８は、受け部が内傾する器台である。３・４は端部が短く内側に折れたものであるが、５～８の受け部は袋状口縁を呈している。調整は、ハケ・ナデ・指押えの他に、外面にタタキを施したもの（３）もある。

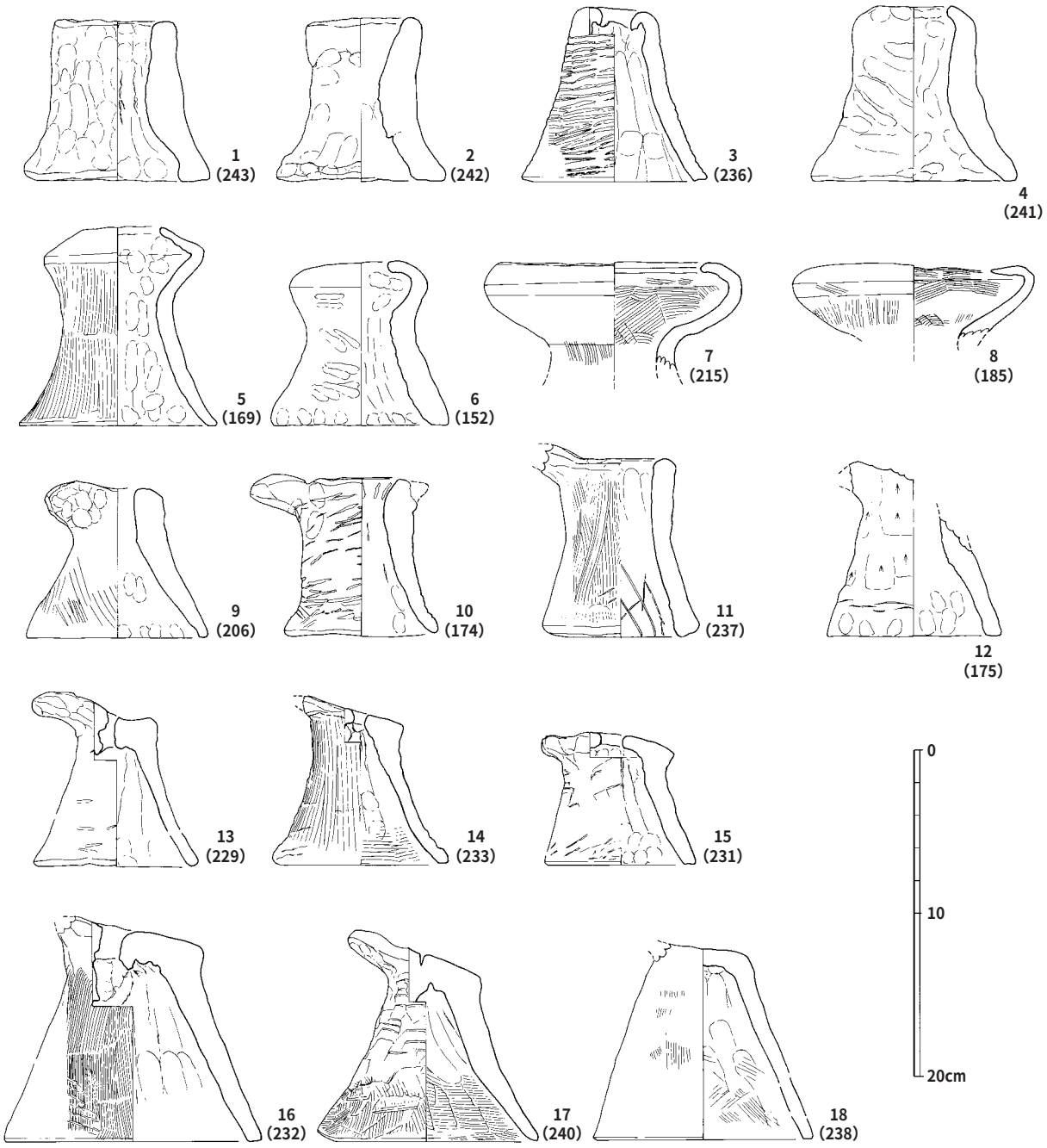
第60図９～18は、受け部の一端に突起物がつくもので、所謂「沓形器台」と呼ばれているものである。９～11は、受け部が水平で、筒状に上下とも開放されているものである。13～17は、斜めの受け部面を呈しており、単体で他の器を受け難い形状をしている。これは、本来複数で器を支える支脚と解すべきである。13～16は受け部面に孔を有しているが、17は途中で切れており貫通していない。調整は、ハケ・ナデ・指押え・ケズリである。



第 58 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑩（S=1/4）

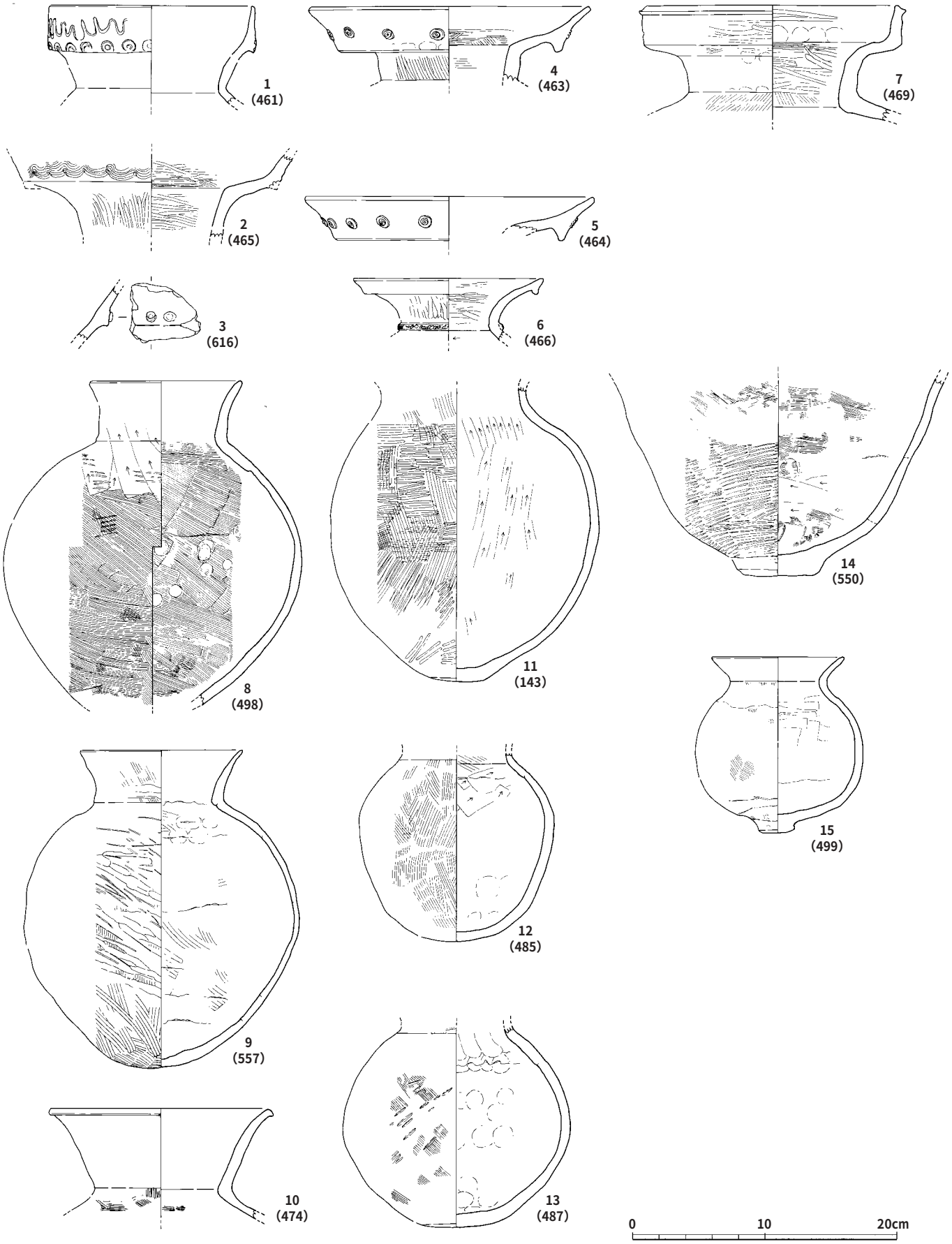


第 59 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑪（S=1/4）



第 60 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑫（S=1/4）

次に、**土師器**としたものは、古墳時代初頭から前期のものである。特に古墳時代初頭とする土師器については、先述した弥生時代終末期の弥生土器と共伴するものであり、この時代区分が良いか自信がない。ここでは、外来系の土器以降を古墳時代の土師器として扱うことにした。



第 61 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑬（S=1/4）

二重口縁壷（第61図１～７、第21表、図版35－16・17、36－１～５）

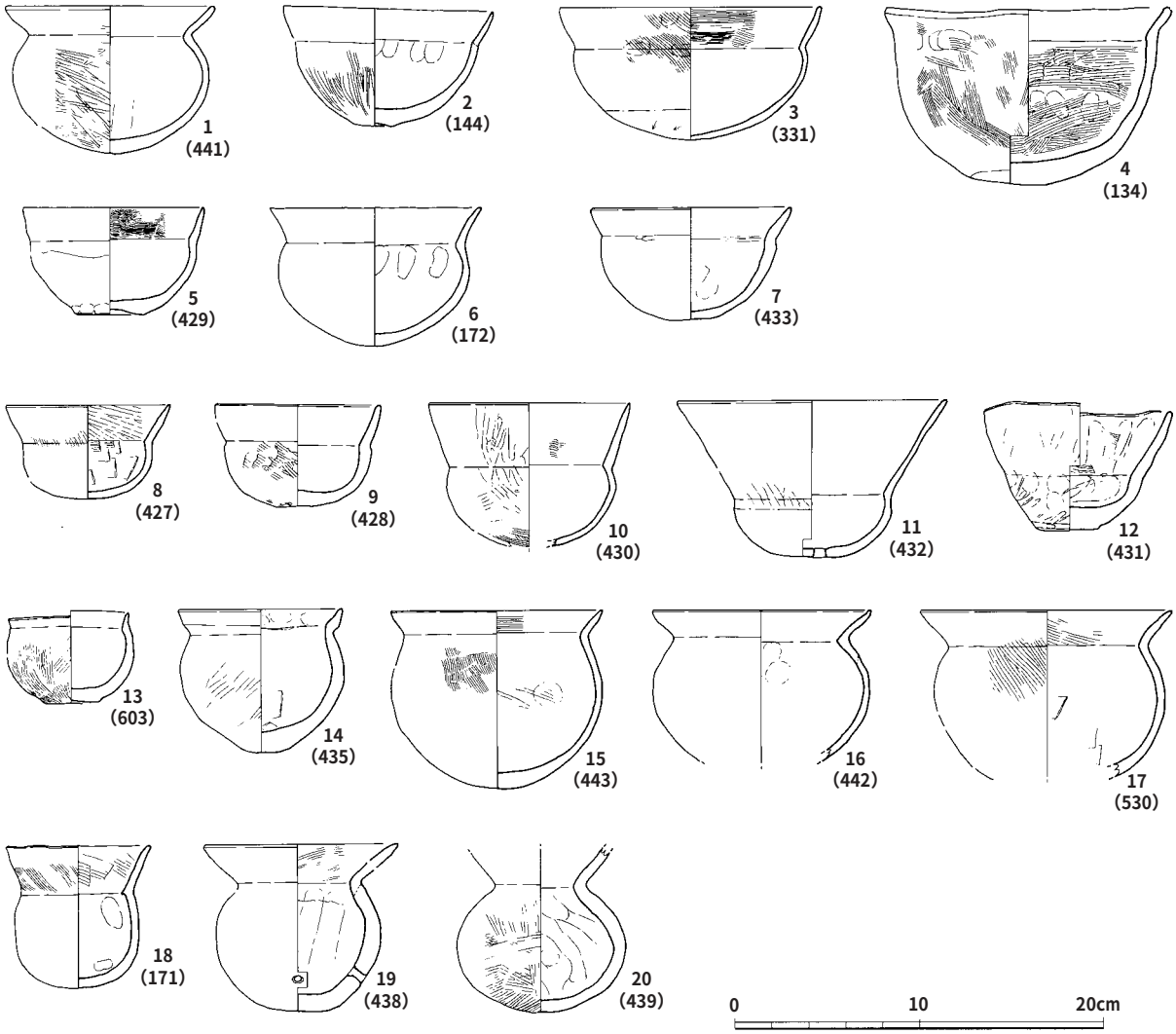
第 61 図１～７は、二重口縁壷の口縁部～頸部である。１～６は近畿（庄内）系であり、二重口縁部外面に円形浮文（１・３～５）や波状文（１・２）を施したり、頸部に刻目突帯をめぐらして加飾している。１の口縁部は直に立ち上っているが、２～６は大きく外反している。調整は、ナデ・ミガキが主であるが、ハケを施したもの（４・７）もある。

広口壷（第61図８～10、第21表、図版36－６～８）

第61図８～10は、近畿系の広口壷である。底部は、９が丸底であるが、他は不明である。調整は、ハケ・ナデが主であるが、外面にタタキ（８・９）やミガキ（９）を施したものもある。

壷（第61図11～15、第21・22表、図版36－９～13）

第61図11～15は、壷である。11～14は口頸部が欠損しているため細分できないが、一括して壷とする。特に、11は広口壷の可能性もある。底部は、丸底のもの（12）、扁平なレンズ状を呈するもの（11・13）の他に、近畿（第Ⅴ様式）系の突出した形状のもの（14・15）もある。調整は、外面にタタキ・ハケ（11・13・14）を、内面にケズリ（11・12）・工具ナデ（14・15）・ハケ（14）・指押え（13）が施されている。



第62図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑭（S=1/4）

小型丸底壷（第 62 図８～12・18～20、第 22 表、図版 37－２～６・12～14）

第 62 図８～12・18～20 は、小型丸底壷である。

８～12 は、近畿系のものと考える。8～10 の口頸部の深さと体部の深さはほぼ同じであるが、11・12 は口頸部が長く深い。12 は作りが粗雑で平底であるが、全体的に 11 と同類と考えた。調整は、ハケ・ナデ・ミガキである。なお、11 の底部には１ヶ所孔が穿たれている。

18～20 は、在地系のものと考える。18 は頸部のしまりが弱く、深めの鉢とも言える。また、19 は胴部に下位１ヶ所に孔が穿たれており、瑟とも言える。調整は、ハケ・ナデである。

鉢（第 62 図１～７・13～17、第 22 表、図版 36－14～19、37－１・７～11）

第 62 図１～７・13～17 は、「く」の字状に外反する口縁部が付く、やや深めの鉢である。口縁部は、内湾しながら開くもの（１～５・14）と、単に外反するもの（６・13・15～17）とがある。底部は、丸底のもの（３・４・15）、やや尖り気味の丸底のもの（１・６・14）、やや平底のもの（７）の他に、上底のもの（２・５・13）もある。調整は、ハケ・ナデが多いが、外面にミガキを施したもの（２）もある。

甕（第 63 図・第 64 図１、第 22・23 表、図版 37－15～17、38－１～15）

第 63 図と第 64 図１は、口縁部が「く」の字状に外反する甕である。

第 63 図１・２は、胴部最大径が下位に下りてズングリとした長胴の甕であり、在地系と考える。なお、２は近畿（第Ⅴ様式）系のタタキを施した折衷型と思われる。調整は、外面にタタキ・ナデを、内面にハケ・ナデを施している。

第 63 図３・６・10 は、近畿（第Ⅴ様式）系の甕である。３は小型のもので、底部はやや尖り気味である。調整は、外面にタタキを、内面に工具ナデを施している。

第 63 図４・５・７・11 は、近畿（庄内）系の甕である。外面のタタキは細く、内面にはケズリが施されている。11 の口縁端部はわずかにつまみ上げており、庄内甕であろう。

第 63 図 13～17 は、近畿（布留）系の甕である。内湾気味に開く口縁部は、12 の外傾度は強いが、13・14 はやや立ち気味である。調整は、外面にハケを、内面にケズリを施している。特に、外面上位のハケは横位であり、13～17 では波状文を描いており、典型的な布留甕である。

なお、８・９も近畿系の甕と考えるが、定かではない。

第 64 図１は、頸部のしまりが弱く深めの鉢とも考えられるが、扁平気味のレンズ状を呈する底部の甕として扱った。内面調整をケズリと考えたが、工具ナデであれば終末期の弥生土器とも考えられる。

鉢（第 64 図２～19、第 23 表、図版 38－16～18、39－１～11・13～16）

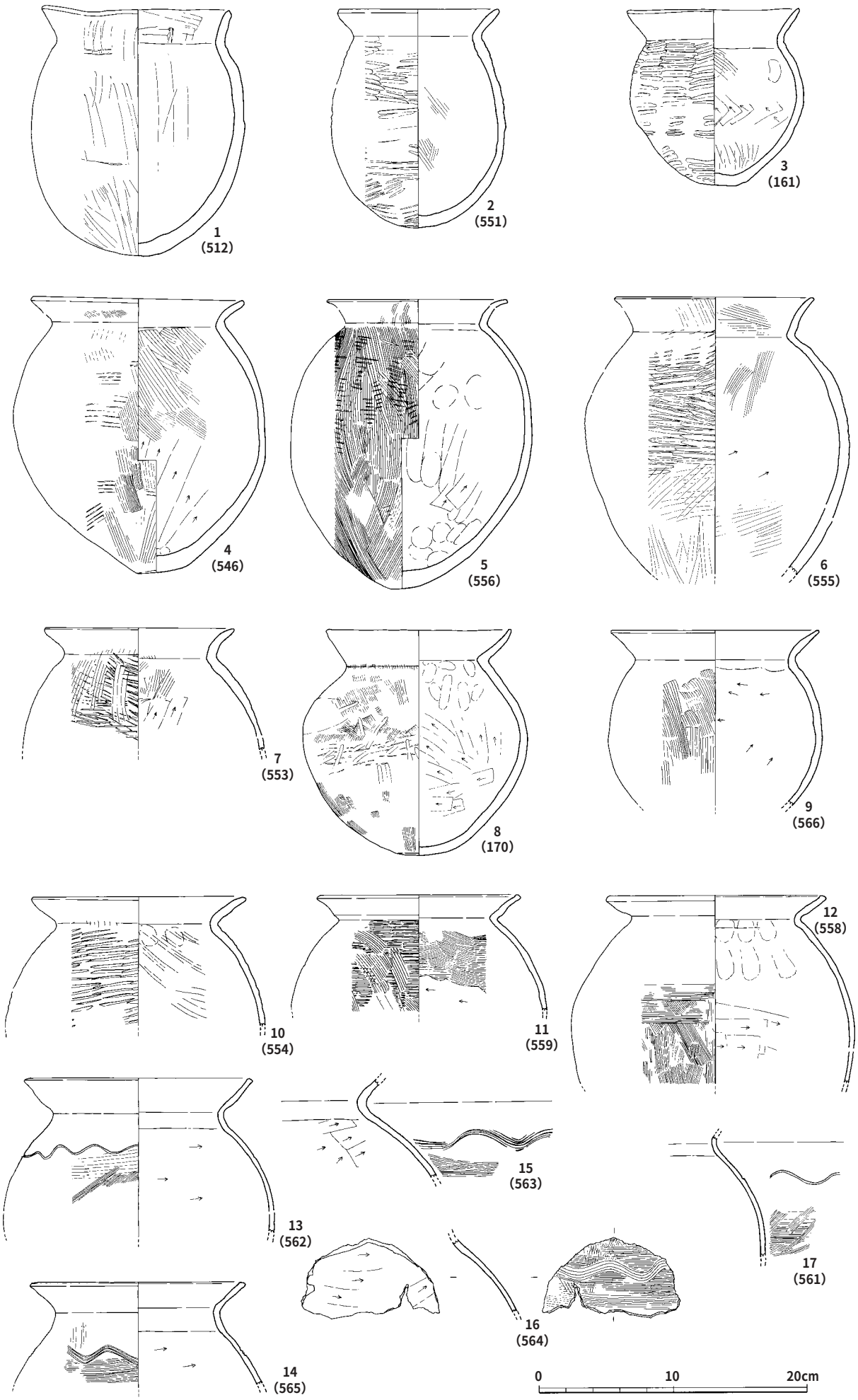
第 64 図２は、椀形の体部に大きく外反する口縁部が付き、口縁端部をつまみ上げた近畿系の鉢である。調整は、外面にハケ・ナデ・ケズリを、内面にハケ・ナデを施している。

第 64 図３～19 は、椀形を呈する鉢である。大半（３～13）が丸底の浅めの椀形であるが、やや尖り気味のもの（14～16）、平底のもの（17～19）もある。

台付鉢（第 64 図 20～32、第 23 表、図版 39－12・17～21、40－１～７）

第 64 図 20～32 は、台付きの鉢であるが、高坏とされるもの（25）も含んでいる。

20 は、緩く外反する口縁部が付く鉢に、内弯して拡がる台が付くものである。台部の４ヶ所に円形孔が穿たれている。調整は、鉢内外面と台外面にミガキを、台内面にハケ・ナデが施されている。

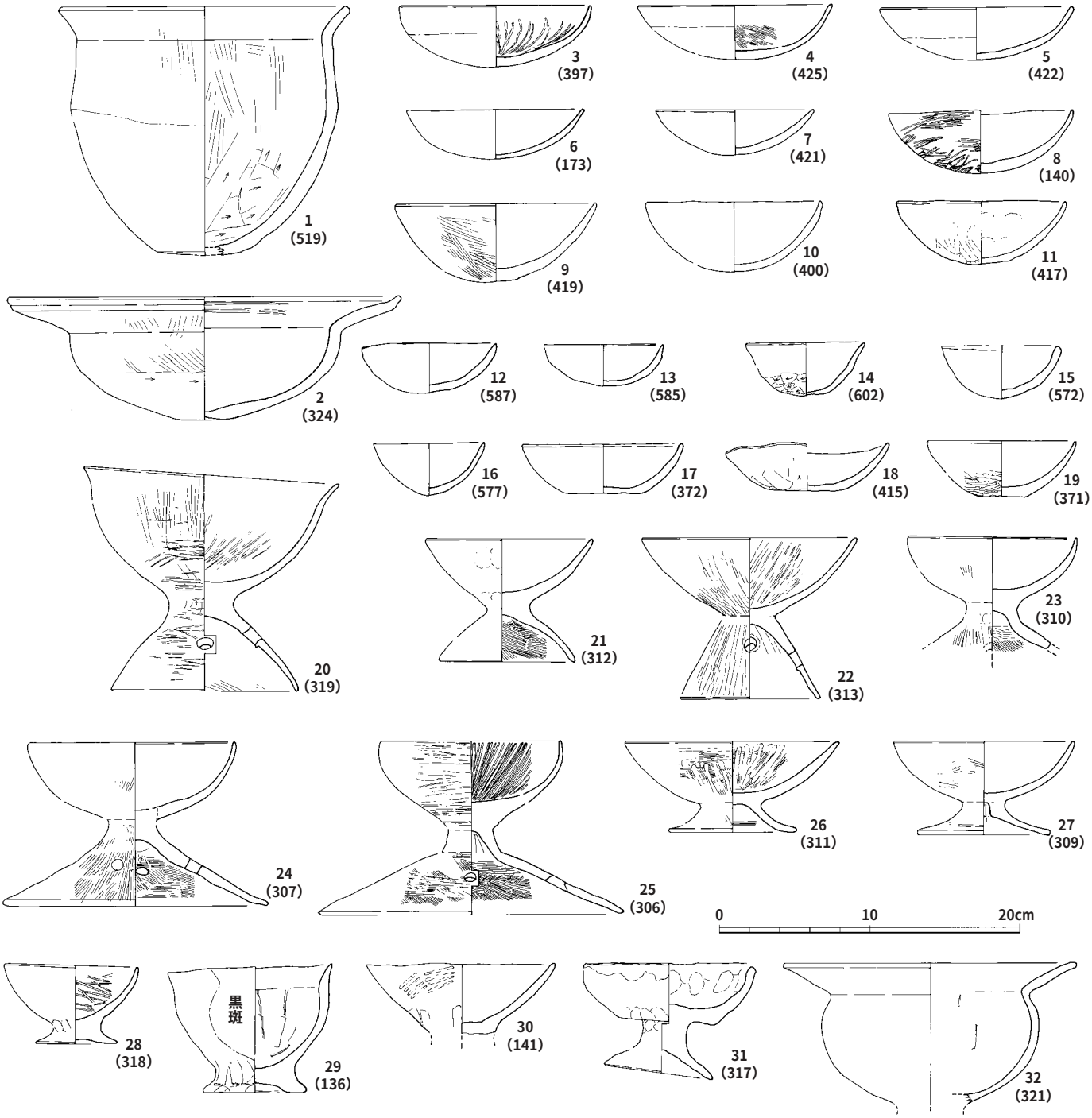


第 63 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑮（S=1/4）

21・22 は、やや尖り気味の底部を呈する椀形の鉢に台が付いたものである。 22 は内弯して拡がる台の４ヶ所に円形孔が穿たれている。22 の調整は、20 同様、外面にミガキが施されている。

23～25 は、丸底の椀形の鉢に、短い脚から大きく拡がる台が付いたものであり、台の４ヶ所に円形孔が穿たれている。調整は、23・24 がハケ・ナデであるのに対し、25 は内外面ともミガキが施されて丁寧な作りである。また、25 は、椀形の内弯度が強く、脚・台もしっかりしており、近畿系高坏とされるものである。

26・27 は、山陰系の台付鉢である。調整は、26 にミガキが施されているのに対し、27 はハケ・ナ



第 64 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑯（S=1/4）

デである。

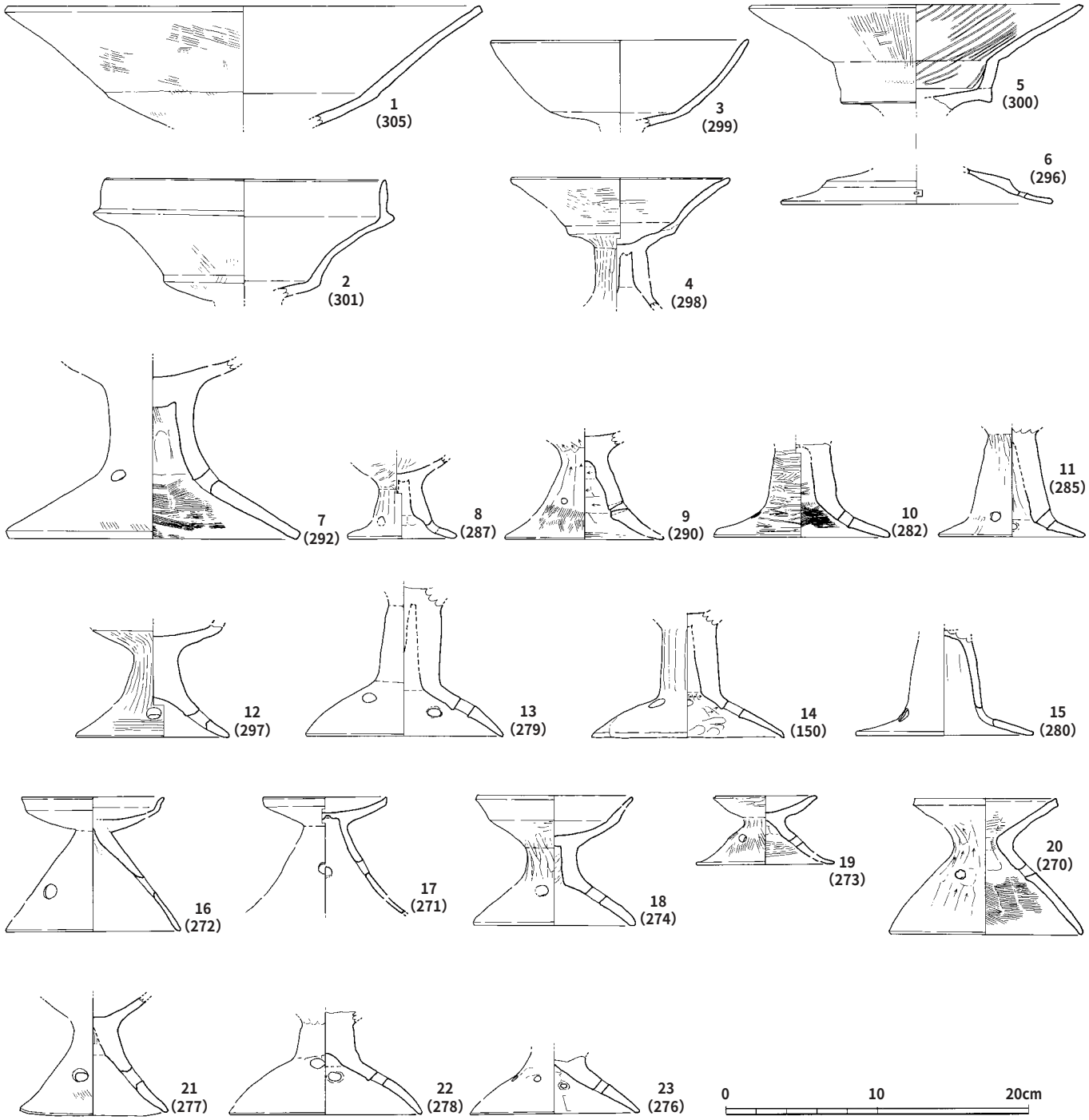
28～31 は、台付鉢を真似た手捏ね土器である。

32 は、底部の欠損状況から台付鉢と考える。調整は、内外面ともナデである。

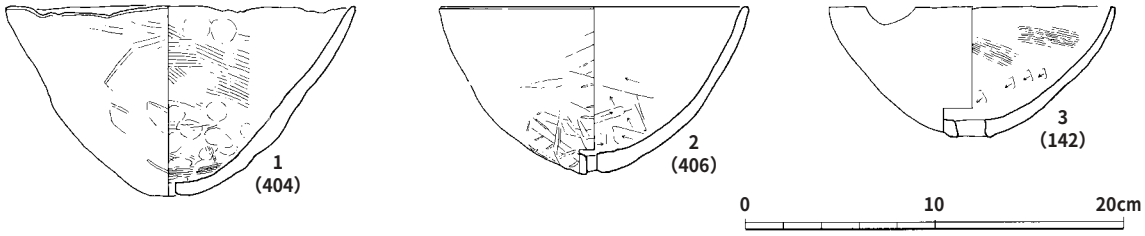
高坏（第 65 図１～15・22・23、第 23・24 表、図版 40－８～21、41－１・８・９）

第 65 図１～23 は、高坏の坏部（１～５）と脚裾部（６～15・22・23）である。

１は、在地系であるが、他は全て外来系のものである。２・５・６は吉備系のものであり、他は近畿系である。特に、５・６は、坏部と脚裾部とも有段を呈する高坏である。９の脚部は単にラッ



第 65 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑰（S=1/4）



第 66 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑱（S=1/4）

パ状に拡がるのに対し、他は全て筒部と裾部で構成されている。大半の筒部は中空であるが、12 の筒部は中実である。全ての裾部には、複数の円形孔が穿たれている。15 の筒部はエンタシス状を呈しており、布留系のものである。

器台（第 65 図 16～20、第 24 表、図版 41－２～６）

第 65 図 16～20 は、外来系の器台である。

全ての台部に円形孔があり、23 には６ヶ所穿たれている。16・17 は皿形の受部にラッパ状に拡がる台が付くものであり、庄内系器台である。20 は、受部と台部が筒状に貫通しており、近畿系のものである。

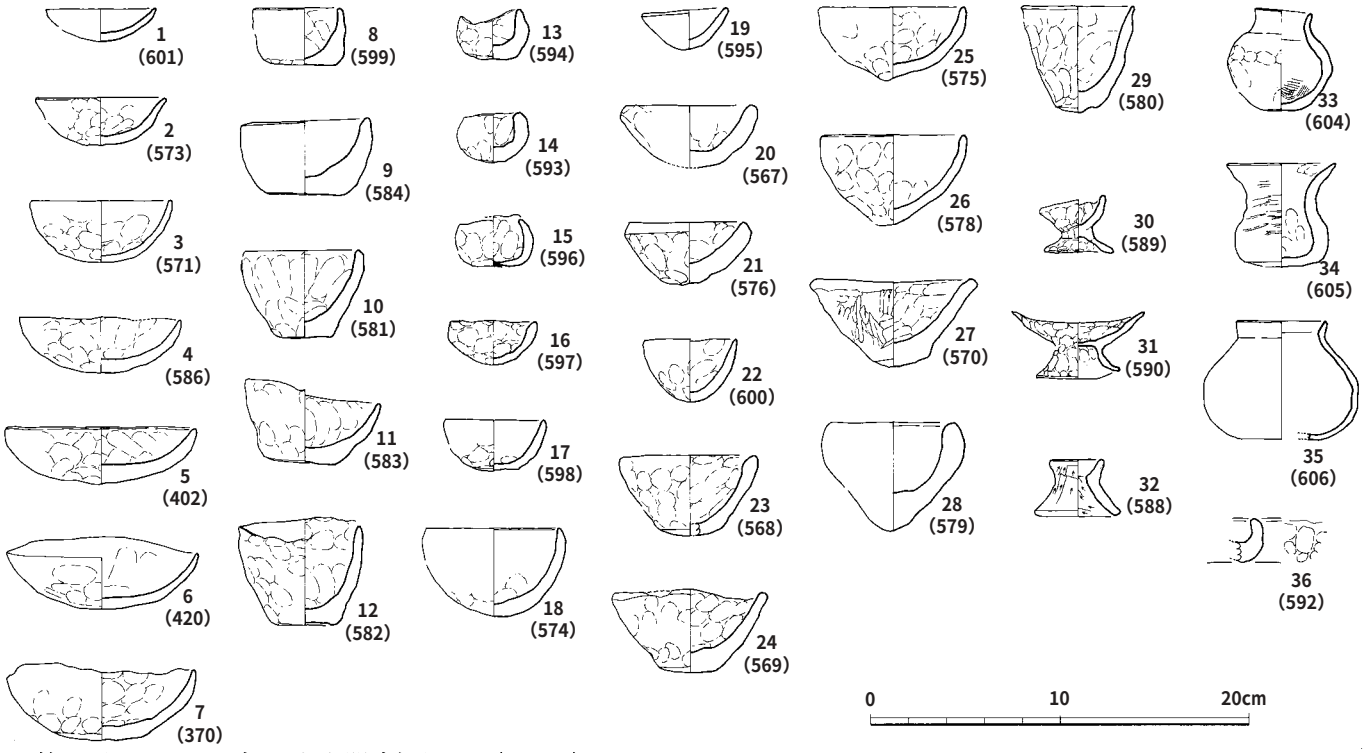
甑（第 66 図、第 24 表、図版 41－10～12）

第 66 図１～３は、尖り底１ヶ所に孔を穿った、在地系の甑である。調整は、ハケ・ナデが主であるが、２・３の内面にはケズリが施されている。

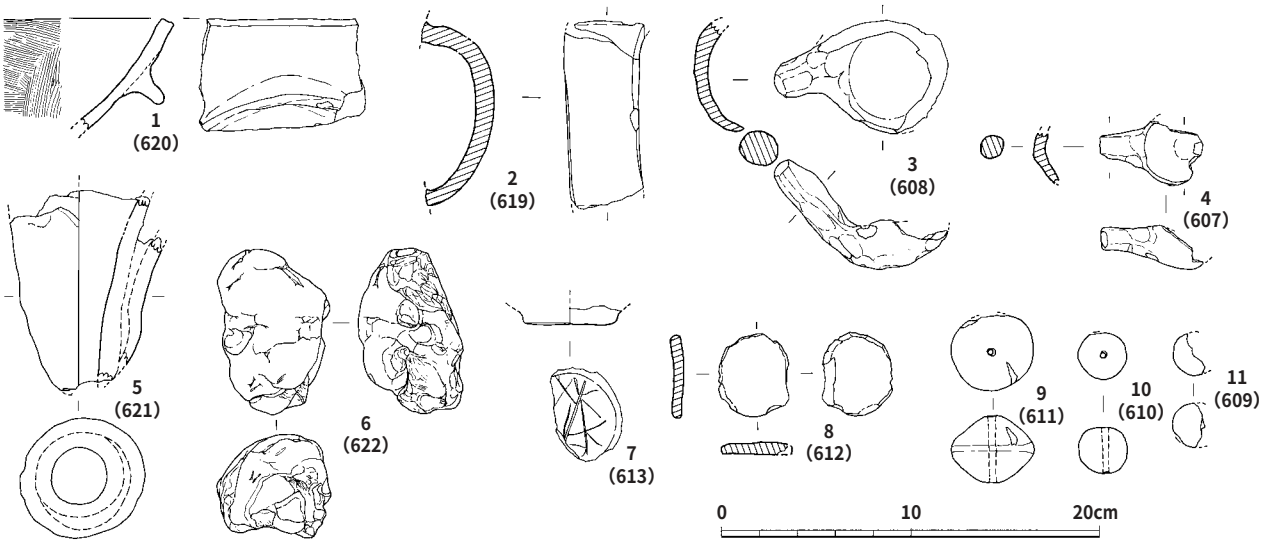
手捏ね土器（第 67 図、第 24・25 表、図版 41－13～21、42－１～22、43－１～５）

第 67 図１～36 は、多種多様の手捏ね土器である。

１～29 は、鉢形を呈するものである。１～７は浅めの丸底碗形、８～12 は平底、13～18 は深めの丸底、19～22・25～28 は尖り底、23・24 は扁平な尖り底を呈しており、29 は深鉢である。



第 67 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑲（S=1/4）



第 68 図　Ⅱ区谷部出土土器実測図⑳（S=1/4）

30・31 は、台付鉢を呈するものである。

32 は、器台形を呈するものである。

33～35 は、壷形を呈するものである。

土製品（第 68 図、第 25 表、図版 43－６～16）

第 68 図１～11 は、土製品である。

１は、胴部に円弧状に貼付された突帯を有する鉢形土器と思えるが、器種不明である。調整は、内面ハケ、外面ナデである。

２は、ジョッキ形土器と考える。調整は、内外面ともナデである。

３・４は、匙形土製品である。大型の３は柄が身に対して角度をもっているが、小型の４は柄と身はほぼ真っ直ぐである。

５は、先細りの２つの筒が入れ子になって癒着したものである。形状が鞴の羽口に似るが、熱を受けた形跡も無く、不明である。調整は、ナデである。

６は、粘土塊である。手で握り固めたものであり、指と爪跡が残っている。

７は、土器の底部破片である。片面に葉脈痕がある。

８は、土製円盤である。土器片の再加工品であり、周囲を打ち欠いて調整している。

９～11 は、有孔土玉である。９は算盤玉形を呈し、10・11 は丸玉である。

第 17 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表①

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
49－ 1	Ⅱ	7D	二重口縁壷	(14.20)		(6.50)	内.橙 外.浅黄橙	2.0mm以下の雲母・赤褐色粒・白色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ハケ	外.黒斑	457
49－ 2	Ⅱ	5CNo18	二重口縁壷	19.80	底径10.40 突帯部胴部径31.0	40.50	内.明赤褐 外.橙	0.1～4.5mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石を少量含む	不良	内.ナデ・ハケ・ナデ 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・ナデ・ハケ	突帯・ 底部穿孔有り	151
49－ 3	Ⅱ	7C	二重口縁壷	12.20		(8.50)	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの角閃石を少量含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑	450
49－ 4	Ⅱ	7C	二重口縁壷	(14.00)	底径(10.10) 胴部径(28.10)	(42.60)	内.浅黄橙・にぶい黄橙 外.にぶい黄橙	0.2～2.0mmの砂粒・長石・石英・角閃石を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ？	外.黒斑 突帯有り	455
49－ 5	Ⅱ	8ENo69	二重口縁壷	10.20	底径(9.60) 胴部径18.20	(23.60)	内.明黄褐 外.浅黄橙	0.5～3.0mmの石英を多量,1.0mm以下の長石・雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ハケ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑 突帯有り	201
49－ 6	Ⅱ	6C	二重口縁壷	17.90		(8.80)	内外.にぶい黄橙	2.0mm以下の雲母・赤褐色粒・白色粒を多量に含む	良	内.ナデ・指頭圧痕・ハケ 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ	内.黒斑	452
49－ 7	Ⅱ	8E	二重口縁壷	(19.00)		(10.20)	内.橙・にぶい橙 外.橙	3.0mm以下の砂粒を多量に含む	良	内.指頭圧痕・ハケ？ 外.ハケ	外.黒斑	448
49－ 8	Ⅱ	5C	二重口縁壷	(23.40)	胴部径 (42.60)	(36.30)	内.浅黄橙 外.浅黄橙・にぶい黄橙	0.2～2.0mmの砂粒を多量,石英・雲母を少量含む	良	内.ハケ→ナデ・ハケ 外.ハケ→ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・ナデ・ハケ	外.黒斑 突帯(2) 浮文	460
49－ 8	Ⅱ	5C	二重口縁壷 (底部)		11.50	(25.00)	内.浅黄橙 外.浅黄橙・にぶい黄橙	0.2～2.0mmの砂粒を多量,石英・雲母を少量含む	良	内.指圧痕→ハケ 外.ハケ・ナデ		460
50－ 1	Ⅱ	7C	二重口縁壷	22.50		(14.90)	内.橙 外.橙・にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒を含む	良	内.指頭圧痕・ハケ 外.ハケ	外.黒斑 突帯有り	449
50－ 2	Ⅱ	6CNo32	二重口縁壷	20.90		(15.80)	内.橙 外.にぶい黄橙	0.2～4.0mmの長石・石英を多少,2.0mm以下の雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・ナデ	外.黒斑 外線刻？ 突帯有り	165
50－ 3	Ⅱ	7CNo89	二重口縁壷	(25.30)		(13.60)	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	2.0mm以下の長石・石英を多量,0.5mm以下の雲母を少量含む	良	内.ナデ・ハケ→指圧痕 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・指頭圧痕・ハケ・ナデ	突帯有り	221
50－ 4	Ⅱ	6C	二重口縁壷	19.20		(13.30)	内外.にぶい黄橙	3.0mm以下の長石・石英を多量,2.5mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕→ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ	外.黒斑	447
50－ 5	Ⅱ	6C	二重口縁壷	17.30		(12.20)	内外.浅黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ	外波状文・ 突帯有り (刻目)	454
50－ 6	Ⅱ	7C	二重口縁壷？			(19.70)	内.にぶい橙・にぶい黄橙 外.橙・浅黄橙	3.0mm以下の砂粒を多量,1.0mmの雲母を少量,0.5～1.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.ナデ？・ナデ・ハケ 外.ハケ？・ナデ・ハケ	外線刻 突帯有り	459
50－ 7	Ⅱ	6C	二重口縁壷	(17.40)		(24.50)	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	1.0mm以下の雲母を少量,3.0mm以下の砂粒・角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕・ハケ 外.ナデ・ハケ・タタキ→ハケ・ナデ	外.黒斑・赤彩？突帯有り (刻目)	453
50－ 8	Ⅱ	7CNo81	壷		11.60	(15.80)	内外.にぶい黄橙	0.1～4.5mmの長石・石英を多量,2.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ハケ→ナデ・ナデ・指ナデ・ハケ 外.タタキ・ハケ→ナデ・ケズリ		213
51－ 1	Ⅱ	7D	甕	(28.00)		(20.80)	内.にぶい黄橙・灰黄褐 外.にぶい黄橙	0.2～2.0mmの砂粒を多量,石英・雲母・角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ 外.ナデ・ハケ	突帯有り	541
51－ 2	Ⅱ	6C	壷	15.20	胴部径30.00	33.80	内.明黄褐・褐灰 外.橙	2.0mm以下の砂粒を含む	良	内.ナデ？・ハケ 外.ナデ？・ハケ→ナデ・ハケ→ナデ？	外.黒斑	501
51－ 3	Ⅱ	5C	甕		胴部径 (25.40)	27.75	内.橙 外.にぶい橙・にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒・小石粒・石英・角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.ハケ・ハケ→指ナデ・ナデ 外.タタキ→ハケ・ハケ・ナデ	内外.煤 外.黒斑	547
51－ 4	Ⅱ	6C	壷	14.40	胴部径25.80	(30.30)	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙・にぶい黄橙	3.0mm以下の砂粒・石英・角閃石を含む	良	内.ナデ・ハケ・ハケ→ナデ 外.ナデ・タタキ→ハケ	外.黒斑	500
52－ 1	Ⅱ	7C	長頸壷	8.80	胴部径 (16.55)	(23.40)	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の角閃石を含む	良	内.ナデ・ハケ→指ナデ・指頭圧痕・ナデ 外.工具ナデ？・ハケ→ナデ・工具ナデ	内外.黒斑	478
52－ 2	Ⅱ	6CNo44	長頸壷	8.20	底径6.40 胴部径13.50	16.70	内外.橙	0.5～2.0mmの石英を多量,0.3～2.0mmの長石を多少,1.5mm以下の雲母・輝石・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ	外.黒斑	177
52－ 3	Ⅱ	7CNo90	長頸壷？		底径3.20 胴部径11.50	7.40	内.にぶい褐 外.にぶい黄橙	0.1～3.5mmの長石・石英を多量,2.5mm以下の雲母・角閃石を少量含む	良	内.指頭圧痕→ナデ		222
52－ 4	Ⅱ	6C	直口壷	10.10		(8.90)	内外.浅黄橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ→ミガキ・指圧痕→ハケ 外.ハケ→ナデ→ミガキ・タタキ→ナデ→ミガキ		494
52－ 5	Ⅱ	5C	直口壷	(10.40)		(11.00)	内外.にぶい橙	2.0mm以下の砂粒と赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ミガキ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ→ミガキ・ハケ→ミガキ		495
52－ 6	Ⅱ	5C	無頸壷	(9.80)	底径 (5.60) 胴部径13.70	11.10	内外.にぶい黄橙	0.1～2.5mmの石英を多量,2.0mm以下の長石・雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕→ハケ・ハケ 外.ナデ・タタキ→ナデ・タタキ・ケズリ		483
52－ 7	Ⅱ	6C	無頸壷	(8.80)	底径(3.50) 胴部径(11.20)	7.60	内外.橙	1.0～6.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの赤褐色粒を少量含む	良	内.ナデ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ・ミガキ・ケズリ・ナデ		481
52－ 8	Ⅱ	6C	無頸壷		胴部径10.20	6.05	内外.にぶい黄橙	0.5～1.0mmの砂粒を少量,1.0～2.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ	内外.黒斑	482
52－ 9	Ⅱ	6CNo60	台付無頸壷	11.70	胴部径16.95	(7.10)	内外.にぶい黄橙	0.1～5.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内壷.ナデ・ハケ→ナデ・指圧痕→ハケ 外壷.ナデ・ミガキ・ハケ→ミガキ・ハケ	外.黒斑	192
52－10	Ⅱ	6CNo47	短頸壷	16.80	底径6.70 胴部径20.90	18.60	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	1.0mm以下の雲母・赤色粒を少量,0.1～5.5mmの長石・石英を含む	普通	内外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ	内.炭化物？ 付着 穿孔有り	180
52－11	Ⅱ	6CNo29	短頸壷	11.30	底径6.20 胴部径15.00	12.90	内外.橙	1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量,0.1～4.0mmの長石・石英を含む	普通	内.ナデ・ハケ・ナデ・指ナデ 外.ナデ・ケズリ？・ケズリ→ナデ		162
52－12	Ⅱ	6CNo61	壷	(10.80)	底径5.00 胴部径16.60	15.20	内.橙 外.明黄橙	0.1～3.9mmの長石を多量,0.2～2.3mmの石英を多少,1.2mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指圧痕→ハケ・ハケ・指頭圧痕→ハケ 外.ナデ	外.黒変	193
52－13	Ⅱ	7D	壷	(13.60)	胴部径 (17.20)	16.60	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母・角閃石を少量含む	良	内.ミガキ 外.ナデ	内外.黒斑	488
52－14	Ⅱ	6C	鉢	(12.00)		(10.60)	内外.にぶい黄橙	0.5～1.0mmの赤褐色粒を少量,0.5～1.0mmの白色粒を含む	良	内.工具ナデ 外.ナデ・ミガキ	外.黒斑	341
52－15	Ⅱ	5C	鉢	15.10	底径7.30 胴部径18.80	(12.40)	内外.浅黄橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・工具ナデ	外.黒斑	445

第18表　Ⅱ区谷部出土土器観察表②

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
52−16	Ⅱ	7C	壷	(7.80)	底径(2.60) 胴部径10.90	9.20	内外.灰黄	0.5～2.3mmの砂粒を多量,0.5mmの雲母を含む	良	内.ナデ？・指圧痕→ナデ 外.ナデ・ケズリ・ナデ	外.黒斑	440
52−17	Ⅱ	6CNo25	壷	14.30	胴部径16.90	14.00	内外.橙色	0.5～4.0mmの石英を多量,0.2～3.0mmの長石を多少,3.5mm以下の雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指圧痕→ハケ・ハケ・指頭圧痕→ハケ 外.ナデ・ハケ	外.煤	158
52−18	Ⅱ	7C	壷	(10.10)	底径6.30 胴部径14.50	14.50	内外.灰白	0.5～2.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの赤褐色粒を含む	良	内外.ナデ	外.黒斑	444
52−19	Ⅱ	6C	壷	(16.70)	底径(6.90) 胴部径(18.70)	15.30	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・指圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ		492
52−20	Ⅱ	6CNo34	鉢	16.45	底径5.90 胴部径16.60	13.80	内.浅黄橙 外.黄橙	0.1～2.2mmの長石を多量,0.4～3.1mmの石英を多少,1.0mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・指ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・ハケ→ケズリ・ケズリ	外.黒斑	167
52−21	Ⅱ	7D	鉢	(17.10)	(5.30)	12.10	内.にぶい黄橙 外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ・ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑	334
52−22	Ⅱ	7C	甕	12.90	底径5.70 胴部径12.80	11.85	内外.にぶい黄橙	0.5～4.0mmの砂粒を多量,0.5～2.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.指圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ？ナデ	外.黒斑	528
52−23	Ⅱ	6C	甕	(12.40)	胴部径12.50	(11.00)	内外.浅黄橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ→ナデ→ミガキ 外.ナデ・ハケ→ミガキ・ミガキ	外.黒斑	529
52−24	Ⅱ	7DNo66	甕	(16.00)	底径6.85 胴部径17.75	(17.90)	内.明黄褐 外.浅橙	0.1～3.5mmの石英を多量,0.1～2.0mmの長石を多少,0.4mm以下の雲母・輝石を少量含む	良	内.ナデ・指頭圧痕→ハケ・ハケ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ		198
53− 1	Ⅱ	7C	甕	(48.20)		(9.80)	内.にぶい橙・浅黄橙 外.にぶい橙・にぶい黄橙	0.2～1.5mmの砂粒を多量,雲母・角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ→ナデ	突帯有り	539
53− 2	Ⅱ	7D	甕	(31.20)		(23.10)	内.橙・にぶい黄橙 外.にぶい褐・灰褐	2.0mm以下の砂粒・小石粒・石英・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ	内外.煤 突帯有り	540
53− 3	Ⅱ	7C	甕	(33.00)		(19.60)	内.にぶい褐・にぶい橙 外.にぶい褐・橙	2.0mm以下の砂粒を多量,小石粒を少量,石英・雲母・角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ･ナデ･タタキ→ハケ	外.黒斑・煤 突帯有り	542
53− 4	Ⅱ	7C	甕	20.90	底径(5.20) 胴部径23.90	32.60	内.橙 外.橙・にぶい橙	4.0mm以下の砂粒を多量,雲母・角閃石・赤褐色粒を少量含む	良	内.ナデ？・ハケ 外.ナデ？・タタキ？→ハケ	外.黒斑・煤	531
53− 5	Ⅱ	6B	甕	21.60	胴部径23.20	(29.70)	内.浅黄橙 外.浅黄橙・にぶい黄橙	0.2～1.5mmの砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ 外.ナデ・タタキ→ハケ・ハケ・ハケ→ナデ？	外.黒斑・煤	532
53− 6	Ⅱ	6CNo46	甕	19.60	底径6.30 胴部径(19.50)	21.30	内.浅黄 外.灰黄	0.1～6.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を多少含む	やや不良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・タタキ→ナデ・タタキ→ハケ・ハケ・ナデ	外.黒斑	179
54− 1	Ⅱ	5CNo2	甕		底径7.10 胴部径14.10	(16.20)	内外.にぶい黄橙	3.5mm以下の長石・石英・雲母・角閃石を含む	普通	内.ナデ・工具ナデ・指ナデ？ 外.ナデ・タタキ→ハケ・ケズリ	外.黒斑	135
54− 2	Ⅱ	6CNo73	甕		6.00	(12.90)	内外.にぶい黄橙	0.1～1.8mmの長石・石英を多量,0.1～1.1mmの雲母を多少,0.8mm以下の輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.工具ナデ・指ナデ 外.ハケ・タタキ？→ケズリ	外.黒斑	205
54− 3	Ⅱ	6C	甕	(13.80)	5.20	18.70	内.橙 外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,3.0mm以下の雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ・ハケ→ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ→ナデ・ケズリ・ナデ	外.煤	523
54− 4	Ⅱ	5CNo16	甕	15.80	5.10	17.30	内外.浅黄橙	0.2～3.7mmの長石・石英を多量,1.3mm以下の雲母を多少,0.2～1.3mmの輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・工具ナデ・指頭痕→ハケ 外.ナデ・タタキ→ハケ・ケズリ	外.黒斑	149
54− 5	Ⅱ	6CNo51	甕	(15.60)	底径5.70 胴部径(15.80)	18.40	内.明黄褐 外.にぶい黄橙	0.5～8.0mmの石英を多量,0.3～2.0mmの長石を多少,1.5mm以下の雲母・輝石・角閃石を少量含む	やや不良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ・ケズリ→ハケ・ハケ	外.煤	184
54− 6	Ⅱ	6C	甕	(14.90)	5.15	17.35	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・ハケ・ハケ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・ハケ→ナデ	外.黒斑	524
54− 7	Ⅱ	7C	甕	(15.40)	底径5.30 胴部径(16.60)	21.10	内外.明黄褐	1.0～3.0mmの赤褐色粒・白色粒を多量に含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ	内外.黒斑 外.煤	514
54− 8	Ⅱ	7C	甕	(17.30)	底径6.20 胴部径(17.50)	21.60	内外.にぶい橙	0.5～5.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ハケ→ナデ・ハケ・指頭圧痕 外.ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑	517
54− 9	Ⅱ	5C	甕	(15.10)	胴部径19.80	23.10	内外.橙	0.5～5.0mmの砂粒を多少,0.5～1.0mmの雲母・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ･タタキ→ハケ・ハケ	外.黒斑	545
55− 1	Ⅱ	6C	鉢	(19.00)	4.40	13.10	内外.にぶい橙	微細粒の角閃石を少量,0.5～2.0mmの砂粒・白色粒を含む	良	内外.ハケ→ナデ・ハケ・ナデ	外.黒斑・煤	335
55− 2	Ⅱ	7CNo84	鉢		8.20	(13.80)	内外.にぶい黄橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・角閃石を少量含む	やや不良	内.工具ナデ・指頭圧痕 外.ケズリ？		216
55− 3	Ⅱ	7CNo85	鉢		底径7.20 胴部径(17.20)	(14.80)	内外.にぶい黄橙	1.5mm以下の角閃石を少量,0.1～4.5mmの長石・石英を含む	普通	内.ハケ・ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ		217
55− 4	Ⅱ	6C	鉢	(21.00)	6.40	13.10	内外.浅黄橙	0.5～1.0mmの砂粒を含む	良	内.指圧痕→ナデ 外.ハケ→ナデ･タタキ→ハケ→ナデ･ナデ	外.黒斑	333
55− 5	Ⅱ	6C	甕	(16.70)	(5.80)	17.40	内.橙 外.橙・褐灰	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の角閃石を含む	良	内.ナデ・指圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ・ナデ	外.黒斑	520
55− 6	Ⅱ	6B	甕	(18.50)		(15.80)	内.にぶい黄橙 外.にぶい黄橙・褐灰	0.5～3.0mmの砂粒を多量に含む	良	内外.指ナデ→工具ナデ		518
55− 7	Ⅱ	5CNo22	甕	(28.20)	7.20	22.80	内外.橙	0.1～4.5mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の赤色粒を少量,2.5mm以下の輝石・角閃石を含む	普通	内.ナデ・ハケ・工具ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ・ナデ	外.黒斑	155
55− 8	Ⅱ	7CNo80	甕	(21.80)	7.00	(20.90)	内.明黄褐 外.にぶい黄褐	0.1～4.1mmの長石・石英を多量,0.8mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・指ナデ 外.ナデ・ハケ	外.赤変 炭化物付着	212
55− 9	Ⅱ	7C	鉢	(14.95)	(7.20)	14.10	内外.明赤褐	5.0mmの小石粒を少量,0.5～1.5mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕 外.ナデ		367
55−10	Ⅱ	5CNo15	鉢	9.20	3.50	7.70	内外.にぶい黄橙	1.2mm以下の輝石・赤色粒を少量,5.0mm以下の長石・石英・雲母を含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕→工具ナデ・工具ナデ 外.ナデ・指頭圧痕・ケズリ→ハケ	外.黒斑	148
55−11	Ⅱ	7CNo92	鉢	14.40	底径7.30 胴部径17.00	15.00	内外.橙	0.1～6.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕・工具ナデ・ハケ・工具ナデ・指ナデ 外.ナデ・ケズリ		224
55−12	Ⅱ	6C	鉢	13.70	3.70	13.00	内外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ・ハケ→ナデ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・ケズリ？・ナデ	内外.黒斑	343

第19表　Ⅱ区谷部出土土器観察表③

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
55－13	Ⅱ	5CNo4	鉢	17.30	5.90	14.80	内.にぶい橙 外.にぶい黄橙	3.0mm以下の長石・石英・雲母・輝石を含む	普通	内.ナデ・ハケ・ハケ→工具ナデ・ナデ→工具ナデ・指頭圧痕→ナデ　外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・ハケ→ケズリ・ケズリ	内外.赤色顔料　外.黒斑	137
55－14	Ⅱ	6CNo30	鉢	14.40	6.00	9.60	内.明黄褐 外.にぶい黄橙	0.1～2.1mmの長石を多少,1.8mm以下の石英・雲母・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・工具ナデ→ナデ・指ナデ 外.ナデ・ナデ→ハケ・ハケ	内.煤	163
55－15	Ⅱ	6B	鉢	14.10	6.00	10.50	内外.にぶい橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ？→ナデ 外.ナデ・ハケ？→ナデ・ナデ		360
55－16	Ⅱ	6C	鉢	(13.60)	5.70	8.40	内外.にぶい黄橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,微細粒の角閃石を含む	良	内.ナデ・指圧痕→工具ナデ 外.ナデ・タタキ→ハケ→ナデ・工具ナデ・ナデ	内外.黒斑	353
56－ 1	Ⅱ	6C	鉢	12.20	3.30	7.40	内外.橙	3.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・ミガキ・工具ナデ 外.ナデ・タタキ・タタキ→ナデ・ナデ		366
56－ 2	Ⅱ	7D	鉢	9.85	2.80	5.10	内外.にぶい黄橙	1.0～3.0mmの砂粒を多量,雲母を少量含む	良	外.指圧痕・ナデ		390
56－ 3	Ⅱ	6C	鉢	(11.70)	(6.00)	9.60	内外.にぶい黄橙	0.5～5.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・工具ナデ？・指圧痕 外.ナデ	内外.黒斑	354
56－ 4	Ⅱ	5C	鉢	(12.00)	5.30	9.40	内外.にぶい橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ・工具ナデ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ？→ナデ・ハケ？	外.黒斑	362
56－ 5	Ⅱ	7CNo94	鉢	11.30	6.30	8.80	内外.にぶい黄橙	0.1～2.5mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕→ハケ→ナデ・ハケ・指ナデ 外.ナデ・ナデ→ケズリ・ハケ・ケズリ→ナデ	外.黒斑	226
56－ 6	Ⅱ	6CNo77	鉢	(10.00)	5.60	8.30	内.にぶい橙 外.にぶい黄橙	0.2～4.0mmの石英・長石を多少,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕→工具ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ナデ→ハケ・ハケ		209
56－ 7	Ⅱ	7C	鉢	10.40	4.80	8.10	内外.橙	0.5～5.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・指圧痕→ナデ 外.ナデ	外.黒斑	365
56－ 8	Ⅱ	7CNo95	鉢	10.10	4.40	7.10	内外.にぶい黄橙	0.1～6.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の輝石を少量含む	普通	内.工具ナデ→ナデ・工具ナデ 外.ケズリ	外.黒斑	227
56－ 9	Ⅱ	7D	鉢	(15.80)	(7.40)	8.60	内.浅黄 外.橙	0.5～3.0mmの石英・白色粒を多量,3.0mm以下の雲母・赤褐色粒を含む	良	内.指頭圧痕・指ナデ 外.指頭圧痕・ナデ・指圧痕	外.黒斑	350
56－10	Ⅱ	7D	鉢	11.55	4.50	7.10	内外.にぶい黄橙	0.5～2.0mmの砂粒・白色粒を多量,1.0mm以下の雲母・赤褐色粒を含む	良	内.指圧痕→ナデ・指ナデ 外.ナデ	外.黒斑	357
56－11	Ⅱ	6CNo76	鉢	8.20	5.30	6.00	内外.橙	0.5～1.5mmの長石を多量,0.2～3.8mmの石英を多少,1.5mm以下の角閃石・輝石・雲母を少量含む	普通	内.ナデ・指ナデ 外.ナデ・ケズリ→工具ナデ		208
56－12	Ⅱ	6CNo75	高台付鉢	6.80	高台径5.00	4.80	内外.橙	0.1～3.5mmの長石・石英を多量,0.5mm以下の輝石を少量含む	普通	内鉢.ナデ・指頭圧痕・ナデ　台.指頭圧痕・ナデ 外鉢.ナデ・工具ナデ　台.工具ナデ・ナデ		207
56－13	Ⅱ	6C	鉢	11.10		8.80	内外.にぶい黄橙	0.5～4.0mmの砂粒を含む	良	内.ハケ→ナデ・指ナデ 外.ハケ→ナデ・ケズリ→ナデ	外.黒斑	363
56－14	Ⅱ	6C	鉢	9.90	2.25	7.40	内外.明赤褐	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.工具ナデ→ミガキ？ 外.ミガキ・指ナデ	外.黒斑	436
56－15	Ⅱ	5C	鉢	(8.50)	3.20	8.20	内外.にぶい黄橙	3.0mm以下の砂粒・角閃石・白色粒を含む	良	内.ナデ 外.工具ナデ・ナデ	内.黒斑	373
56－16	Ⅱ	7C	鉢	(7.50)		(7.60)	内.浅黄橙 外.浅黄	1.0～3.0mmの砂粒を多量,1.0mm以下の雲母・赤褐色粒を少量,0.5～1.0mmの白色粒を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕 外.ナデ	外.黒斑	378
56－17	Ⅱ	6C	鉢	19.60	5.60	10.30	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	内.工具ナデ 外.タタキ	外.黒斑	332
56－18	Ⅱ	7C	台付鉢	(17.00)		(7.20)	内外.にぶい黄橙	0.5～4.0mmの砂粒を多量,雲母を少量,1.0mmの赤褐色粒を含む.	良	内外.鉢　ハケ	外.黒斑	322
56－19	Ⅱ	5C	鉢	(25.20)		11.10	内.橙 外.にぶい黄橙	0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	内.ハケ→ナデ・ナデ・指頭圧痕→ナデ 外.ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑	326
56－20	Ⅱ	7C	鉢	(22.20)		(9.70)	内外.にぶい橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の角閃石を含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ケズリ	外.黒斑	325
56－21	Ⅱ	7C	鉢			(8.10)	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	1.0～4.0mmの砂粒・白色粒を多量,微細粒の角閃石を含む	良	内.ハケ→ナデ 外.ナデ	外.黒斑	320
56－22	Ⅱ	6C	鉢	(17.80)		9.70	内外.にぶい橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ	外.黒斑	346
56－23	Ⅱ	6C	鉢	13.60		7.20	内外.にぶい褐	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・工具ナデ 外.ナデ・工具ナデ？・ケズリ	外.黒斑	345
56－24	Ⅱ	8E	鉢	(12.70)	(5.50)	(5.60)	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	0.5～4.0mmの砂粒を多量,雲母を少量含む	良	内.ナデ・ナデ？ 外.ナデ・ナデ？・ナデ	外.黒斑	369
56－25	Ⅱ	5C	鉢	11.50		5.00	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの雲母を含む	良	内.ナデ 外.指圧痕→ナデ	内外.黒斑 内.煤	418
56－26	Ⅱ	5C	鉢	12.40	5.20	5.45	内外.にぶい橙	4.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ 外.ナデ・タタキ→ナデ・タタキ・ナデ	外.黒斑	381
56－27	Ⅱ	7C	鉢	10.00		4.20	内外.にぶい黄橙	1.0～4.0mmの砂粒を含む	良	内.ハケ→ナデ 外.指圧痕→ナデ・ケズリ	外.黒斑	389
56－28	Ⅱ	6B	鉢	(13.70)	2.60	6.10	内外.にぶい黄橙	1.0～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内外.ナデ	外.黒斑・煤	380
56－29	Ⅱ	5CNo6	鉢	11.30	2.50	5.00	内.にぶい橙 外.橙	0.1～2.0mmの角閃石・赤色粒を少量,5.0mm以下の長石・石英・雲母を含む	普通	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ケズリ		139
56－30	Ⅱ	5CNo12	鉢	9.30		3.40	内外.にぶい橙	2.5mm以下の長石・石英・雲母・赤色粒を含む	普通	内.ナデ・指圧痕→ハケ 外.ナデ・指圧痕→ナデ	外.黒斑	145
56－31	Ⅱ	5C	高台付鉢	(16.60)	高台径5.60	6.40	内.橙 外.にぶい橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内鉢.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ　高台.指頭圧痕・ナデ 外鉢.ナデ・タタキ→ナデ　高台.指頭圧痕・ナデ	外.黒斑	314
56－32	Ⅱ	5C	台？		裾部径 (18.00)	(9.10)	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	3.0mm以下の砂粒を多量,雲母を少量,石英・角閃石を含む	不良	内台.指ナデ・ハケ・ナデ 外台.ナデ・ハケ・ナデ		615

第20表　Ⅱ区谷部出土土器観察表④

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
57－1	Ⅱ	6C	高坏	(32.40)		(8.80)	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	1.0～4.0mmの砂粒.0.5～1.0mmの赤褐色粒を含む	良			303
57－2	Ⅱ	6CNo48	高坏		裾部径(17.20)	(16.10)	内.橙 外.にぶい黄橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多少,1.5mm以下の輝石・角閃石を少量含む	良	内脚.シボリ・シボリ→ナデ・ハケ・ハケ→ナデ 外脚.ハケ・ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り	181
57－3	Ⅱ	5C	高坏		裾部径(16.80)	(17.00)	内外.にぶい黄橙	1.0mmの赤色粒・微細粒の雲母を含む	良	内脚.シボリ・指圧痕	内外.黒斑 穿孔有り	293
57－4	Ⅱ	6C	高坏		裾部径(18.20)	(19.30)	内外.にぶい黄橙	0.5～7.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内脚.シボリ・ハケ→ナデ・ナデ 外脚.ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑	295
57－5	Ⅱ	7D	高坏？			(13.05)	内外.橙	0.1～2.0mmの長石・石英を多量,0.5mm以下の雲母・角閃石を少量含む	良	内脚.指ナデ・ハケ 外脚.ハケ		614
58－1	Ⅱ	5CNo13	器台	受部径 8.60	裾部径10.20	11.00	内外.橙	0.3～3.0mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・工具ナデ・シボリ→指ナデ・工具ナデ・指圧痕→工具ナデ・ナデ 外.ナデ・タタキ→ナデ・ケズリ→ナデ・指圧痕→ケズリ→ナデ・ナデ		146
58－2	Ⅱ	5CNo20	器台	受部径 12.60	裾部径12.80	15.80	内.橙 外.明赤褐	0.1～5.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石を少量含む	良	内.ナデ・シボリ→工具ナデ・工具ナデ→指頭圧痕 外.ナデ・指圧痕(シボリ)・ケズリ・指頭圧痕		153
58－3	Ⅱ	6CNo62	器台	受部径 10.60	裾部径11.70	17.60	内外.橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・シボリ→指ナデ・指圧痕→ハケ・ナデ 外.ナデ・タタキ→ケズリ・ナデ		194
58－4	Ⅱ	6CNo72	器台	受部径 10.70	裾部径(13.00)	18.30	内.明黄褐 外.黄橙	0.1～2.7mmの長石・石英を多量,1.2mm以下の雲母を多少,1.1mm以下の輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指ナデ・工具ナデ・シボリ→工具ナデ・ハケ・指ナデ・ナデ 外.ナデ・指圧痕(シボリ)・タタキ→指圧痕(シボリ)・ナデ	歪みあり	204
58－5	Ⅱ	6CNo43	器台	受部径 (14.40)	裾部径14.10	16.40	内外.橙	1.0mm以下の雲母・角閃石を少量,0.1～3.5mmの長石・石英を含む	普通	内.ナデ・工具ナデ・シボリ→工具ナデ・工具ナデ・ナデ 外.ナデ・指圧痕(シボリ)・ケズリ・指圧痕		176
58－6	Ⅱ	7CNo91	器台	受部径 12.90	裾部径13.10	18.00	内外.にぶい黄橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石を少量含む	普通	内.ナデ・指圧痕→ハケ・シボリ・ナデ・指圧痕→ハケ・ナデ 外.ナデ・指圧痕(シボリ)・ハケ	外.赤変	223
58－7	Ⅱ	5CNo21	器台	受部径 (12.40)	裾部径13.70	20.70	内外.にぶい黄橙	0.1～3.9mmの長石・石英を多量,1.7mm以下の雲母・輝石・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・工具ナデ・シボリ→工具ナデ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・ハケ→ナデ・ナデ		154
58－8	Ⅱ	7C	器台		裾部径14.20	(10.90)	内.にぶい橙 外.橙	0.1～6.0mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内.シボリ→指ナデ・ナデ→ハケ・ナデ 外.指圧痕(シボリ)→ハケ・ナデ		268
58－9	Ⅱ	2-7D	器台	受部径 (12.80)	裾部径16.00	16.70	内外.灰褐	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの角閃石・赤褐色粒・白色粒・黒色粒を含む	良	内.ナデ・指ナデ・指頭圧痕→ナデ・ナデ 外.ナデ・タタキ・ハケ・ナデ	内.黒斑 外.煤	266
58－10	Ⅱ	6CNo33	器台	受部径 (15.10)	裾部径14.00	17.50	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	1.0mm以下の角閃石を少量,6.0mm以下の長石・石英・雲母・赤色粒を含む	普通	内.ナデ・ハケ→ナデ・シボリ→ハケ・シボリ→指ナデ・指ナデ・ナデ 外.ナデ・指圧痕(シボリ)→ハケ・ナデ		166
58－11	Ⅱ	7DNo64	器台	受部径 14.30	裾部径16.50	18.40	内.橙 外.にぶい黄橙	0.1～5.5mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・指圧痕→工具ナデ・シボリ→ハケ・工具ナデ・ナデ 外.ナデ・ハケ・ナデ		196
58－12	Ⅱ	6C7C No79	器台		裾部径13.70	(16.10)	内外.橙	0.3～3.5mmの石英を多量,0.1～2.0mmの長石を多少,2.0mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	良	内.指頭圧痕→ハケ・指ナデ・ハケ・ナデ 外.指圧痕(シボリ) →ハケ・ナデ		211
58－13	Ⅱ	7D	器台	受部径 (11.80)		(10.40)	内外.にぶい黄橙	5.0mm以下の砂粒・白色粒を多量,微細粒・雲母を少量含む	良	内.ナデ・ハケ・指ナデ 外.ハケ→ミガキ	穿孔有り	246
58－14	Ⅱ	6CNo56	器台			(13.60)	内.暗灰黄 外.浅黄	5.0mm以下の長石・石英を多量,2.0mm以下の角閃石を少量含む	良	内.シボリ→指ナデ・ハケ→指ナデ 外.タタキ→ハケ→ケズリ・ハケ→ナデ	外.黒斑	228
58－15	Ⅱ	6C	器台			(15.60)	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,雲母を少量含む	良	内.工具ナデ・指ナデ・ハケ 外.タタキ		259
58－16	Ⅱ	8D	器台	受部径 10.10	裾部径12.25	12.40	内.灰褐 外.にぶい赤褐	0.5～3.4mmの砂粒を多量,0.2～1.0mmの角閃石を含む	良	内.工具ナデ・指頭圧痕 外.ナデ？・ハケ・指頭圧痕		256
58－17	Ⅱ	5C	器台	受部径 10.20	裾部径11.75	15.30	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,0.5mm以下の雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ・シボリ・指ナデ・ハケ・ナデ　外.ナデ・ハケ→ナデ・指圧痕→ナデ・タタキ→ナデ・ナデ	外.黒斑	248
58－18	Ⅱ	6C7C No78	器台	受部径 12.10	裾部径13.30	15.60	内外.にぶい黄橙	0.1～2.2mmの長石・石英を多少,0.5mm以下の雲母・輝石・赤色粒を含む	良	内.ナデ・指ナデ・ハケ・ナデ 外.ナデ→ハケ・タタキ→指圧痕(シボリ)→ハケ・ナデ		210
58－19	Ⅱ	6C	器台	受部径 (14.40)	裾部径(13.20)	16.25	内.浅黄橙 外.にぶい黄橙	0.5～2.3mmの砂粒を多量,0.2～1.0mmの雲母を少量含む	良	内.ハケ・指ナデ 外.ハケ・タタキ→ハケ	外.黒斑	254
59－1	Ⅱ	5C	器台	受部径 (11.80)	裾部径14.50	16.90	内外.にぶい黄橙	1.0mm以下の砂粒・白色粒・黒色粒を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石を含む	良	内.ナデ・シボリ→工具ナデ・ナデ 外.ナデ・指圧痕→工具ナデ・ナデ	外.黒斑	249
59－2	Ⅱ	8DNo68	器台	受部径 (9.65)	裾部径(14.05)	17.50	内.褐灰 外.灰黄褐	0.1～6.5mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・輝石・角閃石を少量含む	普通	内.ハケ・シボリ→指ナデ・ハケ・ハケ→ナデ 外.ハケ→ナデ		200
59－3	Ⅱ	6CNo58	器台	受部径 9.10	裾部径13.70	17.90	内外.黄橙	2.2mm以下の石英・長石・雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・シボリ→指ナデ・ハケ・指頭圧痕→ハケ・ナデ 外.ナデ・ハケ・タタキ→ハケ・タタキ・ナデ		190
59－4	Ⅱ	6C	器台	受部径 13.30	裾部径14.80	18.10	内.橙 外.にぶい橙	3.0mm以下の砂粒・白色粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ・工具ナデ・指ナデ・ハケ・工具ナデ・ナデ 外.ナデ・工具ナデ・ナデ	外.煤	260
59－5	Ⅱ	5CNo5	器台	受部径 14.70	裾部径15.55	19.20	内外.浅黄橙	0.1～3.2mmの長石・石英を多少,1.1mm以下の雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ・指ナデ・ハケ・ナデ 外.ナデ・指圧痕(シボリ) →ハケ・ナデ		138
59－6	Ⅱ	6CNo57	器台	受部径 (18.00)	裾部径(14.50)	19.30	内外.にぶい黄橙	0.5～8.0mmの石英を多少,2.0mm以下の長石・雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ・シボリ→指ナデ・指圧痕→ハケ・ナデ→ハケ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑・赤変	189
59－7	Ⅱ	5C	器台	受部径 13.95	裾部径(15.30)	19.65	内.橙 外.にぶい橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,角閃石を少量含む	良	内.ナデ・指ナデ・指圧痕→ナデ・ナデ 外.ナデ・ハケ・タタキ・ナデ	外.煤	257
59－8	Ⅱ	6CNo24	器台	受部径 (13.90)	裾部径(15.50)	20.00	内外.にぶい黄橙	5.0mm以下の長石・石英を多量,0.5mm以下の雲母,1.0mm前後の赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・指ナデ・シボリ→指ナデ・指ナデ・ナデ　外.ナデ・ハケ→ナデ・タタキ→ケズリ・タタキ→ナデ・ナデ	外.黒斑	157
59－9	Ⅱ	6C	器台	受部径 14.80	裾部径(15.60)	20.40	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細物の雲母を含む	良	内.ハケ→ナデ・指ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑	264
59－10	Ⅱ	6C	器台	受部径 13.40	裾部径(16.25)	21.20	内.にぶい橙 外.にぶい黄橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,1.0mmの角閃石を少量含む	良	内.ナデ・指ナデ・ナデ・ケズリ 外.ナデ・ハケ→ナデ・タタキ→ナデ・ケズリ		261
59－11	Ⅱ	7CNo82	器台	受部径 (13.45)	裾部径(14.00)	21.10	内外.にぶい黄橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・指ナデ・ハケ・指圧痕→ハケ・ナデ 外.ナデ・ハケ・ケズリ→ハケ・タタキ→ハケ・タタキ・ナデ		214
59－12	Ⅱ	6C	器台	受部径 15.80	裾部径(19.60)	20.90	内外.にぶい黄橙	0.5～1.0mmの赤褐色粒を少量,0.5～3.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・ハケ・指ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ		258

第21表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑤

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
59－13	Ⅱ	6CNo45	器台	受部径12.70	裾部径(16.90)	21.90	内.にぶい橙 外.橙	3.0mm以下の長石・石英・雲母・輝石・角閃石を含む	普通	内.ナデ・ハケ・ナデ 外.ナデ・ハケ→指頭圧痕・指頭圧痕→タタキ・ナデ		178
59－14	Ⅱ	7C	器台	受部径16.00	裾部径18.40	22.00	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,1.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.指ナデ・指圧痕→ハケ・ナデ 外.ハケ・ナデ・ハケ・ナデ		267
59－15	Ⅱ	7CNo93	器台	受部径12.40		(16.00)	内.にぶい黄橙 外.にぶい黄褐	0.1～6.0mmの長石・石英を多量,2.0mm以下の輝石・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・工具ナデ・シボリ→工具ナデ・指圧痕→工具ナデ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ		225
59－16	Ⅱ	7D	器台	受部径14.80		(8.60)	内.にぶい黄橙 外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・ケズリ・ハケ→ナデ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑 刻目有り	244
60－ 1	Ⅱ	6C	器台	受部径7.40	裾部径11.40	9.95	内.にぶい橙 外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ・シボリ・指ナデ・ナデ 外.ナデ・指ナデ・ナデ		243
60－ 2	Ⅱ	7C	器台	受部径7.00	裾部径10.40	10.00	内.にぶい橙 外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5mmの角閃石を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・指圧痕→ナデ		242
60－ 3	Ⅱ	5C	器台	受部径5.20	裾部径(11.40)	10.70	内.明黄褐 外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石を含む	良	内.ナデ・シボリ・指ナデ・ナデ 外.ナデ・タタキ・ナデ	外.黒斑	236
60－ 4	Ⅱ	8E	器台	受部径(7.60)	裾部径(12.60)	10.70	内外.にぶい黄橙	5.0mm以下の石英を多量,3.0mm以下の長石を多少,1.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内.指頭圧痕→ナデ・シボリ→指ナデ・指圧痕→ナデ　外.指頭圧痕→ナデ・指圧痕(シボリ)→指ナデ・ナデ	内.煤 外.黒斑	241
60－ 5	Ⅱ	6CNo36	器台	受部径4.70	裾部径12.10	12.20	内.橙 外.明赤褐	3.5mm以下の長石・石英・雲母・角閃石を含む	良	内.ナデ・指頭圧痕→ナデ・シボリ→指ナデ 外.ナデ・ハケ・ナデ		169
60－ 6	Ⅱ	5CNo19	器台	受部径4.00	裾部径10.90	10.10	内.明褐 外.橙	0.1～6.0mmの長石・石英を多量,2.5mm以下の雲母・輝石・角閃石を含む	普通	内.ナデ・指頭圧痕・シボリ・指頭圧痕・ナデ 外.ナデ・指圧痕(シボリ)・ナデ	赤変	152
60－ 7	Ⅱ	7CNo83	器台	受部径15.80		(6.70)	内.明褐 外.にぶい橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ		215
60－ 8	Ⅱ	6CNo52	器台	受部径14.80		(4.80)	内外.にぶい橙	0.1～4.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母を少量含む	良	内外.ナデ・ハケ		185
60－ 9	Ⅱ	6C	沓形器台	受部径7.20	裾部径11.10	9.60	内外.橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・輝石を少量含む	良	内.ハケ・ナデ・工具ナデ・ナデ・指頭圧痕・ナデ 外.ハケ・指頭圧痕・ケズリ・ハケ・ナデ		206
60－10	Ⅱ	6CNo41	沓形器台	受部径(10.30)	裾部径9.50	10.00	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	0.1～4.1mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.シボリ・シボリ→ナデ・ナデ 外.タタキ→指頭圧痕→工具ナデ		174
60－11	Ⅱ	7D	沓形器台	受部径(8.30)	裾部径9.60	(11.60)	内.明赤褐 外.明赤褐・にぶい赤褐	0.5～3.0mmの砂粒を多量,2.0mm以下の角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・指ナデ・ナデ 外.指頭圧痕→ナデ・ナデ・タタキ→ハケ・ナデ	外.黒斑	237
60－12	Ⅱ	6CNo42	沓形器台		裾部径10.70	10.80	内.にぶい橙 外.橙	1.5mm以下の赤色粒を少量,3.0mm以下の長石・石英・雲母・輝石を含む	普通	内.シボリ→ナデ・シボリ・指圧痕・指圧痕→ナデ 外.ケズリ→ナデ・指圧痕→ナデ		175
60－13	Ⅱ	5C	沓形器台	受部径7.70	裾部径(10.10)	10.70	内.橙 外.にぶい黄橙	0.5～1.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの雲母・角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.指ナデ・指頭圧痕→ナデ 外.指頭圧痕・指ナデ・タタキ→ナデ	外.赤彩？ 穿孔有り	229
60－14	Ⅱ	6C	沓形器台	受部径(6.20)	裾部径10.80	10.25	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,角閃石を含む	良	内.シボリ・指ナデ 外.ナデ・ハケ・タタキ・ナデ	穿孔有り	233
60－15	Ⅱ	5C	沓形器台	受部径8.20	裾部径(9.20)	8.10	内.橙 外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒・金雲母・角閃石を含む	良	内.指頭圧痕・シボリ・指ナデ・指頭圧痕・ナデ　外.指頭圧痕・ナデ・タタキ→工具ナデ・ナデ	穿孔有り	231
60－16	Ⅱ	5C	沓形器台	受部径(9.00)	裾部径15.80	13.80	内.明赤褐 外.にぶい褐	0.5～1.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母・赤褐色粒を含む	良	内.シボリ・指ナデ・指圧痕・ナデ 外.ハケ→ナデ・ハケ・タタキ→ハケ・ナデ	穿孔有り	232
60－17	Ⅱ	6C	沓形器台	受部径8.10	裾部径13.50	12.90	内外.にぶい黄橙	3.0mm以下の砂粒・白色粒を多量,微細粒の角閃石を少量含む	良	内.指ナデ・ハケ 外.指頭圧痕・工具ナデ・タタキ→ケズリ・ハケ・ナデ	外.黒斑 未貫通穿孔有り	240
60－18	Ⅱ	7D	沓形器台	受部径(5.70)	裾部径13.50	(12.05)	内.褐灰 外.橙	0.5～1.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.指ナデ・ハケ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ	内外.黒斑	238
61－ 1	Ⅱ	5C	二重口縁壷	(15.60)		(7.40)	内.浅黄 外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5～2.0mmの赤褐色粒を含む	良		外.波状文・竹管文有り	461
61－ 2	Ⅱ	5C	二重口縁壷			(6.20)	内.にぶい橙 外.褐灰	0.5～3.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ミガキ 外.ナデ・ミガキ	外.波状文有り	465
61－ 3	Ⅱ	5C	二重口縁壷			(4.10)	内.にぶい黄褐 外.明赤褐・にぶい黄橙	1.0mm以下の砂粒を多量,雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ	浮文有り	616
61－ 4	Ⅱ	6C	二重口縁壷	(21.40)		(5.50)	内.にぶい黄橙 外.橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・ミガキ・ハケ→ナデ 外.ナデ・ハケ	浮文有り	463
61－ 5	Ⅱ	5C	二重口縁壷	(22.00)		(3.30)	内.浅黄橙 外.にぶい橙	赤褐色粒を少量,0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	外.ナデ	浮文有り	464
61－ 6	Ⅱ	6C	壷	14.40		(4.70)	内外.明赤褐	0.5～2.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.ミガキ・ケズリ？ 外.ナデ・ミガキ・ナデ	内.黒斑 突帯有り（刻目）	466
61－ 7	Ⅱ	6C	二重口縁壷	(20.20)		(8.70)	内.にぶい黄橙 外.橙	0.5～2.0mmの砂粒・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ミガキ・ナデ・ミガキ・ハケ・ナデ 外.ナデ・ミガキ？・ハケ・ハケ→ナデ		469
61－ 8	Ⅱ	5C	壷	(11.50)	胴部径(22.60)	(24.55)	内.褐灰 外.橙	3.0mm以下の砂粒を多量,1.0mm以下の雲母・赤褐色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ハケ・ハケ 外.ナデ・タタキ→ハケ→ケズリ？・タタキ→ハケ・ハケ	内.黒斑 外.黒斑？・煤	498
61－ 9	Ⅱ	6C	甕	(12.30)	胴部径(20.80)	24.10	内.灰黄 外.灰褐	2.3mm以下の砂粒を多量,1.0mm以下の雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ハケ→ナデ 外.タタキ→ハケ→ミガキ・ハケ	内外.煤	557
61－10	Ⅱ	5C	壷	17.00		(8.40)	内外.橙	2.0mm以下の砂粒を多量,雲母・赤褐色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ハケ→ナデ		474
61－11	Ⅱ	5CNo10	壷		底径4.00 胴部径20.30	22.20	内外.橙	1.0mm以下の雲母を多量,1.0mm以下の輝石・赤色粒を少量,0.1～5.5mmの長石・石英を含む	普通	内.ナデ・ケズリ・工具ナデ 外.ハケ・タタキ→ハケ・タタキ→工具ナデ・ナデ		143
61－12	Ⅱ	5C	壷		胴部径(14.70)	(14.30)	内外.明赤褐	0.5～2.0mmの砂粒,3.0～5.0mmの小石粒を多量に含む	良	内.ハケ・ケズリ→ナデ 外.ハケ	外.黒斑・煤	485
61－13	Ⅱ	6C	壷		底径5.20 胴部径(17.20)	(15.80)	内外.にぶい橙	3.0mm以下の砂粒・雲母・赤褐色粒を含む	良	内.指ナデ・指圧痕→ナデ 外.タタキ→ハケ→ナデ？・ナデ		487
61－14	Ⅱ	5C	甕		5.80	(14.90)	内.にぶい黄橙 外.明黄褐	4.0mm以下の長石・石英・赤色粒を多量,0.5mm以下の雲母を少量含む	良	内.指頭圧痕→ハケ→ナデ・指頭圧痕→ハケ→ケズリ・ハケ→ナデ 外.タタキ→ハケ・タタキ→ナデ・ナデ	外.黒斑	550

第22表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑥

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
61−15	Ⅱ	5C	壷	(10.00)	2.70	13.30	内外.にぶい橙	2.0mm以下の長石・石英・雲母・赤色粒を多量に含む	良	内.ナデ・指圧痕→工具ナデ 外.ナデ・ハケ→工具ナデ・ナデ	外.黒斑・煤	499
62− 1	Ⅱ	6B	鉢	(11.40)		8.00	内外.橙	2.0mm以下の砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・指ナデ→ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ	外.黒斑	441
62− 2	Ⅱ	5CNo11	鉢	(11.40)	1.90	6.30	内.明赤褐 外.橙	0.2〜2.5mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	外.ミガキ・ナデ		144
62− 3	Ⅱ	6C	鉢	(14.20)		7.20	内.にぶい黄橙 外.橙	1.0〜2.0mmの角閃石・赤褐色粒を少量,微彩粒の砂粒を含む	良	内.ハケ→ナデ・ナデ 外.ハケ→ナデ・ナデ・ケズリ	外.黒斑	331
62− 4	Ⅱ	5CNo1	鉢	15.50	4.20	9.60	内.明黄褐 外.橙	0.1〜2.2mmの長石・石英を多量,1.3mm以下の雲母を多少,0.4mm以下の輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ハケ・ハケ 外.ナデ・ナデ→ハケ・タタキ→ハケ・ケズリ→ハケ・ケズリ	内.黒斑	134
62− 5	Ⅱ	5C	鉢	(9.80)	3.80	5.80	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	1.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・工具ナデ 外.ナデ		429
62− 6	Ⅱ	6CNo39	鉢	11.50		7.50	内外.橙	0.1〜2.9mmの長石・石英を多量,1.5mm以下の雲母・輝石・赤色粒を多少含む	良	内.ナデ・指ナデ 外.ナデ	外.黒斑	172
62− 7	Ⅱ	5C	鉢	10.90	2.10	6.10	内.明黄褐 外.黄橙	0.5〜3.0mmの長石・石英を多量,0.1〜0.5mmの雲母を少量含む	良	内.ナデ・ミガキ・ナデ・工具ナデ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ヘラミガキ	内外.スリップ　外.黒斑	433
62− 8	Ⅱ	5C	壷	(9.00)		5.10	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	0.5〜1.0mmの角閃石・赤褐色粒を含む	良	内.ハケ→ナデ・工具ナデ 外.ハケ→ナデ・ナデ		427
62− 9	Ⅱ	6C	壷	(9.00)		5.50	内外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒・雲母・白色粒を含む	良	内.ナデ？・ナデ 外.ハケ→ナデ	外.黒斑	428
62−10	Ⅱ	6C	壷	10.90		(7.70)	内外.明赤褐	1.0mm以下の砂粒・白色粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内.ハケ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ミガキ・ナデ・ハケ→ナデ→ミガキ		430
62−11	Ⅱ	5C	壷	(14.60)		8.55	内外.明赤褐	1.0mm以下の砂粒・雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ 外.ミガキ・ケズリ→ミガキ？	穿孔有り(1)	432
62−12	Ⅱ	5C	壷	10.20	3.40	6.90	内.明褐 外.橙	1.0mm以下の長石・石英･雲母・赤色粒を少量含む	やや不良	内.ナデ・ハケ→ナデ・指ナデ 外.ナデ・ミガキ・指頭圧痕→ミガキ・ミガキ	外.黒斑	431
62−13	Ⅱ	5C	ミニチュア土器	(6.50)	2.80	5.05	内外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒・長石・雲母・角閃石を含む	良	内.ナデ・指ナデ 外.ナデ・ハケ・ナデ		603
62−14	Ⅱ	5C	鉢	8.95		7.70	内外.にぶい赤褐	1.2mm以下の砂粒・雲母を多量に含む	良	内.ナデ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ	外.煤	435
62−15	Ⅱ	5C	鉢	(11.50)		9.65	内.にぶい褐 外.浅黄橙	0.5〜5.0mmの砂粒を多量,0.5mmの赤褐色粒を含む	良	内.ハケ 外.ナデ・ハケ		443
62−16	Ⅱ	6C	鉢	(11.90)		(8.20)	内.明赤褐 外.橙	1mm前後の長石・石英,0.1〜0.5mmの雲母,0.5mm前後の赤色粒を多量に含む	良	内.指頭圧痕		442
62−17	Ⅱ	5C	鉢	(13.70)		(9.00)	内.にぶい橙 外.橙	微細粒の雲母を少量,0.5〜3.0mmの砂粒を含む	良	内.ハケ→ナデ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ・ハケ？	内.煤	530
62−18	Ⅱ	6CNo38	壷	7.80		7.75	内.にぶい黄橙 外.淡黄	0.1〜2.5mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・指ナデ 外.ナデ・ハケ・指圧痕→ナデ	外.黒斑	171
62−19	Ⅱ	7C	壷	(10.60)	3.20	9.10	内外.明赤褐	0.5〜3.0mmの砂粒を多量,0.5〜1.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.ハケ→ナデ・指ナデ 外.ナデ・ケズリ	外.黒斑 穿孔有り(1)	438
62−20	Ⅱ	6C	壷		胴部径(9.20)	(8.85)	内.浅黄 外.にぶい黄橙	3.0mm以下の砂粒・雲母・白色粒を含む	良	内.ナデ・指ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ	内外.黒斑	439
63− 1	Ⅱ	6C	甕	14.20	胴部径16.00	18.50	内.灰黄褐 外.にぶい黄橙	0.5〜3.0mmの砂粒・白色粒を多量,微細粒の雲母を少量含む	良	内.工具ナデ・ハケ→ナデ 外.工具ナデ・タタキ→ハケ	外.黒斑	512
63− 2	Ⅱ	5C	甕	(12.10)	胴部径13.00	16.30	内.にぶい黄橙 外.橙	0.5〜3.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・タタキ		551
63− 3	Ⅱ	6CNo28	甕	12.80	底径2.30 胴部径12.90	13.25	内.浅黄橙 外.灰白	0.1〜3.2mmの長石・石英・赤色粒を多少,.0.8mm以下の輝石・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・工具ナデ→ハケ・工具ナデ・ナデ 外.ナデ・タタキ→ナデ・タタキ	外.煤	161
63− 4	Ⅱ	5C	甕	(15.90)	底径3.70 胴部径18.80	20.70	内外.橙	0.2〜2.0mmの砂粒を多量,石英・雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ・ケズリ・指頭圧痕 外.ナデ・タタキ→ナデ→ハケ・タタキ	外.煤	546
63− 5	Ⅱ	5C	甕	(13.40)	胴部径18.00	21.50	内.灰黄褐 外.橙〜にぶい赤褐	0.5〜4.0mmの砂粒を多量,雲母・赤褐色粒を少量含む	良	内.ナデ・指ナデ・ケズリ？ 外.ナデ・タタキ→ハケ・ハケ	内.黒斑 外.煤	556
63− 6	Ⅱ	5C	甕	(15.00)	胴部径19.80	(20.70)	内.にぶい黄橙 外.橙〜浅黄橙	3.0mm以下の砂粒を多量,雲母を少量含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ケズリ？・ハケ・ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・タタキ→ナデ･タタキ・タタキ→ハケ	内.黒斑 外.煤	555
63− 7	Ⅱ	5C	甕	14.20		(9.00)	内.灰黄褐 外.にぶい橙	0.5〜3.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・ハケ・ケズリ 外.ナデ・タタキ→ハケ		553
63− 8	Ⅱ	6CNo37	壷	13.80	底径3.30 胴部径16.80	16.90	内.浅黄橙 外.橙	1.0mm以下の輝石・赤色粒を少量,2.5mm以下の長石・石英・雲母を含む	良	内.ナデ・指圧痕・ケズリ 外.ナデ・ハケ→ナデ→ミガキ・タタキ→ハケ→ミガキ	外.黒斑・煤	170
63− 9	Ⅱ	6C	甕	(15.60)	胴部径16.00	(13.00)	内外.橙	雲母・角閃石・0.5〜6.0mmの赤褐色粒を少量,3.5mm以下の砂粒を含む	良	内.ナデ・ケズリ 外.ナデ・ハケ	内外.煤	566
63−10	Ⅱ	5C	甕	16.00		(9.80)	内外.浅黄	2.0mm以下の砂粒を少量,雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・タタキ		554
63−11	Ⅱ	5C	甕	(15.20)		(8.50)	内.にぶい黄橙〜灰 外.黒褐	1.5mm以下の砂粒を多量,雲母・赤褐色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ・ケズリ 外.ナデ・タタキ→ハケ	外.黒斑・煤	559
63−12	Ⅱ	5C	壷	16.40	胴部径21.10	(14.05)	内.褐灰 外.浅黄橙	雲母を少量,2.0mm以下の砂粒・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・指圧痕→ナデ・ケズリ 外.ナデ・ハケ	外.煤	558
63−13	Ⅱ	5C	甕	(17.00)		(11.50)	内外.にぶい黄橙	3.0mm以下の砂粒を多量,雲母を少量含む	やや良	内.ナデ・ケズリ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑か煤	562
63−14	Ⅱ	5C	甕			(7.50)	内.灰黄 外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒を多量,雲母・角閃石を少量含む	良	内.ナデ・ケズリ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ・ハケ	内.黒斑 外.波状文有り	565
63−15	Ⅱ	5C	甕			(7.40)	内.にぶい橙 外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒を多量,雲母を少量含む	良	内.ナデ・ケズリ 外.ナデ・ハケ	内.煤 外.黒斑 波状文有り	563

第23表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑦

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
63－16	Ⅱ	5C	甕			(5.50)	内.灰白 外.にぶい黄橙	0.2～2.2mmの石英を多少,2.1mm以下の長石・雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ケズリ 外.ハケ→ナデ・ハケ	外.波状文有り	564
63－17	Ⅱ	5C	甕			(9.20)	内.灰黄褐 外.にぶい褐	0.5～2.0mmの砂粒を多量,雲母・赤褐色粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ケズリ→ナデ	外.波状文有り	561
64－ 1	Ⅱ	6C	甕	(19.20)	5.40	(16.50)	内.にぶい黄褐 外.にぶい橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の角閃石を含む	良	内.ナデ・ナデ→ケズリ・ケズリ 外.ナデ・ハケ→ナデ・工具ナデ・ナデ	外.黒斑	519
64－ 2	Ⅱ	5C	鉢	(26.10)	(2.70)	8.20	内外.にぶい黄橙	1.0～4.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を少量含む	良	内.ハケ→ナデ・ナデ 外.ハケ→ナデ・ケズリ・ナデ	内外.煤	324
64－ 3	Ⅱ	6C	鉢	12.80		5.10	内外.橙	雲母を少量,3.0mm以下の砂粒を含む	良	内.ナデ 外.ナデ・ミガキ状ケズリ	内.暗文有り	397
64－ 4	Ⅱ	6C	鉢	13.00		3.60	内外.橙	3.0mm以下の砂粒を少量,微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ・ケズリ	内.モミ痕？有り 外.黒斑	425
64－ 5	Ⅱ	5C	鉢	(13.00)		3.50	内外.橙	1.0mm以下の砂粒を少量,微細粒の雲母を含む	良	内.ミガキ？ 外.ミガキ？・ケズリ	外.黒斑	422
64－ 6	Ⅱ	6CNo40	鉢	11.80		3.30	内外.橙	1.0～2.2mmの長石・石英を多量,1.1mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	やや不良	内外.ナデ	外.黒斑	173
64－ 7	Ⅱ	6C	鉢	10.50		3.05	内.橙 外.橙・明褐	0.5～3.0mmの砂粒を多量,雲母・赤褐色粒を少量含む	良	内.ハケ？→ナデ 外.ハケ→ナデ		421
64－ 8	Ⅱ	5CNo7	鉢	12.30		4.20	内.にぶい橙 外.明赤褐	0.2～3.5mmの長石・石英を多少,0.3～2.0mmの赤色粒を少量含む	良	外.ミガキ	外.スリップ？	140
64－ 9	Ⅱ	6C	鉢	(13.40)		5.20	内外.橙	1.0～3.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を少量含む	良	内.ナデ？ 外.ハケ・ナデ？	外.黒斑	419
64－10	Ⅱ	5C	鉢	(11.80)		4.70	内外.橙	3.0mm以下の砂粒・雲母・赤褐色粒を含む	良	内外.指圧痕→ナデ	外.黒斑	400
64－11	Ⅱ	6C	鉢	11.40		4.20	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	内.指圧痕→ナデ 外.指圧痕→ナデ・指圧痕→ハケ？・ハケ？	内外.黒斑	417
64－12	Ⅱ	7C	鉢	9.00		3.30	内外.浅黄橙	雲母・茶褐色粒,0.2～1.5mmの砂粒を含む	良		外.黒斑	587
64－13	Ⅱ	6C	鉢	8.00		2.75	内外.橙	雲母を少量,2.0mm以下の砂粒を含む	良	内外.ナデ？	外.黒斑	585
64－14	Ⅱ	6C	鉢	(8.00)		3.50	内外.橙	微細粒の雲母を少量,0.2～3.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・ナデ？ 外.ナデ・ナデ→ケズリ		602
64－15	Ⅱ	6C	鉢	8.00		3.50	内.浅黄橙 外.灰白色・浅黄橙	石英・雲母・茶褐色粒を少量,0.2～2.0mmの砂粒を含む	良			572
64－16	Ⅱ	7C	鉢	7.40	(1.30)	3.45	内.浅黄橙・にぶい黄橙　外.にぶい黄橙・浅黄橙	0.2～2.0mmの砂粒を含む	良	内外.ナデ	内.煤？	577
64－17	Ⅱ	6C	鉢	(10.80)	(5.00)	3.30	内外.にぶい黄橙	白色粒を少量,1.0～4.0mmの砂粒を含む	良	内外.ナデ・指圧痕→ナデ	内.黒斑	372
64－18	Ⅱ	5C	鉢	10.95	5.10	3.20	内外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ 外.ナデ・ケズリ	外.黒斑	415
64－19	Ⅱ	6C	鉢	(10.00)		3.70	内外.橙	3.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ 外.ミガキ→ナデ・ミガキ・指圧痕→ナデ		371
64－20	Ⅱ	5C	台付鉢	(17.05)	裾部径12.50	14.90	内.灰黄 外.橙	0.5～4.0mmの砂粒・白色粒を多量,微細粒の赤褐色粒を少量含む	良	内鉢.ミガキ　台.ナデ・ハケ→ナデ 外鉢.ハケ→ミガキ・ミガキ 台.ミガキ	内.黒斑 穿孔有り	319
64－21	Ⅱ	5C	台付鉢	(11.20)	裾部径(9.10)	8.20	内.にぶい橙 外.橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内鉢.工具ナデ　台.ハケ・ナデ 外鉢.工具ナデ　台.ナデ	外.黒斑	312
64－22	Ⅱ	5C	台付鉢	(14.40)	裾部径(9.40)	10.70	内外.橙	1.0mm以下の砂粒・白色粒を含む	良	内鉢.ミガキ　台.工具ナデ・ナデ 外鉢.ミガキ　台.ミガキ	穿孔有り(4)	313
64－23	Ⅱ	5C	台付鉢	(11.40)		(7.45)	内.にぶい褐 外.にぶい黄褐	2.3mm以下の砂粒を多量,1.0mm以下の雲母・白色粒を含む	良	内鉢.ナデ　台.指頭圧痕・ハケ 外鉢.ナデ・ハケ→ナデ　台.ナデ・ハケ	穿孔有り	310
64－24	Ⅱ	5C	台付鉢	(13.90)	裾部径17.70	10.90	内.にぶい黄褐 外.橙	0.5～2.3mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの白色粒を含む	良	内台.指ナデ・ハケ 外鉢.ナデ・ハケ→ナデ？　台.ハケ→ナデ・ハケ・ナデ	内.黒斑 穿孔有り	307
64－25	Ⅱ	5C	台付鉢	(12.00)	裾部径(20.40)	11.50	内外.にぶい橙	1.0mm以下の白色粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内鉢.ミガキ　台.工具ナデ・ハケ・ナデ 外鉢.ミガキ　台.ミガキ・ハケ→ナデ→ミガキ・ナデ	内外.煤？ 外.黒斑 穿孔有り	306
64－26	Ⅱ	5C	台付鉢	14.40	裾部径(8.60)	6.05	内.橙 外.にぶい黄橙	1.0mm以下の赤褐色粒を少量,1.0mm以下の雲母・白色粒を含む	良	内鉢.ハケ→ミガキ　台.ナデ 外鉢.ハケ→ミガキ・ナデ　台.ハケ→ナデ	外.黒斑	311
64－27	Ⅱ	6C	台付鉢	(12.10)	裾部径(8.90)	6.20	内外.橙	1.0mm以下の砂粒・雲母・赤褐色粒を含む	良	内台.工具ナデ 外鉢.ハケ		309
64－28	Ⅱ	6C	台付鉢	9.00	裾部径(5.40)	5.30	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量に含む	良	内鉢.ミガキ？　台.ナデ 外鉢.ナデ　台.指頭圧痕・ナデ		318
64－29	Ⅱ	5CNo3	台付鉢	11.00	裾部径6.90	8.60	内外.橙	0.1～5.0mmの長石・石英を多少,1.0mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	良	内鉢.ナデ・工具ナデ　台.指圧痕・ナデ 外鉢.ナデ・ケズリ　台.ケズリ・指圧痕・ナデ	外.黒斑	136
64－30	Ⅱ	5CNo8	台付鉢	12.50		(4.50)	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	1.0mm以下の輝石・赤色粒を少量,3.0mm以下の長石・石英・雲母を含む	やや不良	内坏.ナデ・工具ナデ 外坏.ナデ・タタキ→ナデ・工具ナデ・ナデ		141
64－31	Ⅱ	6C	台付鉢	(11.50)	裾部径(7.30)	8.00	内.橙 外.浅黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量に含む	良	内外鉢.指圧痕→ナデ　台.ナデ		317
64－32	Ⅱ	6C	台付鉢	(19.60)		(9.40)	内外.にぶい黄橙	1.0～4.0mmの砂粒・白色粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内鉢.ナデ・工具ナデ 外鉢.ナデ		321
65－ 1	Ⅱ	6C	高坏	(31.60)		(7.90)	内外.にぶい黄橙	0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	外坏.ハケ→ナデ・ナデ		305
65－ 2	Ⅱ	6C	高坏	18.65		(8.10)	内.橙 外.淡赤橙・橙	1.0mm以下の雲母・赤褐色粒を含む	良	外坏.ハケ	外.黒斑	301

第 24 表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑧

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
				口径	底径	器高						
65－ 3	Ⅱ	6C	高坏	17.05		(5.70)	内外.橙	1.0mm以下の雲母・赤褐色粒・白色粒を少量含む	良			299
65－ 4	Ⅱ	6C	高坏	(14.50)		(8.60)	内外.にぶい褐	0.5～2.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を含む	良	内坏.ナデ・ミガキ　脚.ナデ 外坏.ナデ・ハケ・ミガキ　脚.ミガキ		298
65－ 5	Ⅱ	5C	高坏	(22.00)		(6.90)	内外.橙	雲母を少量,0.5～2.0mmの砂粒・白色粒を含む	良	内坏.ナデ 外坏.ナデ・ハケ→ミガキ	内.暗文有り	300
65－ 6	Ⅱ	5C	高坏		裾部径(18.00)	(2.30)	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	1.0～2.0mmの砂粒を多量,雲母・赤褐色粒を少量含む	良	内外.脚.ナデ	外.黒斑 穿孔有り	296
65－ 7	Ⅱ	5C	高坏		裾部径19.45	(11.90)	内外.橙	1.0mm前後の赤褐色粒を多量,微細粒の角閃石を含む	良	内坏.ナデ　脚.ハケ･指ナデ・ハケ→ナデ・ナデ 外坏.ナデ？　脚.ナデ？・ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り(3)	292
65－ 8	Ⅱ	6C	高坏		裾部径(7.30)	(5.40)	内外.橙	0.5～1.0mmの角閃石を少量,1.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内坏.ミガキ　脚.指頭圧痕・ナデ 外坏.ミガキ　脚.ミガキ・ナデ	穿孔有り	287
65－ 9	Ⅱ	6C	高坏		裾部径(10.55)	(7.05)	内.明赤褐 外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,微細粒・雲母を含む	良	内坏.ナデ　脚.ナデ・ケズリ・工具ナデ・ハケ・ナデ 外坏.ケズリ　脚.ケズリ・ハケ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り	290
65－10	Ⅱ	5C	高坏		裾部径11.70	(6.10)	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ミガキ・ハケ・ナデ 外.ミガキ	赤彩？ 穿孔有り(2)	282
65－11	Ⅱ	5C	高坏		裾部径(9.70)	(7.10)	内外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を含む	良	内.シボリ・工具ナデ？ 外.ミガキ	穿孔有り	285
65－12	Ⅱ	6C	高坏		裾部径(10.20)	(7.40)	内外.にぶい橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内坏.ミガキ　脚.ナデ 外脚.ミガキ・ナデ	内.黒斑 外.煤・赤彩？ 穿孔有り	297
65－13	Ⅱ	6C	高坏		裾部径13.10	(9.80)	内外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量に含む	良		外.黒斑 穿孔有り(5)	279
65－14	Ⅱ	5CNo17	高坏		裾部径12.70	(8.20)	内外.橙	0.3～4.0mmの石英を多量,0.2～3.0mmの長石を多少,1.5mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	普通	内脚.工具ナデ・ナデ 外坏.ナデ　脚.ナデ・ケズリ・ナデ・ハケ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り(3)	150
65－15	Ⅱ	5C	高坏		裾部径11.70	(6.90)	内.浅黄橙 外.にぶい橙	0.5～2.0mmの砂粒・赤褐色粒を含む	良	内脚.工具ナデ・ナデ	穿孔有り	280
65－16	Ⅱ	6C	器台	受部径 (9.50)	裾部径11.60	8.85	内.橙 外.明赤褐	1.0mm以下の白色粒を多量,0.5mmの赤褐色粒を含む	良	内脚.シボリ	穿孔有り(2)	272
65－17	Ⅱ	6C	器台	受部径 8.25		(7.70)	内外.黄褐	1.0mm以下の白色粒を多量に含む	良	内脚.ナデ	穿孔有り	271
65－18	Ⅱ	6C	器台	受部径 (10.40)	裾部径(10.70)	8.60	内外.橙	0.5mm～小石大の砂粒を多量,1.0mm以下の白色粒を含む	良	内受.ミガキ？　脚.シボリ・ナデ 外受.ミガキ　脚.ミガキ・ナデ	外.赤彩 穿孔有り	274
65－19	Ⅱ	5C	器台	受部径 (6.80)	裾部径(9.20)	4.50	内外.橙	2.3mm以下の砂粒を多量,1.0mm以下の赤褐色粒を少量,微細粒の雲母を含む	良	内脚.指頭圧痕・ハケ→ナデ 外受.ミガキ？　脚.ミガキ？・ハケ・ナデ	穿孔有り	273
65－20	Ⅱ	6C	器台	受部径 (9.60)	裾部径12.80	9.00	内.にぶい黄褐 外.にぶい褐	1.0mmの角閃石を少量,2.0mm以下の砂粒･雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ケズリ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り(3)	270
65－21	Ⅱ	6C	台		裾部径9.80	(7.80)	内外.橙	微細粒の砂粒・雲母を含む	良	内脚.シボリ・ナデ 外脚.工具ナデ？・ハケ→ナデ・ナデ	穿孔有り(3)	277
65－22	Ⅱ	6C	台？		裾部径(12.80)	(6.30)	内.にぶい橙 外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5～1.0mmの赤褐色粒を含む	良	外.指頭圧痕・工具ナデ？	内外.黒斑 内.赤彩？ 穿孔有り	278
65－23	Ⅱ	6C	台		裾部径(11.20)	(4.10)	内外.にぶい橙	赤褐色粒を少量,2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.指頭圧痕・工具ナデ 外.工具ナデ？	内.黒斑 穿孔有り	276
66－ 1	Ⅱ	5C	甑	18.50		10.00	内.にぶい褐 外.にぶい橙	2.3mm以下の砂粒を多量,1.0mm以下の雲母・白色粒を含む	良	内.指圧痕→ハケ・ナデ 外.ハケ→ナデ・工具ナデ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り(1)	404
66－ 2	Ⅱ	6C	甑	(16.40)		8.80	内.にぶい黄橙 外.橙	0.5～2.3mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ？・ケズリ 外.ナデ？・タタキ？	内外.黒斑 穿孔有り(1)	406
66－ 3	Ⅱ	5CNo9	甑	15.10		6.80	内外.橙	2.5mm以下の輝石・角閃石を少量,5.0mm以下の長石・石英・雲母を含む	普通	内.ナデ・ハケ→ナデ・工具ナデ→ナデ・ケズリ 外.ナデ	穿孔有り(1) 口縁打ち欠き？	142
67－ 1	Ⅱ	7D	手捏ね土器	(5.80)		2.20	内.にぶい黄橙 外.にぶい黄橙・灰黄褐	微細粒の雲母を少量,1.5mm以下の砂粒を含む	良	内外.ナデ	外.黒斑	601
67－ 2	Ⅱ	7C	手捏ね土器	(7.00)		2.50	内外.にぶい黄橙	0.2～2.0mmの砂粒を含む	良	内外.指ナデ・指圧痕		573
67－ 3	Ⅱ	6C	手捏ね土器	7.50		3.25	内.にぶい橙・にぶい黄橙 外.にぶい黄橙	雲母を少量,0.2～3.0mmの砂粒を含む	良	内外.指ナデ・指圧痕		571
67－ 4	Ⅱ	7C	手捏ね土器	8.60		2.90	内外.浅黄橙	雲母・赤褐色粒を少量,3.0mm以下の砂粒を含む	良	内外.指圧痕		586
67－ 5	Ⅱ	6C	手捏ね土器	10.20		3.00	内外.にぶい橙	3.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.指圧痕→ナデ・指ナデ 外.指圧痕→ナデ・指圧痕	外.黒斑	402
67－ 6	Ⅱ	5C	手捏ね土器	10.20		3.80	内.明赤褐 外.にぶい黄橙・にぶい橙・橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,微砂粒の角閃石を含む	良	内外.指圧痕→ナデ	内外.黒斑	420
67－ 7	Ⅱ	6C	手捏ね土器	10.00		4.10	内外.にぶい黄橙	4.0mm以下の砂粒・小石粒を含む	良	内.指圧痕→ナデ 外.ナデ・指圧痕→ナデ	外.黒斑	370
67－ 8	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(4.70)	3.50	3.05	内外.褐灰	1.0mm以下の砂粒・長石・石英を含む	良	内.ナデ・指圧痕 外.ナデ・指ナデ		599
67－ 9	Ⅱ	6C	手捏ね土器	6.80	4.30	4.10	内.にぶい黄橙 外.にぶい黄橙・にぶい橙	微細粒の雲母を多量,赤褐色粒・0.5mm以下の砂粒を含む	良	内外.ナデ		584
67－10	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(5.90)	2.70	4.70	内.にぶい橙 外.にぶい黄橙・にぶい橙	雲母を少量,3.0mm以下の砂粒を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ	外.黒斑	581
67－11	Ⅱ	7C	手捏ね土器	7.25	3.90	4.55	内.黄橙・にぶい黄橙 外 浅黄橙・にぶい黄橙	石英・赤褐色粒・0.2～2.0mmの砂粒を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ	内.煤？	583
67－12	Ⅱ	7C	手捏ね土器	6.40	3.40	5.60	内.にぶい褐・にぶい黄橙 外.にぶい黄橙	雲母・茶褐色粒を少量,2.0mm以下の砂粒を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ	外.黒斑	582

第25表　Ⅱ区谷部出土土器観察表⑨

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
67－13	Ⅱ	6C	手捏ね土器	3.10	2.70	2.70	内.橙 外.にぶい黄橙	石英を少量,0.2～2.0mmの砂粒を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ		594
67－14	Ⅱ	6C	手捏ね土器	2.90	1.60	2.70	内.にぶい黄橙 外.にぶい黄橙・橙	3.0mm以下の砂粒・石英を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ		593
67－15	Ⅱ	7D	手捏ね土器	3.30	(2.50)	2.80	内.にぶい黄橙 外.橙・浅黄橙	1.0mm以下の砂粒・雲母を少量含む	良	内外.指圧痕・指ナデ		596
67－16	Ⅱ	7C	手捏ね土器	4.60		2.35	内.にぶい黄橙・橙 外.浅黄橙・にぶい黄橙	1.5mm以下の砂粒を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ	外.黒斑	597
67－17	Ⅱ	7C	手捏ね土器	(5.80)	2.75	2.70	内.暗灰・黒 外.浅黄橙	微細粒の石英を少量,1.5mm以下の砂粒を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ		598
67－18	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(7.10)		4.65	内.灰黄褐 外.浅黄橙	雲母・角閃石を少量,0.2～1.5mmの砂粒を含む	良	内外.指ナデ・指圧痕	内.黒斑?煤? 外.黒斑	574
67－19	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(4.60)	1.45	2.20	内.淡黄・浅黄橙 外.淡黄	1.5mm以下の砂粒を含む	良	内外.ナデ		595
67－20	Ⅱ	7D	手捏ね土器	7.10		(3.30)	内.浅黄橙 外.灰黄・灰白	雲母・茶褐色粒を少量,2.0mm以下の砂粒を含む	良	内外.指ナデ・指圧痕		567
67－21	Ⅱ	6C	手捏ね土器	6.70		3.30	内.灰白・浅黄橙 外.灰白	角閃石を少量,0.2～2.0mmの砂粒を含む	良	内外.指ナデ・指圧痕	内外.赤彩	576
67－22	Ⅱ	7D	手捏ね土器	4.90		3.30	内外.浅黄橙	雲母を少量,0.2～3.0mmの砂粒を含む	良	内外.指頭圧痕・指ナデ		600
67－23	Ⅱ	7D	手捏ね土器	(7.30)	(3.30)	4.20	内.灰褐・黒褐 外.にぶい黄褐・灰黄褐	雲母1.0mm以下の砂粒を含む	良	内外.指ナデ・指圧痕		568
67－24	Ⅱ	6B	手捏ね土器	8.20	3.30	4.40	内外.にぶい黄橙・灰黄褐	角閃石を少量,0.2～2.0mmの砂粒を含む	良	内外.指圧痕		569
67－25	Ⅱ	7C	手捏ね土器	(7.50)		3.85	内.にぶい橙・橙 外.にぶい黄橙・にぶい橙	微細粒の雲母を少量,0.2～3.0mmの砂粒を含む	良	内外.指ナデ・指圧痕	外.黒斑	575
67－26	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(7.70)		4.75	内.橙・にぶい橙 外.にぶい橙・にぶい黄橙	1.5mm以下の砂粒・石英・角閃石を含む	良	内外.指圧痕・指ナデ	外.黒斑	578
67－27	Ⅱ	6C	鉢	8.85	2.80	4.50	内.にぶい黄褐 外.にぶい黄橙	1.0mm以下の砂粒・石英・雲母を含む	良	内.指ナデ・指圧痕 外.工具ナデ・指ナデ	外.煤	570
67－28	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(6.10)		6.10	内外.にぶい黄橙	微細粒の雲母を多量,0.8mm以下の砂粒を含む	良	内外.指ナデ		579
67－29	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(6.00)	2.30	5.60	内外.浅黄橙・にぶい黄橙	0.5～1.0mmの砂粒を含む	良	内外.指圧痕	外.黒斑	580
67－30	Ⅱ	6C	手捏ね土器	3.50	3.60	3.05	内.浅黄橙 外.浅黄橙・にぶい黄橙	2.5mm以下の砂粒・石英・雲母を少量含む	良	内外.指頭圧痕		589
67－31	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(7.00)	4.50	3.50	内.にぶい黄橙・灰黄褐 外.浅黄橙・にぶい黄橙	1.5mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内外.指頭圧痕	外.黒斑	590
67－32	Ⅱ	5C	手捏ね土器	(2.90)	(4.60)	3.00	内.にぶい黄橙・にぶい橙 外.にぶい黄橙・灰黄褐	微細粒の雲母・角閃石を少量,0.2～3.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・ケズリ・ケズリ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ケズリ？・ナデ		588
67－33	Ⅱ	7C	手捏ね土器	(3.60)	底径(2.20) 胴部径(5.60)	5.35	内外.にぶい黄橙	微細粒の砂粒を少量含む	良	内.指ナデ・ハケ？ 外.指ナデ	外.黒斑	604
67－34	Ⅱ	6C	手捏ね土器	(5.70)	底径(4.00) 胴部径(5.00)	5.50	内.灰黄褐・にぶい黄橙 外.浅黄橙	微細粒の雲母を少量,0.2～1.0mmの砂粒を含む	良	内.指ナデ・指圧痕 外.指ナデ・タタキ→ナデ・ナデ	外.煤	605
67－35	Ⅱ	5C	壷	(4.80)	胴部径(8.20)	6.20	内.オリーブ黒 外.暗灰	1.0mm以下の砂粒・石英・雲母を含む	良	内.ナデ・ナデ? 外.ナデ・ナデ?		606
67－36	Ⅱ	6C	手捏ね土器			2.30	内.にぶい橙 外.橙	微細粒の砂粒を少量含む	良	内外.指頭圧痕・指ナデ		592
68－ 1	Ⅱ	6C	不明			(6.00)	内外.褐灰	1.0mm以下の砂粒・石英・雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ 外.ナデ	内.黒斑　外.煤？	620
68－ 2	Ⅱ	7D	ジョッキ型土器			(9.90)	内外.灰白	石英・赤褐色粒を少量,0.1～1.5mmの砂粒を含む	良	内外.ナデ		619
68－ 3	Ⅱ	6C	匙	残存長(9.30)	残存幅(6.00)		内外.浅黄橙	0.2～1.5mmの砂粒を含む	良	内外.指ナデ		608
68－ 4	Ⅱ	7C	匙	残存長(5.50)	残存幅(3.40)	残存高(2.30)	内.にぶい黄橙 外.橙	微細粒の雲母を少量,2.0mm以下の砂粒を含む	良	内外.ナデ		607
68－ 5	Ⅱ	7D	不明	残存長(10.65)			外.にぶい黄橙・灰黄褐	4.0mm以下の砂粒を含む	良	内.工具ナデ? 外.ナデ	外.煤	621
68－ 6	Ⅱ	7C	粘土塊	長8.80	幅6.00	厚5.50	外.橙・明黄褐	1.0mm以下の砂粒を含む	良	外.指	爪痕跡有り	622
68－ 7	Ⅱ	8E	不明(底部)		(2.80)	(1.00)	外.暗灰	石英・角閃石・0.2～2.0mmの砂粒を含む	良	外.ナデ	外.葉脈圧痕有り	613
68－ 8	Ⅱ	5C	円盤？	長4.40	幅3.60	厚0.45～0.65	内.にぶい黄橙 外.赤橙	3.0mm以下の長石・石英を多量,0.5mm前後の白色粒を含む	良	内.ナデ	土器片再利用	612
68－ 9	Ⅱ	7C	ソロバン玉	長3.50	幅4.40	厚(3.90)	外.灰白	石英・角閃石を少量,0.2～1.0mmの砂粒を含む	良	外.ナデ？	外.黒斑 穿孔有り(1)	611
68－10	Ⅱ	7D	丸玉	長2.00	幅2.60	厚(2.40)	外.にぶい黄橙	1.0mm以下の赤色粒を多量に含む	良	外.ナデ	外.黒斑 穿孔有り(1)	610
68－11	Ⅱ	7C	丸玉	長(2.40)	幅1.70	厚(2.20)	外.淡黄・淡黄橙	3.0mm以下の砂粒を含む	良	外.ナデ	外.黒斑	609

石器・石製品（第 69～75 図・第 26・27 表・図版 46～49）

打製石鏃（第 69 図１～13、第 26 表、図版 47－１～13）

１～12 は凹基無茎鏃である。１は黒色黒曜石製で深い抉りをもち、一方の基部を失う。２・３はサヌカイト製で深い抉りをもち、 基部の一部を失う。４はサヌカイト製でやや深い抉りをもち、切先をわずかに失う。５はサヌカイト製の剥片鏃でやや深い抉りをもつ。６は黒色黒曜石製の剥片鏃で深い抉りをもつ。７は黒色黒曜石製の剥片鏃でやや深い抉りをもつ。８・９は黒色黒曜石製で浅い抉りをもち、切先を失う。10 はサヌカイト製で浅い抉りをもつ。11 は黒色黒曜石製の剥片鏃か。深い抉りをもち、一方の基部を失う。12 は黒色黒曜石製の基部である。13 は黒色黒曜石製の切先である。

磨製石鏃（第 69 図 14、第 26 表、図版 47－14）

細粒砂岩製の凹基無茎鏃である。深い抉りをもつ。切先を失う。

つまみ型石器？（第 69 図 15、第 26 表、図版 47－15）

黒色黒曜石製で、両側辺から深い抉りを入れている。

不明石製品（第 69 図 16、第 26 表、図版 47－16）

黒色黒曜石製で、剥片の１辺に調整を加えている。

石錐（第 69 図 17、第 26 表、図版 47－17）

黒色黒曜石製で、上部の形態は不明である。

石匙（第 70 図１、第 27 表、図版 47－18）

サヌカイト製で、横型である。表面に風化した自然面を残す。

打製石斧（第 70 図２～４、第 27 表、図版 46－８～10）

２は縞状緑色片岩ホルンフェルス製で、刃部を一部失う。３はアクチノ閃石片岩製で、基部を一部失うか。４は滑石製でやや反りがある。

石庖丁（第 70 図５～９、第 27 表、図版 48－１～５）

５は暗紫色凝灰質シルト岩製である。背部は直線的で、刃部はゆるやかに外弯する。穿孔が背部よりに近接して２つある。６は灰白色頁岩製で、背部・刃部ともにゆるやかに外弯する。穿孔が背部よりに離れて２つある。７は暗紫色凝灰質頁岩製である。背部は直線的で、刃部はゆるやかに外弯する。穿孔が背部よりに近接して２つある。８は珪質頁岩製である。背部はわずかに外弯し、刃部はゆるやかに外弯する。穿孔途中に割れた未成品か。９は暗紫色頁岩～粘板岩製で、端部を残すのみである。

磨石（第 71 図１～４、第 27 表、図版 47－19～22）

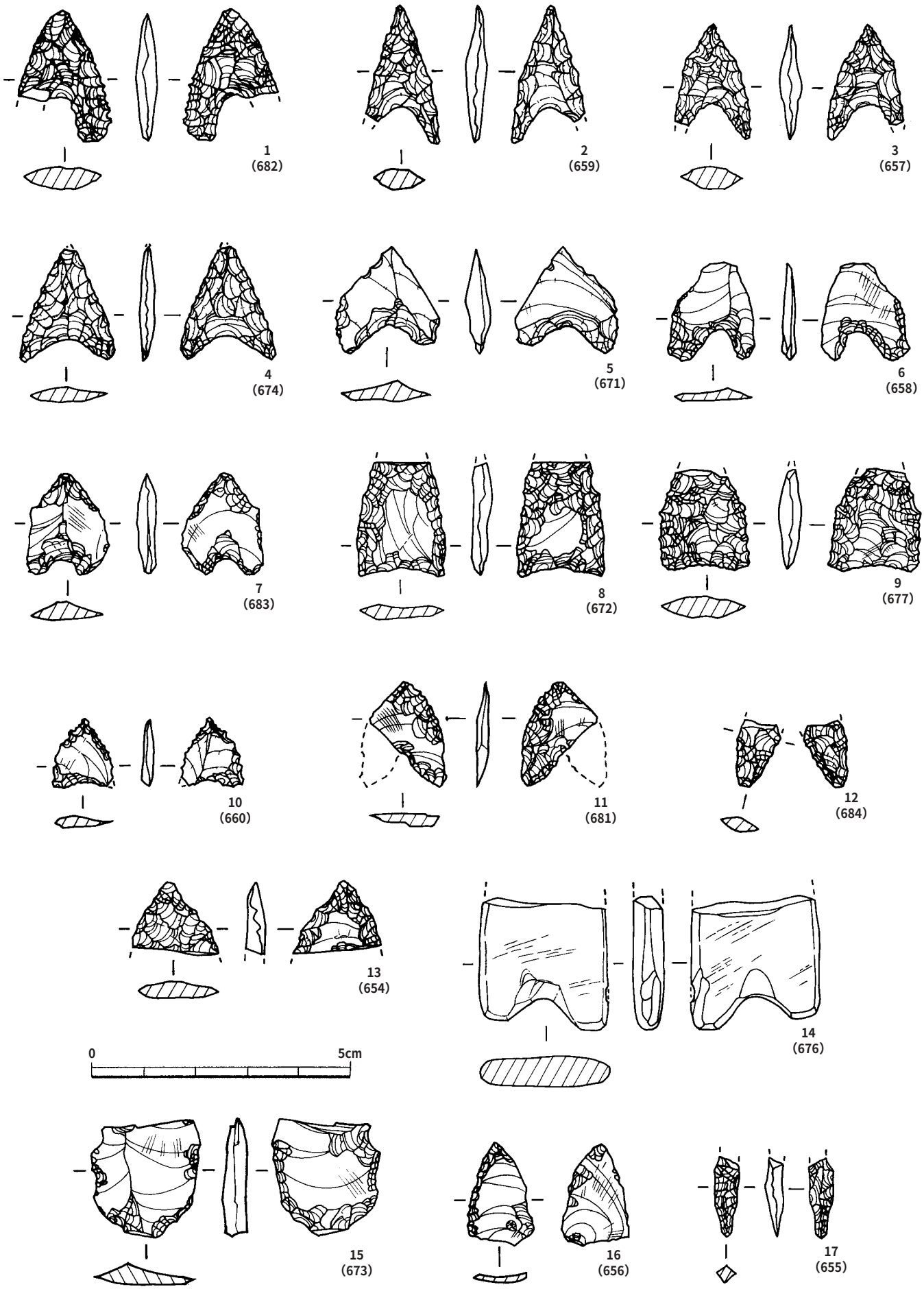
１は安山岩製である。裏面はかなり使い込まれている。敲打痕が各所にある。２・３は角閃石安山岩製で半円形を呈す。側面に敲打痕がある。４は優白色花崗岩製で側面に敲打痕がある。

柱状片刃石斧（第 71 図５、第 27 表、図版 46－11）

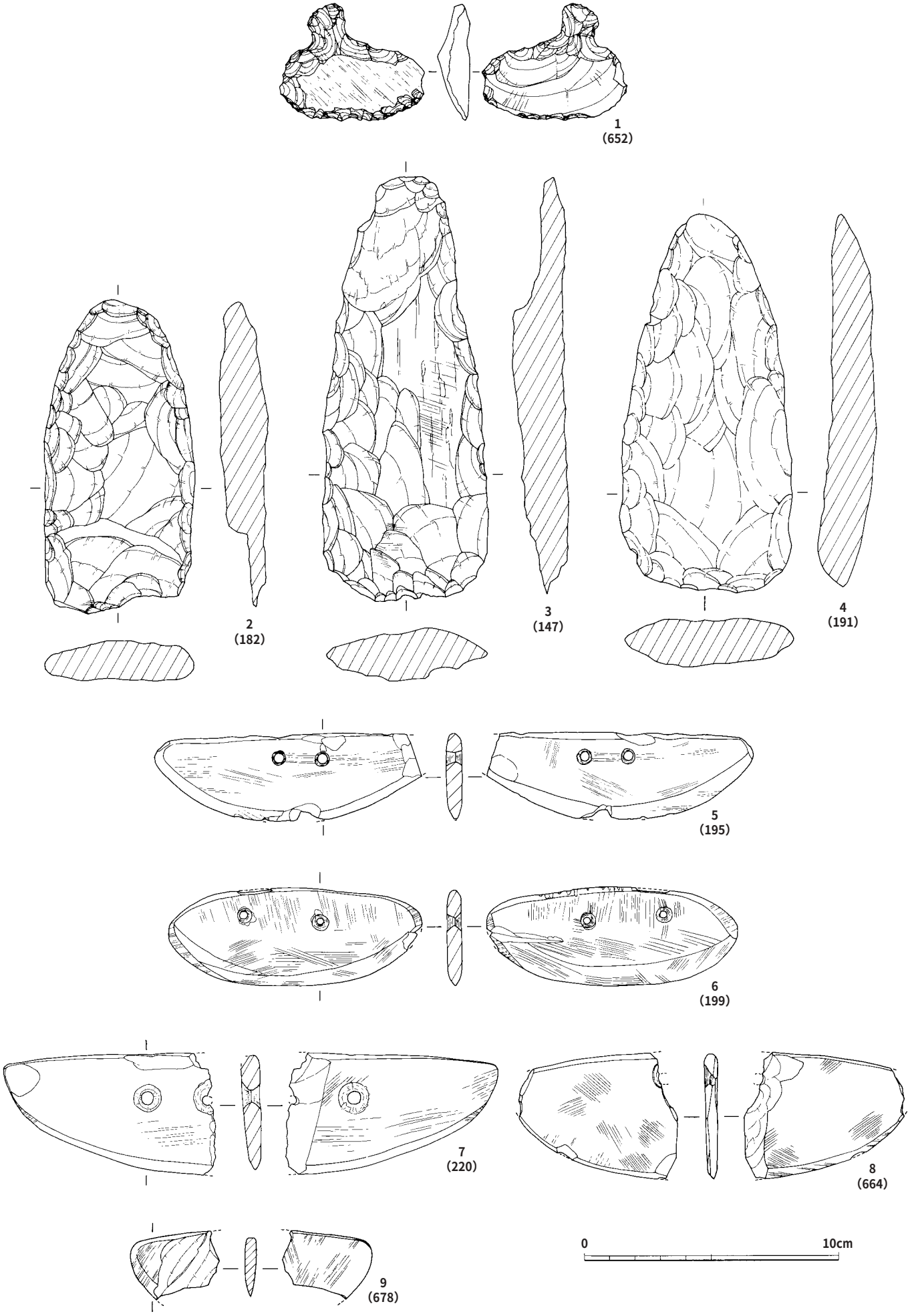
頁岩ホルンフェルス製である。基部を失う。

砥石（第 72・73 図、第 27 表、図版 48－６～16、49－１・２）

第 70 図１はサヌカイト製で撥形を呈す大形のものである。２は中粒角閃石安山岩製で二等辺三角形に近い形状を呈す。表面のみ使用する。３は中粒砂岩製である。元は撥形を呈するものか。４は黒色頁岩製で二等辺三角形に近い形状を呈す。薄いつくりで表裏２面を使用する。第 71 図１・



第69図　Ⅱ区谷部出土石器実測図①（原寸）



第 70 図　Ⅱ区谷部出土石器実測図②（S=1/2）

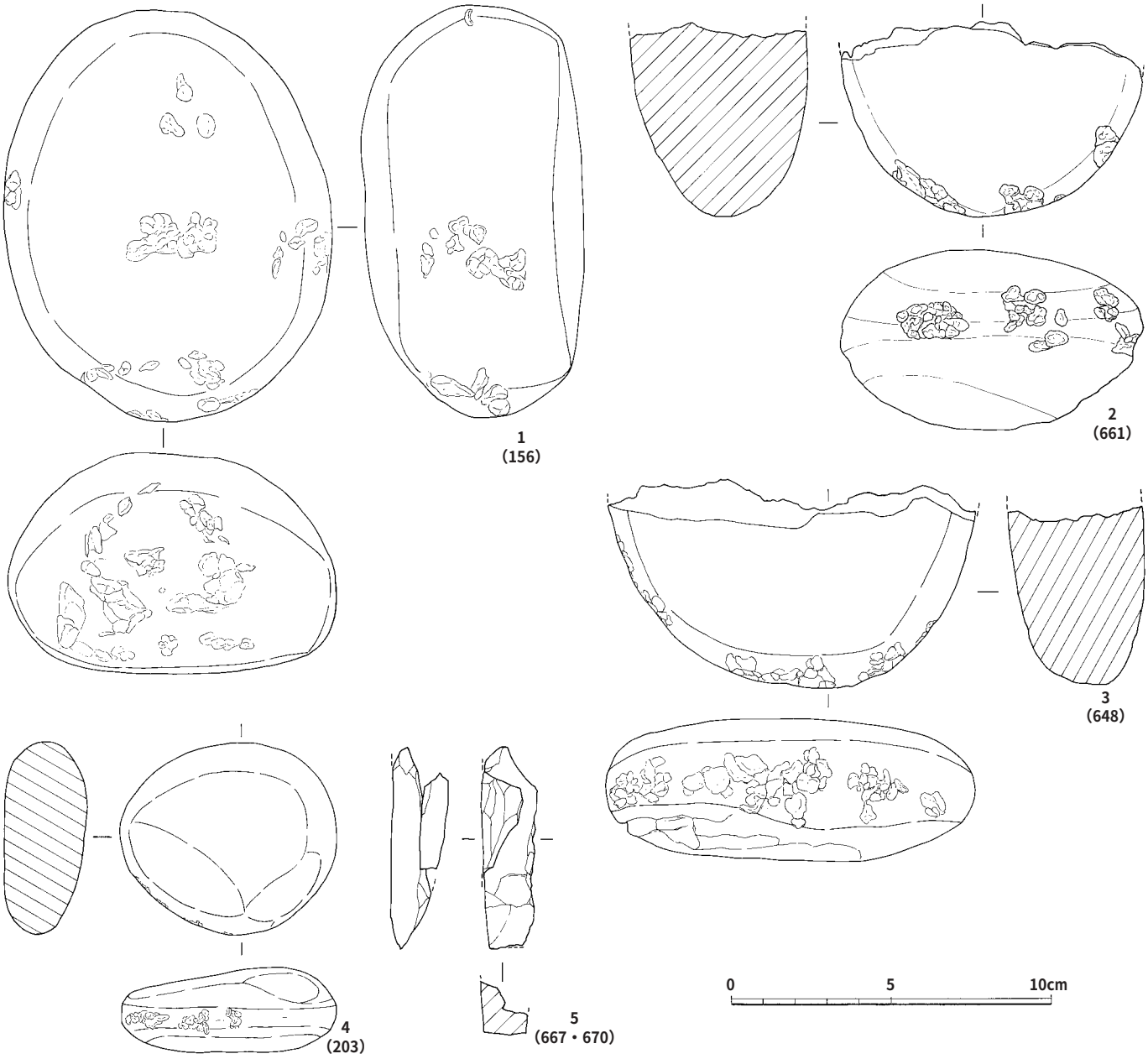
２は細粒砂岩製で、元は撥形を呈するものか。３は暗灰色頁岩製で磨製石斧の基部に近い形状を呈す。４は灰白色頁岩で撥形を呈す小形のものである。５は細粒砂岩製で正三角形に近い形状を呈す小形のものである。６は細粒閃緑岩～斑れい岩製で、元は円盤形を呈するものか。７は細粒砂岩製で、元は円盤形を呈すものか。側面のみ使用する。８は細粒長石斑岩製か。不定形を呈する小形のものである。表面のみ使用する。９はシルト岩製で特徴は７と同じである。

磨石？（第 74 図１、第 27 表、図版 49－４）

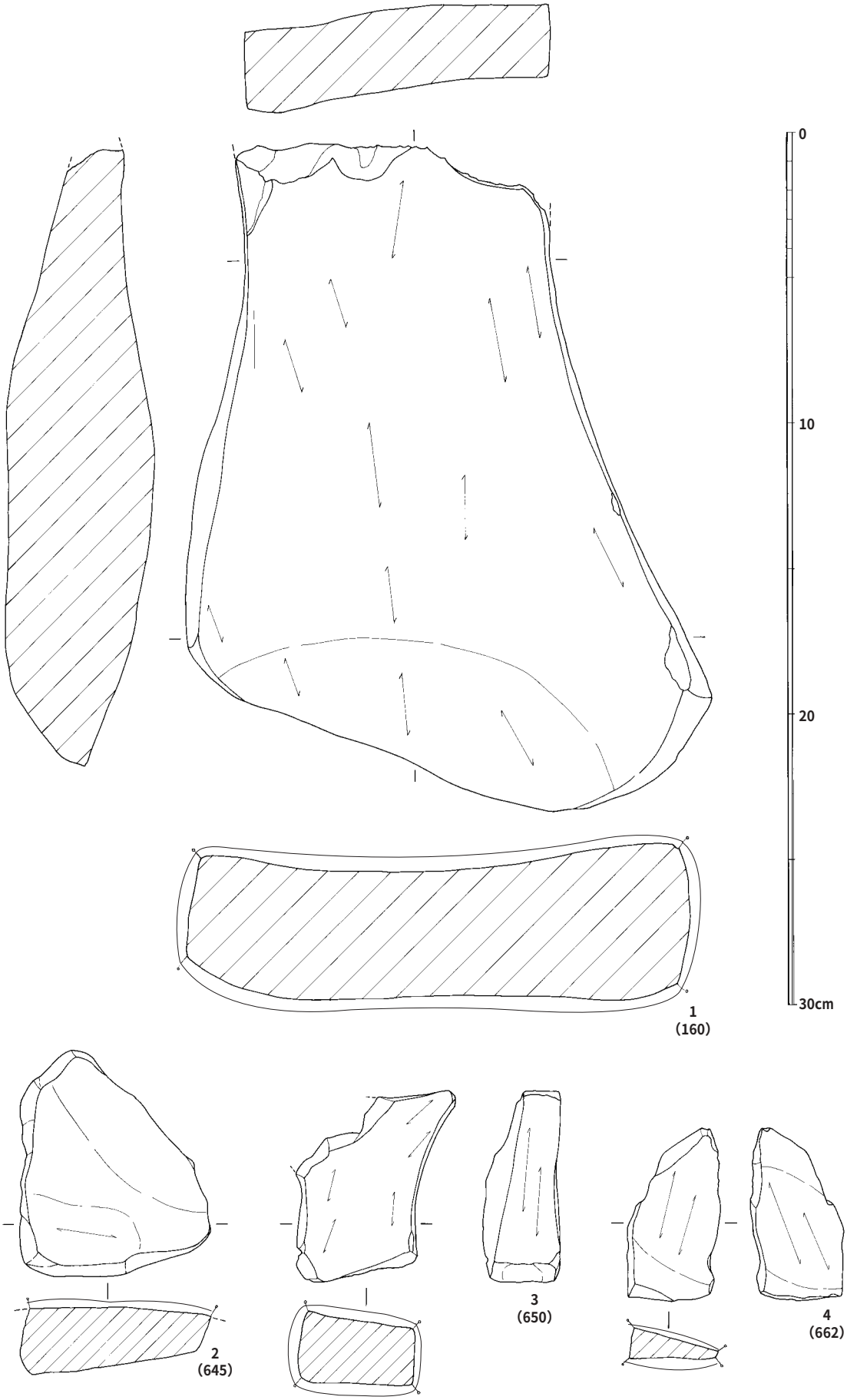
軽石製である。投弾か。表面を磨った形跡があるが明確ではない。

石錘（第 74 図２、第 27 表、図版 49－３）

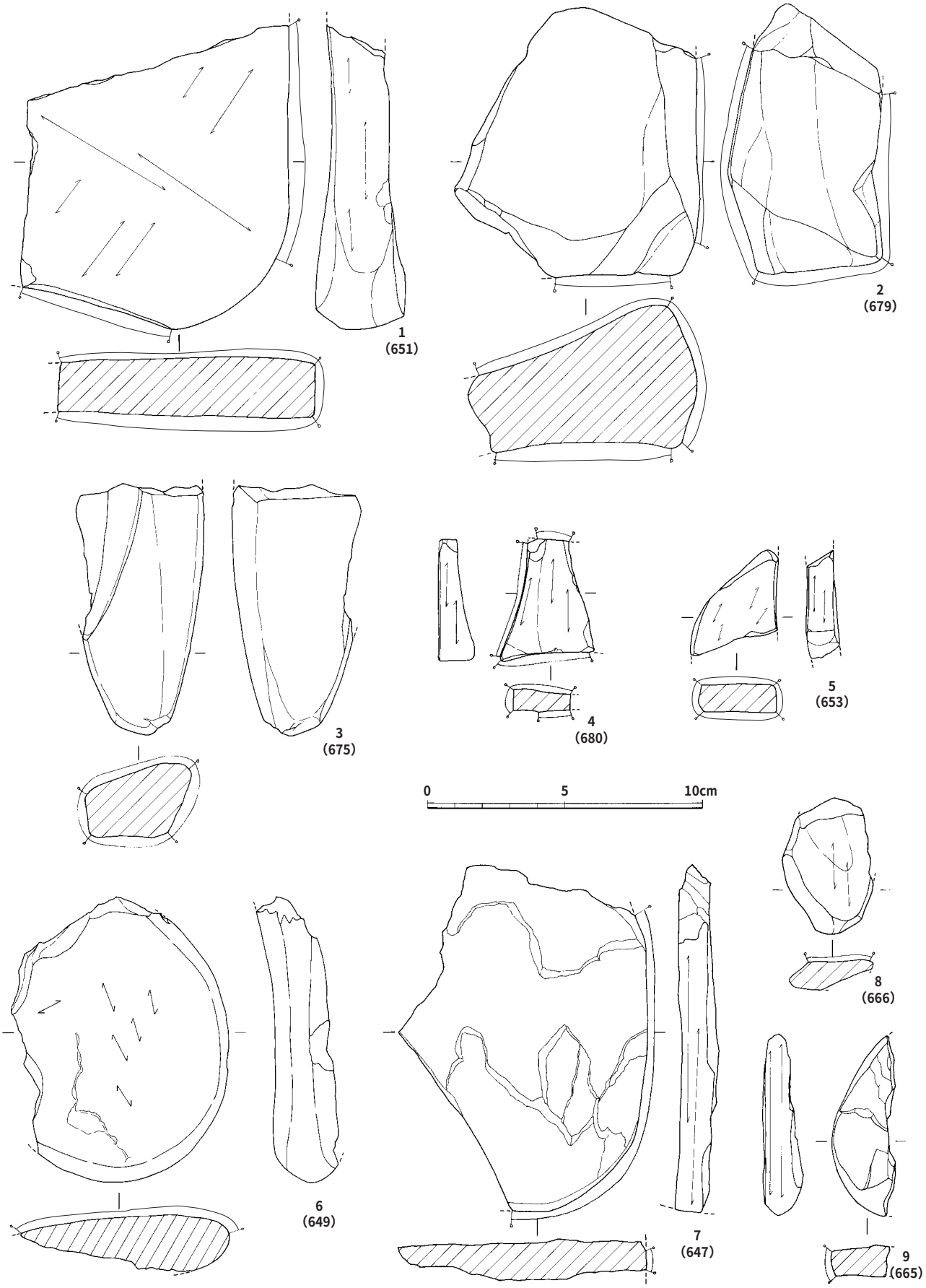
石製でない可能性がある。約１／２欠けているが、元は数珠形を呈すものか。表面は平滑で穿孔は１方向から行っている。



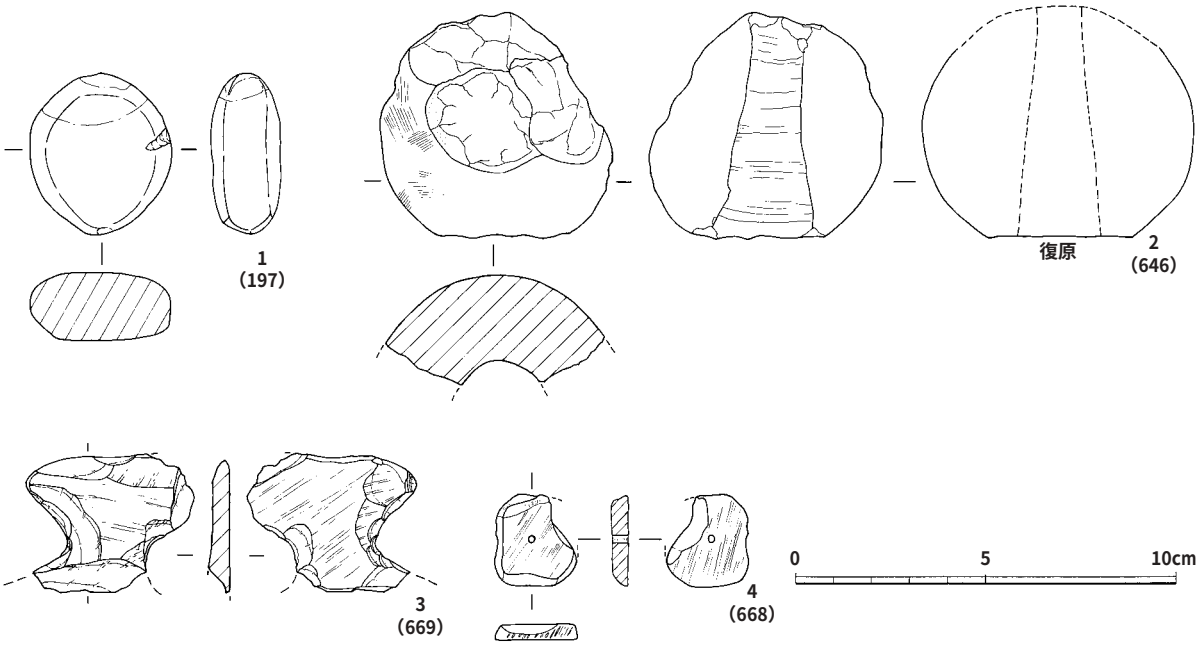
第 71 図　Ⅱ区谷部出土石器実測図③（S=1/2）



第 72 図　Ⅱ区谷部出土石器実測図④（S=1/2）



第 73 図　Ⅱ区谷部出土石器実測図⑤（S=1/2）



第 74 図　Ⅱ区谷部出土石器実測図⑥（S=1/2）

石庖丁？（第 74 図３、第 27 表、図版 49－５）

アクチノ閃石片岩製で、つまみの部分か。

有孔円盤（第 74 図４、第 27 表、図版 49－６）

滑石製である。方形盤の角を取った程度のつくりで、中央に孔が１つある。

第 26 表　Ⅱ区谷部出土石器観察表①

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	残存状況	法量(cm)					鑑定結果	遺物番号
						長	幅	厚	重量(g)	その他		
69－ 1	Ⅱ	8D	石器	石鏃	一方のカエリ欠	2.5	1.8+	0.4	1.2		黒色黒曜石	682
69－ 2	Ⅱ	5C	石器	石鏃	カエリの一部欠	2.7	1.4+	0.4	0.9		サヌカイト	659
69－ 3	Ⅱ	5C	石器	石鏃	カエリの一部欠	2.2	1.45+	0.45	0.9		サヌカイト	657
69－ 4	Ⅱ	6C	石器	石鏃	ほぼ完形	2.2+	1.8	0.3	0.9		サヌカイト	674
69－ 5	Ⅱ	6C	石器	石鏃	完形	2.05	1.95	0.45	1.2		サヌカイト	671
69－ 6	Ⅱ	5C	石器	石鏃	完形	1.9	1.7	0.3	0.6		黒色黒曜石	658
69－ 7	Ⅱ	8E	石器	石鏃	完形	1.95	1.6	0.4	0.9		黒色黒曜石	683
69－ 8	Ⅱ	6C	石器	石鏃	切先欠	2.2+	1.7	0.4	1.6		黒色黒曜石	672
69－ 9	Ⅱ	7C	石器	石鏃	切先欠	1.95+	1.75	0.45	1.5		黒色黒曜石	677
69－10	Ⅱ	6B	石器	石鏃	ほぼ完形	1.3	1.2+	0.25	0.3		サヌカイト	660
69－11	Ⅱ	7D	石器	石鏃	一方のカエリ欠	2.05	1.7	0.25	0.5		黒色黒曜石	681
69－12	Ⅱ	8E	石器	石鏃	一方のカエリ以外欠	1.3+	0.8+	0.3	0.3		黒色黒曜石	684
69－13	Ⅱ	5C	石器	石鏃	切先以外欠?	1.4+	1.7+	0.4	0.7		黒色黒曜石	654
69－14	Ⅱ	7C	石器	磨製石鏃	切先欠	2.6+	2.5	0.6	6.0		細粒砂岩	676
69－15	Ⅱ	6C	石器	つまみ型石器?	?	2.3	2.1	0.5	2.3		黒色黒曜石	673
69－16	Ⅱ	5C	石器	?	?	2.0	1.3	0.3	0.5		黒色黒曜石	656
69－17	Ⅱ	5C	石器	石錐	?	1.55+	0.5+	0.35	0.2		黒色黒曜石	655

第 27 表　Ⅱ区谷部出土石器観察表②

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	残存状況	法　量(cm)					鑑定結果	遺物番号
						長	幅	厚	重量(g)	その他		
70－ 1	Ⅱ	5C	石器	石匙	ほぼ完形	4.65	5.75	1.25	22.6		サヌカイト	652
70－ 2	Ⅱ	6C№49	石器	打製石斧	刃部欠?	12.4+	6.0	1.9	200.0		縞状緑色片岩ホルンフェルス：黒雲母の多い薄層をはさむ。	182
70－ 3	Ⅱ	5C№14	石器	打製石斧	?	16.7	6.6	2.0	280.0		アクチノ閃石片岩	147
70－ 4	Ⅱ	6C№59	石器	打製石斧	完形	14.9	6.7	1.9	290.0		滑石	191
70－ 5	Ⅱ	7D№63	石器	石庖丁	一部欠	10.65+	3.4	0.6	36.0	孔径 0.4	暗紫色凝灰質シルト岩：部分的に細粒砂質。	195
70－ 6	Ⅱ	8D№67	石器	石庖丁	完形	10.0	3.9	0.6	37.0	孔径 0.3	灰白色頁岩	199
70－ 7	Ⅱ	7C№88	石器	石庖丁	1/2欠	8.45+	4.85+	0.75	33.2	孔径 0.5	暗紫色凝灰質頁岩	220
70－ 8	Ⅱ	6C	石器	石庖丁	2/3欠	6.3+	5.0+	0.45	21.8		珪質頁岩	664
70－ 9	Ⅱ	7C	石器	石庖丁	小片	2.7+	3.6+	0.5	4.8		暗紫色頁岩～粘板岩	678
71－ 1	Ⅱ	6C№23	石器	磨石	完形	13.1	10.35	7.0	1460.0		安山岩：1～3mm大の斜長石と輝石の斑晶を含む。前者が後者より多い。	156
71－ 2	Ⅱ	6C	石器	敲石	1/2欠	6.0+	9.6+	5.6+	400.0		角閃石安山岩：長さ1mm以下～4mmの柱状角閃石と1～3mm大の斜長石の斑晶を含む。	661
71－ 3	Ⅱ	5C	石器	敲石	1/2欠	6.6+	11.6+	4.3+	420.0		角閃石安山岩：№643とほぼ同じ	648
71－ 4	Ⅱ	6C№71	石器	敲石	完形	6.05	6.8	2.7	154.7		優白色花崗岩：有色鉱物はほとんどなく、石英・長石からなる	203
71－ 5	Ⅱ	6C	石器	柱状片刃石斧	?	6.4+	1.8+	1.7+	19.0		頁岩ホルンフェルス	667・670
72－ 1	Ⅱ	6C№27	石器	砥石	完形	23.1	18.2	5.1	2650.0		サヌカイト?厚さ数mmの縞状構造を示す。	160
72－ 2	Ⅱ	5C	石器	砥石	?	7.8+	6.6+	2.5+	172.0		中粒角閃石安山岩	645
72－ 3	Ⅱ	5C	石器	砥石	?	6.6	5.5+	2.65	96.7		中粒砂岩	650
72－ 4	Ⅱ	6C	石器	砥石	?	6.0	3.2	1.1	24.2		黒色頁岩：風化面は暗紫色。	662
73－ 1	Ⅱ	5C	石器	砥石	?	11.15+	9.85+	3.25	440.0		細粒砂岩	651
73－ 2	Ⅱ	7D	石器	砥石	?	10.0+	9.0+	5.3	520.0		細粒砂岩	679
73－ 3	Ⅱ	7C	石器	砥石	?	8.2+	4.7+	4.2	150.0		暗灰色頁岩	675
73－ 4	Ⅱ	7D	石器	砥石	?	4.5+	3.5+	1.0	19.2		灰白色頁岩。凝灰質?	680
73－ 5	Ⅱ	5C	石器	砥石	?	3.9+	3.2	1.25	14.8		細粒砂岩	653
73－ 6	Ⅱ	5C	石器	砥石?	?	10.5+	8.0+	2.4+	252.8		細粒閃緑岩～斑れい岩	649
73－ 7	Ⅱ	5C	石器	砥石	?	12.8+	9.1+	1.35+	197.2		細粒砂岩	647
73－ 8	Ⅱ	6C	石器	砥石	?	5.0+	3.35+	1.1	21.1		細粒長石斑岩?	666
73－ 9	Ⅱ	6C	石器	砥石	?	6.6+	2.1+	1.2	25.4		シルト岩	665
74－ 1	Ⅱ	7D№65	石器?	磨石・投弾?	完形	4.3	3.7	1.85	36.6		軽石(安山岩質)：空隙は1mm±。ときに斜長石斑晶を含む。	197
74－ 2	Ⅱ	5C	石器?	石錘?	2/3欠	高6.0+	径6.2+	－	103.9	孔径 2.2～1.2	石?	646
74－ 3	Ⅱ	6C	石器	石庖丁?	?	4.5+	3.65+	0.5	12.3		アクチノ閃石片岩	669
74－ 4	Ⅱ	6C	石器	有孔円盤	1/4欠	2.45	2.2+	0.4	3.9	孔径 0.2	滑石	668
図無し	Ⅱ	6C№70	石器?	?	?	5.8	4.85	0.7	30.0		細粒角閃岩：細かい縞模様を示し、板状に割れる。	202

金属器（第 75・76 図、第 28 表、図版 49・50）

袋状鉄斧（第 75 図１・２、第 28 表、図版 49－７・８）

１は刃先がわずかに撥状に開く。２は刃先が丸い。

鋳造鉄斧（第 75 図３、第 28 表、図版 49－10）

刃先が撥状に開く。袋部の上面は梯形を呈す。

やりがんな？（第 75 図４、第 28 表、図版 49－11）

断面形が凸状を呈す。やりがんなの基部か。

青銅製鋤先（第 75 図５、第 28 表、図版 49－９）

残りが悪く、刃部の多くを失う。

鉄製鋤先（第 75 図６～８、第 28 表、図版 49－12、50－１・２）

幅は異なるが、いずれも両端を折り返している。**6** は折り返し部分に木質片が入っていた。**7** は使い込まれたせいか、刃が減って内弯している。

鉄製手鎌（第 75 図９・10、第 28 表、図版 50－３・４）

いずれも端部を折り返している。直線刃である。

鉄鎌（第 76 図１～３、第 28 表、図版 50－５～７）

いずれも切先を失う。基部を折り返しているが、３は折り返し方向から左利き用と考えられる。

鉄製刀子（第 76 図４・５、第 28 表、図版 50－８・９）

４は刃部がかなり厚い。５は茎部が刃部にむかって幅広になるため、関が明確でない。

鉄製素環頭刀子（第 76 図６、第 28 表、図版 50－10）

刃部の大半を失うが、断面観察からかなり鋭利なものであったとみられる。

沓巻（第 76 図７、第 28 表、図版 50－12）

天地は不明であるが、どちらかの端部か。鉄鏃の茎に糸を巻き、矢柄に装着したあと桜皮で固定したと考えられるが、材質は不明である。

鉄鏃（第 76 図８、第 28 表、図版 50－11）

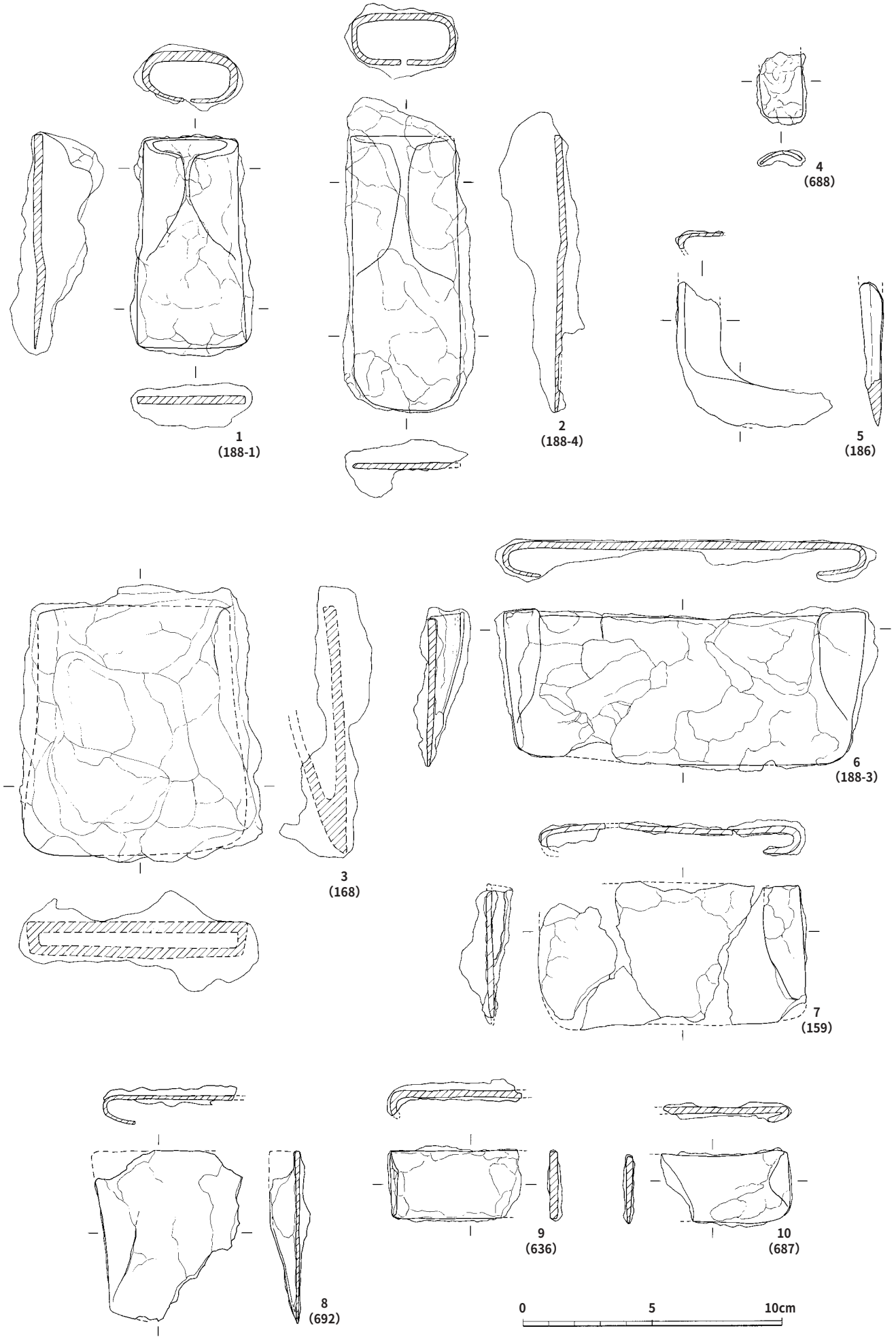
凹基無茎鏃で深い抉りをもつ。矢柄に装着するための穿孔が中央に２つある。

鉄片（第 76 図９～11、第 28 表、図版 50－13～15）

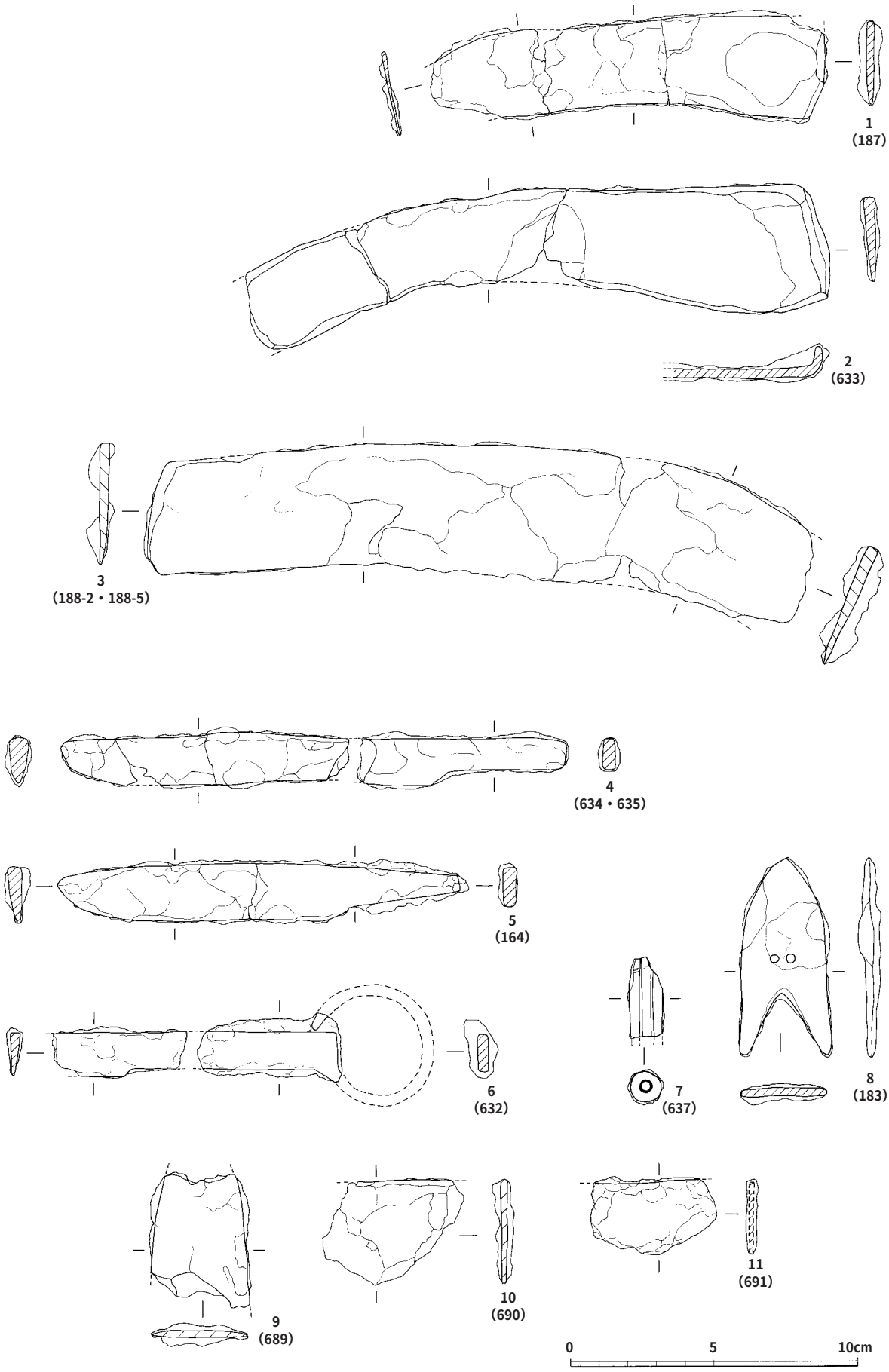
９は切先に近い部分か。10・11 は薄い板状で、１辺は直線的である。

第 28 表　Ⅱ区谷部出土金属器観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法量(cm)					備考	遺物番号
					長	幅	厚	重量(g)	その他		
75-1	Ⅱ	6CNo.55	鉄器	斧	8.3	4.3	(0.4)	134.6			188－1
75-2	Ⅱ	6CNo.55	鉄器	斧	12.35	5.2	0.7	213.6			188－4
75-3	Ⅱ	6CNo.35	鉄器	斧（鋳造）	10.55	(8.7)	(0.5)	432.4			168
75-4	Ⅱ	5C	鉄器	やりがんな？	2.55	1.6	0.15	6.5			688
75-5	Ⅱ	6CNo.53	青銅器	鋤先	5.6+α	6.1+α	0.6+α	23.8			186
75-6	Ⅱ	6CNo.55	鉄器	鋤先	5.9	14.1	0.3	137.6			188－3
75-7	Ⅱ	6CNo.26	鉄器	鋤先	5.8	10.5	0.3	49.2			159
75-8	Ⅱ	6C	鉄器	鋤先	6.6+α	5.8+α	0.2	18.8			692
75-9	Ⅱ	7C	鉄器	手鎌	5.1+α	2.6	0.3	14.7			636
75-10	Ⅱ	5C	鉄器	手鎌	5.05	2.7	0.25	13.7			687
76-1	Ⅱ	6CNo.54	鉄器	鎌	13.7+α	3.5+α	(0.3)	46.8			187
76-2	Ⅱ	6C	鉄器	鎌	20.6+α	4.5	0.4	83.5			633
76-3	Ⅱ	6CNo.55	鉄器	鎌	23.4+α	4.8	0.35	198.2			188－2・5
76-4	Ⅱ	6C	鉄器	刀子	10.1+7.3	1.65	0.7	40.1	茎部幅 1.1		634・635
76-5	Ⅱ	6CNo.31	鉄器	刀子	14.2	3.0	0.5	38.4	茎部幅 1.4		164
76-6	Ⅱ	6C	鉄器	素環頭刀子	4.75+4.6	1.5	0.35	24.7	茎部幅 1.3		632
76-7	Ⅱ	7D	鉄器	沓巻	2.85+α	－	－	3.9	直径 1.1		637
76-8	Ⅱ	6CNo.50	鉄器	鏃	6.9	3.2	0.3	20.4			183
76-9	Ⅱ	6C	鉄器	破片	4.75+α	3.4+α	0.3	13.6			689
76-10	Ⅱ	6C	鉄器	破片	3.7+α	5.0+α	0.25	9.1			690
76-11	Ⅱ	6C	鉄器	破片	2.6+α	4.45	0.15	8.7			691



第 75 図　Ⅱ区谷部出土金属器実測図①（S=1/2）



第 76 図　Ⅱ区谷部出土金属器実測図②（S=1/2）

谷 部 以 外（第40図）

ＳＤ８・９の他、遺構らしい遺構は見当たらなかった。堆積状況を観察するためＴＬ１～３の３本のトレンチを設定した（第40図）。いずれも砂・シルト・粘土が互層となり、段丘側から流れ込む形で厚く堆積していた。

遺物は多量に出土したが層位はバラバラで、特定できなかった。

土器・土製品（77～79図・第29・30表・図版43～46）

二重口縁壷（第77図１・２、第29表、図版43－17、44－１）

１は凸レンズ状にふくらむ底をもつ。胴部最大径に１条の工具の木口で刻み目を入れた三角突帯がある。２は口縁が直立に近い角度で内屈し、わずかに内弯する。

壷（第77図３、第29表、図版43－18）

肩部に１条の幅の広い台形突帯があり、工具の木口で刻み目を入れている。またその直下には列点文を施文している。

長頸壷（第77図４、第29表、図版44－２）

平底で、胴部最大径が中位で強く張り算盤玉形を呈す。頸部はしまりが強く、わずかに外傾する。

甕（第77図５～12、第29表、図版44－３～10）

５は凸レンズ状にふくらむ底をもつ。長胴で最大径は中位にあり、頸部のしまりは強い。６はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。胴部最大径は中位にある。頸部のしまりは弱く、口縁はやや外傾する。胴部中位に１条の刻み目の入った三角突帯がある。７は平底で胴部最大径は中位やや上にある。頸部のしまりはやや弱く、口縁はやや外傾する。８はほぼ平底で胴部最大径は上位にあり、あまり張らない。頸部のしまりはやや強く、口縁はやや長くやや外傾する。９はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。胴部最大径は中位にある。頸部のしまりは弱く、口縁は短く外反する。10はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。胴部最大径は中位にある。頸部のしまりは強く、口縁は短くやや外傾する。11は平底で胴部最大径は中位にある。頸部のしまりはやや強く、口縁はやや外傾する。12はわずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。胴部最大径は中位にある。頸部のしまりはやや強く、口縁は短くやや外傾する。

壷（第78図１、第29表、図版44－11）

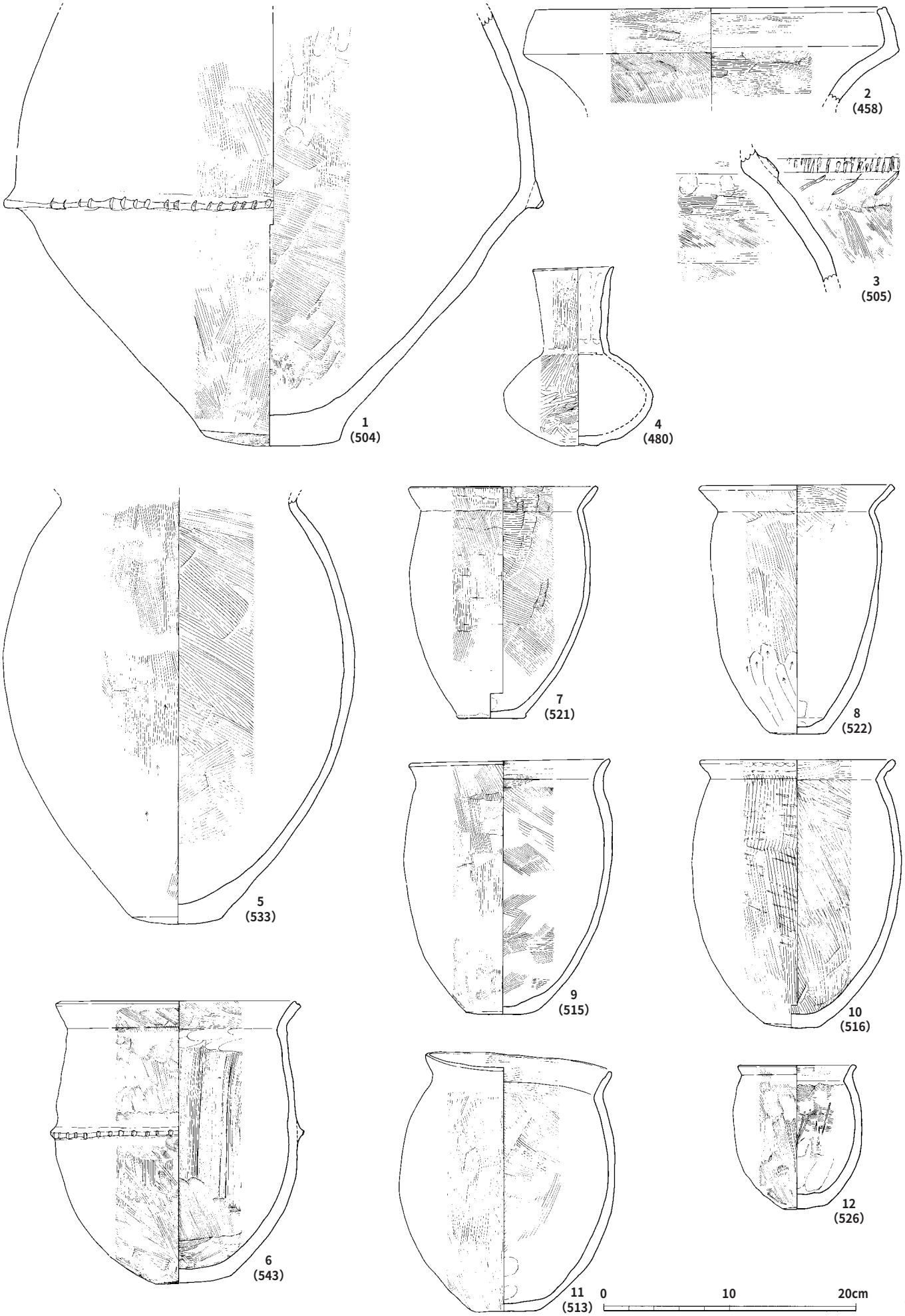
わずかながら凸レンズ状にふくらむ底をもつ。球形胴で頸部のしまりはやや強く、口縁は短く外反する。

台付壷（第78図２、第29表、図版44－12）

丸底で胴部最大径を中位にもつ。胴部最大径は中位にある。頸部のしまりはやや強く、口縁はやや外傾する。

鉢（第78図３～６、第29表、図版44－13・14、45－１・２）

３は平底で胴部は強く内弯する。口縁は内傾し高さは一定しない。４はレンズ上にふくらむ底部をもつ。胴部は内弯しながら外へ開き、口縁はやや外傾する。５は凸レンズ状にふくらむ底をもち、直線的に外へ開く。６は丸底でやや内弯しながら外へ開く。



第 77 図　Ⅱ区谷部以外出土土器実測図①（S=1/4）

沓形器台（第 78 図７、第 29 表、図版 45－３）

庇状突起をもつタイプである。脚部は直線的に外へ開く。受部中央に穿孔が１つある。

台付鉢（第 78 図８、第 29 表、図版 45－４）

鉢部はやや内弯しながら外へ開く。台部は短く強く外へ開く。

手捏ね土器（第 78 図９、第 29 表、図版 45－５）

鉢形である。ほぼ平底でやや内弯しながら外へ開く。

二重口縁壷（第 79 図１～５、第 30 表、図版 45－６～10）

１は口縁がやや外反する。内面口縁端部に波状文がある。２は口縁が強く外反する。外面下位に竹管文・屈折部に刻み目がある。３は頸部のしまりが強く、やや外傾し上位で強く外反する。口縁はやや外反する。４は頸部が直立から強く外反し、口縁は直立する。５は頸部のしまりが強く、わずかに内傾する。

壷（第 79 図６～８・10・11、第 30 表、図版 45－11～13・15・16）

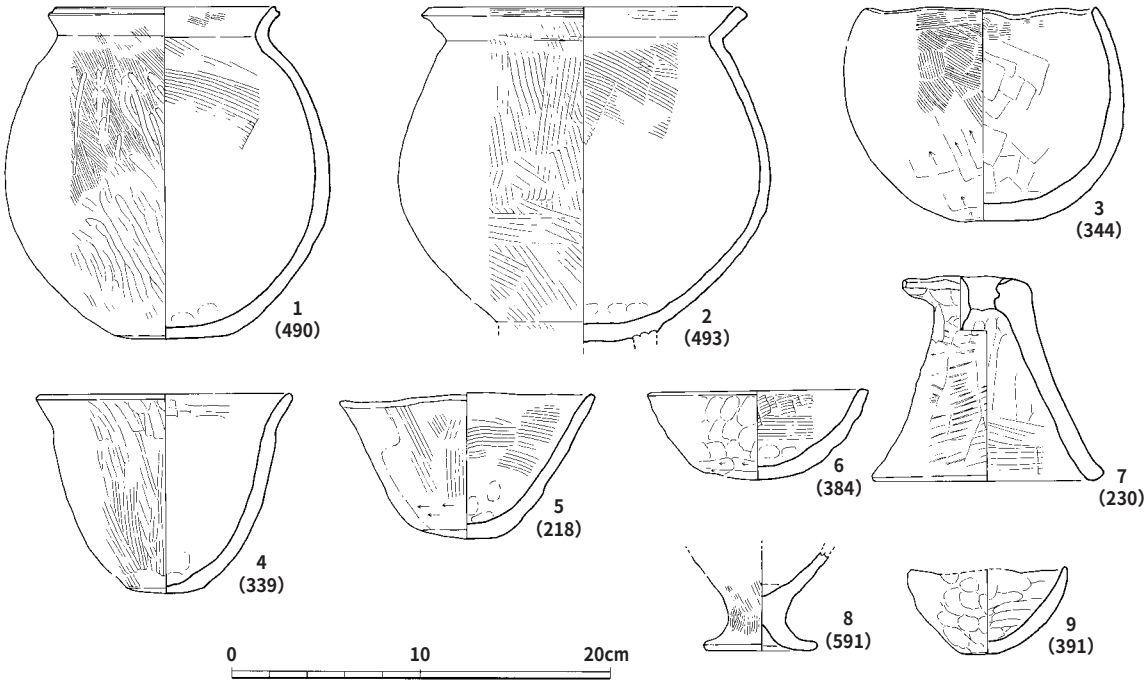
６は長胴で頸部のしまりが強い。７は二重口縁の退化したものか。やや外傾から上位で直立し、端部は短くやや外反する。８は頸部のしまりが強く、口縁はやや長くやや外傾し、上位でさらに外傾する。10 は頸部のしまりが強く、口縁はやや長くやや外反する。11 は丸底で球形胴である。頸部のしまりは強い。口縁はやや長くやや外傾する。

直口壷（第 79 図９・12、第 30 表、図版 45－14、46－１）

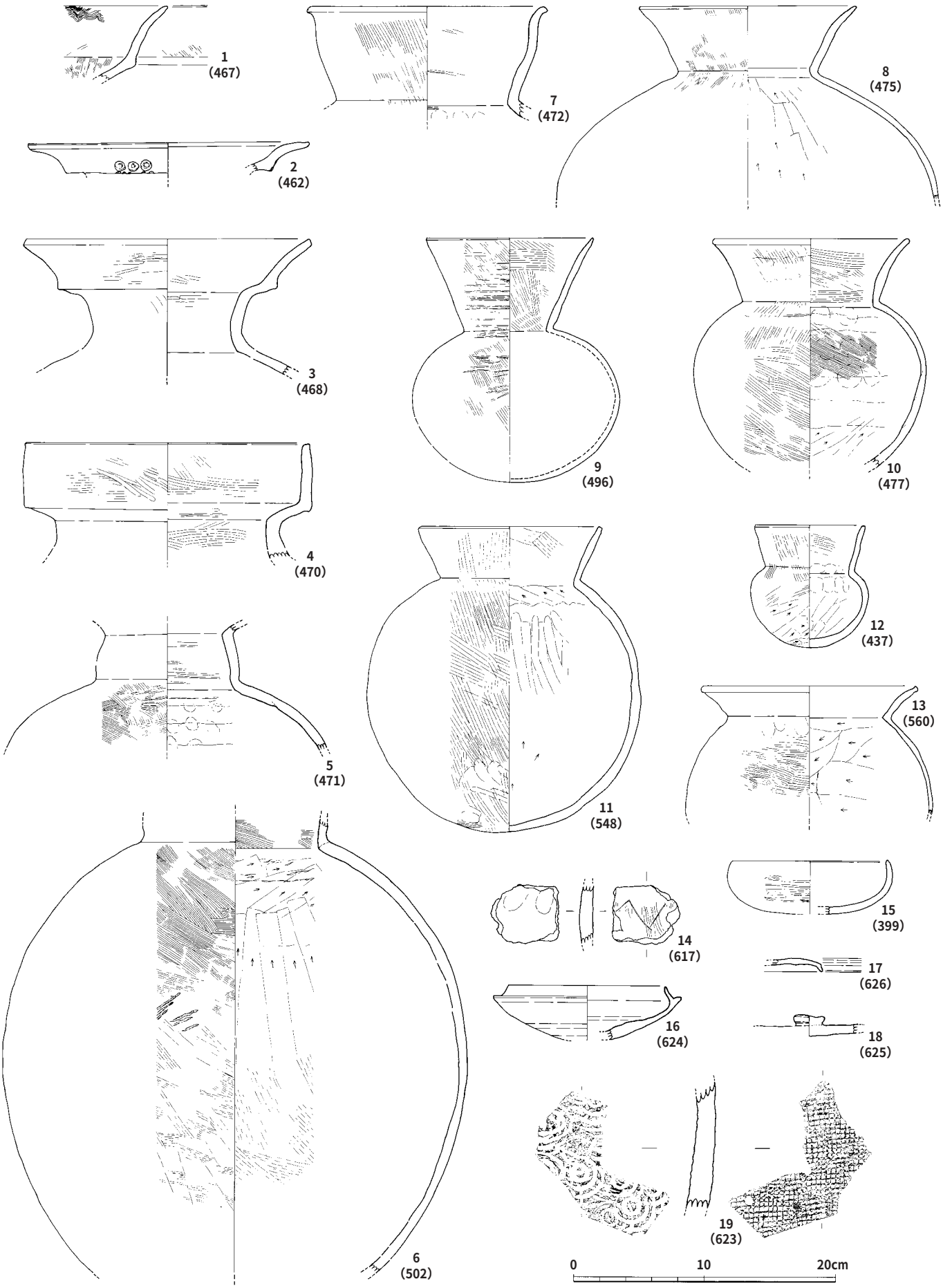
９は畿内系である。丸底で胴部最大径は中位にある。頸部のしまりは強く、長くやや外傾する。12 は丸底で胴部最大径を上位にもつ。頸部のしまりはやや強く、口縁は長くわずかに外傾する。

甕（第 79 図 13、第 30 表、図版 46－２）

畿内系で薄いつくりである。頸部はしまりが強く、口縁は外傾し端部はつまみ出される。



第 78 図　Ⅱ区谷部以外出土土器実測図②（S=1/4）



第 79 図　Ⅱ区谷部以外出土土器実測図③（S=1/4）

不明土製品（第 79 図 14、第 30 表、図版 45－17）

土製円盤か。外面に線刻がある。

埦（第 79 図 15、第 30 表、図版 45－18）

丸底から内弯しながら立ち上がり、口縁はわずかに内傾する。

須恵器（第 79 図 16～19、第 30 表、図版 46－３～５）

16 は坏身か。立ち上がりは短く内傾する。ヘラ記号がある。17 は蓋で端部を折り曲げている。18 は蓋で釦状のつまみがついている。19 は甕か。内面に青海波、外面に格子目のタタキがある。

第 29 表　Ⅱ区谷部以外出土土器観察表①　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量（cm）			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
77－1	Ⅱ	4D	壷		底径11.10 胴部径42.80	(34.50)	内.にぶい黄橙・灰黄褐　外.浅黄橙	微細粒の石英・角閃石を少量,6.0mm以下の砂粒を含む	良	内.指ナデ→ハケ・ハケ・ナデ 外.ハケ・ハケ→ナデ・ハケ	内外.黒斑 突帯(刻目)有り	504
77－2	Ⅱ	4E	二重口縁壷	(27.80)		(7.60)	内外.にぶい黄橙	0.5～4.0mmの砂粒,微細粒の角閃石を含む	良	内.ハケ・ハケ→ナデ・ハケ　外.ハケ	内外.煤	458
77－3	Ⅱ	3D	壷			(10.50)	内.明赤褐　外.橙	3.0mm以下の長石・石英・白色粒を多量,1.0mm以下の角閃石を少量含む	良	内.ハケ→ナデ・指頭圧痕→ハケ・ハケ 外.ハケ→ナデ・ハケ	突帯(刻目)有り・列点文有り	505
77－4	Ⅱ	1TB	長頸壷	(6.50)	胴部径11.80	14.20	内外.にぶい橙	雲母を少量,0.5～2.0mmの砂粒・白色粒を含む	良	内.ナデ・指ナデ・ハケ　外.ナデ→ミガキ・ハケ→ミガキ・ミガキ・ハケ→ミガキ・ハケ→ケズリ→ミガキ・ナデ→ミガキ	外.黒斑	480
77－5	Ⅱ	4D	甕		底径7.10 胴部径27.90	(33.95)	内.にぶい黄橙 外.にぶい黄橙・灰褐	3.0mm以下の砂粒を多量,0.5～2mmの雲母・角閃石を少量含む	良	内.ハケ・ナデ 外.ハケ・タタキ→ハケ・ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑・煤	533
77－6	Ⅱ	1TB	甕	19.40	6.10	22.40	内.にぶい褐・灰褐 外.にぶい褐・にぶい橙	2.0mm以下の砂粒・小石粒・石英・角閃石を含む	良	内.ナデ・ハケ・指ナデ・ハケ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・ナデ・ハケ	外.黒斑 突帯(刻目)有り	543
77－7	Ⅱ	1TB	甕	15.00	5.50	18.40	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量含む	良	内.ハケ・ハケ→ナデ・指頭圧痕→ナデ 外.ハケ・ハケ→ナデ・ナデ	外.黒斑	521
77－8	Ⅱ	3T	甕	(15.50)	4.50	19.80	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒,微細粒の雲母・赤褐色粒を含む	良	内.ナデ・ハケ・ナデ・工具ナデ・指頭圧痕　外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・工具ナデ・ナデ	内外.黒斑 外.煤	522
77－9	Ⅱ	4D	甕	16.00	底径5.80 胴部径16.50	20.30	内外.にぶい黄橙	0.5～1.0mmの赤褐色粒・白色粒を多量含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ケズリ→ハケ・ナデ・ハケ	外.黒斑・煤	515
77－10	Ⅱ	1T	甕	(15.50)	底径4.50 胴部径16.60	21.20	内外.にぶい橙	0.5～1.0mmの砂粒を少量含む	良	内.ナデ・ハケ・ナデ 外.ナデ・タタキ→ハケ・ハケ→ナデ	内外.黒斑	516
77－11	Ⅱ	1TB	甕	14.85	底径4.85 胴部径17.10	20.60	内外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒・白色粒を多量に含む	良	内.ハケ→ナデ・ハケ・ハケ→ナデ・ナデ 外.ナデ・ハケ・ケズリ	内外.黒斑 外.煤	513
77－12	Ⅱ	1TB	甕	9.50	底径3.60 胴部径10.20	11.40	内.黄灰　外.灰黄	0.5～3.0mmの砂粒を多量,雲母を少量含む	良	内.ハケ→ナデ・指ナデ→ハケ→ナデ・ミガキ・指圧痕→ナデ 外.ハケ→ナデ・ハケ・ハケ→ナデ	外.黒斑	526
78－1	Ⅱ	1TB	壷	12.30	底径5.90 胴部径17.20	17.55	内外.浅黄	0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ→ミガキ・ミガキ・ナデ	外.黒斑・赤彩？	490
78－2	Ⅱ	2D	台付壷	(17.30)	胴部径(19.80)	(17.90)	内外.にぶい黄橙	0.5～3.0mmの砂粒を含む	良	内壷.ハケ・指圧痕→ナデ　台.ナデ 外壷.ハケ		493
78－3	Ⅱ	4D	鉢	(12.40)	4.90	11.30	内外.にぶい橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・工具ナデ 外.ナデ・ハケ・ハケ→ケズリ・ケズリ・ケズリ→ナデ	外.黒斑・赤彩？	344
78－4	Ⅱ	4D	鉢	(13.20)	4.00	10.60	内外.にぶい橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量,微細粒の雲母を少量含む	良	内.ナデ・ハケ？・ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ・ナデ		339
78－5	Ⅱ	5DNo86	鉢	13.50	4.80	7.70	内外.にぶい黄橙	0.1～5.5mmの長石・石英を多量,1.0mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内.ナデ・ハケ・ナデ・指頭圧痕 外.ナデ・ハケ・工具ナデ	外.黒斑	218
78－6	Ⅱ	4D	鉢	(11.70)		4.80	内外.にぶい黄橙	0.5～5.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ナデ 外.ナデ・指圧痕→ケズリ・ナデ	外.黒斑	384
78－7	Ⅱ	3D	沓形器台	受部径 6.70	裾部径12.30	10.90	内外.にぶい黄橙	1.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ・指ナデ・ハケ・ナデ 外.指圧痕・ナデ・タタキ・ナデ	外.黒斑 穿孔有り	230
78－8	Ⅱ	3D	台付鉢		(6.10)	(5.30)	内外.浅黄橙	雲母・赤褐色粒を少量,0.5～2.0mmの砂粒を含む	良	内鉢.ナデ？　台.指ナデ 外鉢.ハケ　台.ハケ・指ナデ		591
78－9	Ⅱ	4D	手捏ね土器	(8.30)		4.60	内外.にぶい黄橙	0.5～4.0mmの砂粒含む	良	内.指圧痕→ナデ・指ナデ 外.指圧痕→ナデ	外.黒斑	391

第30表　Ⅱ区谷部以外出土土器観察表②　　法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
				口径	底径	器高						
79－1	Ⅱ	5D	二重口縁壷			(5.70)	内.にぶい赤褐 外.橙	1.0mm以下の雲母・白色粒を含む	良	内.ハケ→ナデ 外.ナデ・ハケ・ナデ	内.波状文有り 内.黒斑	467
79－2	Ⅱ	5D	二重口縁壷	(21.60)		(2.30)	内外.橙	0.5～2.0mmの砂粒を多量に含む	良	内外.ナデ	外.竹管文・刻目有り	462
79－3	Ⅱ	2C	二重口縁壷	(22.00)		(10.50)	内外.橙	0.5～3.0mmの砂粒を多量,0.5～2.0mmの赤褐色粒を含む	良	内.ミガキ・ナデ　外.ミガキ	内.黒斑？	468
79－4	Ⅱ	4D	二重口縁壷	21.80		(8.60)	内.灰黄褐 外.にぶい黄橙	2.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ナデ→ミガキ？・ハケ→ナデ→ミガキ・ハケ→ナデ　外.ナデ→ミガキ？・ハケ→ナデ→ミガキ・ナデ	内.煤？　外.黒斑	470
79－5	Ⅱ	2D	二重口縁壷			(9.70)	内外.にぶい黄橙	雲母を少量,2.0mm以下の砂粒を含む	良	内.ハケ→ナデ・ケズリ→ナデ 外.ナデ･ナデ→ミガキ？・ハケ→ミガキ？	内外.煤	471
79－6	Ⅱ	2C	壷		胴部径35.50	(34.70)	内.灰黄褐・黄灰 外.橙	0.2～3.0mmの砂粒を多量,雲母・角閃石を少量含む	良	内.ハケ・ナデ・工具ナデ・ケズリ・ハケ 外.ナデ・ハケ・タタキ→ハケ・ハケ→工具ナデ？	外.黒斑・煤	502
79－7	Ⅱ	2C	壷	(18.40)		(8.50)	内外.浅黄橙	赤褐色粒を少量,3.0mm以下の砂粒・雲母を含む	良	内.ハケ→ナデ・ナデ　外.ハケ→ナデ		472
79－8	Ⅱ	2C	壷	(16.60)		(14.70)	内.灰黄褐・橙 外.橙	1.0～3.0mmの砂粒を多量に含む	良	内.ナデ・指圧痕→ナデ→ケズリ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ナデ？	内.黒斑？	475
79－9	Ⅱ	2C	直口壷	12.80	胴部径15.90	13.70	内外.橙	微細粒の砂粒を含む	良	内.ハケ 外.ハケ→ミガキ・ハケ→ナデ･ナデ	外.黒斑	496
79－10	Ⅱ	3D	壷	(15.00)	胴部径(17.80)	(17.50)	内.にぶい黄橙 外.にぶい橙	0.5～2.0mmの砂粒,微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ・ハケ・ナデ・ハケ・ケズリ 外.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ	外.煤	477
79－11	Ⅱ	2C	甕	13.60	胴部径20.90	23.30	内外.にぶい黄橙	0.2～1.5mmの砂粒を多量,石英を含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ケズリ 外.ナデ･ハケ→ナデ・ハケ	外.黒斑・赤彩・煤	548
79－12	Ⅱ	1TA	壷	8.40	胴部径9.05	9.40	内外.にぶい橙	4.0mm以下の砂粒・白色粒を多量,0.5～1.0mmの角閃石を少量含む	良	内.ハケ→ナデ・指圧痕・指ナデ 外.ハケ→ナデ・ハケ→ケズリ	内外.黒斑 外.煤	437
79－13	Ⅱ	2C	甕	(16.60)		(9.90)	内外.橙	0.1～3.0mmの長石・石英を多量,0.5mm以下の雲母,0.5mm前後の赤色粒を含む	良	内.ナデ・ケズリ 外.ナデ・タタキ→ハケ→ナデ	外.煤	560
79－14	Ⅱ	3D	不明			(4.50)	内.にぶい黄橙 外.橙	0.1～2.8mmの長石・石英を多量,0.3mm以下の雲母・赤色粒を少量含む	やや不良	内.指頭圧痕？　外.ハケ	外.線刻有り	617
79－15	Ⅱ	2T		(11.90)		(4.10)	内外.にぶい黄橙	微細粒の雲母を含む	良	内.ナデ　外.ナデ・ミガキ	内外.黒彩 外.黒斑	399
79－16	Ⅱ	2C	須.坏身			(4.10)	内外.灰	2.0mm以下の砂粒を少量,微細粒の雲母を含む	良	内.ヨコナデ・ナデ 外.ヨコナデ・ヘラケズリ	外 自然釉 ヘラ記号有り	624
79－17	Ⅱ	2B	須.蓋			(1.05)	内外.灰	1.0mm以下の砂粒を少量含む	良	内.ヨコナデ・ナデ 外.ヨコナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	内外.自然釉	626
79－18	Ⅱ	5D	須.蓋	つまみ径 2.40		(1.70)	内外.灰白	0.8mm以下の砂粒を少量含む	良	内.ナデ・ヨコナデ 外.ヨコナデ	外.自然釉 つまみ有り	625
79－19	Ⅱ	5D	須.甕？			(9.70)	内外.灰	微細粒の砂粒を少量含む	良	内.青海波タタキ　外.格子目タタキ		623

石　器（第80・81図、第31表、図版51）

打製石鏃（第80図１～３、第31表、図版51－１～３）

１は黒色黒曜石製の凹基無茎鏃である。浅い抉りをもつ。２はサヌカイト製の凹基無茎鏃である。やや深い抉りをもつ。３はサヌカイト製の尖基鏃である。

石庖丁（第80図４、第31表、図版51－４）

細粒安山岩製で背部は外弯し、刃部は直線的である。穿孔が背部よりに近接して２つある。

敲石（第80図５、第31表、図版51－９）

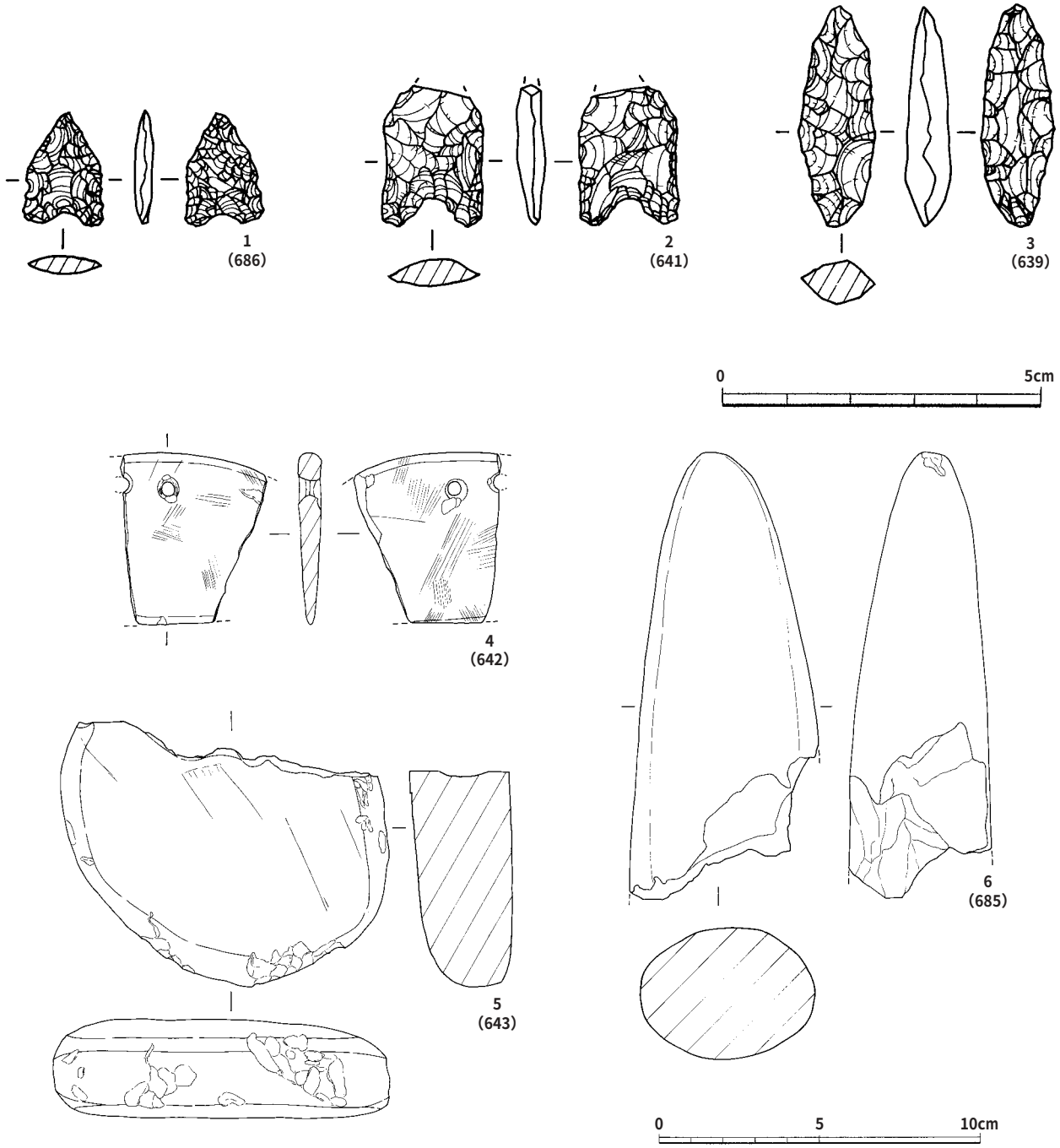
角閃石安山岩製で楕円形を呈す。表面に工具痕、側面に敲打痕がある。

磨製石斧（第 80 図６、第 31 表、図版 51－５）

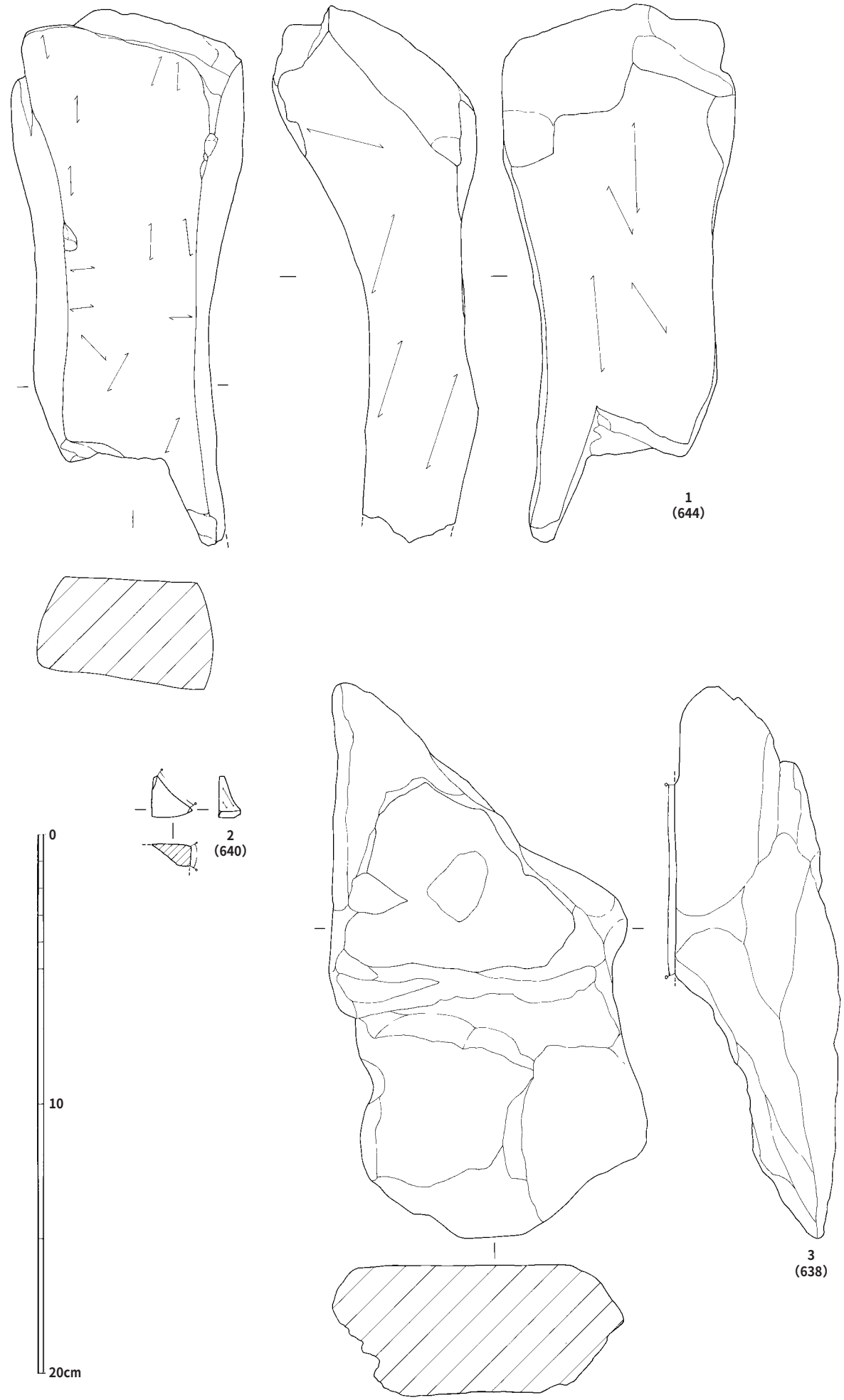
蛇紋岩製である。刃部を失う。

砥石（第 81 図１～３、第 31 表、図版 51－７・８）

１は細粒砂岩製で撥形を呈す。２は砂質片岩製か。かなり小形の三角錐形を呈す。３は灰白色シルト岩製である。



第 80 図　Ⅱ区谷部以外出土石器実測図①（原寸・S=1/2）



第 81 図　Ⅱ区谷部以外出土石器実測図②（S=1/2）

第 31 表　Ⅱ区谷部以外出土石器観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	残存状況	法　量(cm)					鑑定結果	遺物番号
						長	幅	厚	重量(g)	その他		
80- 1	Ⅱ	?	石器	石鏃	完形	1.75	1.25	0.3	0.8		黒色黒曜石	686
80- 2	Ⅱ	4TA	石器	石鏃	切先欠	2.2+	1.55	0.45	1.6		サヌカイト	641
80- 3	Ⅱ	2T	石器	石鏃	完形	3.5	1.15	0.7	2.6		サヌカイト	639
80- 4	Ⅱ	4C	石器	石扈丁	3/4欠	4.6+	5.4	0.7	27.7	孔径 4.5～4.0	細粒安山岩:2～4mm大の石英の塊を含む。	642
80- 5	Ⅱ	4D	石器	敲石	1/4欠	8.3+	10.35	3.1	380.0		角閃石安山岩:長さ2～3mmの柱状角閃石と2～3mm大の斜長石の斑晶を含む。	643
80- 6	Ⅱ	?	石器	磨製石斧	刃部欠	14.0+	5.7+	4.4	510.0		蛇紋岩	685
81- 1	Ⅱ	4D	石器	砥石	?	20.05	8.7	6.2	1090.0		細粒砂岩	644
81- 2	Ⅱ	2T	石器	砥石	?	1.55+	1.5+	0.7+	1.3		砂質片岩?	640
81- 3	Ⅱ	1TB	石器	砥石?	?	20.6	11.1	6.15	1060.0		灰白色シルト岩	638

金属器（第 82 図、第 32 表、図版 51）

鋤先（第 82 図１、第 32 表、図版 51－10）

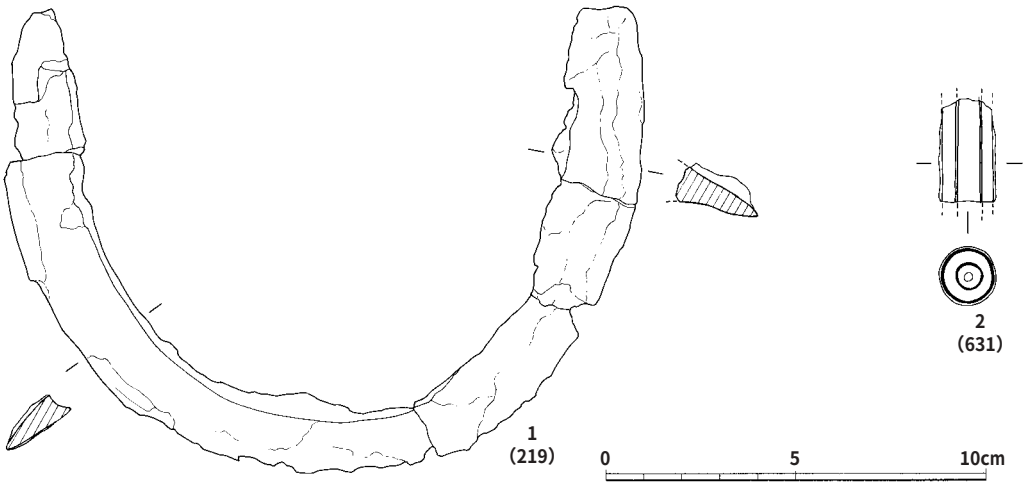
Ｕ字形鋤先と呼ばれるものである。ソケット部の大半を失う。

沓巻（第 82 図２、第 32 表、図版 51－11）

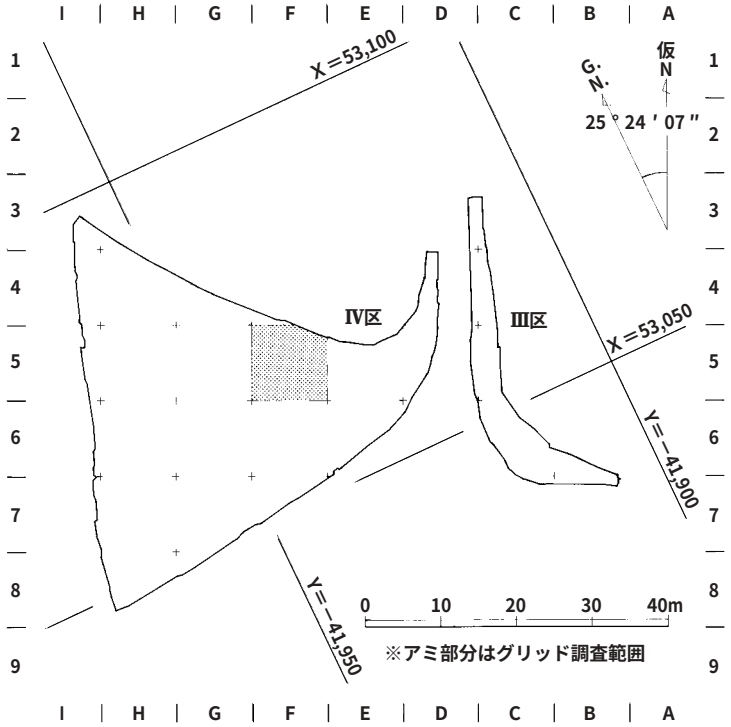
天地は不明である。鉄鏃の茎に糸を巻き、矢柄に装着したあと桜皮で固定したと考えられるが、材質は不明である。

第 32 表　Ⅱ区谷部以外出土金属器観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法　量(cm)					備　考	遺物番号
					長	幅	厚	重量(g)	その他		
80－ 1	Ⅱ	5DNo.87	鉄器	鋤先	12.4	17.0	0.7+α	58.1		Ｕ字形鋤先	219
80－ 2	Ⅱ	カクラン5	鉄器	沓巻	2.7+α	－	－	5.1	直径 1.5		631



第 82 図　Ⅱ区谷部以外出土金属器実測図（S=1/2）



第 83 図　永岡岸元遺跡Ⅲ・Ⅳ区調査地区割図（S=1/1,000）

第４節　Ⅲ 区の調査（第２・83～86 図、図版 52・53）

低位段丘Ⅲ面である。かつての川原の跡を残す平坦な段丘面(砂層)を層厚 0.2m 前後の風成土壌(黄褐色粘質土)が覆っており、その上に茶褐色粘質土の層(上層にあった黒ボク土によって汚れたものか)がある。この上面が遺構面である。

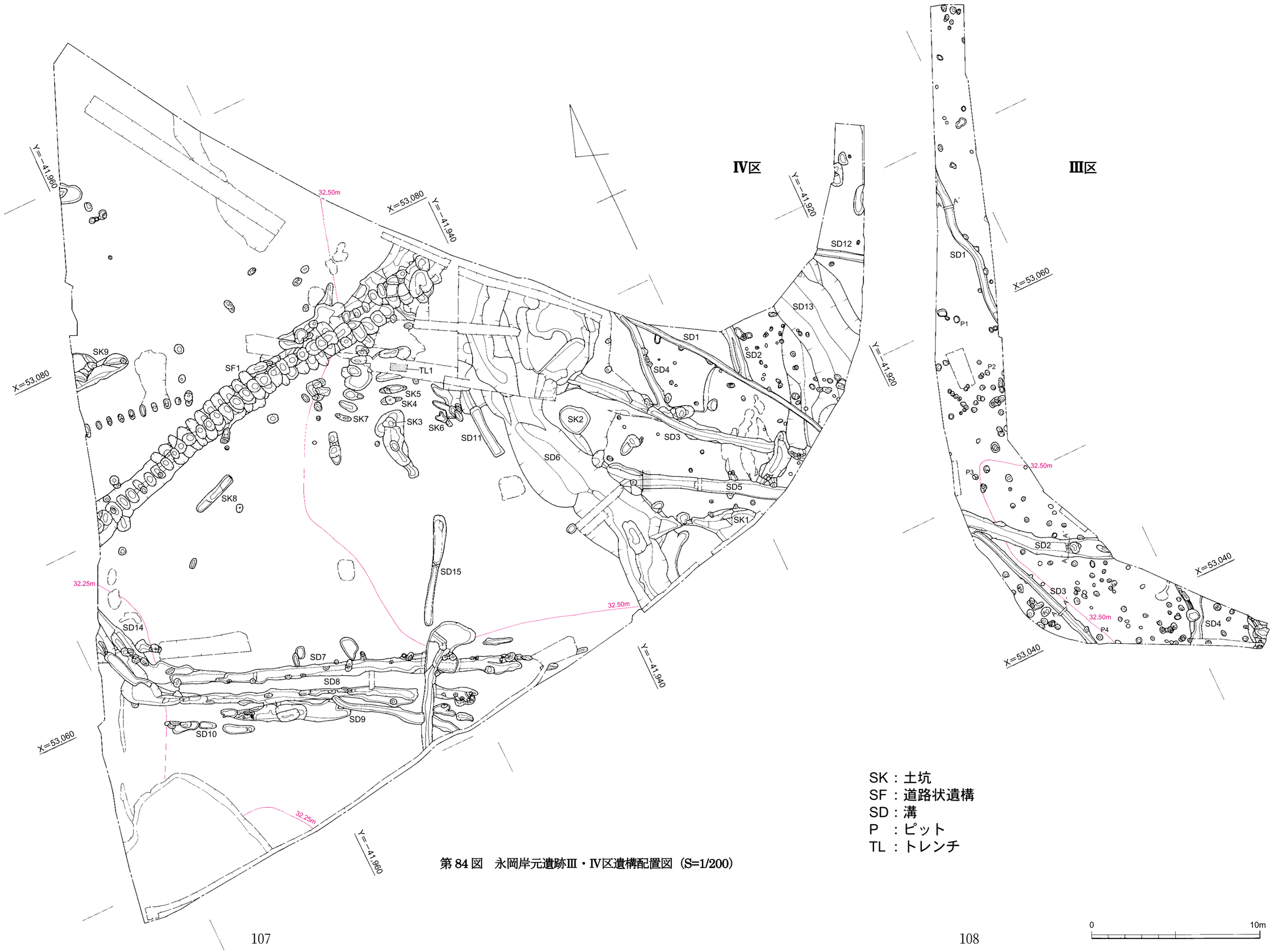
溝４・ピット多数を検出した。

溝（ＳＤ）

４条検出した。

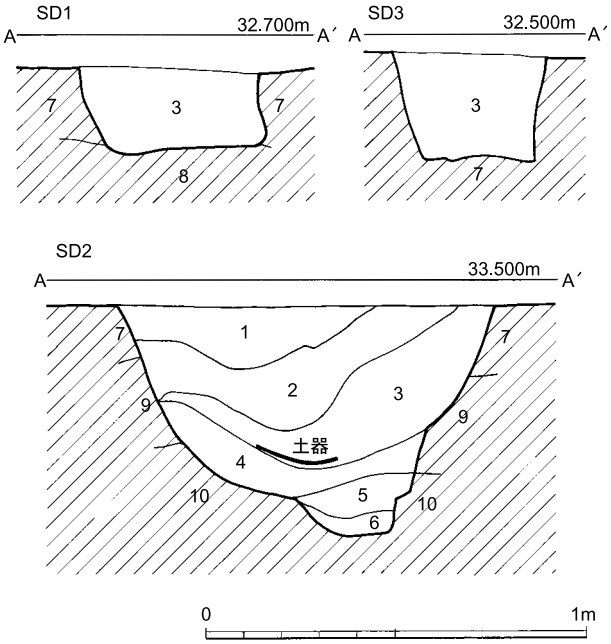
ＳＤ１（第 84・85 図、図版 51）

調査区の中央やや北を南北方向へ蛇行しながらのびる。幅 0.43m 前後・深さ 20cm 前後で断面形は逆台形である。埋土は黒ボク土である。



第 84 図　永岡岸元遺跡Ⅲ・Ⅳ区遺構配置図（S=1/200）

SK：土坑
SF：道路状遺構
SD：溝
P　：ピット
TL：トレンチ



1	淡黒色土	粒子は非常に細かい。	Φ1～3mm程の粗砂粒を若干含む。 Φ5mm程の粗砂粒をわずかに含む。粘性やや強い。しまりやや弱い。
2	淡灰褐色土	粒子はやや粗い。	Φ1～3mm程の粗砂粒を非常に多く含む。 Φ1～2cm程の石を若干含む。粘性やや弱い。しまり強い。
3	淡黒色土	粒子は非常に細かい。	Φ1～5cm程の灰色土塊。 Φ6cm程の8のブロックをわずかに含む。粘性やや強い。しまりやや弱い。
4	淡灰褐色土	(2より)やや暗い。 粒子はやや粗い。	Φ1～3mm程の粗砂粒を多く含む。 Φ1～2cm程の石を若干含む。粘性やや弱い。しまり強い。
5	淡黒色土	3と同じ	
6	淡灰褐色土	4と同じ	
7	茶褐色土 (地山)	粒子は非常に細かい。	Φ1～3mm程の粗砂粒を若干含む。 粘性やや強い。しまりやや強い。
8	白灰色砂質土 (地山)	粒子は粗い。	Φ1～3mm程の粗砂粒を非常に多く含む。 粘性弱い。しまりやや強い。
9	淡灰褐色土 (地山)	(4より)やや明るい。 粒子はやや粗い。	Φ1～3mm程の粗砂粒を非常に多く含む。 Φ1～3cm程の石を非常に多く含む。粘性やや弱い。しまり強い。
10	黄白色土(地山)	粒子は細かい。	粘性非常に弱い。しまり非常に弱い。

第85図　Ⅲ区ＳＤ１～３土層図（S=1/20）

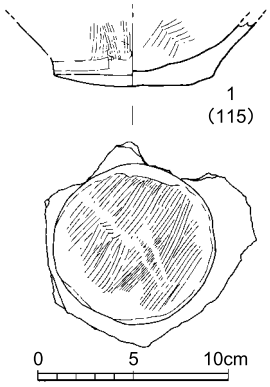
ＳＤ２（第84・85図、図版53）

調査区の南を東南東－西北西方向へのびる。ＳＤ３との切り合い関係は不明である。Ⅳ区ＳＤ３へ接続するものか。幅0.86～1.25m・深さ46cm前後で断面形はゆるいU字形である。埋土は黒ボク土と淡灰褐色土(地山由来か)の互層となっている。

３層下面から壷(１)が出土した。

土　器（第86図、第33表、図版57）

壷（第86図１、第33表、図版57－１）　凸レンズ状にふくらむ底をもつ。内面底部にハケのち指ナデ・胴部下位にハケ、外面底部にハケ・胴部下位に工具ナデ・ナデ・指オサエのちハケ・ハケを施す。



第86図　Ⅲ区ＳＤ２出土土器実測図（S=1/4）

第33表　Ⅲ区ＳＤ２出土土器観察表

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	調整	備考	遺物番号
86－1	Ⅲ	SD2	壷		8.40	(3.40)	内外.にぶい黄橙	0.1～3.3mmの長石・石英を多少,0.4mm以下の雲母・輝石・赤色粒を少量含む	良	内.ハケ・ハケ→指ナデ　外.ハケ・指頭圧痕→ハケ・ナデ・工具ナデ・ハケ		115

ＳＤ３（第84・85図、図版53）

調査区の南を南南東－北北西方向へのびる。ＳＤ２との切り合い関係は不明である。Ⅳ区ＳＤ１へ接続するものか。幅0.42m前後・深さ27cm前後で断面形は逆台形である。埋土は黒ボク土である。

ＳＤ４（第84図）

調査区の南を南南東－北北西方向へのびる。幅0.60～1.00m・深さ６cm前後で断面形は逆台形である。

第５節　Ⅳ 区の調査（第 83・84 図、図版 54～56）

任意の方向に基準を定め、10m×10m のグリッドを組んだ（第 83 図参照）。

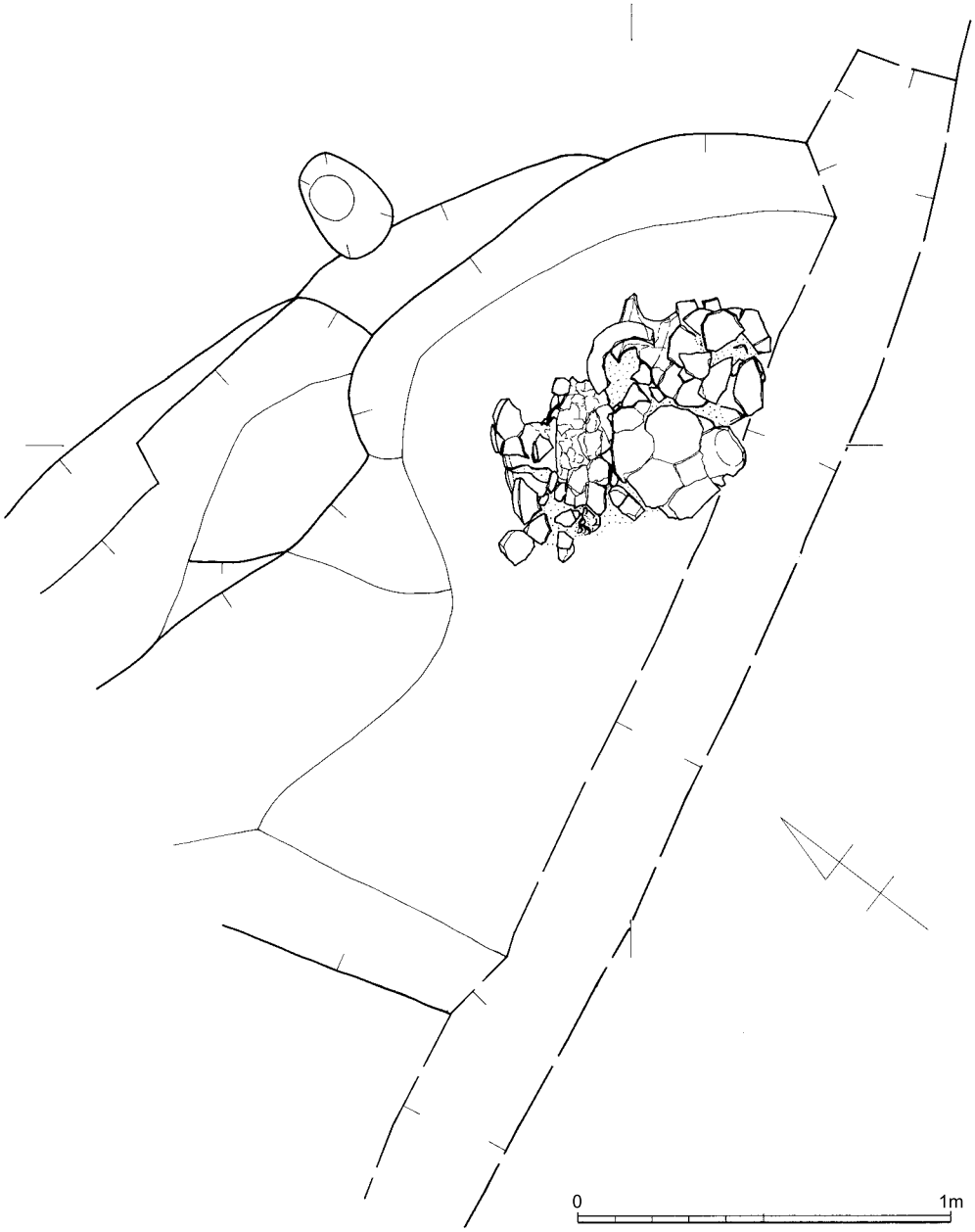
特徴の違いから、３つのエリア(東・西・中央)に分けて説明する。

東側は、かつての川原の跡を残す平坦な段丘面(砂層)を層厚 0.2m 前後の風成土壌(黄褐色粘質土)が覆っており、その上に茶褐色粘質土の層(上層にあった黒ボク土によって汚れたものか)がある。この上面が遺構面である。

西側は、火山噴出物(火山ガラス)を多く含む阿蘇４火砕流が堆積したものである。

中央は、かつて谷だった部分に浸食された段丘の土砂が二次堆積したものである。東側から谷への落ち際には、かつて段丘面を覆っていた黒ボク土が堆積している。

東側を中心に土坑９・道路状遺構１・溝 15・ピット多数を検出した。



第 87 図　Ⅳ区ＳＫ１土器出土状況実測図（S=1/20）

土　坑（ＳＫ）

東側で２基、中央で７基検出した。

ＳＫ１（第 87 図、図版 54）

中央南端に位置する。長軸 1.4m以上・短軸 1.0m以上・深さ 36cm を測るが、遺構の形は不明確である。谷への落ち際にあたり、土坑でない可能性がある。

二重口縁壷が２つ並ぶような形で検出された。

土　器（第 94 図、第 35 表、図版 57）

二重口縁壷（第 94 図１・２、第 35 表、図版 57－２・３）　１は凸レンズ状にふくらむ底をもつ。長胴で最大径は中位やや上にある。頸部はしまりが強く、直立からやや外反する。口縁はやや内屈し、端部は上方へつまみあげられている。肩部に１条の三角突帯、屈折部外面に刻み目がある。内面底部に指オサエのちナデ・胴部～頸部にハケ・口縁部にハケとナデ、外面底部にナデ・胴部下位に工具ナデ・中位～上位にタタキのちハケ・頸部にハケ・口縁部にハケとナデを施す。外面に黒斑がある。２は頸部のしまりがやや強く、内傾から中位で外反する。口縁は内屈し、端部はわずかに外反する。肩部に１条の低い三角突帯がある。内面胴部に指オサエのちハケ・頸部上位にハケ・口縁部にナデ、外面胴部～頸部にハケ・口縁部にナデを施す。外面に黒斑がある。

ＳＫ２（第 88 図）

東側西端に位置する。長軸 1.76m・短軸 1.58mの不整円形を呈し、深さ 17 cm を測る。

ＳＫ３（第 88 図）

中央やや東に位置する。長軸 0.80m・短軸 0.61mの不整形を呈し、深さ 19cm を測る。

ＳＫ４（第 88 図）

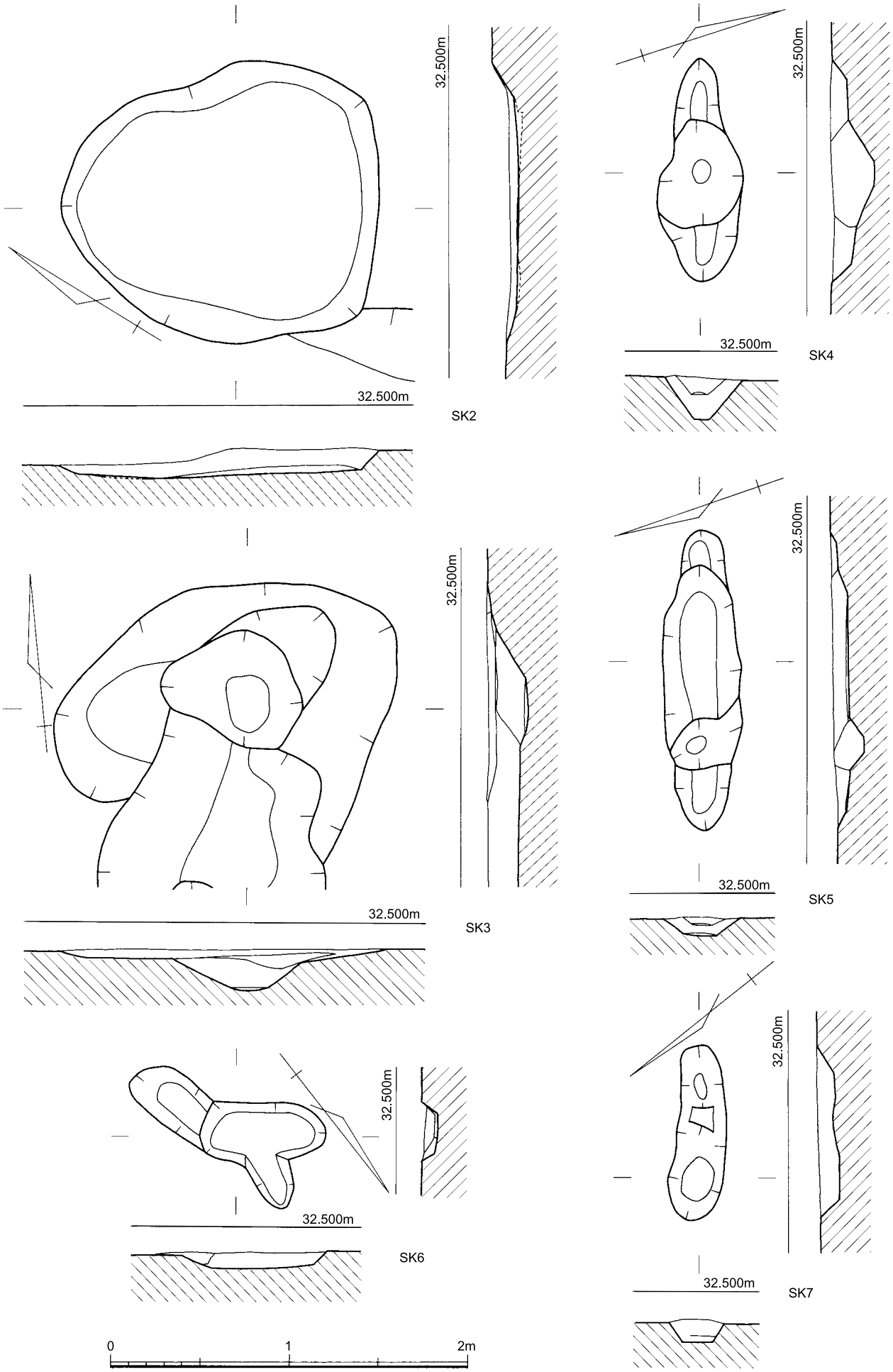
ＳＫ３の北北東 0.8mに位置する。長軸 1.24m・短軸 0.26mの長楕円形を呈し、深さ９cm を測る。

土　器（第 94 図４、第 35 表）

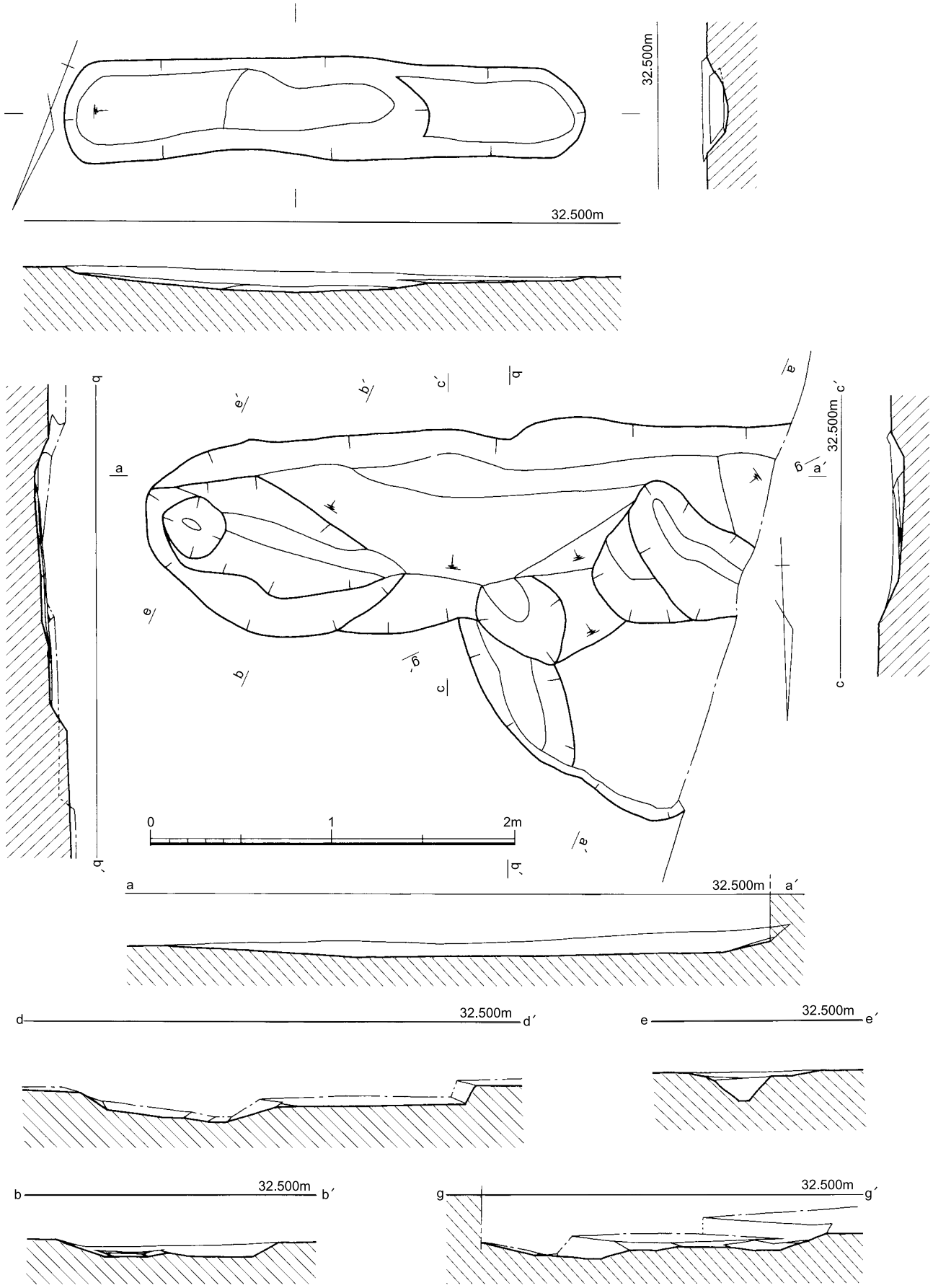
須恵器（第 94 図４、第 35 表）　甕の口縁部か。内面にナデ、外面にナデと工具ナデを施す。外面に沈線と波状文がある。

ＳＫ５（第 88 図）

ＳＫ４の北北東 0.2mに位置する。長軸 1.48m・短軸 0.44mの長楕円形を呈し、深さ 10cm を測



第88図　Ⅳ区ＳＫ２～７実測図（S=1/30）



第89図　Ⅳ区ＳＫ８・９実測図（S=1/30）

る。

土　器（第 94 図、第 35 表）

須恵器（第 94 図５、第 35 表）　坏蓋である。内面に回転ヨコナデ、外面天井部にヨコナデ・口縁部に回転ヨコナデを施す。外面に沈線がある。

ＳＫ６（第 88 図）

中央東に位置する。長軸 0.70m・短軸 0.30mの不整形を呈し、深さ９cm を測る。

ＳＫ７（第 88 図）

ＳＫ４の西北西 1.8mに位置する。長軸 0.98m・短軸 0.30mの長楕円形を呈し、深さ 12cm を測る。

土製品（第 94 図３、第 35 表、図版 57）

土玉（第 94 図３、第 35 表、図版 57－４）　ツメ押し型がある。

ＳＫ８（第 89 図）

中央やや西に位置する。長軸 2.86m・短軸 0.56mの長楕円形を呈し、深さ 14cm を測る。

ＳＫ９（第 89 図）

中央西端に位置する。長軸 3.40m以上・短軸 1.10mの長楕円形を呈し、深さ 14cm を測る。

溝（ＳＤ）

15 条検出した。

ＳＤ１（第 84 図）

東側中央を南東－北西方向へのびる。ＳＤ２に切られる。ＳＤ４との切り合い関係は不明である。幅 0.32m 前後・深さ 17cm 前後で断面形は逆台形である。Ⅲ区ＳＤ３へ接続するものか。

土　器（第 95 図、第 35 表、図版 57）

縄文土器（第 95 図３、第 35 表、図版 57－14）　精製浅鉢である。内外面とも研磨を施す。内外面に沈線がある。

ＳＤ２（第 84 図）

東側中央を南北方向へのびる。ＳＤ１を切る。幅 0.73m 前後・深さ 10cm 前後で断面形は逆台形

である。

ＳＤ３（第 84 図）

ＳＤ１の南西 2.2 m を南東－北西方向へのびる。幅 0.79m 前後・深さ 33cm 前後で断面形は逆台形である。Ⅲ区ＳＤ２へ接続するものか。

ＳＤ４（第 84 図）

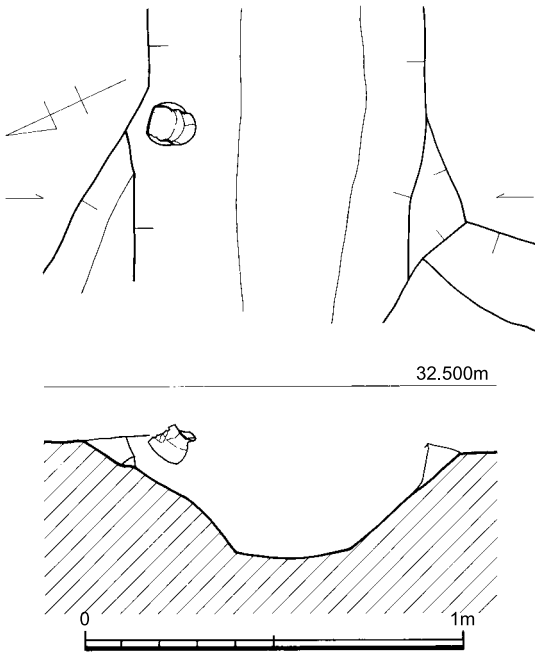
東側やや西を南北方向へのびる。ＳＤ１・３との切り合い関係は不明である。幅 0.44m 前後・深さ９cm 前後で断面形は逆台形である。

ＳＤ５（第 84・90 図）

ＳＤ３の南西 1.8 m を東南東－西北西方向へのびる。ＳＤ６との切り合い関係は不明である。幅 0.73m 前後・深さ 40cm 前後で断面形は逆台形である。

土　器（第 94 図、第 35 表、図版 57）

壷（第 94 図６、第 35 表、図版 57－５）　検出面から出土した。凸レンズ状にふくらむ底をもつ。胴部は直立し、頸部のしまりはやや強い。口縁はやや外傾する。



第 90 図　Ⅳ区ＳＤ５土器出土状況実測図（S=1/20）

ＳＤ６（第 84 図）

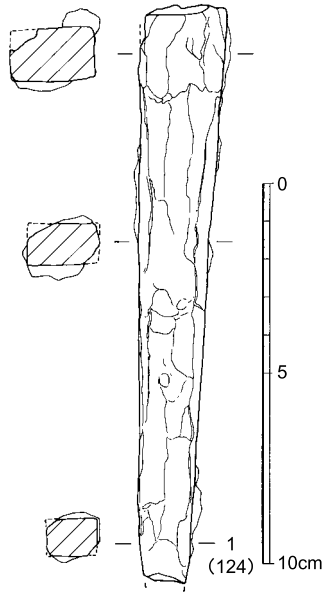
中央東端を南南東－北北西方向へのびる。幅 2.32～4.44m・深さ 43cm で断面形はU字形である。谷への落ち際にあたり、溝でない可能性がある。

土　器（第 94 図、第 35 表、図版 57）

高坏（第 94 図７、第 35 表、図版 57－６）　やや外へ開く筒部から強く外折し、裾部はやや短く開く。

ＳＤ７～10（第 84 図、図版 56）

中央南西端を西南西－東北東方向へのびる。ＳＤ７～９はＳＤ 15 に切られる。幅 0.60m 前後・深さ５cm 前後で断面形は逆台形



第91図　Ⅳ区ＳＤ８出土金属器実測図（S=1/2）

第 34 表　Ⅳ区ＳＤ８出土金属器観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法　　量(cm)					備　考	遺物番号
					長	幅	厚	重量(g)	その他		
91-1	Ⅳ	SD8	鉄器	鏨	15.3+α	2.25	1.7	132.7			124

である。

金属器（第 91 図、第 34 表、図版 57）

鏨（たがね）（第 91 図１、第 34 表、図版 57－15）　ＳＤ８から出土した。基部と切先を失う。新しいものか。

ＳＤ11（第 84 図）

中央やや東を南北方向へのびる。幅 0.56m 前後・深さ 16cm 前後で断面形は逆台形である。

土製品（第 94 図、第 35 表、図版 57）

手捏ね土器（第 94 図８、第 35 表、図版 57－７）　鉢形を呈す。ほぼ丸底で口縁は直立する。

ＳＤ12（第 84 図）

東側やや東を東南東－西北西方向へのびる。幅 0.42m 前後・深さ５cm 前後で断面形は逆台形である。

ＳＤ13（第 84 図）

ＳＤ12 の南西 0.2ｍを南北方向へのびる。幅 1.78～2.68m・深さ 32cm 前後で断面形は逆台形である。

ＳＤ14（第 84 図）

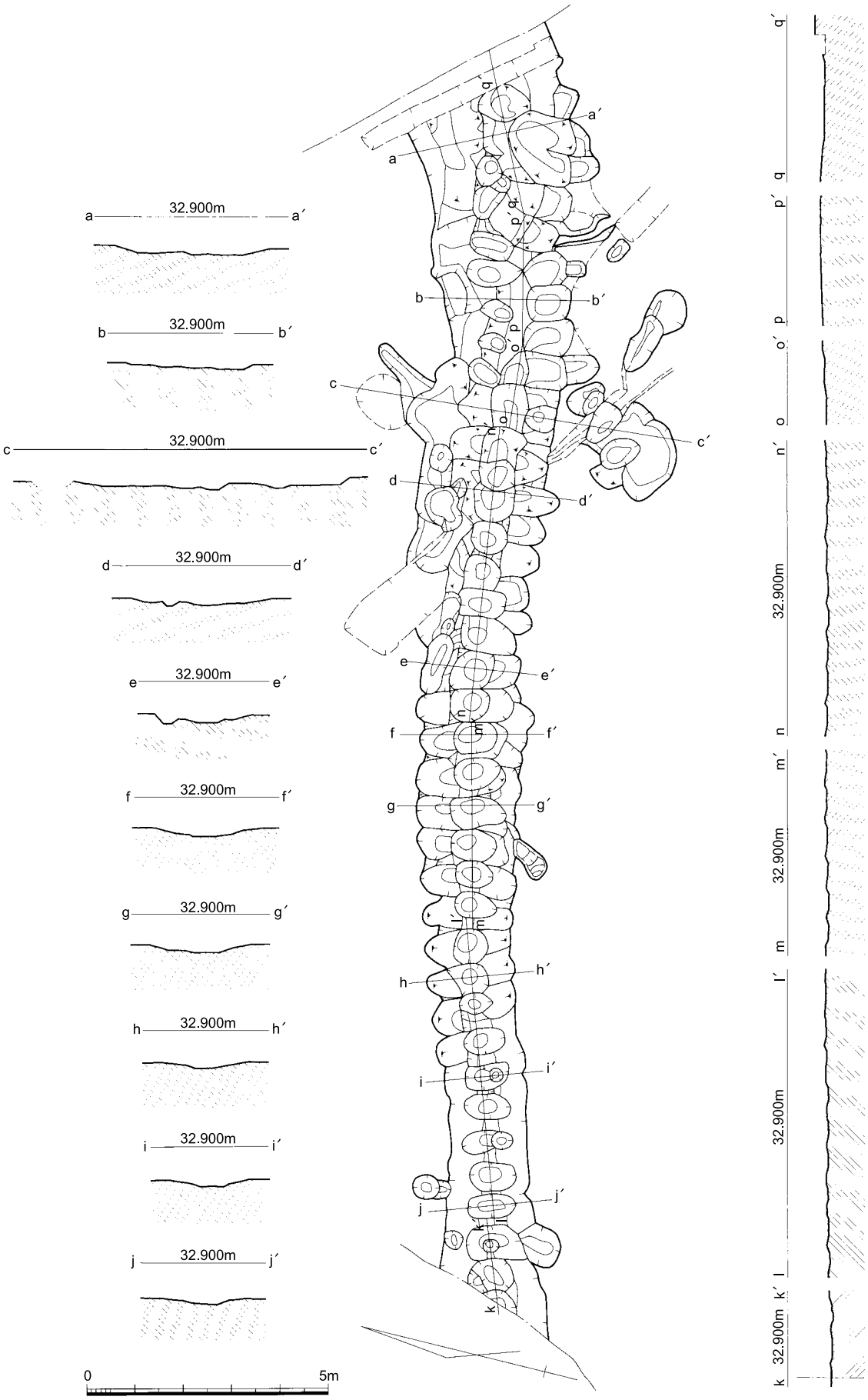
中央東端を南南東－北北西方向へのびる。幅 0.90m 前後・深さ６cm 前後で断面形は逆台形である。

ＳＤ15（第 84 図）

中央南を南南西－北北東方向へのびる。ＳＤ７～９を切る。幅 0.50m 前後・深さ 10cm 前後で断面形は逆台形である。撹乱か。

道路状遺構（ＳＦ）

中央で１条検出した。



第 92 図　Ⅳ区ＳＦ１実測図（S=1/120）

ＳＦ１（第 84・92 図・図版 55）

Ⅳ区の西側中央から北東側中央にかけて、やや緩く蛇行する溝状遺構を検出した（第 84 図）。完掘後の状態は長楕円形（長さ 1.8m 前後、幅 0.65m、深さ 0.15cm 前後）を呈する浅い窪みの連続であり、長楕円形窪みの中央には更に略円形の浅い窪みが検出できた。底面での著しい硬化は確認できなかったが、小郡市薬師堂東遺跡例から道路状遺構と判断した。

幅 1.4～3.5m、深さ 10～20cm を測り、長さ約 27mを検出した。主軸方位は、E― 14°―Nである。東側 2/3 は長楕円形の窪みが連続しているが、西側 1/3 では中央の略円形の窪しか検出できなかった。西側も本来長楕円形であったと考える。幅は、西側が狭く東側が広くなっている。また、底面の高さは、西側が低く東側に行くに従い僅かずつ高くなっており、その比高差は最大で 24ｃｍを測る。

なお、第 84 図のⅣ区の遺構配置図を見ると、ＳＦ１から枝分かれしているような楕円形窪みの繋がりが３箇所認められる。うち２箇所はＳＦ１の東側から南に分かれるもので、ＳＫ４・５を含んだ繋がりのものと、ＳＫ７を含む繋がりのものである。もう１箇所はＳＦ１の西側から西へ楕円形 10 個が連続するものである。また、ＳＫ６もＳＦ１から枝分かれする道路状遺構の一部とも考えられるが、断定できない。

ＳＦ１からの遺物の出土は無く、時期不明である。

その他の遺物

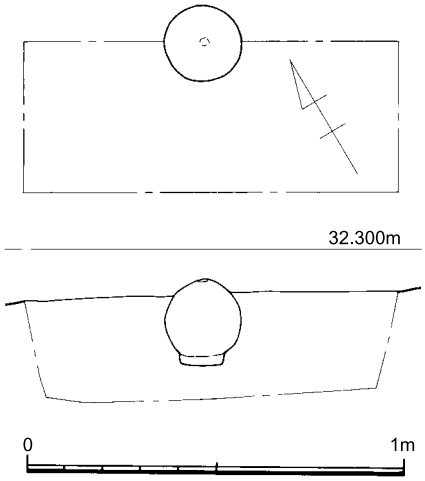
土　器（第 94・95 図、第 35 表、図版 57）

直口壷（第 94 図９、第 35 表、図版 57－８）　ＴＬ１から倒立状態で出土した。丸底で球形胴である。頸部のしまりはやや弱く、口縁はやや長く直立し、上位でわずかに内弯する。

甕か鉢（第 94 図 10、第 35 表、図版 57－９）　５Ｆから出土した。平底である。

高坏（第 94 図 11、第 35 表、図版 57－10）　５Ｆから出土した。坏部との接点から直接外に開く。裾部はさらに開きつつわずかに内弯する。

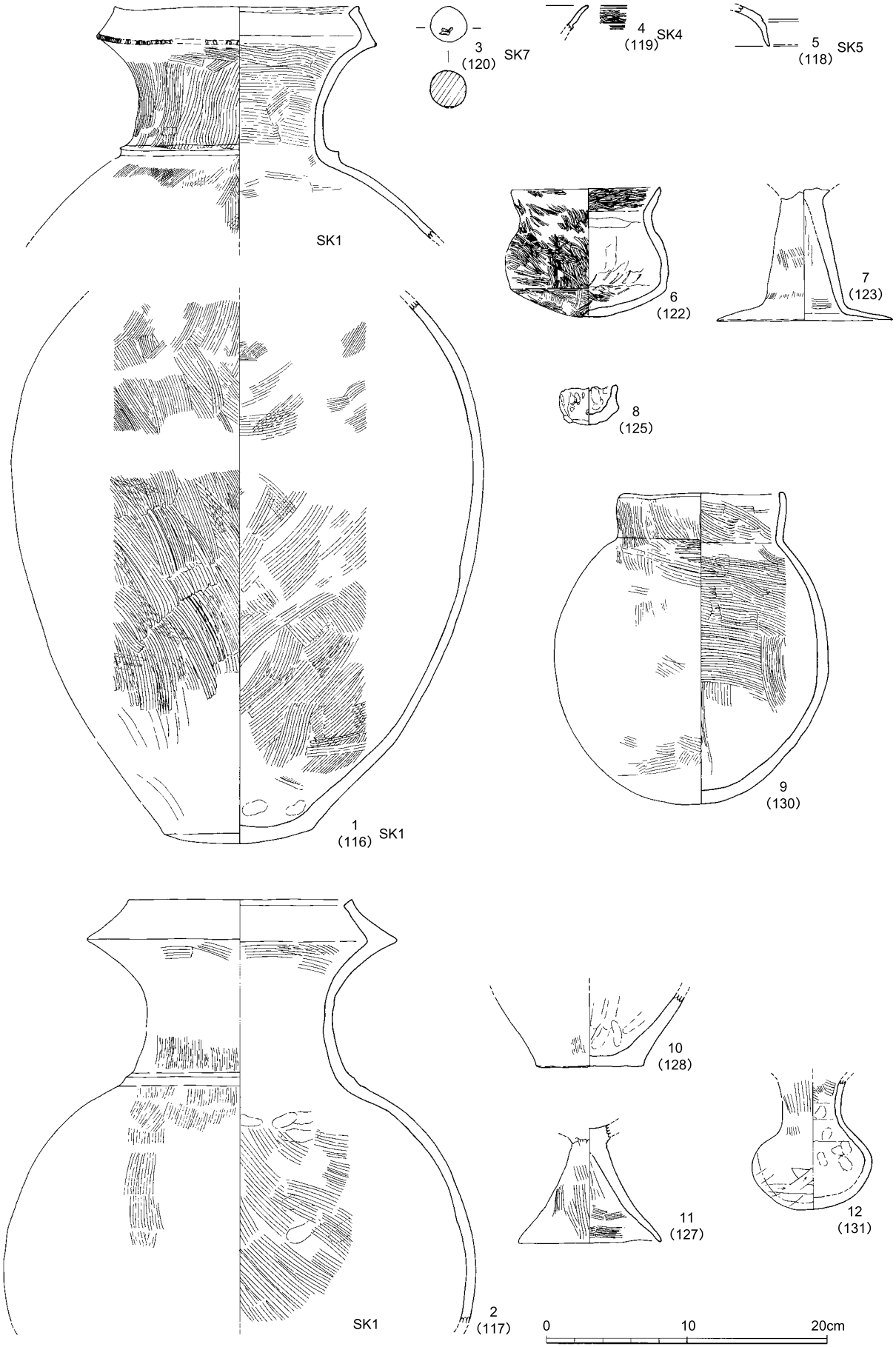
長頸壷（第 94 図 12、第 35 表、図版 57－11）　検出面から出土した。丸底で胴部最大径を中位にもつ。頸部のしまりはやや強く、直立からわずかに外傾する。



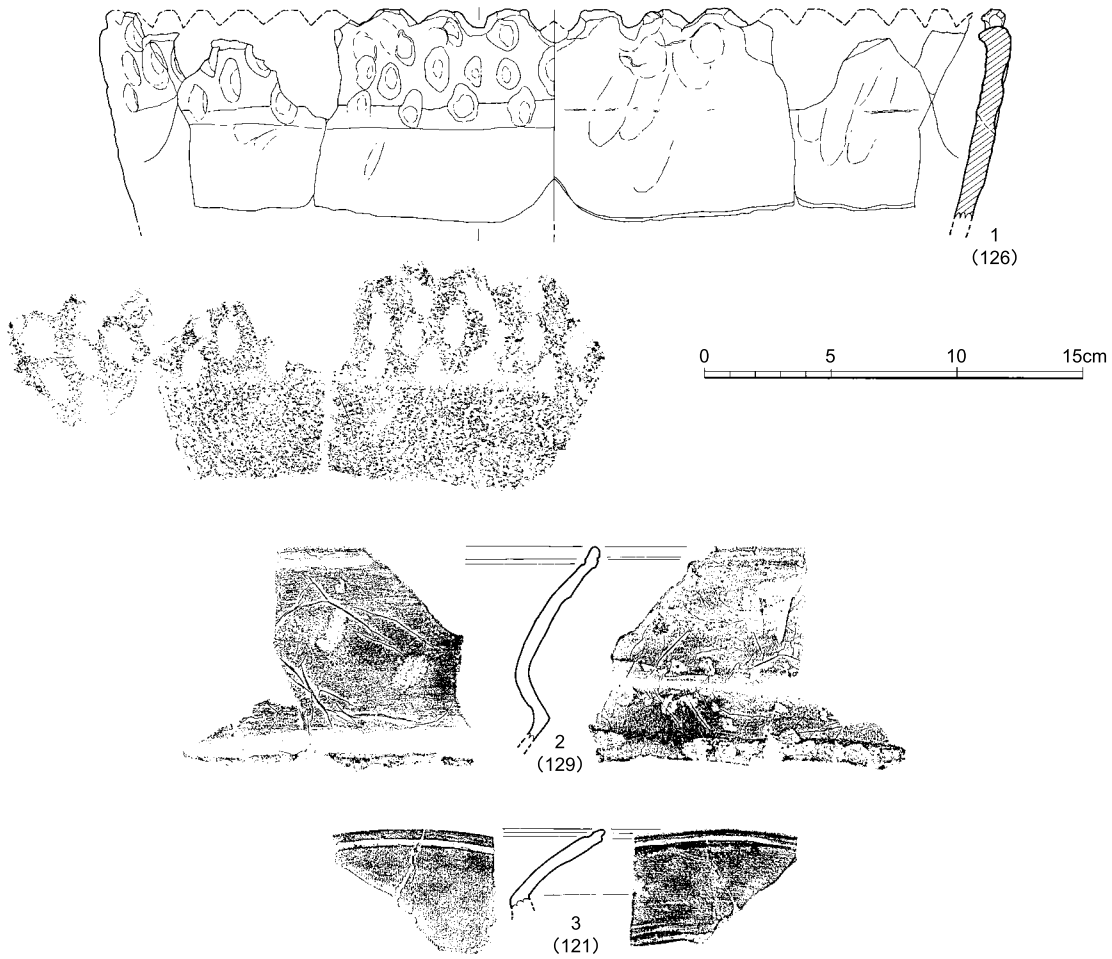
第 93 図　Ⅳ区ＴＬ１土器出土状況実測図（S=1/20）

縄文土器（第 95 図１、第 35 表、図版 57－12）　５Ｆから出土した。阿高Ⅲ式深鉢か。３段ある凹点部に浅く太い凹線が及んでいる。口縁端部は工具を使った深い刻み目が入っている。

縄文土器（第 95 図２、第 35 表、図版 57－13）　５Ｆから出土した。精製浅鉢の口縁部か。内外面とも研磨を施す。内外面に沈線がある。



第 94 図　Ⅳ区出土土器実測図（S=1/4）



第 95 図　Ⅳ区出土縄文土器実測・拓影図（S=1/3）

第 35 表　Ⅳ区出土土器観察表

法量における（　）内数値は、口径・底径は復原径、器高は残存高

挿図番号	調査区	出土遺構	器 種	法量（cm）			色 調	胎 土	焼 成	調 整	備 考	遺物番号
					底径	器高						
94－ 1	Ⅳ	SK1No1	二重口縁壷	17.50	底径10.60 胴部径(33.70)	(55.10)	内.黄橙 外.浅黄橙	0.3～2.5mmの石英を多量,0.3～2.4mmの長石・雲母・赤色粒を多少,0.5mm以下の輝石を少量含む	良	内.ハケ・ナデ・ハケ・指頭圧痕→ナデ　外.ハケ・ナデ・ハケ・タタキ→ハケ・工具ナデ→ハケ・工具ナデ・ナデ	外.黒斑 突帯・刻目有り	116
94－ 2	Ⅳ	SK1No2	二重口縁壷	16.00	胴部径(33.70)	(30.00)	内.にぶい黄橙 外.浅黄橙	0.6～4.0mmの長石・石英を多量,2.5mm以下の雲母・輝石・角閃石・赤色粒を少量含む	やや不良	内.ナデ・ハケ・指頭圧痕→ハケ 外.ナデ・ハケ	外.黒斑 突帯有り	117
94－ 3	Ⅳ	SK7	土玉	径2.55			外.にぶい橙	0.2mm以下の雲母を多量,0.5mm以下の長石・石英・角閃石を含む	普通		ツメ押し型有り	120
94－ 4	Ⅳ	SK5	須.鼎?			(1.80)	内.灰白　外.灰	精良	良	内.ナデ　外.ナデ・工具ナデ	外.沈線・波状文	119
94－ 5	Ⅳ	SK4	須.坏蓋			(2.90)	内外.灰	1mm以下の砂粒・白色粒を含む	良	内.回転ヨコナデ 外.ヨコナデ・回転ヨコナデ	外.沈線	118
94－ 6	Ⅳ	SD5No1	壷	(10.60)	底径11.10 胴部径11.60	9.30	内.にぶい橙 外.橙	1.0mm以下の長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	良	内.ナデ・ミガキ・指ナデ・工具ナデ・ハケ→工具ナデ 外.ナデ・ミガキ・ハケ	外.黒斑	122
94－ 7	Ⅳ	SD6	高坏		裾部径12.50	(9.40)	内.にぶい黄橙 外.橙	0.1～2.3mmの赤色粒を少量,0.1～2.5mmの長石・石英を含む	普通	内脚.シボリ・ナデ・ハケ・ナデ 外脚.ナデ・ハケ・ナデ		123
94－ 8	Ⅳ	SD11	手捏ね土器	3.90		2.90	内外.橙	2.0mm以下の長石・石英・雲母を含む	普通	内外.指頭圧痕		125
94－ 9	Ⅳ	1T	直口壷	12.10	胴部径19.50	22.25	内.浅黄　外.灰黄	0.1～3.1mmの長石・石英を多量,1.3mm以下の雲母を少量含む	良	内.ナデ・ハケ→ナデ・ハケ・指圧痕→ハケ・ハケ・指ナデ 外.ナデ・ハケ→ナデ・タタキ→ハケ・ハケ		130
94－10	Ⅳ	5F	甕か鉢		(7.60)	(5.30)	内外.橙	0.4～3.5mmの石英を多量,0.1～2mmの長石を多少,0.8mm以下の雲母・角閃石を少量含む	普通	内.指ナデ　外.ハケ→ナデ・ナデ		128
94－11	Ⅳ	5F	高坏		裾部径(10.20)	(8.50)	内.浅黄 外.にぶい黄橙	2.0mm以下の長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒を少量含む	普通	内脚.シボリ→ナデ・ハケ・ナデ 外脚.ハケ・ナデ	外.黒斑	127
94－12	Ⅳ	検出面	長頸壷		胴部径8.50	(9.20)	内外.にぶい橙	3.0mm以下の輝石・赤色粒を少量,0.1～2.5mmの長石・石英・雲母を含む	良	内.ハケ・指圧痕・工具ナデ 外.ハケ・ハケ→ナデ・ケズリ→ナデ	外.黒斑	131
95－ 1	Ⅳ	5FNo1	縄.深鉢	(36.00)		(8.40)	内.極暗赤褐 外.暗赤褐	2.0mm前後の長石・石英,0.5mm以下の雲母,10mm以下の滑石を多量に含む	良	内.指圧痕	外.凹点・凹線	126
95－ 2	Ⅳ	5F	縄.精製浅鉢?			7.80	内.灰黄褐 外.黒褐	2.0mm以下の長石・石英・雲母を少量含む	良	内外.研磨	内外.沈線	129
95－ 3	Ⅳ	SD1	縄.精製浅鉢			(2.80)	内.にぶい黄褐 外.灰黄褐	2.0mm以下の石英・雲母を少量含む	良	内外.研磨	内外.沈線	121

第４章　理化学的分析

第１節　永岡岸元遺跡出土石器の材質鑑定について（補足）

唐木田芳文（西南学院大学文学部名誉教授）

岩石の肉眼鑑定では、非常に細粒のものは、ルーペをつかっても正確な判定のむずかしいことがある。その場合は、鉱物組成と組織を偏光顕微鏡で観察して鑑定する必要がある。今回は、特徴のある黒曜石は別として、おもに石鏃につかわれている灰黒色のスレート状にみえる極細粒、緻密な岩石の鑑定が困難であったので、同類の石鏃石材のチップを提供していただき、偏光顕微鏡でチェックした。検討した岩石チップは、①石器観察表に「サヌカイト」と記した石材と同類の緻密、灰黒色岩と、②緻密、縞状のスレート状外観を呈し、遺物番号 160（第 72 図１）の砥石の石材とよく似た岩片である。

①は、偏光顕微鏡で観察した結果、普通角閃石の微斑晶をわずかにふくむ、普通角閃石含有斜方輝石単斜輝石サヌカイトであることがわかった。

北部九州でのサヌカイト類としては、佐賀県多久市のほぼ中央から南隣の大町町まで南北に細長く、約６㎞にわたって分布する岩体がよく知られている（佐賀県 1954『佐賀県の地質と地下資源』）。ここに分布する岩石には、（Ⅰ）サヌカイト質安山岩（斜方輝石普通輝石サヌカイト質安山岩）と（Ⅱ）サヌカイト（普通角閃石含有斜方輝石普通輝石サヌカイト）の２種類が識別されている（松本徑夫 1961「佐賀県杵島地区における古期玄武岩類および讃岐岩類」『九州大学生産科学研究所報告』29 号）。永岡岸元遺跡出土の岩石チップは、肉眼的にもまた顕微鏡的な鉱物組成や組織においても（Ⅱ）のタイプに酷似している。

②の縞状スレート様岩は、偏光顕微鏡下での鉱物組成・組織から、①のサヌカイトと同類の普通角閃石含有斜方輝石単斜輝石サヌカイトであるとみとめられた。灰黒色の部分は灰色の部分よりは輝石類がより多く含まれているようにみえる。

１）鑑定結果は、本文および石器観察表参照。

２）下線部は、編集者による。

第２節　永岡岸元遺跡出土青銅製鋤先の材質調査について

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター文化財主事）

永岡岸元遺跡から出土した青銅製の鋤先について、蛍光Ｘ線分析による材質調査を行った。蛍光Ｘ線分析は対象試料にＸ線を照射し、含有する各元素から発生する二次Ｘ線（特性Ｘ線）を検出器でとらえてＸ線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。

今回の調査はＸ線の照射面積が 0.3㎜φの微小領域用エネルギー分散型の装置と、同じく 20㎜φの大型資料用波長分散型の二種類の装置を用いた非破壊による表面分析である。通常、正確な定量値を求める分析では、対象試料が平滑且つ均質であること、更に得られたＸ線強度を標準化するための標準試料を介するなどの諸条件が必要となる。しかし埋蔵文化財の場合、平滑、均質にはほど遠い上、埋蔵環境下での腐蝕によって元素の比率が変化することも指摘されている。また埋土の成分も分析結果に影響することも考慮しなければならない。更に今回は標準試料を用いていないこともあり、定性的な分析に止めている。

資料は比較的腐蝕が進行し、表面は全体が痘痕状に凸凹となり本来の表層は失われているものと思われる。いずれの場合も肉眼で埋土の付着などができるだけ少ない部分を選んで分析対象としているが、微小領域用装置の場合、表面的には判別し得ない元素の偏析や付着物の影響なども考えられることから、複数箇所を任意に選択している[1)]。

分析の結果、装置や分析箇所による大きな差異はなく、銅(Cu)、鉛(Pb)、錫(Sn)といった青銅を構成する元素の他に、微量成分として砒素(As)、銀(Ag)、アンチモン(Sb)などが検出された[2)]。また鉄(Fe)も認められるが、鉄は付着土壌にも豊富に含まれる元素であり、本来含まれるか否かの判断は困難である。また銅以外の元素が比較的強く検出される特徴が指摘できるが、この要因としては腐蝕による組成の変化などが考えられる。なお肉眼や顕微鏡による観察からも明らかであるが、赤色顔料など二次的な付着物も見られず、それを示す元素も検出されていない。

以上の結果は、これまでに分析で明らかになっている青銅製鋤先や、ひいては弥生時代の青銅器に一般的に見られる組成と特に齟齬を来すものではない（沢田他 1978・比佐他 2000・安武 1998a・b・平尾 1999)。従って永岡岸元遺跡出土の青銅製鋤先は弥生時代に通有の青銅器と言えよう。

１）細かい分析条件は紙幅の都合により割愛した。

２）波長分散の装置のみビスマス(Bi)が僅かに認められる。

沢田正昭・秋山隆保 1978「青銅製鋤先の蛍光Ｘ線分析」『千塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団

比佐陽一郎・片多雅樹・横田義章 2000「青銅製鋤先の材質調査－福岡市内出土例を中心として－」『日本文化財科学会第 17 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

平尾良光（編）1999『古代青銅の流通と鋳造』鶴山堂

安武千里 1998a「坂口遺跡出土青銅製鋤先の金属学的調査」『勝浦北部丘陵遺跡群』津屋崎町文化財調査報告書第 13 集　津屋崎町教育委員会

安武千里 1998b「生家釘ヶ裏遺跡出土青銅製鋤先の金属学的調査」『生家釘ヶ裏遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第 14 集　津屋崎町教育委員会

第５章　総 括

第１節　永岡岸元遺跡Ｉ区のまとめ

Ｉ区は、南に宝満川と山口川の合流地点を望む段丘上に営まれた集落の跡であり、その時代は弥生時代後期から古墳時代中期にかけてと考えられる。Ｉ区のまとめとして、主に竪穴住居（ＳＣ）の重複（新旧）関係と出土遺物の対応図（第 96 図）から、Ｉ区における集落の変遷を見ることとする。

１．竪穴住居の新旧関係

第 96 図中の遺構配置図に示すとおり、Ｉ区の竪穴住居 10 軒のうち２グループ７軒の重複が確認できた。

１つ目は、ＳＣ３～６の４軒である。ＳＣ５はＳＣ３・４・６に切られており、ＳＣ３・４・６同士の重複はない。このことから、ＳＣ３～６の新旧関係は

↗　ＳＣ３
ＳＣ５　→　ＳＣ４
↘　ＳＣ６

となる。

２つ目は、ＳＣ８～10 の３軒である。ＳＣ８がＳＣ９を、ＳＣ９がＳＣ10 を切り、ＳＣ８・10 間の重複はない。このことから、ＳＣ８～10 の新旧関係は

ＳＣ10　→　ＳＣ９→　ＳＣ８

となる。

残りのＳＣ１・２・７の３軒は、重複が確認できなかった。

２．竪穴住居の形態

Ｉ区で検出した 10 軒の竪穴住居は、その形態において大きく３種類がある。

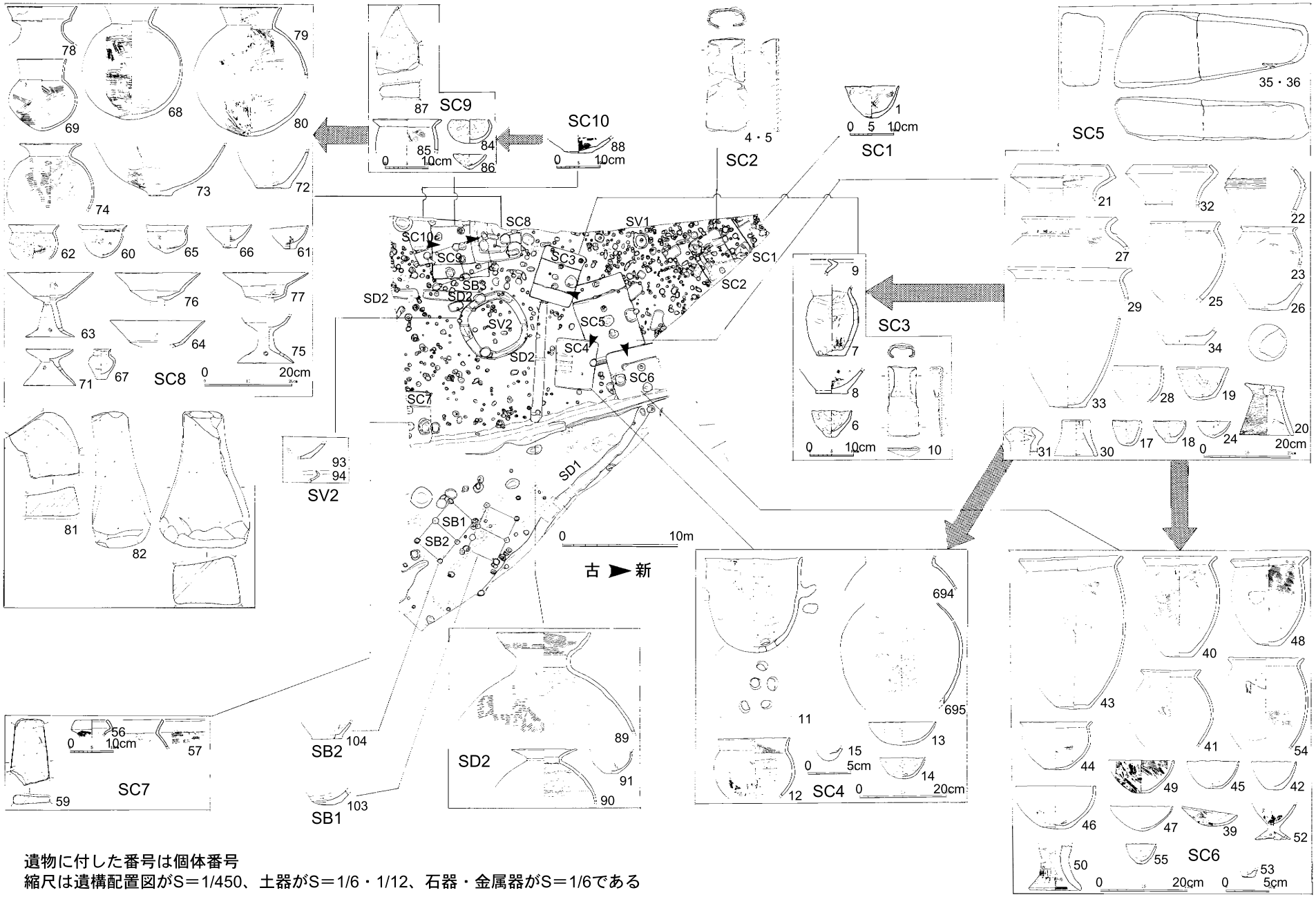
１つ目は、長方形の平面プランを呈し、主軸上に２本の主柱穴を掘り、その間に炉を切っているもの（ＳＣ２・３・５～７・９・10）である。残りが良く全体構造がわかるＳＣ３・５では、片方の長壁中央に接して屋内土坑を、両短壁側にベッド状遺構を設けている。なお、その規模には、大型のもの（ＳＣ５）と小型のもの（ＳＣ３）とがある。

２つ目の形態は、平面形が短めの長方形を呈し、片方の長壁中央にカマドが付設されたものである。Ｉ区ではＳＣ４のみであり、屋内の主柱穴は認められない。

３つ目の形態は、ＳＣ８である。後述する出土遺物から恣意的に分類したものであるが、恐らく４本の主柱穴を有し、平面形が略正方形を呈するものと考える。

この３形態の竪穴住居は、先述の遺構の重複関係から以下の事が確認できる。

① ２グループの重複関係から、２本主柱穴でベッドを有する長方形プランの竪穴住居が古く、カマド付きの短い長方形プランの竪穴住居（ＳＣ４）および略正方形プランの竪穴住居（ＳＣ８）は、それよりも新しい。



遺物に付した番号は個体番号
縮尺は遺構配置図がS＝1/450、土器がS＝1/6・1/12、石器・金属器がS＝1/6である

第96図　Ⅰ区の遺構配置と出土遺物の対応図

② 古い形態の２本主柱穴でベッドを有する長方形プランの竪穴住居の大小の規模については、ＳＣ３・５の重複関係から大型から小型の変遷が確認できる。

３．竪穴住居の出土遺物

第 96 図の遺物実測図は、先述した竪穴住居の重複（新旧）関係から各竪穴住居出土遺物の新旧関係を示したものである。

先ず、２本主柱穴でベッドを有する長方形プランの竪穴住居のうち、ＳＣ５・６においてまとまった量の土器が出土しており、両者の土器を比較してみる。両者で共通する器種は、甕・鉢・器台である。

甕は、いずれも口縁部が「く」の字状を呈する長胴のものである。しかし、底部をみると、ＳＣ５の甕の底部は略平底のもの（個体番号 34、以下同じ）か扁平に近いレンズ状のもの（26・33）であるのに対し、ＳＣ６の甕の底部は扁平なレンズ状もの（40・48）と共にやや突出するレンズ状のもの（43）もある。また、甕の胴部形態も、ＳＣ５の 29・33 は胴部最大径が上位にあり下半がスマートであるのに対し、ＳＣ６の 40・43・48・54 は胴部最大径が中位から下位にかけてありややズングリした感がある。甕の比較では、ＳＣ５出土甕に古い要素が認められ、ＳＣ６出土甕はやや後出するものと考える。

また、ＳＣ５には二重口縁壷が共伴し、ＳＣ６には共伴していない点も、ＳＣ５出土土器がＳＣ６出土土器よりも古い要素とみなす点である。この新旧関係は、遺構の重複関係と一致する。その時期は、ＳＣ５を弥生時代後期中頃～後半に、ＳＣ６を弥生時代後期後半に考えたい。

しかし、ＳＣ３とＳＣ５との比較では新旧関係が一致しない。ＳＣ３の７・８の底部はいずれも平底であり、ＳＣ５のものより古い要素が認められる。ＳＣ３の土器の出土量が少ないため、これだけで断定し得ないが、遺構の重複関係ＳＣ５→ＳＣ３とは矛盾する。

次に、ＳＣ４とＳＣ５との比較である。ＳＣ４の土器 11・12・695 は内面をヘラケズリ調整した土師器である。また、11 の甑は把手付多孔式であり、古墳時代中期の須恵器出現前後に比定されるものである。ＳＣ４出土土器には須恵器は共伴していないが、柳田編年の土師器Ⅲb 式に比定でき、ＳＣ４の時期は５世紀前半と考えたい。

他の重複するグループＳＣ８～10 の出土遺物については、ＳＣ９・10 の出土土器 85・88 は内面ハケ調整であり共に弥生土器ではあるが、両者の遺構の重複（新旧）関係ＳＣ10→ ＳＣ９を裏付ける資料とはならない。

ただし、ＳＣ８～10 の中で遺構の重複（新旧）関係が最も新しかったＳＣ８の出土土器はまとまっており、その器種は壷・甕・鉢・高坏・器台である。在地系の土器（72）の他に外来系土器（63・69・71・73・74・77・78）も多く共伴しており、柳田編年の土師器Ⅰ式に比定できる。しかし、中にはⅡa 式と思われる丸底の壷（68・69）も含まれており、あるいは新旧遺構の重複の可能性もあるが、ＳＣ８の時期は古墳時代前期（３世紀末～４世紀初頭）と考えたい。

残りＳＣ１・２・７の出土遺物は少なく、各竪穴住居の時期を確定しにくい。ＳＣ２は出土鉄斧（４・５）がＳＣ３出土の鉄斧（10）と同じであり、ＳＣ７も二重口縁壷（56）がＳＣ５のものと共通するものであり、同じ形態の竪穴住居という点と併せて、ＳＣ２・７の時期も弥生時代後期の範疇と考える。

４．他の遺構と出土遺物

Ｉ区では、竪穴住居以外に掘立柱建物（ＳＢ）３・土坑（ＳＫ）13・貯蔵穴（ＳＰ）１・円形周溝（ＳＶ）２・溝（ＳＤ）２を検出した。このうち、掘立柱建物・溝・円形周溝について考えてみたい。

掘立柱建物は、３軒とも１間×２間のものである。方向に統一性は無く、ＳＢ１・２はその規模が近いが、ＳＢ３はＳＢ１・２よりやや大きい。竪穴住居との重複関係では、ＳＢ３はＳＣ８～10より古く、出土遺物無く比較できないがＩ区の中では最も古い遺構と考えられる。なお、ＳＢ１・２の出土遺物は、小片ながら弥生時代後期のものである。

次に、溝２条のうちＳＤ２は、残りの悪い浅い溝であるが、途切れながらもＬ字状に曲がっている。ＳＣ３・ＳＶ２との重複があるが、新旧関係は不明である。出土土器には土師器Ｉ式の壷２点（89・90）があり、ＳＤ２の時期はＳＣ８と同じ古墳時代前期と考えたい。

また、円形周溝２基のうちＳＶ２から小片ながら弥生時代後期の土器が出土しているが、他の遺構との新旧関係が不明なため、弥生時代後期の遺構とするには根拠が薄い。

５．Ｉ区における集落の変遷

Ｉ区における集落の変遷については、竪穴住居の重複関係と出土土器の新旧関係に矛盾するものを含んでおり、また、狭い調査区であり、資料の少なさもあって、詳細な変遷を確定し得なかった。ここでは、概略を述べるにとどめたい。

① 弥生時代後期中頃から後半にかけて、集落が営まれ始まる。２本主柱で炉・ベッド・屋内土坑を有する長方形プランの竪穴住居は、大型から小型への変遷を考えるが、断定できない。大型のＳＣ５の時期に１間×２間の掘立柱建物（ＳＢ１～３）が存在した可能性がある。

② 弥生時代後期後半にも、大型の竪穴住居（ＳＣ６）が引き続き営まれている。また、同じ形態の竪穴住居の重複から、終末にかけての短期間に竪穴住居の廃棄・建て替えが繰り返されていたものと考える。

③ 古墳時代前期前半に、外来系土器を共伴する略正方形プランの竪穴住居（ＳＣ８）が出現する。近くには区画溝と考えられる溝（ＳＤ２）が並存していたと考える。

④ 古墳時代中期前半には、カマド付きの短い長方形プランの竪穴住居（ＳＣ４）が出現する。

⑤ ①→②の流れは、途切れることなく集落が営まれていたと考える。②→③の流れも、弥生時代後期後半から終末期として考えるとその連続性もあり得るが、③の資料少なく、自信がない。③→④については、同じ古墳時代ながら時期差がありすぎ、集落として途切れていた可能性もある。

第２節　永岡岸元遺跡Ⅱ区のまとめ

Ⅱ区は、調査区Ⅰ～Ⅳ区の中で最も広い面積を占め、出土遺物の量も最も多かった。しかしながら、遺構の残存状況は良くなく、遺物の大半は谷部出土のものであった。このため、谷部の調査に時間を割き、谷部以外の調査は全体の調査期間の関係でやや粗雑にならざるを得なかった。

Ⅱ区を地理的にみると（第 97 図）、調査区の東と北東側には弥生・古墳時代の集落が立地するⅠ区の丘陵（低位段丘Ⅱ面上段）が続いているが、他は一段低くなっている（下段）。上段には本来Ⅰ区と同じ集落の遺構が存在していたと考えるが、後世の水田開拓に伴う削平を受けていたため、明瞭な遺構は検出できなかった。また、下段は山口川に面した河岸段丘面であるが、東側の上段に沿う形で検出した「谷部」とそれより西側を「谷部以外」として区別して調査した。

第３章第３節で述べたように、谷部からは多量の遺物が出土しながらも（第 45～48 図）、谷本来の埋土からの出土ではなく、大半の遺物は谷埋土の上位に堆積した土層からの出土であり（第 46 図）、谷開析時の遺物ではなく、谷埋没後の堆積土に伴う遺物と理解した。しかしながら、谷部出土の遺物の中には単なる流れ込みとは考えにくい状態で出土したものもあり、何らかの人為的痕跡と考える事も必要かもしれないが、ここでは立証できない。

谷部以外の下段については、谷部の基盤となっていた砂礫層（第 46 図）と似た土層であったため、調査当初は無遺物層と考えていた。しかし、近世以降の遺構検出面において遺物が採集できたため、谷部以外に７本の試掘坑を設定した（第 97 図ＴＬ１～４）。その結果、試掘坑からも遺物が出土したため、調査期間の許す限り、谷部同様 10ｍグリッド毎の発掘を行った。調査箇所と出土遺物の対比は、第 97 図の通りである。土層図は提示できないが、遺物はすべて砂層・礫層・砂礫層からの出土である。出土遺物は、谷部同様、弥生時代後期から古墳時代前期のものが主体である（第 77～82・97 図）。このことから、Ⅱ区の低位段丘面は古墳時代前期以降に河川の氾濫を受けたものと考える。

以上のことから、Ⅱ区の低位段丘面については、

①　谷部の埋没

②　河川の氾濫

③　谷部上位への多量の遺物の流入

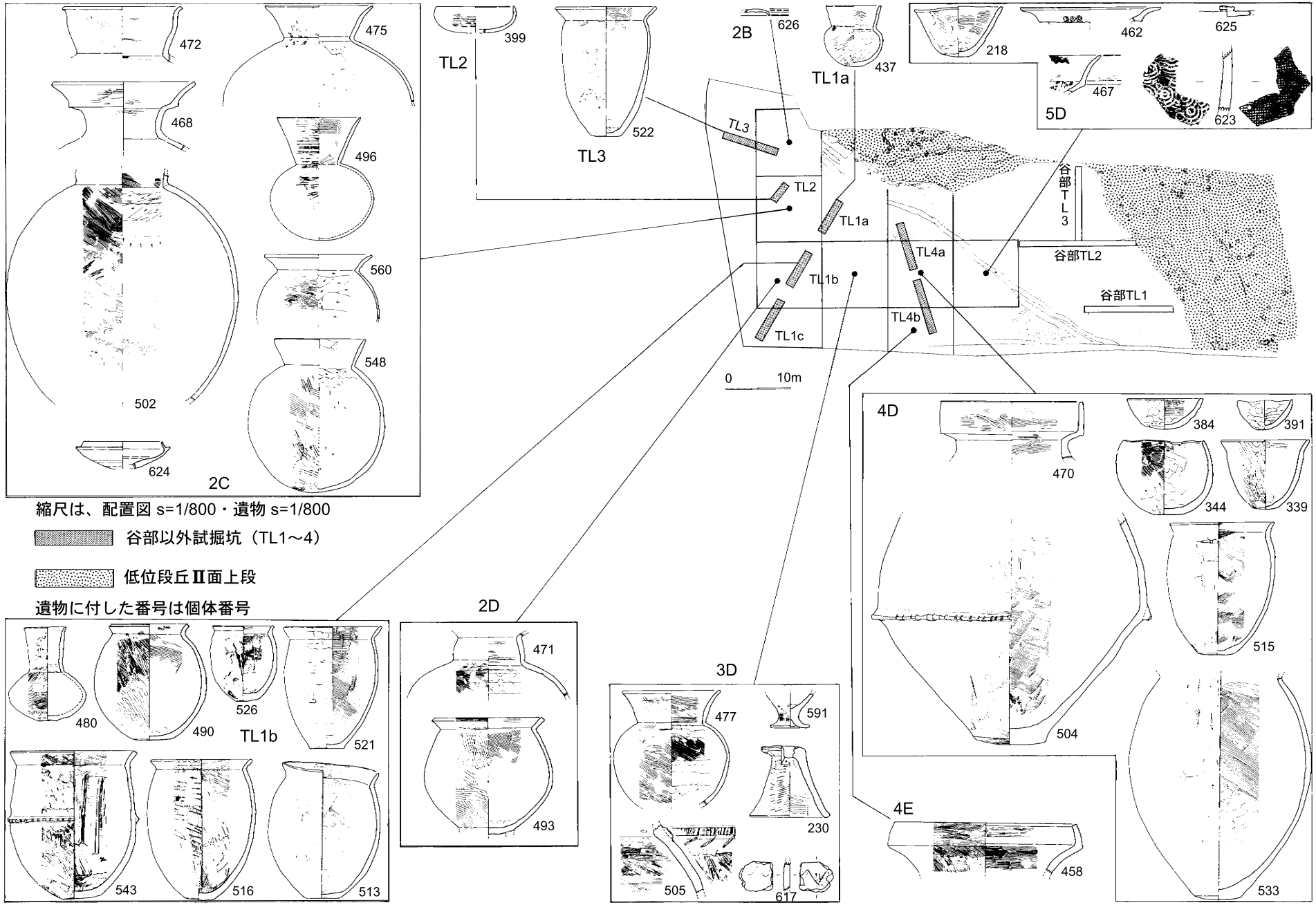
という変遷を考えたい。

ただし、③については、低位段丘面の事象というよりは、Ⅰ区を含めた低位段丘Ⅱ面上段の事象として考えるべきであろう。集落の廃棄に伴う行為とみるのか、後世の削平に伴うものとみるのか、この点については語り得ない。

1930 年頃、中山平次郎氏が太宰府周辺の踏査を行っている。そのときの記録によると当時の永岡岸元付近は桑畠や耕地で、須恵器を伴って弥生土器が多く出たものの、その多くは粉砕され原形を留めていなかったそうである。

また、地元住民の話によるとⅡ区周辺の田畑は戦後重機を使って整備されたそうである。そのときⅡ区上段が削られ谷部が完全に埋め立てられたとみられる。

以上のことから、段丘上は早くから土地の改変が進み、そこに広がっていたであろう遺跡が大きなダメージを受けていたことが容易に想像できる。



縮尺は、配置図 s=1/800・遺物 s=1/800

谷部以外試掘坑（TL1～4）

低位段丘Ⅱ面上段

遺物に付した番号は個体番号

第97図　Ⅱ区谷部以外の試掘坑・グリッド配置と出土遺物の対応図

第３節　永岡岸元遺跡Ⅲ・Ⅳ区のまとめ

Ⅲ区とⅣ区東側とは、溝だけであるが遺構の繋がりがあり、同一遺跡である。溝（Ⅲ区ＳＤ２、Ⅳ区ＳＤ５・６・11）出土の遺物はＩ区と同じ弥生時代後期・古墳時代前期のものであり、Ｉ区の集落の北西側の縁辺部にあたると思われるが、明確ではない。

Ⅳ区の西側は、土器を含んだ砂・小礫混ざりの土層が広がっており、Ⅱ区下段と同じく、河川の氾濫を受けている感がある。

Ⅳ区において検出した楕円形の落込みの列を道路状遺構（第 92 図）とした。第３章第４節で述べたように、他の列を成す楕円形落込みも人が通った小道の跡と考えられる。遺物の出土は無く、時期は確定できないが、氾濫層と同じ砂礫層に切り込んでいることから、古墳時代以降の生活用道路（小道）と考える。ただし、Ｉ区の古墳時代の集落と結びつけることはできない。

第４節　永岡岸元遺跡出土の遺物について

永岡岸元遺跡からは、多量の遺物が出土した。その主体はⅡ区谷部から出土した弥生時代後期から古墳時代中期にかけての土器である。しかし、それ以外にも、縄文時代の土器・石器や弥生時代の石器・金属器も出土している。ここでは詳細な分類・考察を述べることはできないが、少し感じた事を述べたい。

１．縄文時代の遺物について

永岡岸元遺跡では少量ながら縄文時代の遺物（第 98 図）も出土している。土器の大半は縄文時代晩期前半の精製の鉢であるが、Ⅳ区では黒褐色粘質土層下位から中期後半に位置づけられる鉢が出土している。また、共伴関係は不明確であるが、縄文時代の石鏃・石斧などの石器も出土している。

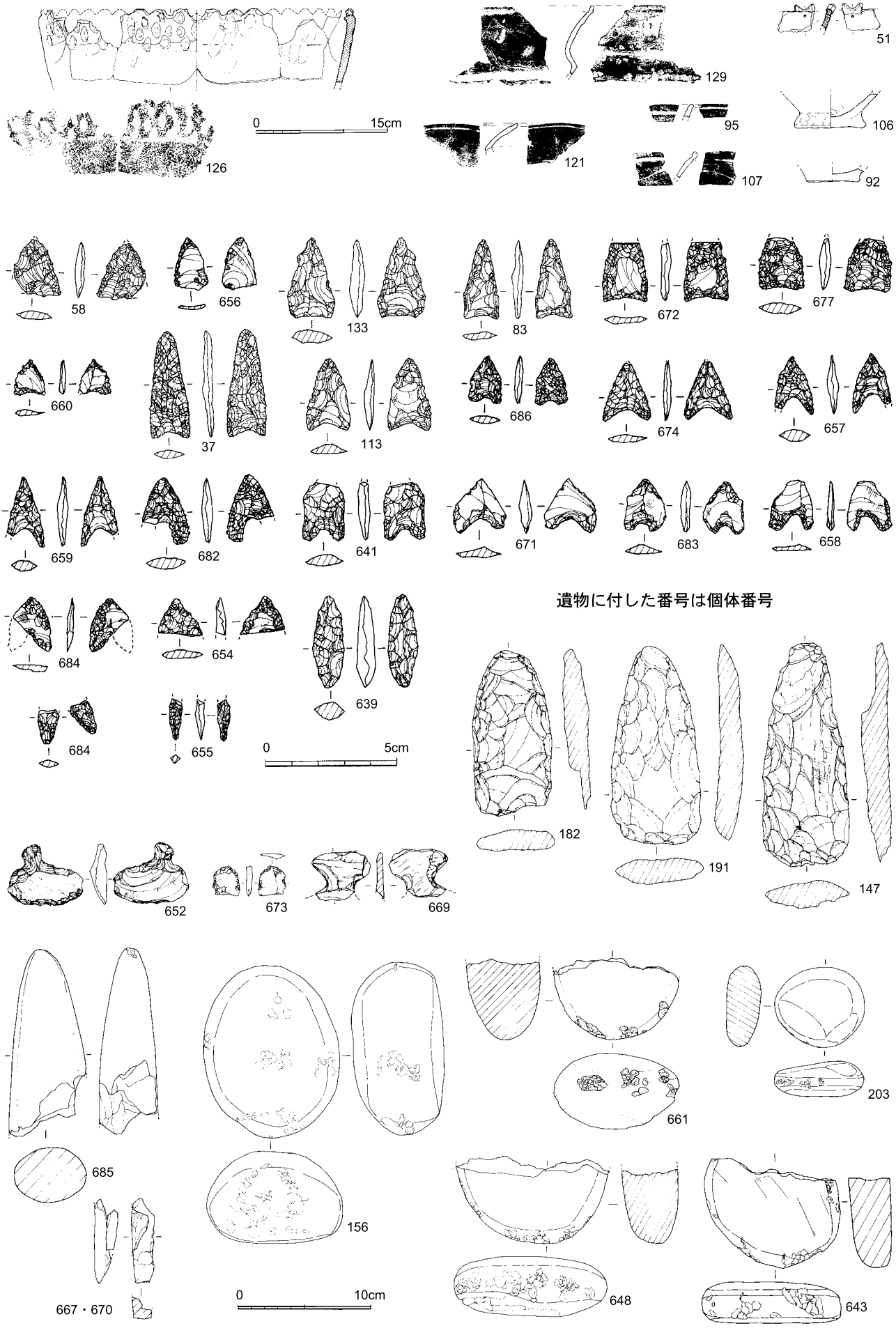
石鏃は、すべて打製であり、その石材は黒色黒曜石とサヌカイトである。表裏両面を丁寧に調整しているものと剥離面を残すものの２種類に分けられる。すべて中茎の無い無茎式のものであり、平面形が三角形を呈するものが主であるが、他にも長めの二等辺三角形や五角形を呈するものもある。基部の形状では、平らなもの・やや窪むもの・深く窪むものの３種類がある。639 は、石槍とも考えられるが、尖基鏃として扱った。

655 は、欠損品ながら、黒色黒曜石製の石錐である。

石斧は、打製のものと磨製のものがある。打製石斧３点は、いずれも両面調整で扁平に仕上られているが、その材質は片岩ホルンフェルス（182）・滑石（191）・アクチノ閃石片岩（147）と様々である。磨製石斧には、刃部を欠損するが横断面が太い楕円形を呈するものと、柱状片刃状のものがあり、その石材は蛇紋岩（685）と頁岩ホルンフェルス（667・670）である。

磨石あるいは敲石は、平面形が円形もしくは太めの楕円形を呈しており、側面には敲き痕が残っている。石材は大半が安山岩であるが、203 は花崗岩製である。

ほかに、削器としての石匙（652）や剝片石器片（673）も出土しており、いずれも黒色黒曜石製



第98図　永岡岸元遺跡出土の縄文土器・石器集成図（S=1/2・1/4・1/6）

である。669 は、両側から抉られたつまみ状のものであり、両面に磨きが施されている。石匙としては考えにくい。

縄文時代の遺構は検出できていないが、貯蔵・煮沸用の土器、狩猟用の石鏃、農耕具や工具としての石斧、加工具としての石匙・磨石・敲石など、多種多様な生活用具が出土した。宝満川と山口川に挟まれた丘陵上では縄文時代中期頃から人の営みが行われていた事が伺われる。

２．砥石と農・工具について

今回の調査で出土した遺物の中で、気に留まったものは砥石である。土器に比べて著しく多いわけでもなく、その出土状況も周辺の同時期の遺跡に比べて突出しているわけでもない。しかし、その砥石で研磨されたであろう道具の存在を考えると、当時－弥生時代後期－の生産基盤が連想される（第 99 図)。

出土した砥石は、21 点を数える。石材は細粒・中粒の砂岩が主であるが、他の石を使用したものもある (108・638) 。その形態と大きさは多種多様であるが、著しく細くなったものもあり大切に長く使用されていたことが窺える。

砥石に共伴する生産具のうち、農耕用石器としては石庖丁がある。石庖丁は、製作段階において砥石で研磨されており、使用段階においても刃砥ぎとして何度も砥石が使用されているであろう。

農具としては金属製品も共伴しており、種類としては鎌・穂摘具・鋤鍬先がある。いずれも刃を有する農具であり、砥石による刃砥ぎは欠かせないものである。特に、鉄製穂摘具は石庖丁と同じ機能をなすものであり、農耕具の金属製品－主として鉄器－化が窺える。

また、工具も金属製品化しており、斧・刀子・鉈は全て木工用鉄器である。農具と同様刃を有しており、砥石による刃砥ぎは欠かせないものである。

以上の事から、永岡岸元遺跡出土の砥石は、農具の製作・維持（刃砥ぎ）に伴い、または木製農具の製作用工具の維持に伴い、かなり高い頻度で使用されていたものであろう。さらに、これらの遺物は、永岡岸元遺跡の弥生時代後期以降の生産基盤が農耕にあったことを示している。

参考文献

次山　淳　「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40－２　1993

小林行雄・佐原　真　『紫雲出』　1964

中山平次郎 「太宰府附近に於ける彌生式系統遺蹟調査」(其二)　『考古學雜誌』第二十卷第八號　考古學會　1930

田中良之　「２．阿高式土器」『縄文文化の研究』第４巻　縄文土器Ⅱ　雄山閣　1981

山崎純男・島津義昭　「４．九州の土器」『縄文文化の研究』第４巻　縄文土器Ⅱ　雄山閣　1981

柳田康雄　「２．高三潴式と西新町式土器」『弥生文化の研究』第４巻　弥生土器Ⅱ　雄山閣　1987

柳田康雄　「２．土師器の編年　２．九州」『古墳時代の研究』第６巻　土師器と須恵器　雄山閣　1991

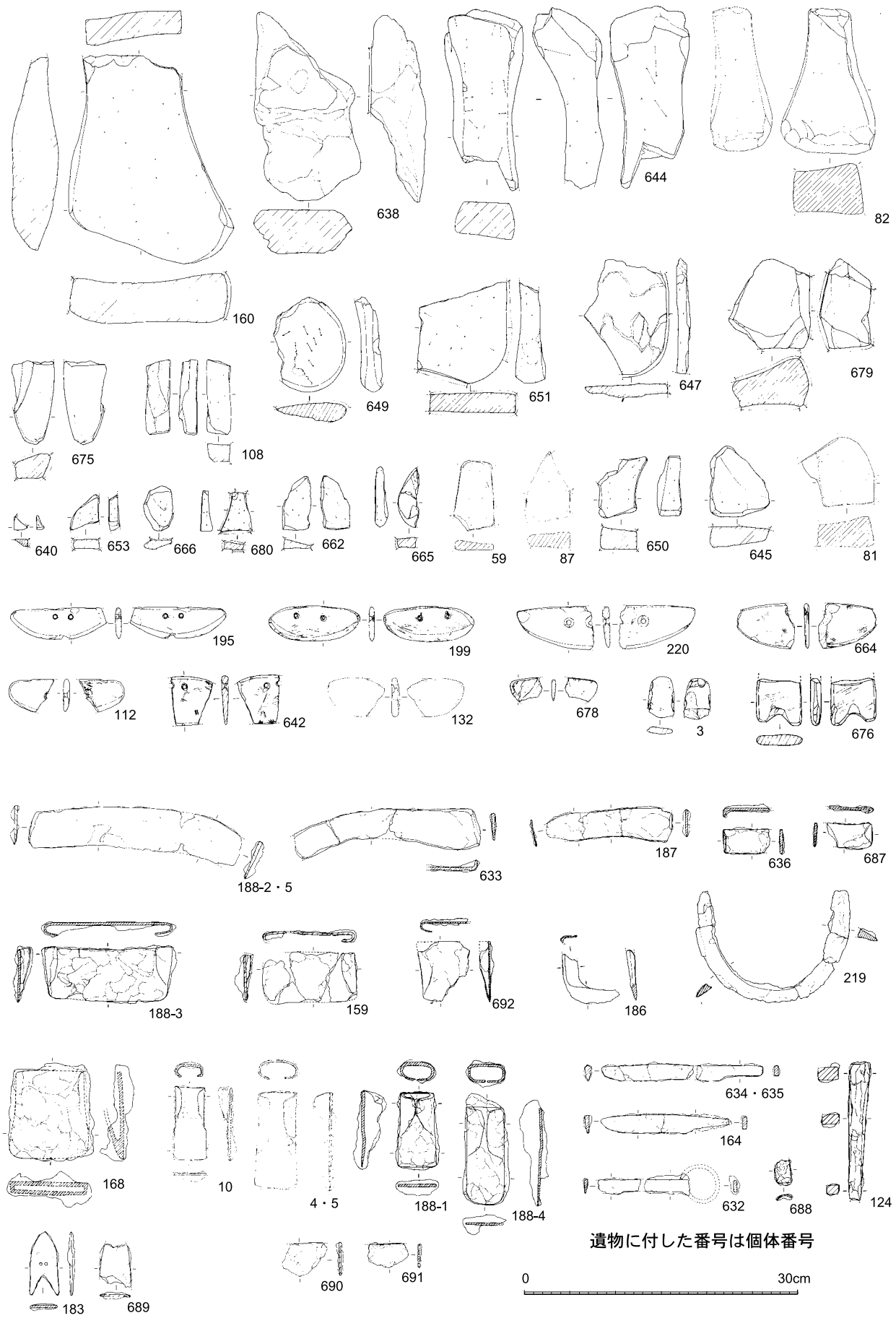
福岡県教育委員会　「塚堂遺跡Ⅰ」『一般国道 210 号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第１集　1983

福岡県教育委員会　『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』1980

福岡県教育委員会　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第７集　1978

大宰府市教育委員会　「太宰府・国分地区遺跡群１」『太宰府市の文化財』第 73 集　2004

福岡県教育委員会　「薬師堂東遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』13　1988

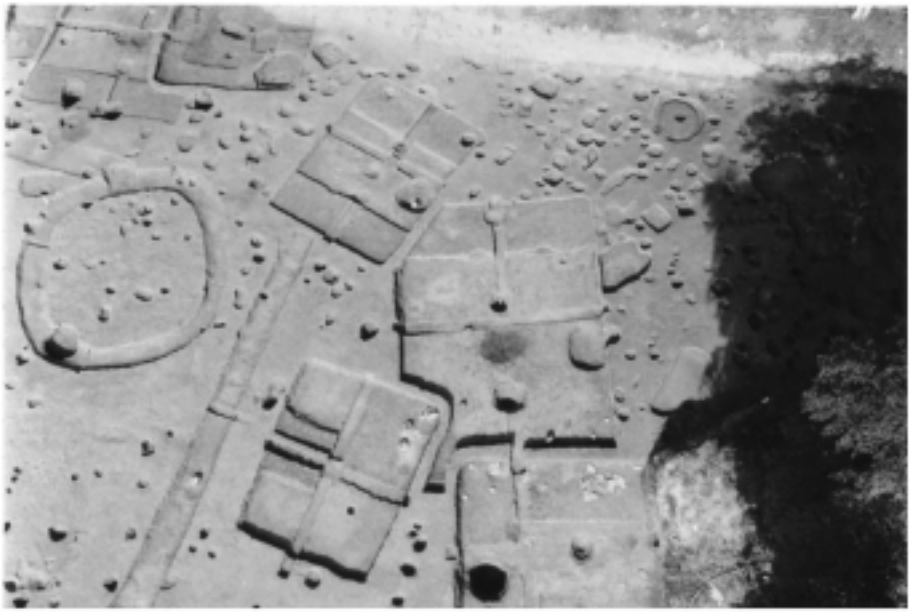


第 99 図　永岡岸元遺跡出土の砥石と農・工具他集成図（S =1/6）

写　真　図　版

図版１　Ⅰ区

Ⅰ区全景（上空から）



ＳＣ５付近（上空から）

ＳＣ１（東から）

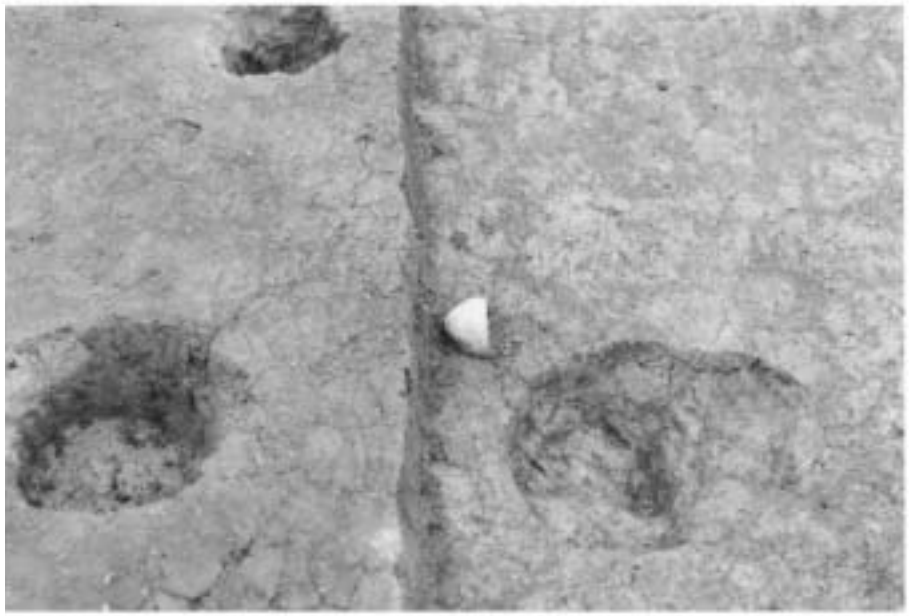
ＳＣ１遺物出土状況（東から）

ＳＣ２（東から）

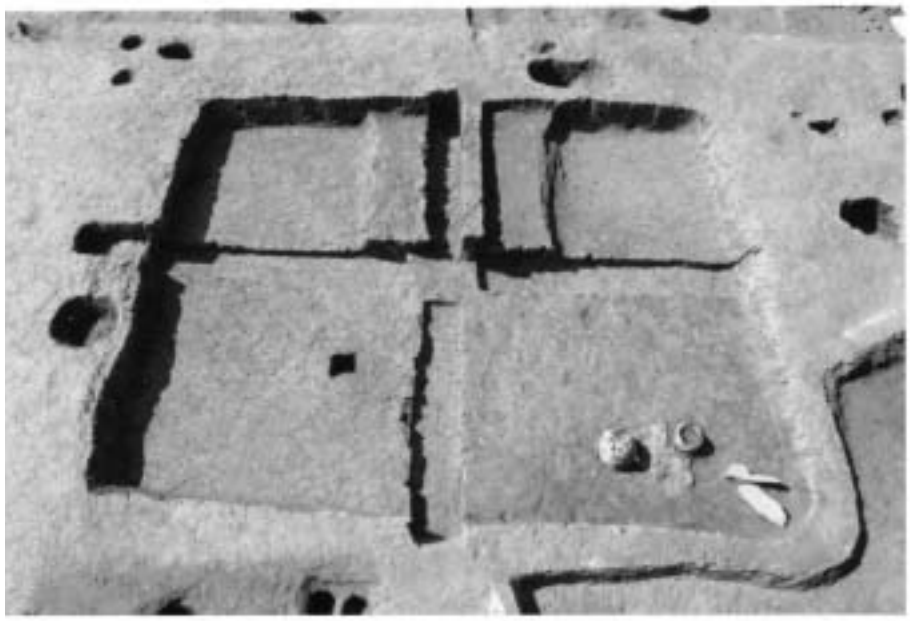
ＳＣ３（北西から）

図版３　Ｉ区

ＳＣ３土坑１遺物出土状況
（北西から）



ＳＣ３遺物出土状況（北西から）



ＳＣ４（南東から）

ＳＣ４遺物出土状況（北西から）

ＳＣ４カマド（南東から）

ＳＣ４カマド遺物出土状況
（南東から）

図版５　Ｉ区

ＳＣ５（西から）

ＳＣ５遺物出土状況（北から）

ＳＣ５遺物出土状況（北東から）

ＳＣ６（東から）

ＳＣ６遺物出土状況（東から）

ＳＣ６遺物出土状況（南から）

図版７　Ⅰ区

ＳＣ６遺物出土状況（西から）

ＳＣ７（北西から）

ＳＣ８（北東から）

ＳＣ８土坑２遺物出土状況
（北東から）

ＳＣ８（奥）・ＳＣ９（手前）
（北西から）

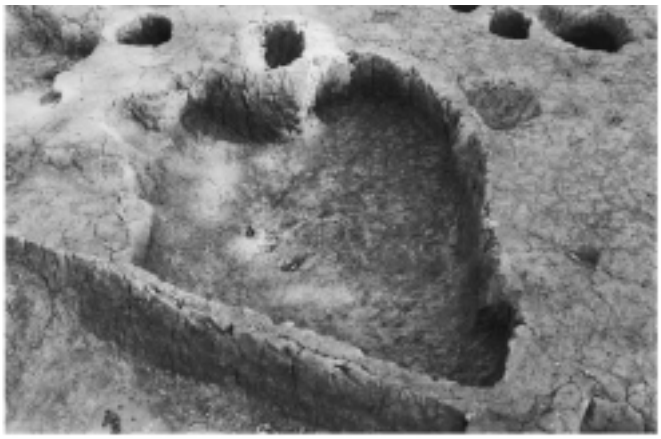
ＳＣ10（東から）

図版９　Ｉ区

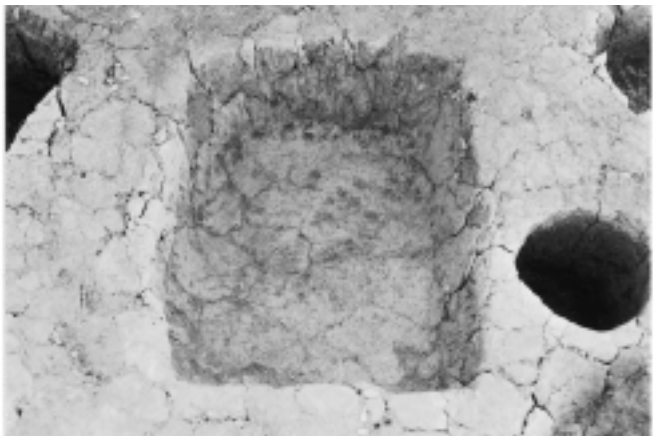
ＳＢ１（北東から）

ＳＢ２（東から）

ＳＢ３（北から）



SK1（西から）

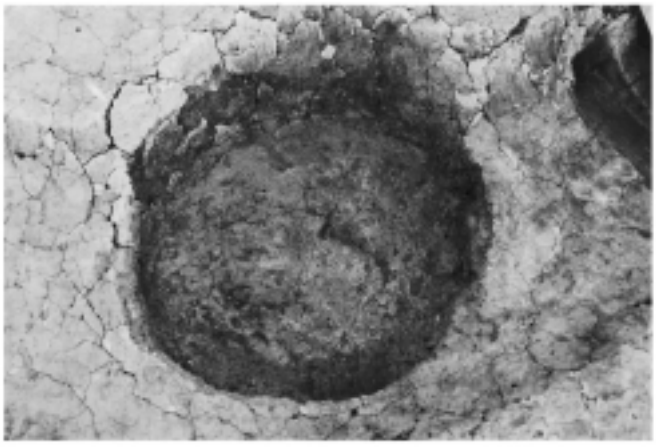


SK5（北から）

SK2（南から）

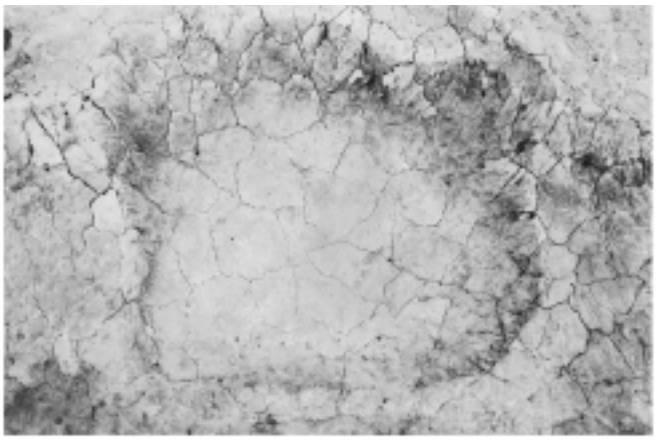
SK6（北東から）

SK3（北東から）



SK7（南西から）

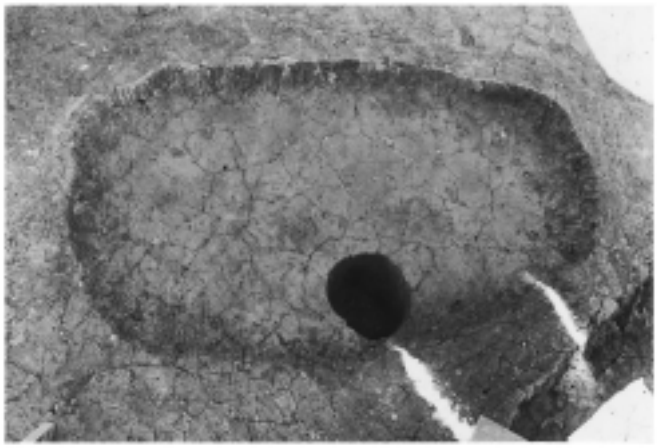
SK4（南西から）



SK8（南から）

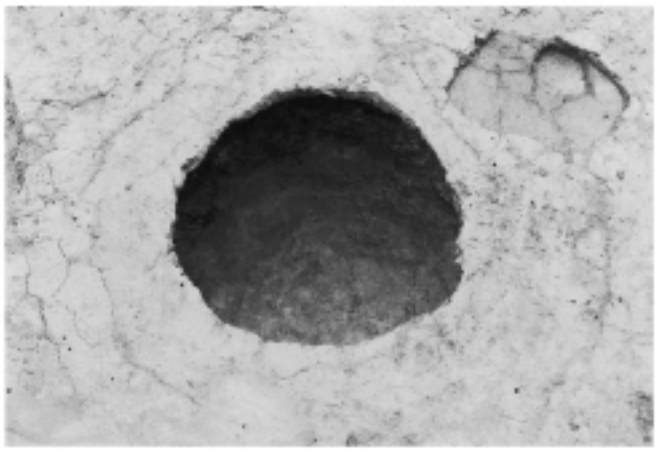
図版11　Ⅰ区

SK9（南西から）

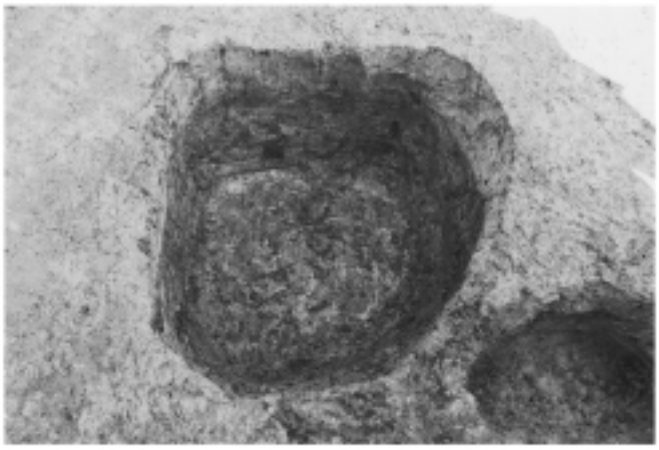


SK13（南から）

SK10（北東から）



SP1（南西から）



SK11（南西から）

P82遺物出土状況（南西から）

SK12（北から）

作業風景

ＳＶ１（南東から）

ＳＶ２（南西から）

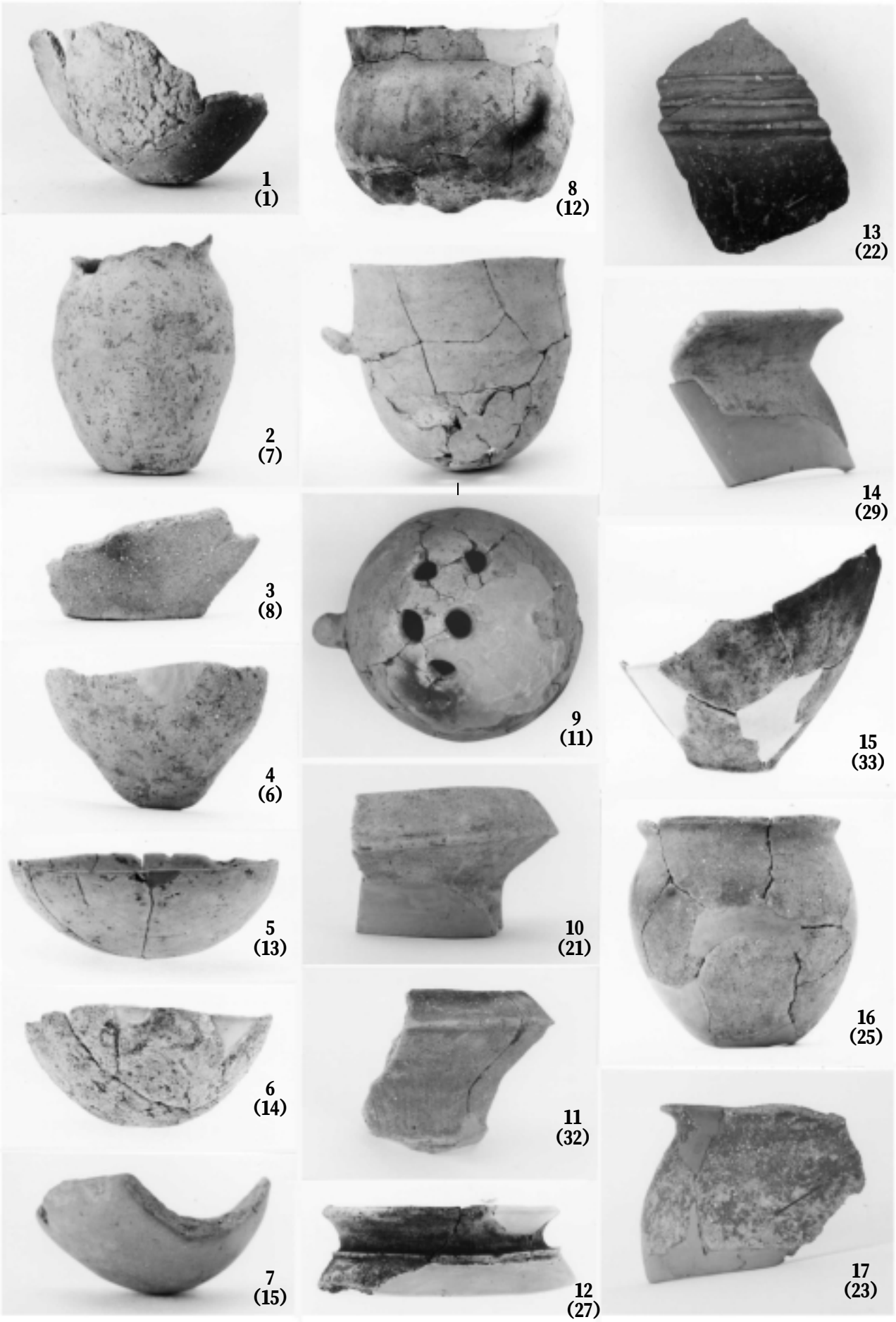
作業風景

図版13　Ⅰ区

ＳＤ１土層（西から）

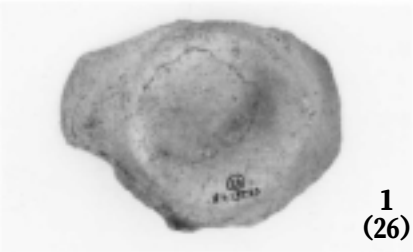
ＳＤ２遺物出土状況（南西から）

ＳＤ２土層（南西から）


1
(1)
2
(7)
3
(8)
4
(6)
5
(13)
6
(14)
7
(15)
8
(12)
9
(11)
10
(21)
11
(32)
12
(27)
13
(22)
14
(29)
15
(33)
16
(25)
17
(23)

ＳＣ１・３・４・５　出土土器

図版15　Ⅰ区

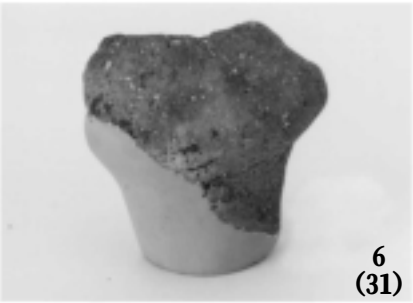

1
(26)

2
(34)

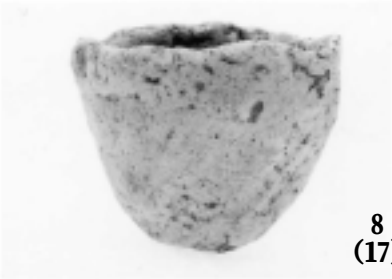
3
(28)

4
(19)

5
(20)


6
(31)

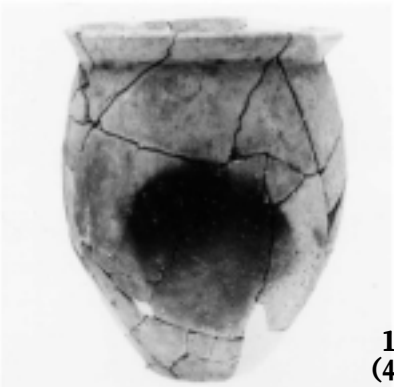
7
(30)

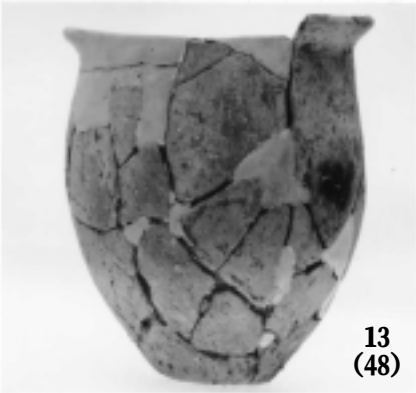

8
(17)

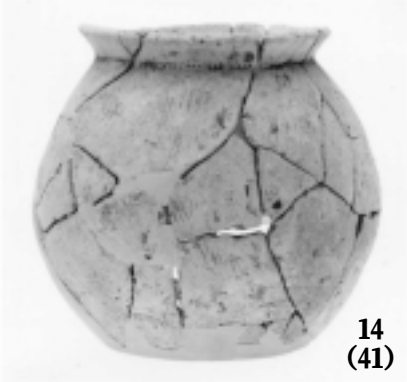
9
(18)

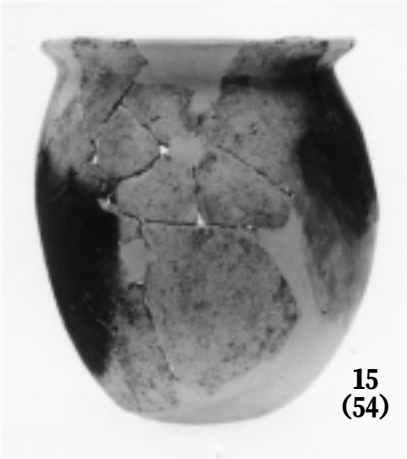
10
(24)

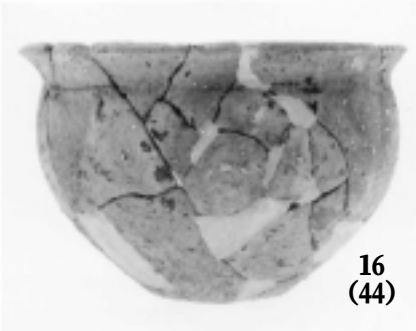
11
(43)


12
(40)


13
(48)


14
(41)


15
(54)

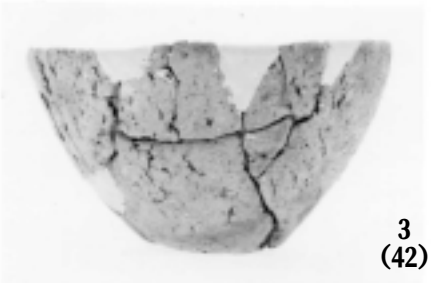

16
(44)

17
(46)

ＳＣ５・６　出土土器

1
(49)

2
(45)

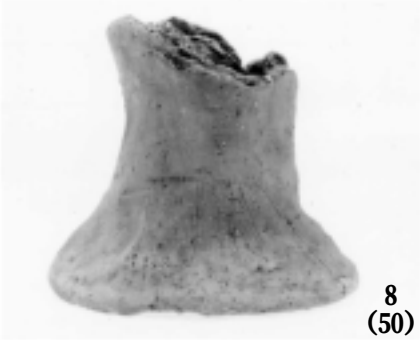

3
(42)

4
(47)

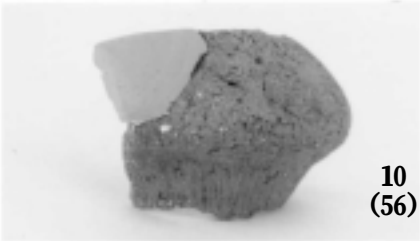
5
(39)

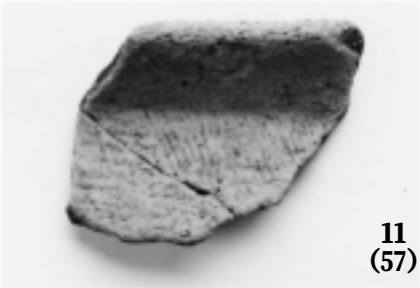
6
(52)

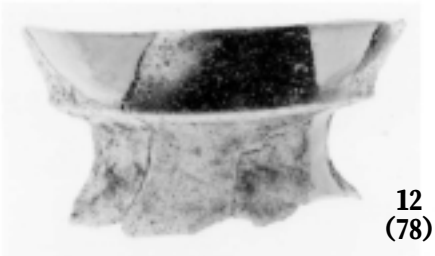
7
(53)

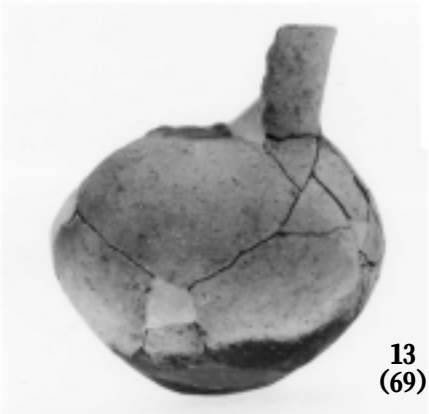

8
(50)

9
(55)

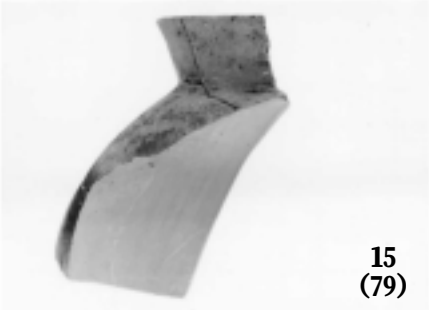

10
(56)


11
(57)


12
(78)

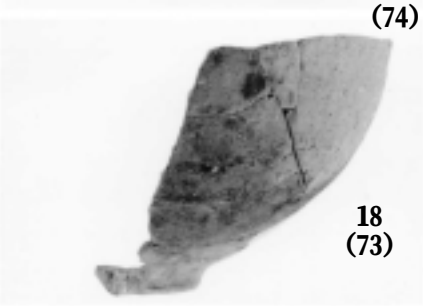

13
(69)

14
(68)


15
(79)

16
(80)

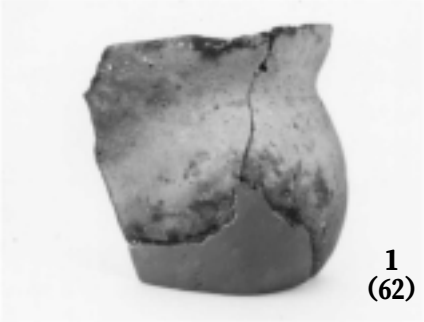
17
(74)


18
(73)

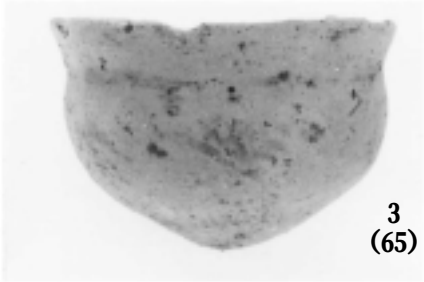
19
(72)

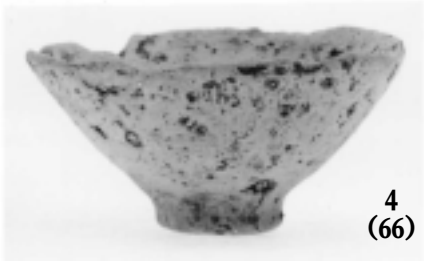
ＳＣ６・７・８　出土土器

図版17　Ⅰ区


1
(62)

2
(60)


3
(65)


4
(66)

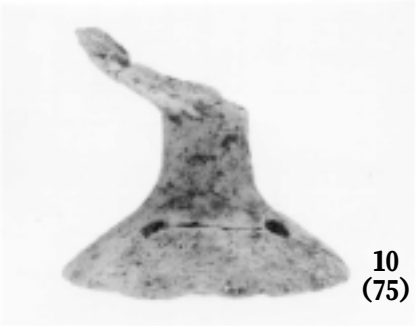
5
(61)

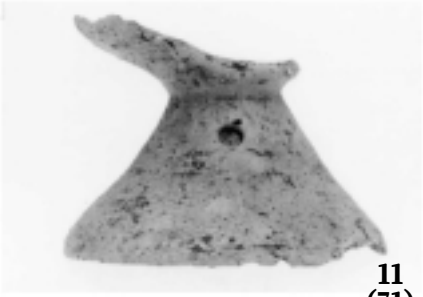
6
(63)

7
(76)

8
(64)

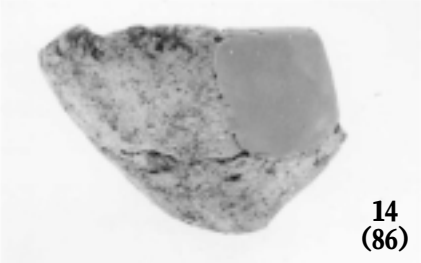
9
(77)

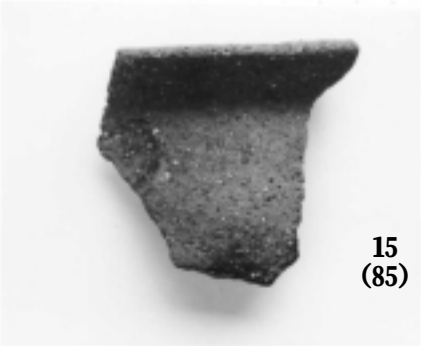

10
(75)


11
(71)

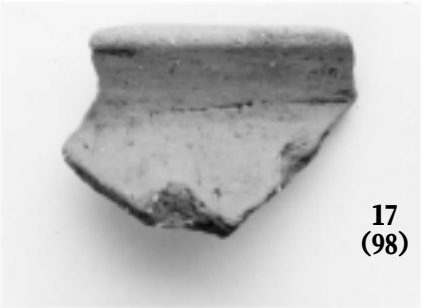
12
(67)

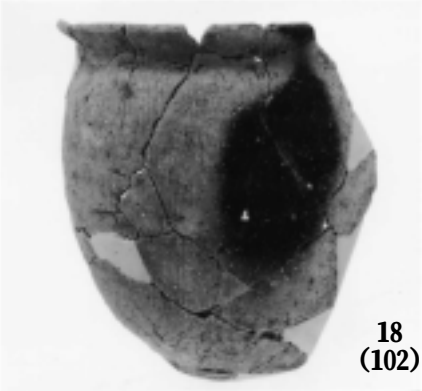
13
(84)


14
(86)


15
(85)

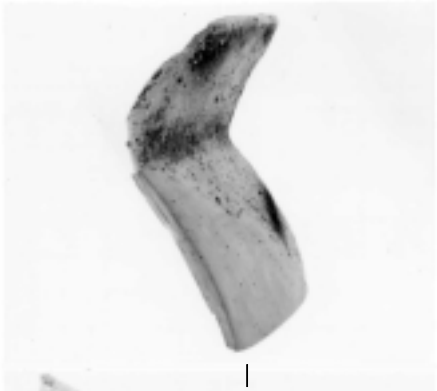
16
(88)


17
(98)


18
(102)

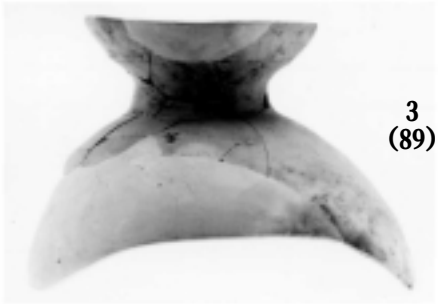
19
(100)

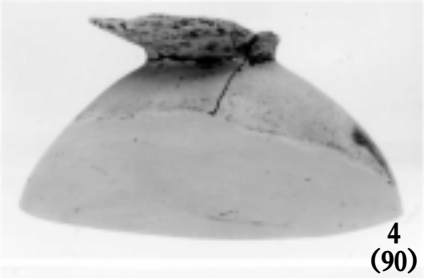
ＳＣ８・９・10，ＳＫ３・12・９出土土器



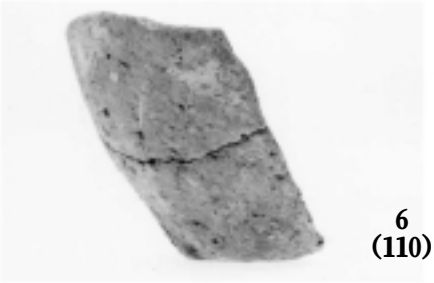
1
(101)

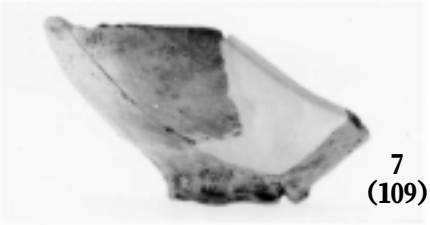
2
(96)

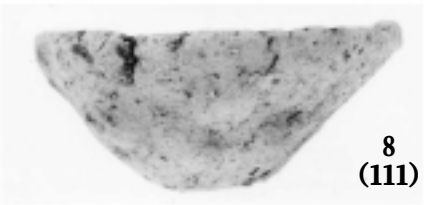

3
(89)


4
(90)

5
(91)

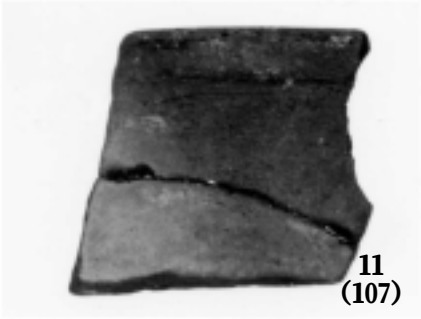

6
(110)


7
(109)


8
(111)

9
(114)

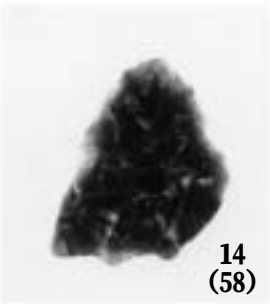
10
(95)


11
(107)

12
(51)

13
(106)

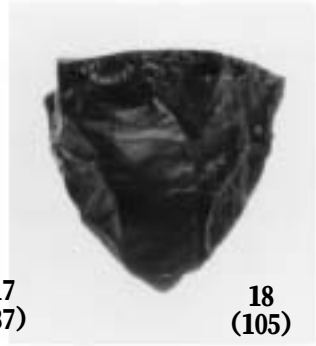
ＳＣ６，ＳＫ９，ＳＰ１，ＳＤ２，包含層，ＴＬ1出土土器・土製品


14
(58)

15
(113)

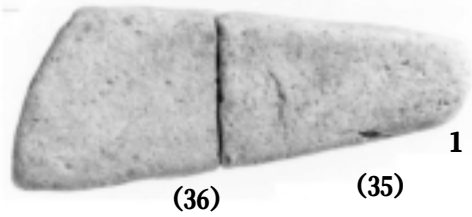
16
(83)

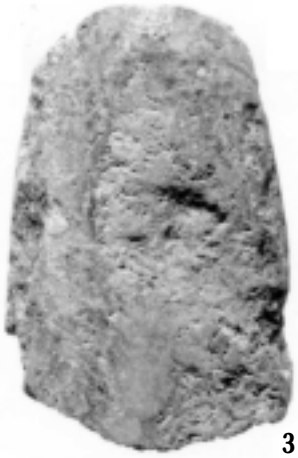
17
(37)

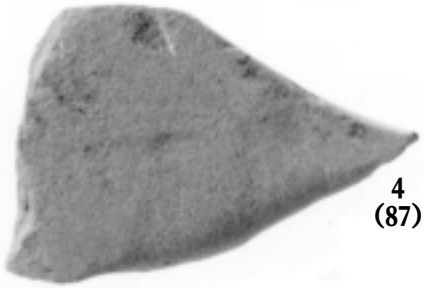

18
(105)

Ⅰ区出土石器①

図版19　Ⅰ区







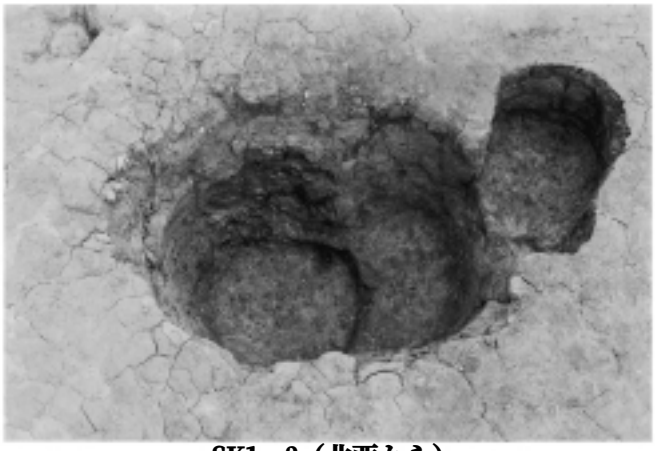
Ⅰ区　出土石器②

Ⅰ区　出土金属器

Ⅰ区（奥）・Ⅱ区（手前）遠景（西から）

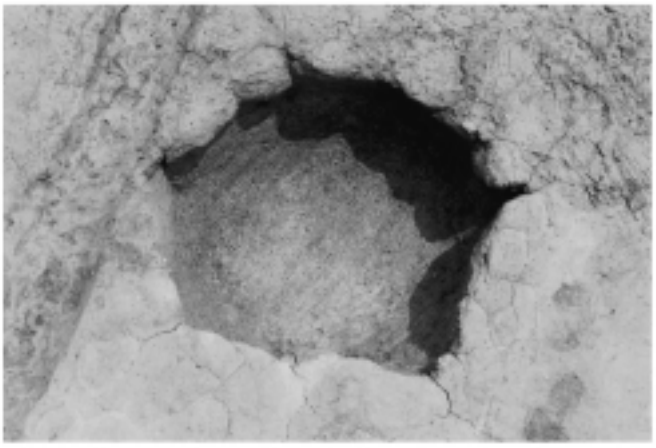
Ⅱ区全景（上空から）

図版21　II区



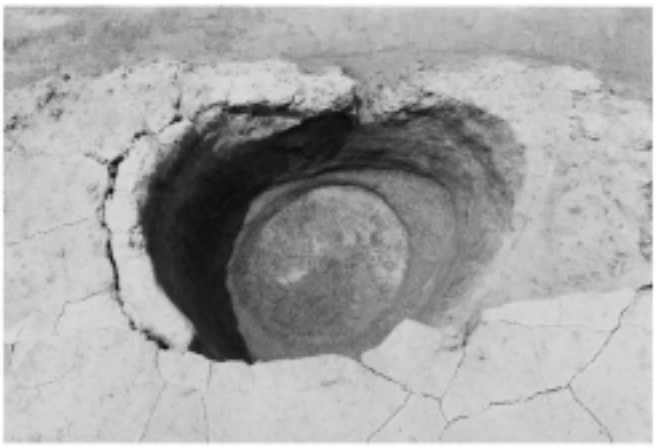
SK1・2（北西から）

SD6・7土層A（南から）



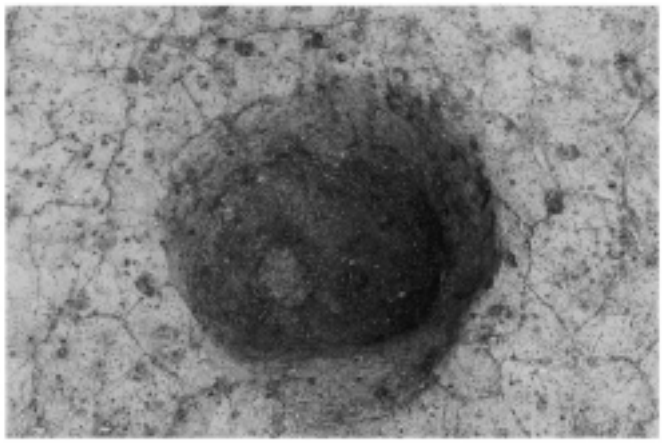
SK3（北西から）

SD7土層B（南から）

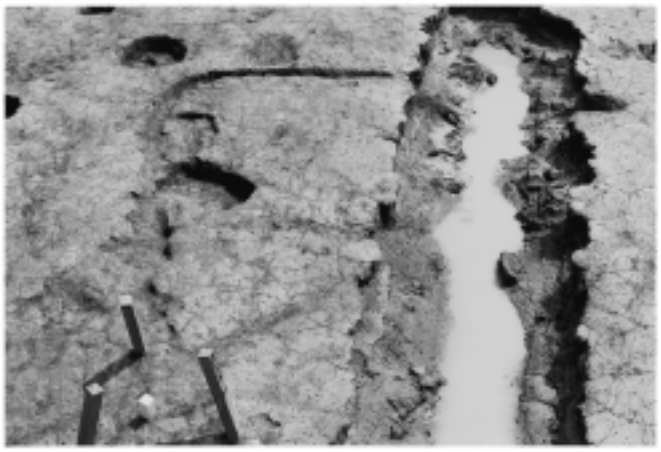


SK4（北東から）

SD7土層C（南東から）



SK5（南西から）



SD10（北から）

谷部遺物出土状況（北西から）

谷部遺物出土状況（南西から）

谷部３Ｔ土層（北西から）

図版23　Ⅱ区

谷部完掘状況（北西から）

谷部完掘状況（南西から）

谷部遺物出土状況①

谷部遺物出土状況②

谷部遺物出土状況③

作業風景

図版25　II区

1
(457)

2
(450)

3
(452)

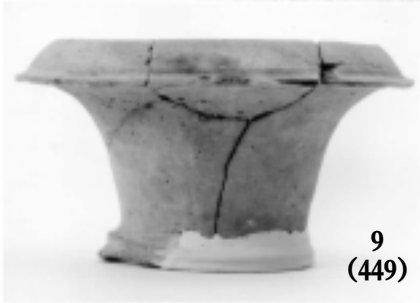
4
(448)

5
(151)

6
(455)

7
(201)

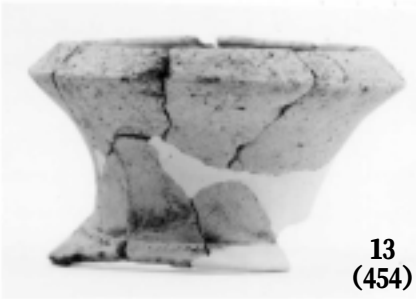
8
(460)

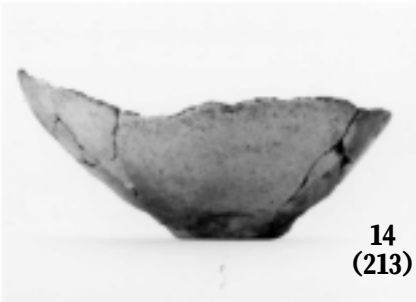

9
(449)

10
(165)

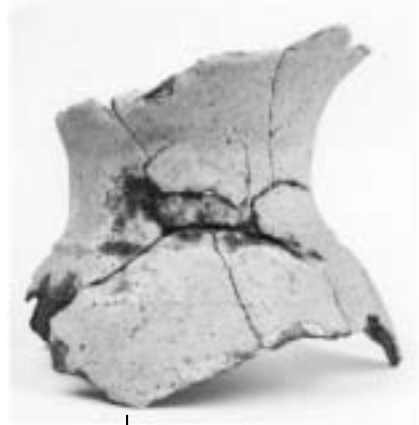
11
(221)

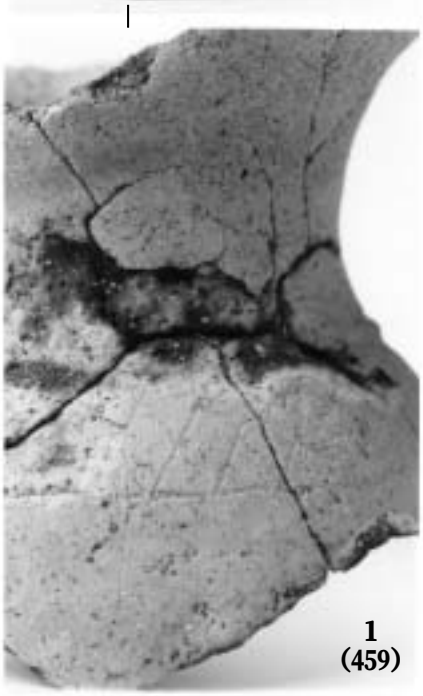
12
(447)


13
(454)


14
(213)

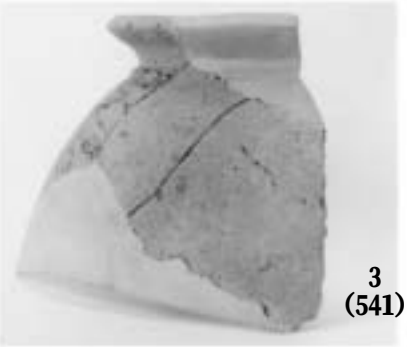
谷部出土土器①





1
(459)

2
(453)



3
(541)

4
(501)

5
(547)

6
(500)

7
(478)

8
(177)

9
(222)

10
(494)

11
(495)

12
(483)

谷部出土土器②

図版27　II区

1
(481)

6
(193)

11
(158)

2
(482)

7
(488)

12
(444)

3
(192)

8
(341)

13
(492)

4
(180)

9
(445)

14
(167)

5
(162)

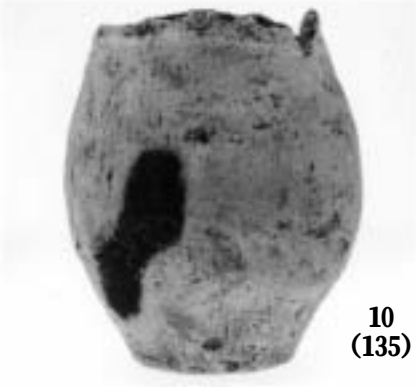
10
(440)

15
(334)

谷部出土土器③

1
(528)

6
(542)


10
(135)

2
(529)

7
(531)

11
(205)

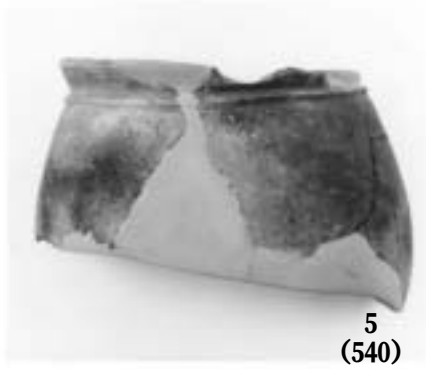
3
(198)

8
(532)

12
(523)

4
(539)

13
(149)

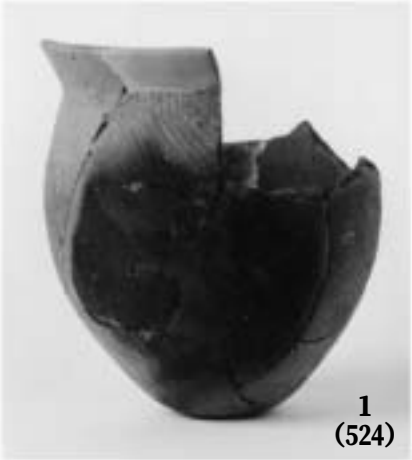

5
(540)

9
(179)

14
(184)

谷部出土土器④

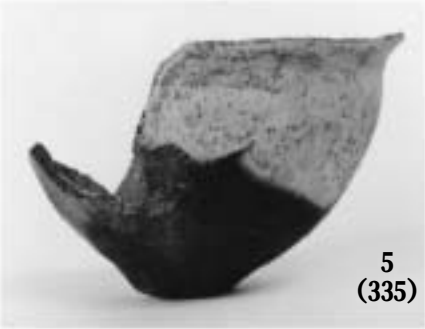
図版29　II区


1
(524)

2
(514)

3
(517)

4
(545)


5
(335)

6
(216)

7
(217)

8
(333)

9
(520)

10
(518)

11
(155)

12
(212)

13
(367)

14
(148)

谷部出土土器⑤

1
(224)

2
(343)

3
(137)

4
(163)

5
(360)

6
(353)

7
(366)

8
(390)

9
(354)

10
(362)

11
(226)

12
(209)

13
(365)

14
(227)

15
(350)

16
(357)

17
(208)

谷部出土土器⑥

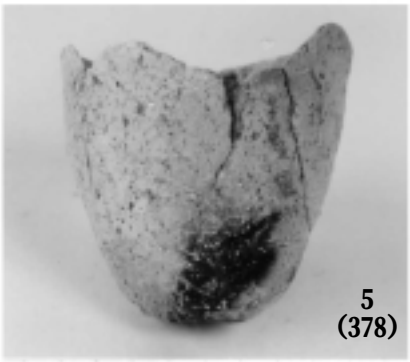
図版31　Ⅱ区

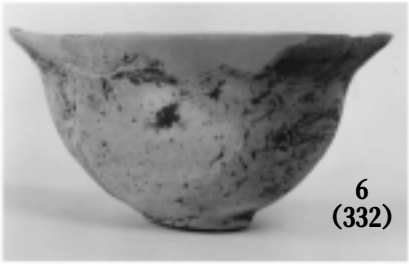
1
(207)

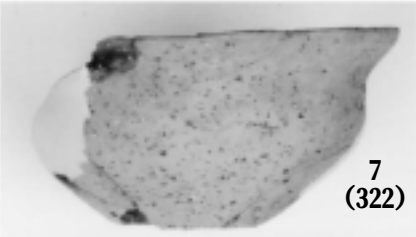
2
(363)

3
(436)

4
(373)


5
(378)

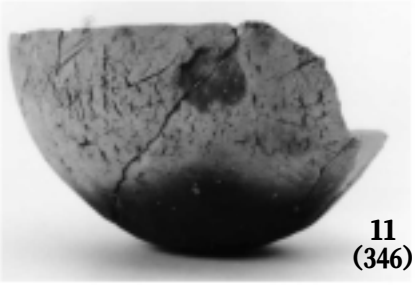

6
(332)


7
(322)

8
(326)

9
(325)

10
(320)


11
(346)

12
(345)

13
(369)

14
(418)

15
(381)

16
(389)

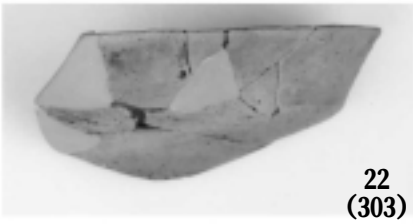
17
(380)

18
(139)

19
(145)

20
(314)

21
(615)


22
(303)

谷部出土土器⑦

1
(181)

2
(293)

3
(295)

4
(614)

5
(146)

6
(153)

7
(194)

8
(204)

9
(176)

10
(223)

11
(154)

12
(268)

13
(266)

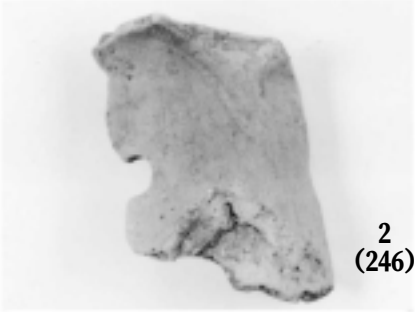
14
(166)

15
(196)

谷部出土土器⑧

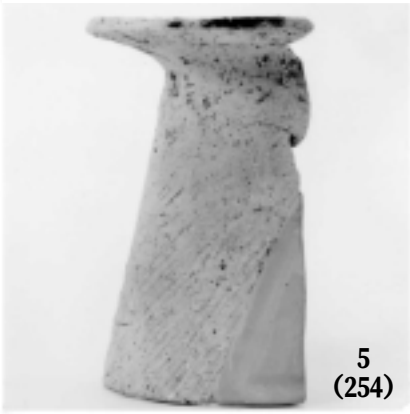
図版33　II区

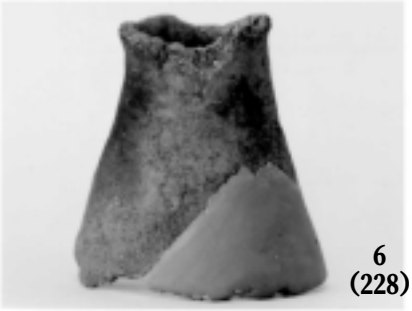
1
(211)

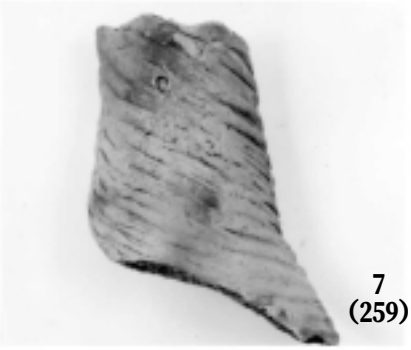

2
(246)

3
(248)

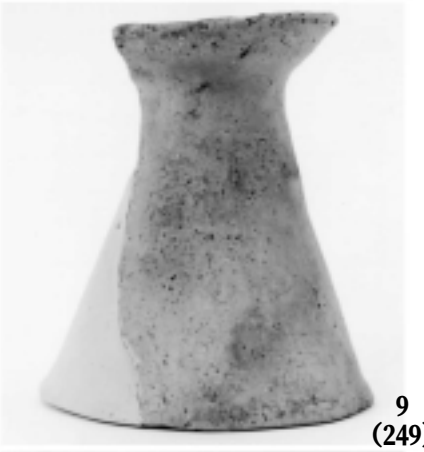
4
(210)

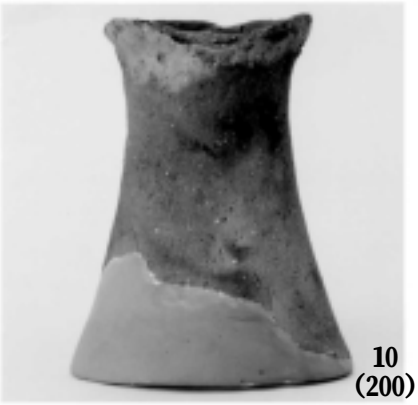

5
(254)


6
(228)


7
(259)

8
(256)


9
(249)


10
(200)

11
(190)

12
(260)

13
(138)

14
(189)

谷部出土土器⑨

1
(257)

2
(157)

3
(264)

4
(261)

5
(214)

6
(258)

7
(178)

8
(267)

9
(225)

10
(244)

11
(243)

12
(242)

13
(236)

谷部出土土器⑩

図版35　II区

1
(241)

2
(169)

3
(152)

4
(215)

5
(185)

6
(206)

7
(174)

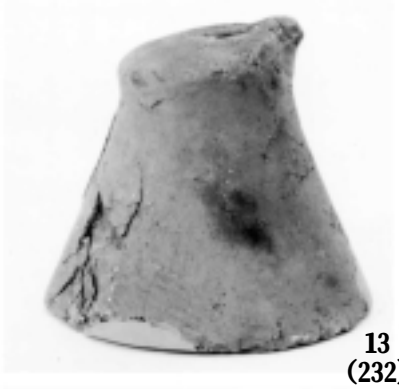
8
(237)

9
(175)

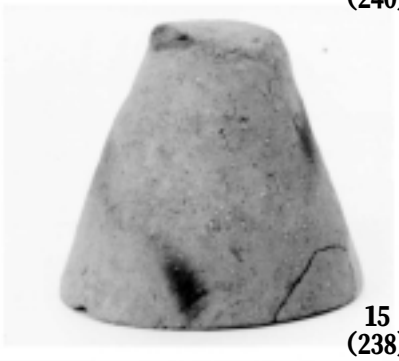
10
(229)

11
(233)

12
(231)


13
(232)

14
(240)


15
(238)

16
(461)

17
(465)

谷部出土土器⑪

1
(616)

2
(463)

3
(464)

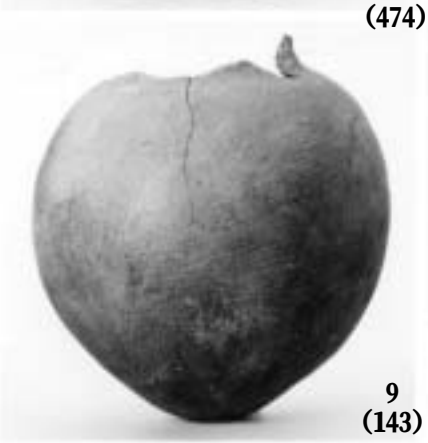
4
(466)

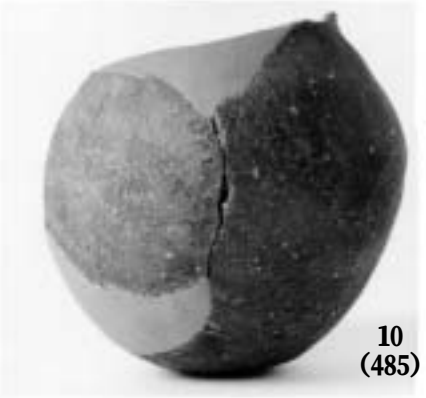
5
(469)

6
(498)

7
(557)

8
(474)


9
(143)


10
(485)

11
(487)

12
(499)

13
(550)

14
(441)

15
(144)

16
(331)

17
(134)

18
(429)

19
(172)

谷部出土土器⑫

図版37　II区

1
(433)

2
(427)

3
(428)

4
(430)

5
(432)

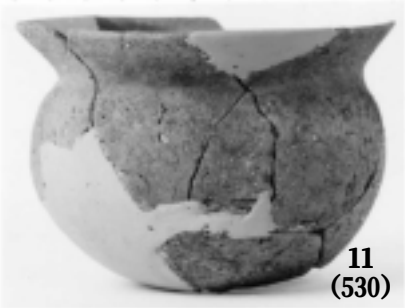
6
(431)

7
(603)

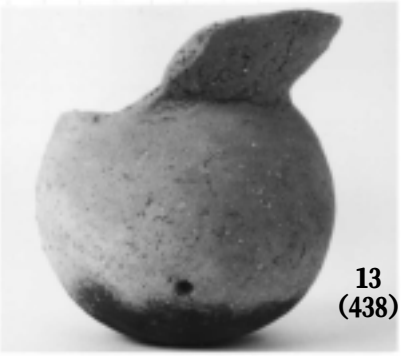
8
(435)

9
(443)

10
(442)


11
(530)

12
(171)


13
(438)

14
(439)

15
(512)

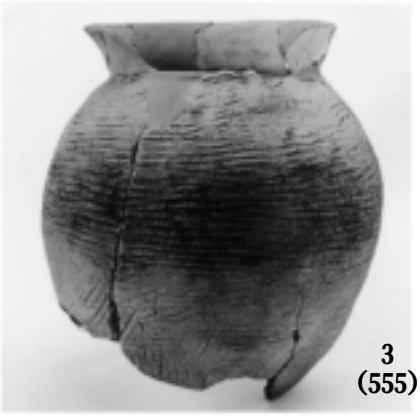
16
(551)

17
(161)

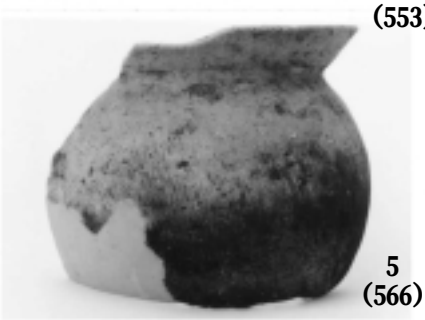
谷部出土土器⑬

1
(546)

2
(556)

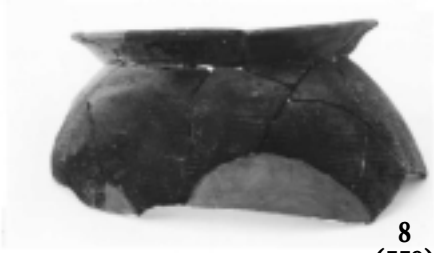

3
(555)

4
(553)

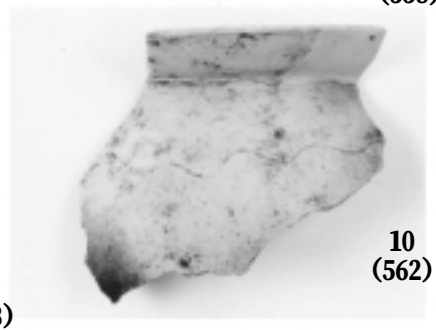

5
(566)

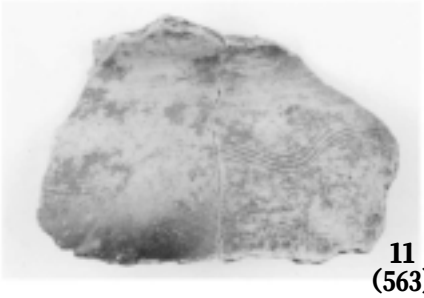
6
(170)

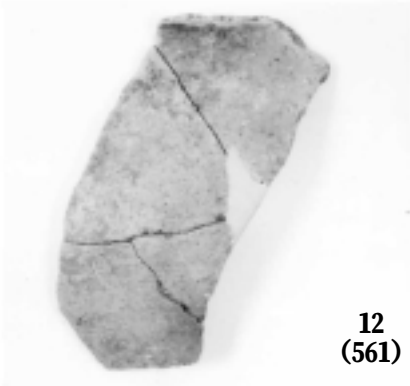
7
(554)

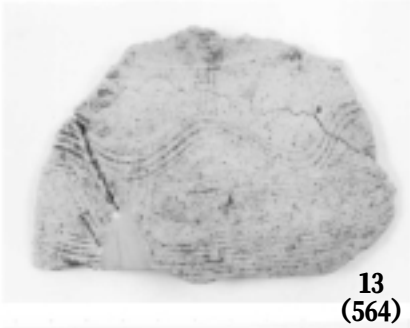

8
(559)

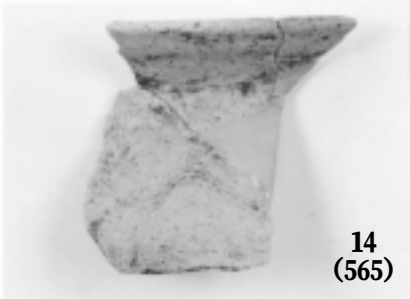
9
(558)

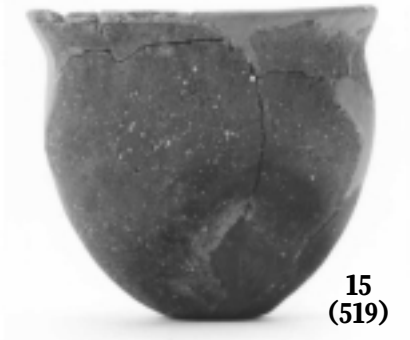

10
(562)


11
(563)


12
(561)


13
(564)


14
(565)


15
(519)

16
(397)

17
(425)

18
(422)

谷部出土土器⑭

図版39　II区

1
(140)

2
(421)

3
(173)

4
(419)

5
(400)

6
(417)

7
(572)

8
(602)

9
(585)

10
(587)

11
(324)

12
(319)

13
(577)

14
(372)

15
(415)

16
(371)

17
(310)

18
(313)

19
(312)

20
(307)

21
(306)

谷部出土土器⑮

1
(311)

2
(309)

3
(321)

4
(317)

5
(141)

6
(136)

7
(318)

8
(305)

9
(299)

10
(300)

11
(296)

12
(298)

13
(301)

14
(292)

15
(287)

16
(290)

17
(282)

18
(285)

19
(280)

20
(150)

21
(279)

谷部出土土器⑯

図版41　II区

1
(297)

2
(272)

3
(271)

4
(274)

5
(273)

6
(270)

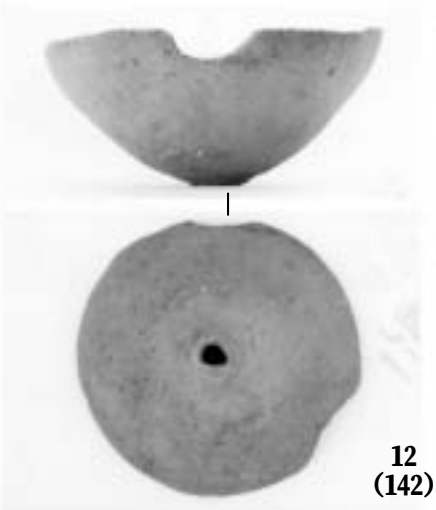
7
(277)

8
(278)

9
(276)

10
(404)

11
(406)


12
(142)

13
(601)

14
(573)

15
(571)

16
(586)

17
(402)

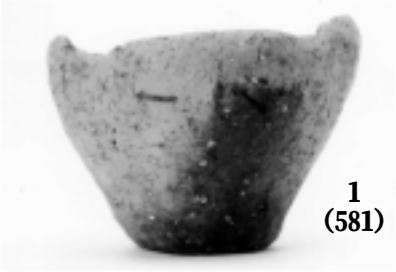
18
(420)

19
(370)

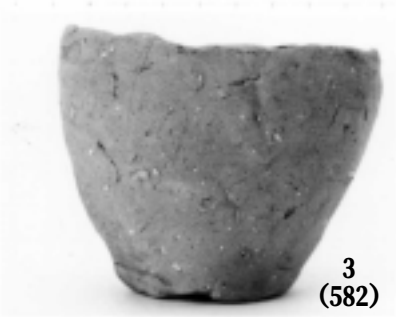
20
(599)

21
(584)

谷部出土土器⑰


1
(581)

2
(583)


3
(582)

4
(594)

5
(593)

6
(596)

7
(597)

8
(598)

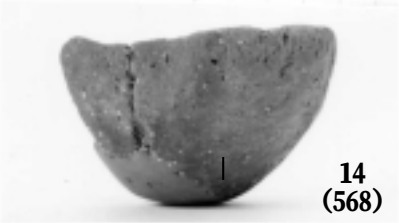
9
(574)

10
(595)

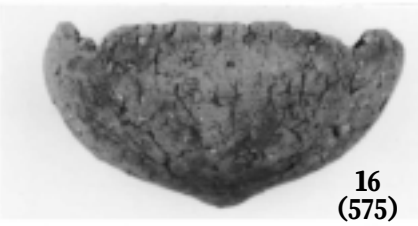
11
(567)

12
(576)

13
(600)


14
(568)

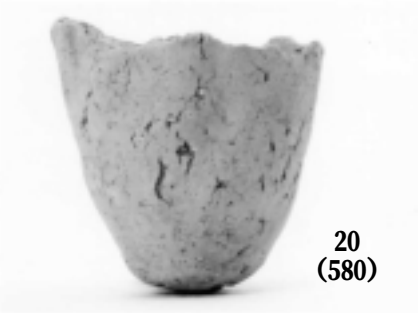
15
(569)


16
(575)

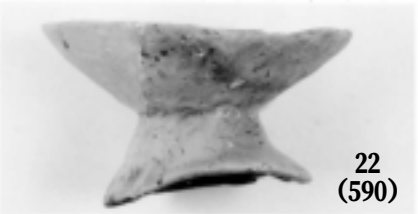
17
(578)

18
(570)

19
(579)


20
(580)

21
(589)


22
(590)

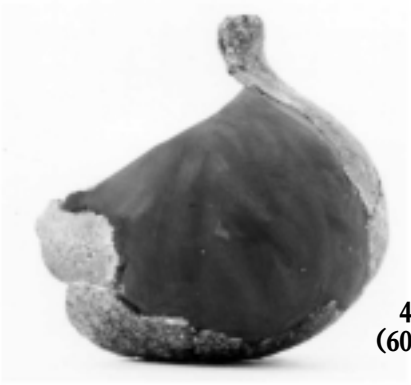
谷部出土土器⑱

図版43　Ⅱ区

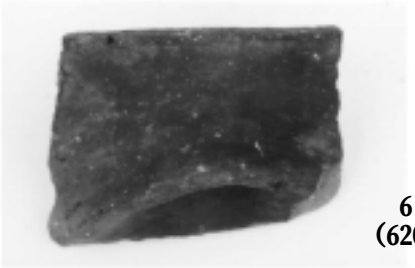
1
(588)

2
(604)

3
(605)


4
(606)

5
(592)


6
(620)

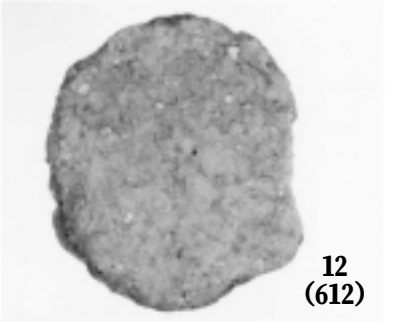
7
(619)

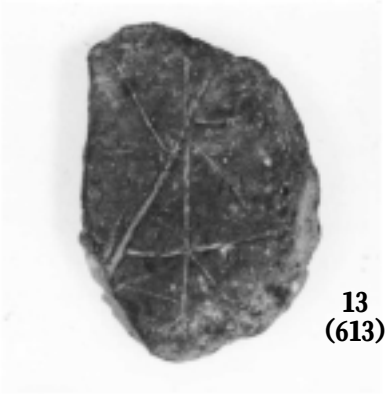
8
(608)

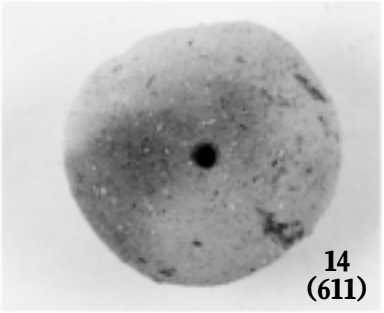
9
(607)

10
(621)

11
(622)

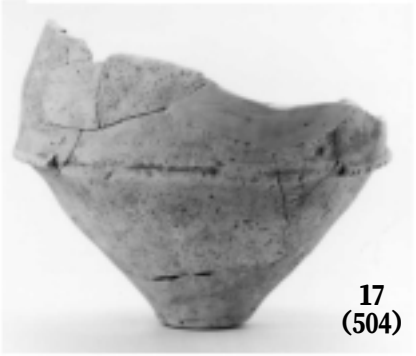

12
(612)

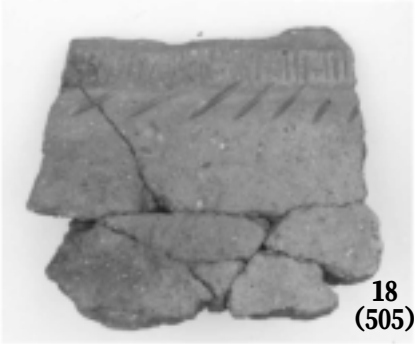

13
(613)


14
(611)

15
(610)

16
(609)


17
(504)


18
(505)

谷部出土土器⑲（1～16），谷部以外出土土器①（17・18）

1
(458)

2
(480)

3
(533)

4
(543)

5
(521)

6
(522)

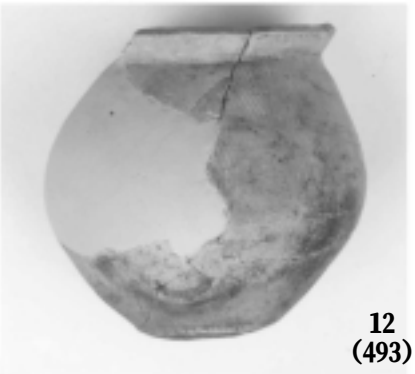
7
(515)

8
(516)

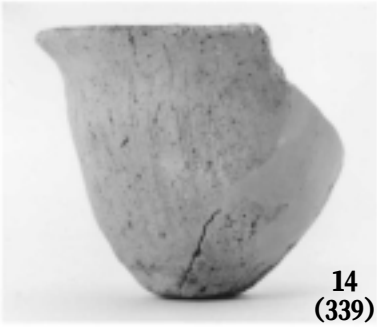
9
(513)

10
(526)

11
(490)


12
(493)

13
(344)


14
(339)

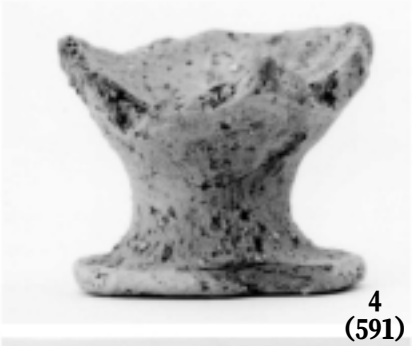
谷部以外出土土器②

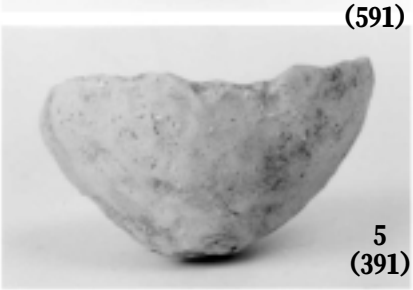
図版45　Ⅱ区

1
(218)

2
(384)

3
(230)


4
(591)


5
(391)

6
(467)

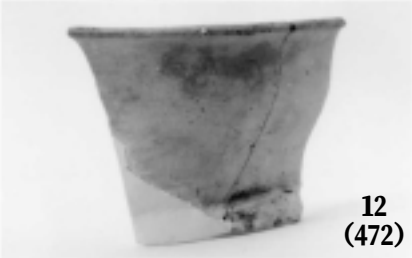
7
(462)

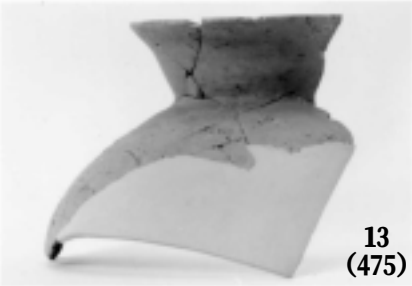
8
(468)

9
(470)

10
(471)

11
(502)

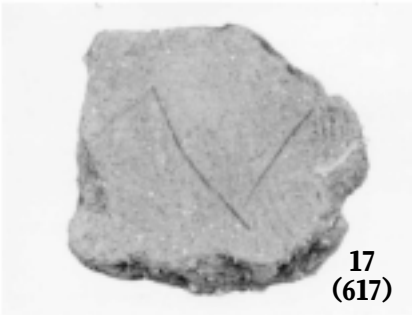

12
(472)


13
(475)

14
(496)

15
(477)

16
(548)

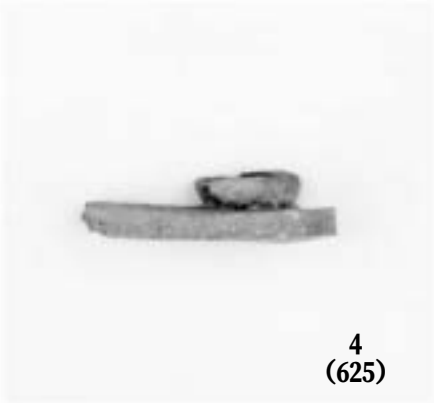

17
(617)

18
(399)

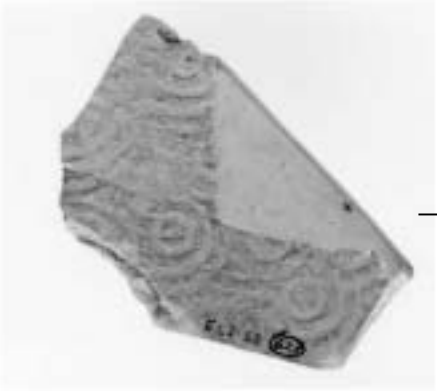
谷部以外出土土器③

1
(437)

3
(624)


4
(625)

2
(560)



5
(623)

谷部以外出土土器④

SD6・7

6
(132)

SD9

7
(133)

SD6・7・9　出土石器

8
(182)

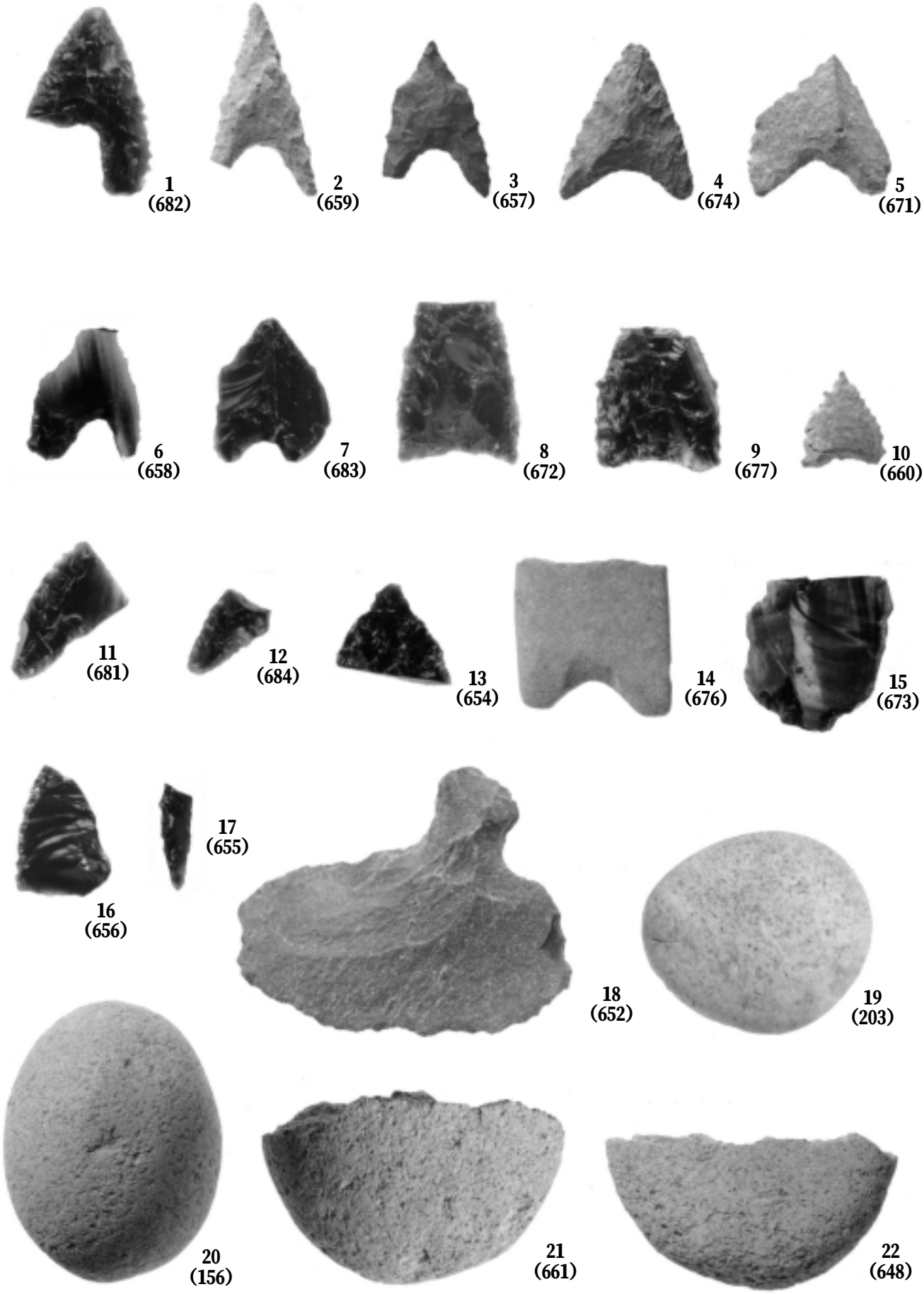
9
(147)

10
(191)

11
(667)
(670)

谷部出土石器①

図版47　II区



谷部出土石器②

1
(195)

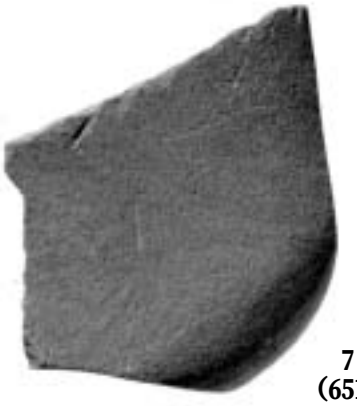
2
(199)

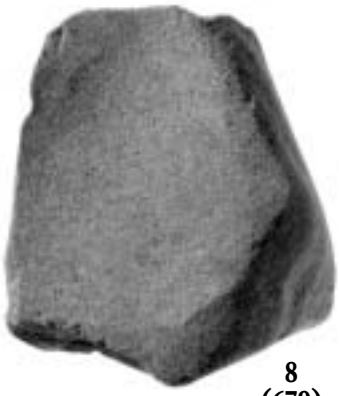
3
(220)

4
(664)

5
(678)

6
(160)


7
(651)


8
(679)

9
(645)

10
(650)

11
(662)

12
(680)

13
(653)

14
(675)

15
(649)

16
(666)

谷部出土石器③

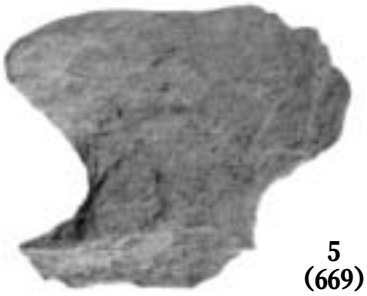
図版49　II区

1
(647)

2
(665)

3
(646)

4
(197)



5
(669)

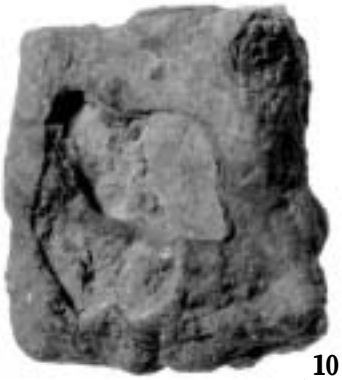
6
(668)

谷部出土石器④

7
(188-1)

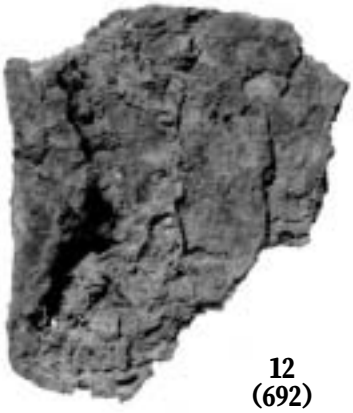
8
(188-4ウラ)

9
(186)



10
(168)

11
(688)



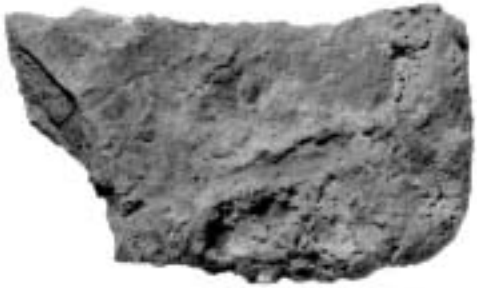
12
(692)

谷部出土金属器①

1
(188-3)

2
(159)

3
(636)



4
(687)

5
(187)

7
(188-2+5)

6
(633)

8
(634,635)

9
(164)

11
(183)

10
(632)

12
(637)

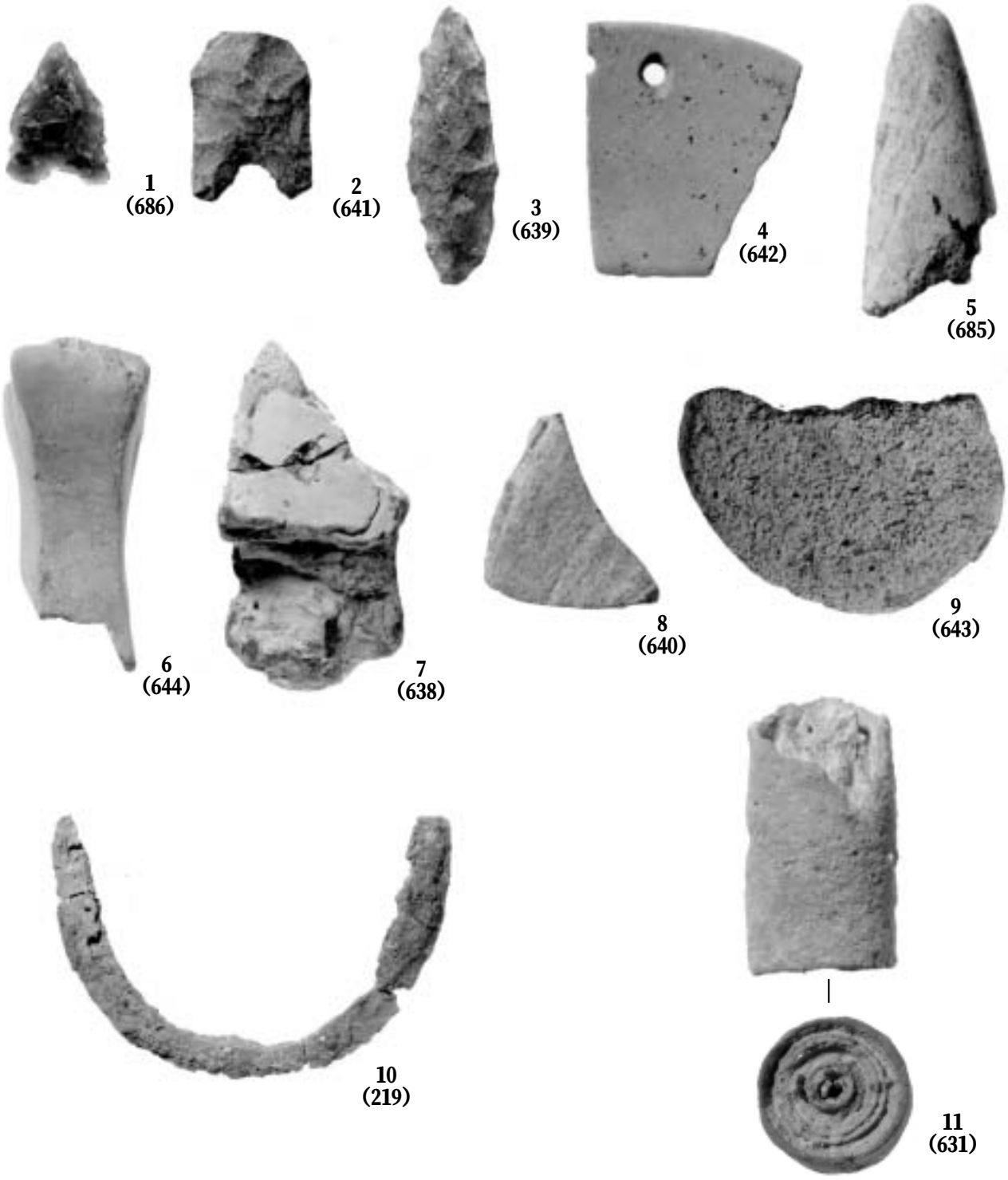
13
(689)

14
(690)

15
(691)

谷部出土金属器②

図版51　II区



谷部以外出土石器・金属器

Ⅲ区全景（南西から）

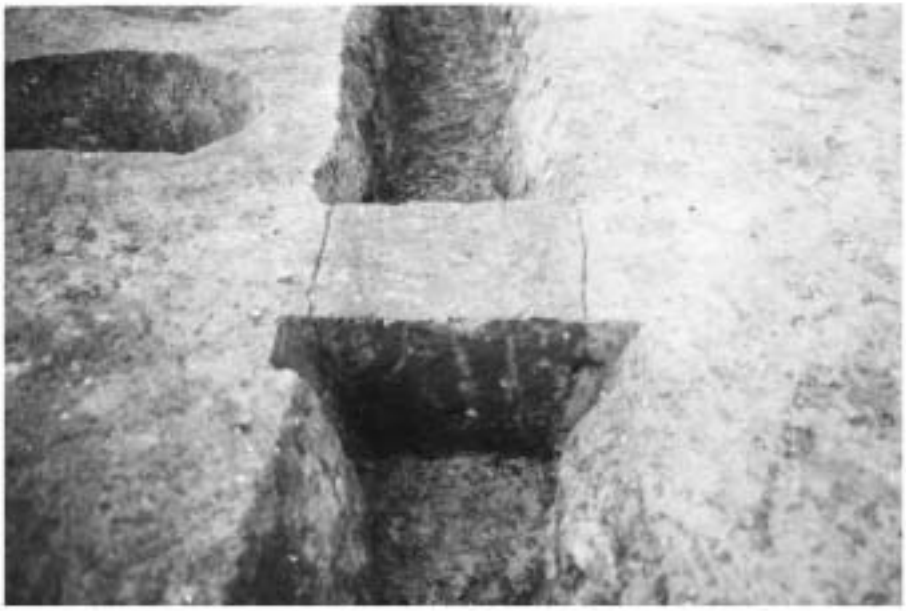
ＳＤ１（北から）

ＳＤ１土層（南から）

図版53　Ⅲ区

ＳＤ２（左）・ＳＤ３（右）
（北西から）

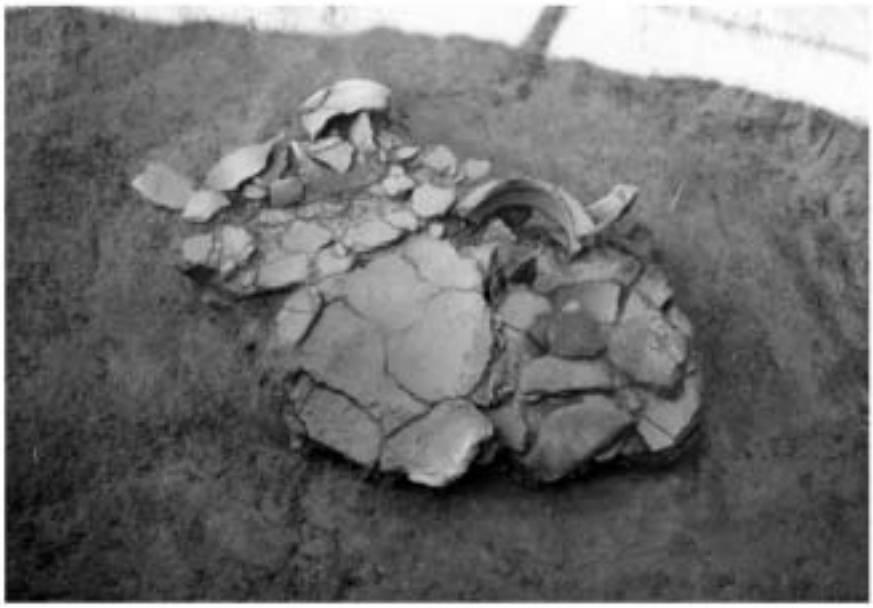
ＳＤ２土層（南東から）



ＳＤ３土層（南から）

Ⅳ区全景（上空から）

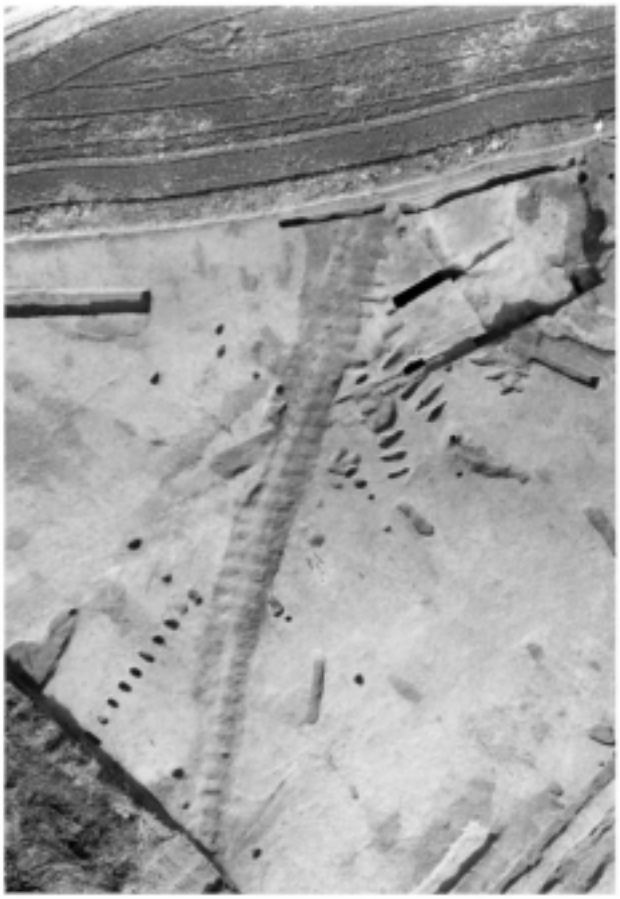
ＳＫ１遺物出土状況（北から）



ＳＫ１遺物出土状況（南から）

図版55　Ⅳ区

ＳＦ１遠景（東から）



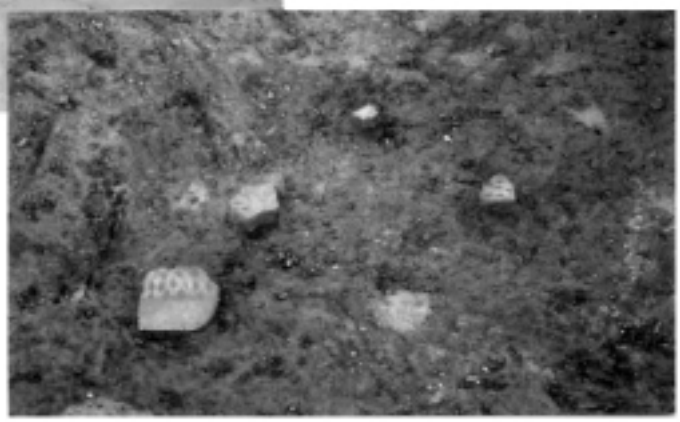
ＳＦ１付近（上空から）

ＳＦ１（東から）

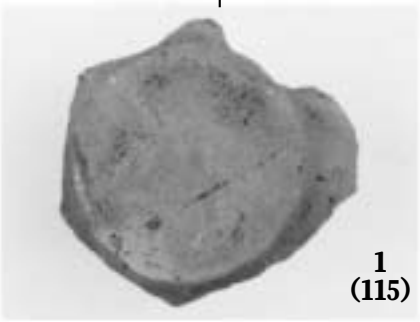
ＳＤ7～10（北西から）

ＳＤ7～10（南東から）

５Ｆ遺物出土状況（南西から）



図版57　Ⅲ・Ⅳ区



1
(115)

2
(116)

3
(117)

4
(120)

5
(122)

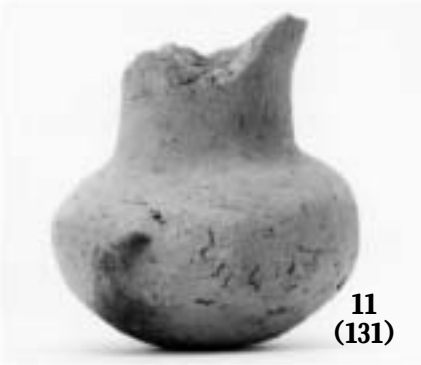
6
(123)

7
(125)

8
(130)

9
(128)

10
(127)



11
(131)

12
(126)

13
(129)

14
(121)

15
(124)

1はⅢ区出土
それ以外はすべてⅣ区出土

Ⅲ・Ⅳ区出土土器・土製品・金属器

報　告　書　抄　録

ふりがな 書名	ながおかきしもといせき 永岡岸元遺跡
副書名	主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	１
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第９１集
編著者名	池松 幸路・唐木田 芳文・比佐 陽一郎・森山 栄一
編集機関	筑紫野市教育委員会
所在地	〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西一丁目１番１号　　TEL092-923-1111　Fax092-923-9644
発行年月日	西暦２００７年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ながおかきしもといせき 永岡岸元遺跡	ふくおかけん 福岡県 ちくしのし 筑紫野市 おおあざながおか 大字永岡 62-1 外	402176	170430	33° 29′ 09″	130° 32′ 57″	20010507 ～ 20020116	4,902	県道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
永岡岸元遺跡	集落	弥生時代 ～ 古墳時代	竪穴住居 掘立柱建物 円形周溝 溝 道路状遺構 貯蔵穴 土坑	10 3 2 13 1 1 33	弥生土器 土師器 石器 鉄器	Ⅱ区６Ｃから青銅製鋤先が１点出土した。

要約	Ⅰ区では、弥生時代後期～古墳時代中期にかけての竪穴住居がみつかった。ＳＣ４からは初現期のカマドを検出した。ＳＣ６床直上から出土した土器は、共伴関係のわかる良好な資料である。 Ⅱ区では、谷部を中心に多量の遺物が出土したが、これは段丘上にこの時期の集落が広がっていたことを示すとともに、遺構の破壊が進んでいることも示すものである。 Ⅲ・Ⅳ区では、多数の溝を検出したが、時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

土木工事の届出日　20010419

永　岡　岸　元　遺　跡

主要地方道久留米筑紫野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1

筑紫野市文化財調査報告書　第９１集

平成１９年３月３１日

発　行　筑紫野市教育委員会

〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西一丁目１番１号

印　刷　**秀英社印刷株式会社**

〒818-0052　福岡県筑紫野市武蔵三丁目 2 番 6 号